日上天王山古墳

ひかみてんのうやまこふん

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第60集

1997
津山市教育委員会
日上天王山古墳発掘調査委員会

日上天王山古墳　津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第６０集　正誤表

頁	行	誤	正
iii	１８	大田武	太田武
ＩＸ	３	日上天王山古墳（黒） 箸墓古墳（赤） 浦間茶臼山古墳（赤）	日上天王山古墳（赤） 箸墓古墳（黒） 浦間茶臼山古墳（黒）
ＸＩ	１２		８．弥生土器蓋形土器
６	３５	墳頂	墳長
３０	１４	メイン石列ライン	メインライン
３３	３３	1.5～2.5m平坦面	1.5～2.5mの平坦面
４５	１５	かった（第１８図）	かった（第２０図）
４６	３８	しながら円礫を	しながら小円礫を
６９	３	鉈５（同１０	鉈４（同１０
７０	２８	依存	遺存
８１	キャプション	浦間茶臼山古墳（1/５００）	浦間茶臼山古墳（1/１５００）
９０	２６	規格	企画
９３	宮川85文献	前方後円墳築造規格性	前方後円墳築造企画性
９５	２６	型式的な変	型式的に変
９６	６	段差付けて	段差を付けて
９６	１４	鏡径に制約	鏡径の制約
１０５	１７	神頭鏡系	神獣鏡系
１０５	２７	鏡径を製作が	鏡径の製作が
１０６	６	最も古い古墳に	最も古い古墳の一つに
１０６	２０	三角縁神獣鏡２面出土	三角縁神獣鏡２面が出土
１１２	２７	納めらた	納められた
１１４	１９	小口板を挟んだ	小口板で挟んだ
１４１	１３	（近藤他　1996C）	（近藤他　1996）
１６７		Tokyo Municipal University	Tokyo Metropolitan University

巻頭図版

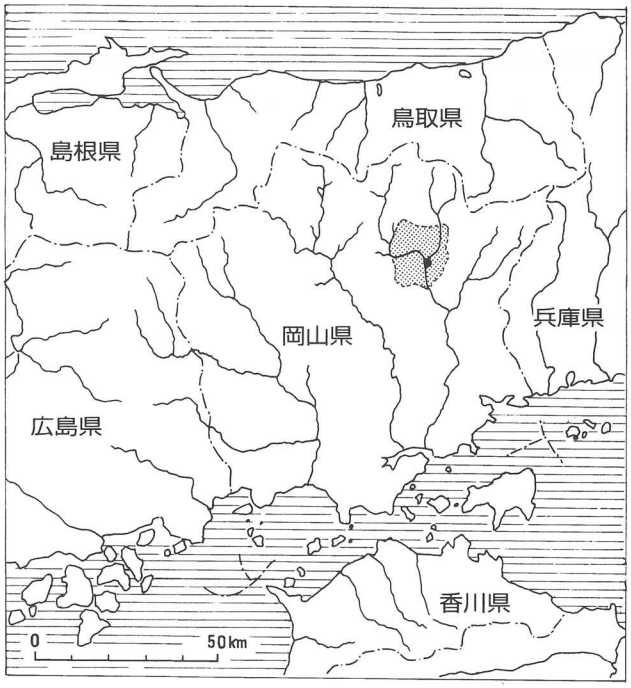
吉井川からの遠景

（寿福滋 撮影）

ひかみてんのうやまこふん

日上天王山古墳

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第60集



●日上天王山古墳

1997
津山市教育委員会
日上天王山古墳発掘調査委員会

序

日上天王山古墳は、津山市の東部、日上地区の丘陵上に存在する市指定文化財の前方後円墳です。同丘陵には、この他50数基の小墳で構成される畝山古墳群が存在することもあり、考古学研究者が遠所から同地を訪れているという話をよく耳にしていました。

津山市では、日上天王山古墳の重要性に鑑み、同古墳の調査を考古学研究者に委託することとし、平成５・６年度に調査委員会を組織し発掘調査を実施しました。

このたび、その調査報告書が刊行されるはこびとなったことは、まことに喜ばしいかぎりです。ご苦労をともにされた調査関係者のみなさまに、厚くお礼を申しあげます。

付近には美作国分寺跡、同尼寺跡、飯塚古墳など重要な遺跡が多く、本古墳の調査も、昭和51年度から始めた国分寺跡、同尼寺跡の調査の流れを受け継ぐもので、津山市東部の主要遺跡の重要性をさらに明らかにしたものとして注目いたしております。

津山市ではこの調査に引き続き、平成７年度から国庫補助を得て３ヶ年計画で畝山古墳群の調査を進めており、その成果も近く刊行される予定となっています。

河辺、国分寺、日上地域は、美作全体でも最重要な古代遺跡が集中する地域であり、これら一連の調査により、保存のための基礎資料が整うこととなります。今後は、これら重要遺跡を街づくりに活かし、保護と活用の道を探って行きたいと考えております。今後とも、ご支援、ご協力をお願いいたします。

末筆ながら、調査の遂行に有形無形のご尽力を賜わった地元関係者各位に、衷心からお礼申しあげます。

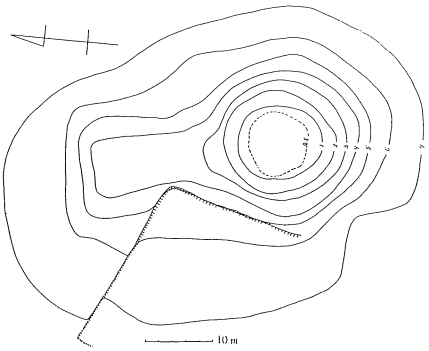
平成９年３月３１日

津山市長 中　尾　嘉　伸

はしがき

佐良山古墳群の調査を行いその報告文と考察めいたものを書いて以来、僕は美作の古墳に関心をもつようになった。そこへ翌1952年1月、河辺村（いま津山市）瓜生原の渡辺健治さんから人骨のある古墳が家の近くの小字隠里（かくれざと）で発見されたという連絡が入った。僕は当時岡山大学医学部解剖学教室の講師をされていた人類学の中島寿雄先生に同道をお願いし、2月12日に現場で図面を描き人骨や遺物を取り上げた。その折渡辺さんのほか、山本博之さんと小林護さんにも会い、この三人から河辺村には沢山古墳があり大きな前方後円墳もあるという話を聞き、しかもこの地に美作国分寺や国分尼寺が造られたことを知っていたので大変興味をもった。中島先生は確か人骨を箱詰めにしそれをもって岡山に帰られたが、勧められるままに僕は、当時村長で古墳や歴史に興味をもたれていた中島茂さん宅に一泊した。その夕、上記3人に中島村長も加わって古墳談義に花が咲き、とうとう「それでは分布調査をしてみますか」ということになった。

当時は中島村長以外はみな暇だったとみえ日程はすぐ決まり、翌3月8日から10日間ほどの予定で河辺村の古墳悉皆（しっかい）調査を実施した。僕は再び中島さん宅に宿をお願いし、上記3名のほか、津山基督教図書館高等学校直原正雄先生、当時岡山大学教育学部の学生だった神原英朗・高校生の高木美支子．佐良山の南中学生山田英輔・河本清・河本昌宏・大田武などの諸君が通いで加わった。毎日朝から夕方まで野山を歩き、古墳を見つけ径や長さを測って記録した。前方後円墳かもしれないと思った古墳は略測を行なった。その一つが日上天王山古墳である。当時僕たちは畝山にあるということで畝山古墳と呼んだ。他の古墳に比べて大きく、樹木はほとんど生えておらず惚れぼれするほど堂々と整った形をしていた。明らかに前期古墳である。当時の記録では長さ約50mであった。



日上天王山古墳　1952年3月測量
（河本清、河本昌宏、近藤義郎、高木美支子、山田英輔、山本博之、渡辺健治）

この時に僕の心に焼きついたこの古墳は時を経てもなかなか頭から離れなかった。離れる時があっても何年かするとまた取りついてくる始末だった。確か初めて登った時、渡辺さん達から「これはだいぶ前に盗掘されたらしい。村の駐在が若いものを連れてあちこち掘り荒らした古墳の一つだと思う」と聞いた記憶があるが、墳頂は平坦で盗掘痕も見当たらず、石や埴輪も見当たらないので、盗掘されたとしてもきっと内部の埋葬部分まで届かなかったに違いないと思うようになった。

美作では前期や中期の大形古墳の発掘は、1953年の柵原町月の輪古墳、1960年の鏡野町赤峪古墳、1978年の久米町三成古墳についてなされたくらいで、とくに美作初現の前方後円墳についてはそれにやや近い時期と推定される赤峪古墳が発掘調査されただけであった。

前方後円墳の起源の問題に関心をもった僕は、赤峪古墳の発掘以来多くの同志と共に、また在職していた岡山大学考古学研究室の仕事としても、幾つかの古式前方後円墳や前方後方墳、さらにその直前の時期と思われる弥生時代墳丘墓の発掘を行い、前方後円墳成立に関しある種の見通しを、立てては崩し

崩しては立てていた。しかしある特定の地域、僕にとってはその第一の候補地域である美作における前方後円墳出現の問題については、いつかは踏み出さなければならないと思いながらも、資料的にも見通しの上でも皆目見当がつかない期間が長く続いていた。

1992年から94年にかけようやく課題の点でも時間的余裕の点でもある程度の準備ができ、また津山市教育委員会の努力によって地元の理解が得られ、発掘予算の計上もなされ、発掘調査委員会も成立した。発掘は1994年3月から5月にかけて行われたが、その発掘調査団の主力は、津山市在住の古くからの友人渡辺健治・土居徹・山田英輔・津山弥生の里文化財センターの専門職員中山俊紀・安川豊史・行田裕美・小郷利幸・平岡正宏・坂本心平、ここ十年来発掘を共にしてきた若い友人のうち長期滞在可能な倉林眞砂斗と澤田秀実、それにその友人の水野敏典、やや遅れて増田直人、中盤から参加の高橋幸治の皆さんで、さらに終盤から増野晋次・久米基両君が宿泊参加して加わった。また、今枝孝志郎さん山口晋子さんなど遺跡観察会の十数人の随時的参加をはじめ、8頁の参加協力者に芳名を掲げた津山市内外の多数の方々の自主的参加があった。

発掘の準備・実施・終結に当たっては多くの方々の協力と援助を頂いた。発掘を承諾された地権者の皆さん、地元で支援下さった日上および人神の皆さん、とくに発掘終了後の埋め戻しに奮闘された日上町内会青壮年部有志の皆さん、発掘に汗を流した調査団と参加協力者の皆さん、見学に訪れ激励下さった皆さん、そのすべての方々に対し発掘調査団を代表して深く感謝の意を表したい。

本書をまとめるに当たっても、上記の方々はもとよりさらに広範な人々の教示と幾つかの機関の援助を受けたが、そのことは執筆者各位の文末に記された通りである。最後になったが、発掘直前に磁気探査を遂行された西村康さんとその一行、出土土器の胎土分析を担当された清水芳裕さん、鏡片の成分分析を担当された馬淵久夫さんはそれぞれ研究の成果を寄せられた。記して感謝を申し上げる。

本書が津山の、ひいては美作の原始古代史研究の一助となれば望外の喜びである。

1997年2月17日

日上天王山古墳発掘調査団長　近　藤　義　郎

序 …… 中尾嘉伸 i
はしがき …… 近藤義郎 iii

目　　次

第1章　周辺の環境及び調査の経過
第1節　立地と環境 …… 中山俊紀 1
第2節　発掘調査の経過 …… 倉林眞砂斗 5
第3節　発掘調査の組織その他 …… 倉林眞砂斗・中山俊紀 7

第2章　測量調査の成果
第1節　墳形及び規模 …… 小郷利幸 9
第2節　墳丘裾部の埋葬施設 …… 坂本心平 9
第3節　小結 …… 行田裕美 10

第3章　発掘調査の成果
第1節　墳丘
・トレンチの位置及び設置理由 …… 倉林眞砂斗 15
Ⅰ．後円部の発掘調査
1）南北トレンチ
・南端裾部 …… 澤田秀実 15
・頂部平坦面 …… 増田直人 17
2）東西トレンチ
・墳丘の構築 …… 高橋幸治・増田直人 18
・墓坑埋土について …… 増田直人 22
Ⅱ．くびれ部の発掘調査
1）第1トレンチ …… 澤田秀実 25
Ⅲ．前方部の発掘調査
1）第2トレンチ …… 澤田秀実 27
2）第3トレンチ …… 澤田秀実 27
3）第4トレンチ …… 澤田秀実 29
4）第5トレンチ …… 澤田秀実 30
Ⅳ．小結
1）墳丘形態 …… 澤田秀実 30
2）日上天王山古墳における墳丘の築成について …… 増田直人 38
第2節　埋葬施設
・埋葬施設の位置関係 …… 増田直人 40

Ⅰ．中心石槨
1）盗掘状況 …… 倉林眞砂斗 40
2）墳頂平坦面における位置 …… 倉林眞砂斗 42
3）墓坑 …… 倉林眞砂斗 42
4）棺床と基底部の構造 …… 倉林眞砂斗 45
5）壁体と裏込め …… 倉林眞砂斗 45
6）蓋石 …… 倉林眞砂斗 49
7）蓋石の被覆措置 …… 倉林眞砂斗 49
8）墓坑埋土 …… 倉林眞砂斗 51
9）石槨構築過程の復元 …… 倉林眞砂斗 51
10）小結 …… 倉林眞砂斗 52
Ⅱ．第２石槨
1）墳頂平坦面における位置 …… 高橋幸治・水野敏典 53
2）墓坑 …… 水野敏典 53
3）棺と石槨基底部分の構造 …… 水野敏典 54
4）壁体と裏込め …… 水野敏典 56
5）蓋石 …… 水野敏典 59
6）石槨構築過程の復元 …… 水野敏典 61
7）小結 …… 水野敏典 61
Ⅲ．箱形石棺
1）第１箱形石棺 …… 渡辺健治 63
2）第２箱形石棺 …… 水野敏典 64
Ⅳ．石槨に使用された石材 …… 安川豊史 65
第３節　出土遺物
Ⅰ．中心石槨の副葬品
1）副葬品の内訳と出土状況 …… 倉林眞砂斗 68
2）直刀 …… 水野敏典 69
3）鉄鏃 …… 水野敏典 69
4）鉇 …… 水野敏典 70
5）刀子 …… 水野敏典 70
6）鉄斧 …… 増田直人 70
7）その他の鉄器 …… 水野敏典 70
8）青銅片 …… 水野敏典 70
Ⅱ．第２石槨の副葬品
1）副葬品の内訳と出土状況 …… 水野敏典 72
2）銅鏡 …… 水野敏典 73
3）鉄鏃 …… 水野敏典 73
4）鉄鑿 …… 水野敏典 75

5）鉄剣 …… 水野敏典 75
6）その他 …… 水野敏典 75
Ⅲ．東くびれ部出土の壺形土器及びその他の土師質土器 …… 中山俊紀 75
Ⅳ．その他の遺物 …… 平岡正宏 77

第4章　考察
第1節　墳丘形態からみた日上天王山古墳 …… 澤田秀実 79
第2節　古墳時代における盛土技法－日上天王山古墳を中心として－ …… 増田直人 87
第3節　捩文鏡の編年と製作動向 …… 水野敏典 94
第4節　竪穴式石槨の特色と問題点 …… 倉林眞砂斗 112
第5節　壺形土器 …… 中山俊紀 124
第6節　美作地方における政治勢力と諸関係 …… 倉林眞砂斗 128

第5章　むすび　－日上天王山古墳と美作東部諸首長の動向－ …… 近藤義郎 145

付編　自然科学的分析
Ⅰ．出土土器の胎土分析 …… 清水芳裕 156
Ⅱ．日上天王山古墳出土捩文鏡の鉛同位体比について …… 馬淵久夫 159
Ⅲ．日上天王山古墳の探査結果 …… 西村　康 162

英文抄録
HIKAMI-TENNŌYAMA KOFUN, THE EARLIEST TYPE ZENPŌ-KŌEN FUN,
IN MIMASAKA OF OKAYAMA PREF., JAPAN …… Kondō Yoshirō 167
Kurabayashi Masato

挿図目次

第１図　日上天王山古墳周辺の遺跡（1/25000）……2
第２図　日上天王山古墳周辺の地形図（1/5000）……3
第３図　箱形石棺Ａ・Ｂ 平・断・立面図（1/30）……10
第４図　墳丘測量図（1/300）……11・12
第５図　墳丘トレンチ配置図（1/300）……16
第６図　南北トレンチ南端裾部 平・断・立面図（1/40）……17
第７図　東西・南北メインライン断面図（1/40）……19・20
第８図　東西トレンチ 平・断・立面図（1/40）……23・24
第９図　第１トレンチ 平・断・立面図（1/40）……26
第10図　第２トレンチ 平・断・立面図（1/40）……28
第11図　第３トレンチ 平・断・立面図（1/40）……29
第12図　第４トレンチ 平・断・立面図（1/40）……31・32
第13図　第５トレンチ 平・断・立面図（1/40）……33
第14図　墳丘構築模式図（1/300）……35・36
第15図　埋葬施設位置図（1/60）……41
第16図　墓坑ライン及びトレンチ配置図（1/60）……43
第17図　中心石槨全体図（1/60）……44
第18図　中心石槨の棺底部分図（1/20）……46
第19図　中心石槨 平・立面図（１）（1/30）……47・48
第20図　中心石槨 平・立面図（２）（1/30）……50
第21図　中心石槨構築模式図……52
第22図　第２石槨墓坑ライン及びサブトレンチ配置図（1/60）……54
第23図　第２石槨断面図（1/40）……55
第24図　第２石槨 平・立面図（１）（1/30）……57・58
第25図　第２石槨 平・立面図（２）（1/30）……60
第26図　第２石槨構築模式図……62
第27図　第１箱形石棺 平・断・立面図（1/30）……64
第28図　第２箱形石棺 平・断・立面図（1/30）……65
第29図　中心石槨の石材……66
第30図　石槨使用石材の割合……66
第31図　第２石槨の石材……67
第32図　中心石槨遺物分布図（1/30）……69
第33図　中心石槨出土遺物（１/２）……71
第34図　第２石槨遺物出土状況……72
第35図　第２石槨出土遺物……74
第36図　墳丘出土の土器（１/４）……76

第37図　その他の遺物（1/3，1/4）……77
第38図　日上天王山古墳墳丘復元図（1/450）……80
第39図　日上天王山古墳（黒）と箸墓古墳（赤）・浦間茶臼山古墳（赤）……81
（1．1/600：1/3000，2．1/600：1/1500）
第40図　日上天王山古墳墳丘築造企画の推定復元図（1/600）……90
第41図　日上天王山古墳後円部・竪穴式石槨築造企画の推定復元図（1/100，1/60）……91
第42図　鼉（だ）龍鏡における捩文（ねじもん）鏡原図像……99
第43図　捩文鏡の分類……103
第44図　二重口縁壺の類例（1/4，2は1/8，8・9は1/6）……125
第45図　美作東部における前期古墳の分布状況……128
第46図　諸墳の位置関係概念図……133
第47図　美和山古墳群に認められる企画性……137
第48図　美作東部5政治圏の大形古墳の分布……148・149
第49図　出土土器の胎土顕微鏡写真……157
第50図　日本出土青銅器の鉛同位体比分布……160
第51図　捩文鏡の鉛同位体比……160
第52図　電気探査で測定している領域模式図……162
第53図　電気探査結果（1）……165
第54図　電気探査結果（2）……166

表目次

第1表　石槨使用石材の点数……68
第2表　捩文鏡集成（1）……97
第3表　捩文鏡集成（2）……98
第4表　捩文鏡型式編年表……106

写真図版目次

巻頭　1．吉井川からの遠景（寿福滋 撮影）

図版1　1．日上畝山丘陵（南から）　2．墳丘側面（南西から）

図版2　1．上空から見た埋葬施設　2．斜め上方から見た埋葬施設（寿福滋 撮影）

図版3　1．墳丘調査前（前方部から）　2．墳丘調査前（後円部から）
3．東側くびれ部　4．西側くびれ部
5．南北トレンチ南端　6．東西トレンチ（東側斜面）

図版4　1．第1トレンチ（東から）　2．第1トレンチ（北から）
3．第2トレンチ（東から）　4．第2トレンチ土層断面（北から）
5．第3トレンチ（東から）　6．第3トレンチ（南から）
7．第4トレンチ（北から）　8．第4トレンチ（南西から）

図版5　1．第4トレンチ前方部側縁（南から）　2．前方部東側縁（北から）
3．第5トレンチ（北から）　4．第5トレンチ土層断面（北東から）
5．前方部東側縁（前方部前端から）　6．前方部東側縁（北東から）
7．前方部東側縁（くびれ部から）

図版6　1．Cサブトレンチ南壁（第2石槨墓坑東端）　2．Aサブトレンチ北壁
3．南北トレンチ西壁（中心石槨南端）　4．南北トレンチ北端西壁
5．南北トレンチ南半部東壁　6．中心石槨北端
7．東西トレンチ北壁（中心石槨西端）　8．東西トレンチ北壁（中心石槨東端）

図版7　1．調査前の後円部墳頂平坦面　2．中心石槨の黒褐色被覆土検出状況（南から）
3．中心石槨の被覆石検出状況（南から）　4．中心石槨の蓋石検出状況（東から）
5．中心石槨の床面検出状況（南から）　6．中心石槨（東から）
7．中心石槨（南から）

図版8　1．中心石槨の撹乱状況　2．中心石槨北側小口
3．中心石槨南側小口　4．中心石槨（西から）
5．中心石槨床面南端　6．中心石槨床面の撹乱坑（北から）
7．中心石槨の床面断ち割り状況（南から）

図版9　1．第2石槨の被覆石検出状況（東から）
2．第2石槨及び第1箱形石棺の蓋石検出状況（東から）
3．第2石槨の蓋石検出状況（東から）　4．第2石槨の崩落状況（東から）
5．第2石槨の遺物出土状況（西から）

図版10　1．第2石槨の床面検出状況（西から）　2．第2石槨の遺物出土状況（南から）
3．第2石槨北壁（南から）　4．第2石槨東側小口
5．第2石槨西側小口
6．第2石槨東側小口付近の木棺痕跡検出状況（西から）
7．第2石槨の床面断ち割り状況（西から）

図版11　1．第1箱形石棺の蓋石検出状況（東から）　2．第1箱形石棺の床面検出状況（北から）
3．第1箱形石棺の床面検出状況（東から）　4．第1箱形石棺東側小口
5．第1箱形石棺西側小口　6．第2箱形石棺（東から）
7．後円部上の埋葬施設（東から）

図版12　中心石槨副葬品
1．直刀片　2．鉄鏃　3．鉄鏃・不明・刀子
4．鉇　5．鉄斧・不明　6．青銅片
7．直刀付着の布帛　8．鉄斧付着の布帛

図版13　第2石槨副葬品と墳丘出土土器
1．銅鏡　2．鉄鏃　3．鉄鑿
4．鉄剣　5．鉄鏃付着の布帛　6．鉄剣付着の布帛
7．二重口縁壺形土器

例　言

1　本書は、日上天王山古墳発掘調査委員会（委員長　藤原修己）が平成6年3月13日から5月15日まで発掘調査を実施した、日上天王山古墳の発掘調査報告書である。古墳所在地の地番は、岡山県津山市日上417番地の13である。

2　発掘調査および報告書作成作業は、津山市教育委員会から調査委託を受けた日上天王山古墳発掘調査委員会が、同古墳調査団（団長　近藤義郎）を組織し実施した。調査および報告書作成に要した経費は、おおむね津山市からの調査委託料をあてた。なお、報告書の印刷は津山市教育委員会が実施した。

3　本調査に関わる組織ならびに協力者は、別記したとおりである。

4　本書の編集は、第1章～第3章については倉林眞砂斗及び澤田秀実が、第4章、第5章については近藤義郎が行ったが、全体に亘って中山俊紀、安川豊史の援助を得た。なお執筆者は各文末に記した。

5　遺構の実測は、基本的に調査団員が分担して行なったが、適宜参加者や見学者の協力も得た。

6　遺構の製図、遺物の実測・製図は、倉林眞砂斗、澤田秀実、水野敏典、増田直人、高橋幸治が分担して行い、東京都立大学院生楢本弘貴、長沼正樹両氏の協力を得た。

7　電気探査では西村康（奈良国立文化財研究所主任研究員）、写真撮影では寿福滋（寿福写房　美術文化財写真家）、胎土分析では清水芳裕（京都大学助教授）、青銅片の分析では馬淵久夫（くらしき作陽大学教授）、石槨石材の判別では横山義人（岡山県立江見商業高等学校教諭）の諸氏をわずらわせた。うち、西村、清水、馬淵の各氏の成果は巻末に付した。

8　本書に使用したレヴェル高は、すべて海抜絶対高である。方位は、磁北方位を用いた。なお、磁針方位は、西偏約6度40分である。

9　出土遺物・図面等は、津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターが保管している。

第１章　周辺の環境及び調査の経過

第１節　立地と環境

日上天王山古墳は、岡山県津山市日上417-13番地に存在する。ＪＲ津山駅から東に約2.5km、同東津山駅の南約１kmに位置し、南方眼下に吉井川が流れる。国道53号線からは、津山市東松原交差点を吉井川沿に南下し、日上集落で国分寺方向に約500ｍ進むと古墳に至る。

天王山古墳の存在する津山市は、中国山地最大の山間盆地中央に位置し、北方に中国山地がそびえ、南に吉備高原が東西に延び広がっている。盆地内には畝々と低丘陵が縦横に走り、起伏の多い地形を呈する。

天王山古墳は、吉井川と北方中国山地に発する加茂川の合流地点を西にみる独立低丘陵南端に位置する。眼下には水田地帯が広がり、水田との比高は約20ｍである。古墳基盤の丘陵は第４紀層に属し、吉井川や加茂川河床には北方中国山地から押し出されてきた大量の真砂が堆積する。また、吉井川を挟んだ南岸には流紋岩の露岩が知られており、地元では「尼子石」といわれている他、西方約３kmには津山城築城の際同質の石材が切り出されたとされる石山が存在する。

日上が属する旧河辺村の古代の行政的位置は、美作国勝田郡河辺郷に属する。出雲街道を通じ播磨との、また因幡街道を通じて因幡との、さらに吉井川を通じての備前とのつながりが歴史上強い地域で、津山盆地東部の交通起点となってきた。奈良時代には、古墳東部１kmに国分寺(湊　1980)、500mに同尼寺(湊　1983)が設置されている。

近年、多数の遺跡が周辺で発掘調査されている。このうち、天神原遺跡(河本他　1975)ではナイフ形石器が発見されたり、西吉田遺跡(行田他　1985)等で縄文土器も発見されているが、遺跡としてはいずれも弥生時代以降のものに限られる。しかも、天神原遺跡の弥生前期の小土坑を除けば、弥生時代中期中葉以降のものがすべてで、弥生遺跡だけでも、天神原遺跡、金井別所遺跡(行田他　1988)、一貫東(湊　1992)･西遺跡(行田　1990)、大畑遺跡(小郷他　1993)など十指に余る。

そのいずれもが低丘陵上に位置する集落遺跡で、短期廃絶型のものが大部分を占める。既調査遺跡群の東方には大崎の小平野が広がり、この平地部分の発掘調査は進んでいないが、断片的に中期中葉の土器が発見されたり、遺跡推定範囲が広大な点から、中心的な集落の存在が推定され、既調査遺跡群はいずれも、おおづかみにみてそれに対応した周辺部集落の性格が強い。

日上天王山古墳は、美作最古級の前方後円墳の一つとみられるが、美作の代表的な大形前方後円・後方墳としては、天王山古墳の東11kmに所在する勝央町植月寺山古墳(光永　1986)〔前方後方墳墳長91.5ｍ〕と天王山古墳の西６km、津山市二宮に存在する美和山１号墳(中山　1992)〔前方後円墳墳長80ｍ〕の二基がある。

植月寺山古墳については、未調査で築造年代は不明であるが、墳形から古墳時代初頭のものであろうとみられている。また、美和山１号墳については昭和60年度に整備にともない墳端の一部が調査され、その際埴輪類が少量発見されて、初期の前方後円墳であることが明確となった。

この他、周辺の前方後円・後方墳としては、かつて周溝のみ調査された畝山80号墳(河本　1986)〔墳長31ｍ〕、茶山１号墳(保田　1989)〔墳長21ｍ〕、一貫東１号墳〔墳長31ｍ〕、玉琳大塚(今井　1961)

第１図　日上天王山古墳周辺の遺跡（国土地理院25,000分の１地形図「津山東部」）

1 日上天王山古墳　2 日上畝山古墳群　3 国分寺飯塚古墳　4 河辺上原古墳群　5 天神原遺跡
6 井口車塚古墳　7 正仙塚古墳　8 押入飯綱神社古墳群　9 押入西遺跡　10 狐塚遺跡
11 能満寺古墳群　12 川崎六ッ塚古墳群　13 玉琳大塚　14 兼田丸山古墳　15 長畝山北古墳群
16 長畝山古墳群　17 茶山古墳群　18 一貫西遺跡　19 一貫東１号墳　20 小原遺跡
21 大畑遺跡　22 柳谷古墳　23 崩塚古墳　24 崩塚古墳群　25 日上和田古墳
26 西吉田北１号墳

第２図　日上天王山古墳周辺の地形図（縮尺１：5000）

〔墳長30～35m〕など小規模な後半期古墳が存在し、やや離れて高野山西正仙塚(安川他　1996)〔墳長55.5m〕、近長四ッ塚2号墳(小郷　1995)〔墳長42m〕など前半期古墳とみられる前方後円墳が存在する。

また、円墳では近長丸山1号墳(小郷　1992)〔直径20m〕が平成3年に発掘調査され、中心主体に伴い小形内行花文鏡1面と翡翠製勾玉、短剣等が発見された。墳頂部で発見された壺棺の年代観から、古墳時代初頭のものであることが判明している。

5世紀以降美作でもいわゆる群集墳がつくられてくるが、天王山古墳の所在する畝山丘陵を中心に日上畝山古墳群(約50基が現存)が存在する。畝山古墳群については、工事に伴い古墳周溝部分が調査され多量の須恵器や埴輪、鉄器等が発見されている他、かつて工事等により断片的に発見されている遺物から判断して、美作でも最初期の群集墳とみられる。

畝山古墳群東方約1.5kmには、長畝山古墳群、長畝山北古墳群が存在しほぼ同時期の古墳群とみられるが、長畝山古墳群では昭和46年に2基の古墳が発掘調査され、そのうち1基から鉄鉗、鉄槌等が発見されている(坂本　1996)。また、長畝山北古墳群は平成2年度及び平成7年度の二度の発掘調査により10基の古墳が調査され、1基を残しほぼ発掘調査が完了した(行田他　1992・1996)。これらは、木棺直葬、箱式棺、竪穴式石槨を埋葬主体にするが、それらに伴い多量の須恵器や鉄器類が発見されている。さらに、これら古墳群のすぐ北東の丘陵頂で、西吉田北1号墳が単独で発見され、平成7年度に発掘調査された(行田他　1997)。中心主体は、盗掘による大幅な撹乱を受けていたが箱形石棺とみられ、中心主体に伴い、鉄鉗、鏨、鉄鐸が発見された。

平成5年には、これら古墳群の丘陵を挟んだ北側で河辺上原古墳群が調査された。この古墳群でも多量の須恵器及び鉄器類が発見されている。

以上のように、日上が属する河辺地区では、小規模古墳が集中して群在するだけではなく、5世紀から6世紀前半の築造になるものが多く、鉄器あるいは装身具かつまた須恵器等の副葬品を豊富に共伴する例が多い。鉄鉗や鉄槌、鏨などの出土遺物からみて、被葬者の背後に鍛冶集団の存在が浮かび上がるとともに、朝鮮起源とみられる鉄鐸の出土や独特の特徴をもつ須恵器の存在から、それら先進技術集団と大陸との強いつながりが暗示される。

美作最古級の前方後円墳である日上天王山古墳の存在と畝山古墳群が位置的に重ね合わされることは、古墳時代の先進集団のありようを考える上で非常に興味深い。

奈良時代に、国分寺、国分尼寺が付近に創設されることも、こういった前史と無関係ではなさそうだ。

国分尼寺については、確認調査の実施にもかかわらず伽藍の存在や寺域の把握ができていないが、国分寺については昭和51年度から54年度にかけての確認調査で、方二町の寺域をもつことが推定され、主要伽藍の存在はほぼ確実に知られた。この国分寺、尼寺とも創建瓦は平城宮第2次朝堂院所用瓦と同型のものでもある。

ちなみに、中核工業団地の造成に先立ち調査した一貫西遺跡では、奈良時代の製鉄遺跡が発見されており、隣接して工房とみられる建物群も発見され、その操業規模から推定して官営のものであった可能性が強い。

(中山俊紀)

参考文献

今井　堯　1961　『津山市川崎玉琳大塚調査報告』津山市文化財調査略報第1集 津山市教育委員会

小郷利幸　1992　「近長丸山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集 津山市教育委員会

小郷利幸　1994　『河辺上原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集 津山市教育委員会
小郷利幸　1995　「近長四ッ塚２号墳測量調査報告」『年報津山弥生の里』第２号 津山市教育委員会
小郷利幸他　1993　『大畑遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集 津山市教育委員会
河本　清　1986　「日上畝山古墳群」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
河本　清他　1975　『天神原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（７）岡山県教育委員会
坂本心平　1996　「長畝山２号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里』第３号 津山市教育委員会
中山俊紀　1992　『史跡美和山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集 津山市教育委員会
保田義治　1989　『茶山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集 津山市教育委員会
光永真一　1986　「植月寺山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
湊　哲夫　1992　『一貫東遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集 津山市教育委員会
湊　哲夫他　1980　『美作国分寺跡発掘調査報告書』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第２集 津山市教育委員会
湊　哲夫他　1983　『美作国分尼寺跡発掘調査報告書』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集 津山市教育委員会
安川豊史他　1996　「正仙塚古墳測量調査報告」『年報津山弥生の里』第３号 津山市教育委員会
行田裕美　1990　『一貫西遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集 津山市教育委員会
行田裕美他　1985　『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集 津山市教育委員会
行田裕美他　1988　『金井別所遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集 津山市教育委員会
行田裕美他　1992　『長畝山北古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集 津山市教育委員会
行田裕美他　1996　『長畝山北11号墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集 津山市教育委員会
行田裕美他　1997　『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集 津山市教育委員会

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は、1994年３月13日から５月15日までの64日間にわたって実施した。津山市教育委員会の協力を得て、調査開始時には雑木や下草の伐採が終了していたため、直ちに後円部の墳頂平坦面に発掘調査区の設定を行った。墳頂平坦面の南端近くに径１ｍ余の浅い落ち込みが存在した他は、特に撹乱を被った形跡は無く、石槨石材らしき石塊や粘土塊なども認められなかった。事前に行われた電気探査によれば、中心埋葬施設は南北方向に長軸をもつ竪穴式石槨で、現地表面から蓋石上面までは１ｍ以上を測ることが予測された。

ところが、特に墳頂平坦面の北半分において、表土直下から多数の人頭大の円礫や粗割りされた板状の石が次々と姿を現し始めた。円礫は相互に組み合い、また板石上面は平坦に揃えられており、これらが意図的に配されたものであることは明らかであった。表土剥ぎが進むにつれて、円礫の密集は東西に長い楕円形を呈し、板石はその北側に接するようにしてやはり東西方向に長く並んでいることが判明した。つまり、電気探査では捉えられなかった埋葬施設が別個に存在していたのである。多量の円礫は第２石槨を被覆していたものであり、上面を揃えた板石群は第１箱形石棺の蓋石であった。両者の精査を進める中で、箱形石棺は第２石槨を一部壊して埋設されたこと、円礫群は第２石槨の蓋石として用いられたかなり大形の板石を覆うように配されていたこと、そして第２石槨の蓋石の一部は南側側壁の崩壊

に伴って水平面を保っていないこと、などが次第に明らかにされた。第２石槨と第１箱形石棺は墳頂平坦面の北半分を占めており、中心石槨よりも後から設けられたことは明らかであったため、まずこれらの調査に全力を尽くすことになった。

併せて、南北トレンチの南半分を掘り下げて、中心石槨の墓坑埋土の様子を先行的に把握することにした。現地表面から1.1ｍほど下がった所で、堅く締まった黒褐色土が全面的に検出された。トレンチ幅を拡張しつつ土層断面を精査したところ、墳頂部の中央部付近に径1.5ｍほどの円形竪穴が確認された。この撹乱坑は、黒褐色土を掘り抜いており、底面には中心石槨の被覆石が一部現れていた。また、南側小口付近でも斜めに掘り抜かれた盗掘坑が確認されたことから、中心石槨は少なくとも二度にわたって盗掘を受けたことが確実視されるに至った。先の黒褐色土は、中心石槨全体を被覆したものと推測されたため、これを平面的に追いつつ墓坑壁を検出することに努めた。その過程で、墳頂平坦面の中心からやや東寄りで、第２箱形石棺の存在が確認された。この箱形石棺は、損壊が著しく、二、三の側石を残すのみであった。

第２石槨の蓋石が全面的に検出され、第１箱形石棺内が床面まで掘り下げられた３月27日に、見学会を開催した。その後、第２石槨の蓋石を除去し、石槨内部の掘り下げにとりかかった。第２石槨の壁体は、ほとんど円礫が用いられていた上に控え積みされており、槨内の掘り下げは非常に難しく危険を伴った。すでに予想されていた通り、南壁中央部付近が崩落しており落下した側石は床面に直接のっていた。第２石槨の床面が完全に検出された後、第２石槨の構築過程や中心石槨とのレヴェル差を確認するために南北メインラインに沿って断ち割りを行った結果、部分的ながら中心石槨の北側小口の裏込め状況を明らかにすることができた。さらに第２石槨の両小口部分を断ち割るとともに、第１箱形石棺を壊さないようにＡ～Ｄトレンチを設けて墓坑を確認し、構築過程の復元的把握に努めた。

第２石槨の遺存状況が良好であったため、極力これを残して中心石槨の調査を進めることにした。中心石槨の位置や規模からみて、その北側小口部分が第２石槨の下に潜り込む形となることは明らかであったが、中心石槨の構造を追求する上で特に差し障りは生じないと判断した。そこで、北側部分を除いて黒褐色土を掘り下げ、蓋石を覆っていた割石を全面的に検出した。撹乱坑内の被覆石はすべて一度動かされており、蓋石も一部が割られてはずれ落ちていた。各所の隙間から石槨内を覗くと、被覆黒褐色土が取り去られた部分からは土砂が流入していたものの、特に北半部分では粘土棺床を直接目にすることができた。蓋石を除去した後に、石槨内の土砂を取り除いて粘土棺床を全面的に検出した。粘土棺床は数箇所で掘り抜かれており、多数の粘土塊が散乱した状態であった。撹乱坑の中や、流入土に混じって多数の鉄器や漆膜の破片などが出土したが、原位置を保っていたものはなかった。粘土棺床の中央部分の撹乱坑を利用して石槨の横断面を明らかにし、墓坑底と粘土棺床との関係を把握した。さらに、石槨内の南側小口部分や、南北トレンチの南半部及び東西トレンチで墓坑壁の断ち割りを行った。

後円部上の調査に見通しが立った時点で、後円部後端を抑えるべく南北トレンチの延長上にあたる南端裾部にトレンチを設定した。また、墳丘の構築状況を連続的に捉えるために、東西トレンチを東側裾部まで延長した。さらに、くびれ部に第１トレンチ、前方部側縁に第２・３トレンチ、前方部東隅に第４トレンチ、前方部前端に第５トレンチを設定して、墳頂、後円部径、前方部の形状などの把握に努めた。墳丘の西側は、畑地や用水溝によってけずられて崖状を呈していたため、各トレンチの設定は墳丘の東側に限定せざるを得なかった。第１トレンチでは円礫を二段にわたって配列した状態でくびれ部が検出され、二重口縁の壺形土器の破片が比較的まとまって出土したが、他のトレンチでは本墳に伴うと

思われる土器片は埴輪を含めて出土しなかった。

最後に、中心石槨の南側の墓坑壁面を精査し、こちら側には排水溝が取り付かないことを確認した。また、第２石槨が遺存していた北側では同様の作業は不可能であったが、第２石槨の墓坑ラインの確認状況をふまえて、排水溝が設けられた可能性が最も高い箇所を絞り込むことができた。

以上の調査を経て、５月13日から一部埋め戻しを開始し、15日までにこれを完了し撤収した。

（倉林眞砂斗）

第３節　発掘調査の組織その他

発掘調査委員会、発掘調査団の構成、地権者の方々、御協力いただいた方々、埋め戻しに御協力いただいた日上町内会青壮年部有志の方々については、以下のとおりである。（倉林・中山）

１．日上天王山古墳発掘調査委員会

委員長	藤原修己	津山市教育委員会教育長
副委員長	宮本祥郎	津山市文化財保護委員会委員長
委員	近藤義郎	岡山大学名誉教授
	河本　清	岡山県立博物館副館長
	葛原克人	古代吉備文化財センター次長
	臼井洋輔	岡山県教育委員会文化課長補佐
	高畑知功	〃
	小山健三	津山市文化財保護委員会委員
	土居　徹	〃
	原田武蔵	日上町内会会長
	直原　饒	地権者代表
	籾山三千穂	津山市教育委員会文化課長
監事	日笠圭太	津山市教育委員会教育総務課長
	神田久遠	津山弥生の里文化財センター主幹

事務局長	須江尚志	津山弥生の里文化財センター所長	
事務局次長	中山俊紀	〃	次長
事務局員	光井とみよ	〃	事務員

（構成は発足当初）

２．日上天王山古墳発掘調査団

団長	近藤義郎	岡山大学名誉教授
副団長	土居　徹	津山市文化財保護委員

団員	渡辺健治	団体職員
	山田英輔	新聞記者
	倉林眞砂斗	城西国際大学講師
	澤田秀実	東京都立大学助手
	水野敏典	早稲田大学大学院生
	増田直人	広島大学大学院生
	高橋幸治	明治大学研究生
	安川豊史	津山市教育委員会主査
	行田裕美	〃
	小郷利幸	〃　　主事
	平岡正宏	〃
	坂本心平	〃

3．地権者の方々

伊藤文子、直原太郎、直原　饒、立石莫子他

4．御協力いただいた方々

秋久俊量、秋久　毅、秋山浩三、家元博子、池上　博、石坂俊郎、伊藤聖浩、今枝孝志郎
岩本えり子、上原通弘、氏平昭則、梅本康広、扇崎　由、大谷晃二、大渕淳志、岡田　聡
岡田淳也、小川洋子、加藤末四郎、金田明大、亀山行雄、川口美善、岸本道昭、久米　基
桑田俊明、神原英朗、小嶋善邦、小竹森直子、小寺達雄、小寺三喜子、小山桂司、近藤昭男
近藤邦男、斉藤新市、斉藤道子、佐々木憲一、佐藤久恵、白石　純、白川雄一、申　敬澈
寿福　滋、鈴木博司、角南勝弘、高田貫太、武部聡明、立石幸一、田中弘志、冨岡　昌
内藤正治、仲田信一、中田宗伯、中山俊子、難波俊成、難波紀子、西　博孝、野上恭子
野崎貴博、延原経子、乗岡　実、乗岡美佐子、橋本博文、橋本道範、濵　隆造、林　実
原田晋伍、東　康男、平松エイ子、藤井浩之、古市　晃、古市秀治、古瀬清秀、堀内恒彦
牧野久美、増野晋次、松田有美、実金資夫、光永真一、宮口公子、村田美佳、村田聡一郎
安川　満、山形真理子、山川芳一、山口晋子、山田正保、用田政晴、横田美香、吉留秀敏
渡辺貞幸、渡辺聡美（50音順）、ほかに見学・助言者多数

5．埋め戻しに御協力いただいた日上町内会青壮年部有志の方々

秋久憲司、河原正志、坂手邦治、坂手俊夫、須江君雄、須江忠雄、須江　浩、鈴木通弘
竹内　誠、立石林夫、立石　学、富倉敦美、富倉完治、富倉孝利、富倉武敏、原田浩司
原田泰蔵、原田敏明、原田久志、原田勇次、和田潤司　（50音順）

第２章　測量調査の成果

第１節　墳形及び規模

測量調査は平成６年３月７～９日に墳丘の主要部分を、同年５月30～31日にかけて周辺の地形測量の補足を行った。墳丘測量は墳丘主軸を基準とした開放トラバースを設定して行った。本墳は前方後円墳であり、設定した主軸は国土座標系第Ｖ系のＸ軸からＮ－22.5°－Ｗである。また、測量図のコンター幅は25cm間隔である。

古墳は標高約110～124ｍ程の南北に連なる丘陵の南端東側の高所に立地している。古墳西側の後円部から前方部にかけては墳形に沿って溝が巡っている。この溝は排水用のものであるが、深い所では人の背丈以上もあり、その際の排土が両側、特に墳丘側に積まれかなり地形が改変されているている所もある(特に西側の前方部)。また、この溝は西側のくびれ部付近では一部墳丘を削る形となっており、この部分では盛土状況や葺石らしき円礫が観察される。

後円部の墳頂部には直径13ｍ程の平坦面が存在し、現状では中心から南東よりに直径２ｍ程の撹乱坑が存在する以外には目立った盗掘穴などは見られない。コンター全般には若干の乱れが存在するが、東と南側を細かく観察すれば平坦面が122.5ｍあたりと120ｍあたりに見られ、ここをテラスとして数えれば墳頂部を合わせ三段築成の可能性が指摘できる。ただその場合、下から二段目のテラスは後円部で完結し、一段目のテラスはほぼ前方部の平坦面に一致するものと考えられる。

また、前方部東端付近においても、119.5ｍあたりに一部平坦面が認められた。

前方部においては、西側が溝によって削られているため墳端が明瞭でないが、比較的残りの良い東側ではいわゆる撥形に開く形状になるものと考えられる。

以上から、主軸を中心とした平面での規模は墳長58.3ｍ、後円部径33.5ｍ、墳頂平坦部径13ｍ、くびれ部幅13ｍ、前方部前面幅約28ｍ、前方部長27.５ｍである。高さは後円部で5.3ｍ、前方部で2.5ｍで、前方部と後円部の比高差は2.8ｍといった数値が読み取れる。　（小郷利幸）

第２節　墳丘裾部の埋葬施設

後円部墳丘南側裾部で、２基の箱形石棺が確認されている。いずれも後世の排水溝の壁面に断面が露出している。

以下、各石棺について概要を述べる。

箱形石棺Ａ（第３図）

板石を組合せた箱形石棺で、後円部南西側墳端付近に位置する。棺の中央部を後世の溝で削られ、両小口付近が露出している。両小口付近の長側壁石材、蓋石の一部がほぼ原位置を留めて確認できる。北東小口側では、長側壁石材は両側とも厚さ10cm弱の板石を用いている。両小口側とも蓋石石材は厚さ10cm前後のものが用いられている。寸法は内法で幅約40cm、両短壁が堆積土のため確認できないが、ピンポールによる探査では長さ約175cmと推定される。現状では南西小口側の幅がやや狭いが、南東壁が土圧等で若干内傾しているためと思われる。

箱形石棺B（第3図）

板石を組合せた箱形石棺で、後円部南々東側墳端付近に位置する。南側の側面を一部溝で削られ、棺の西半部が露出している。西側短壁、北側長側壁、蓋石の一部がほぼ原位置を留めて確認できる。北側長側壁は板石二枚以上、西側短壁は板石一枚で構成されると考えられる。長短両壁とも内側は平滑で、ある程度加工されている可能性がある。西側短壁石材は厚さ10cm弱のものが用いられている。南側長側壁石材は原位置を留めないが、一石が外側に倒れた状態で遺存している。西側短壁の大きさから、棺幅は内法で約40cmと考えられる。長さは明らかでない。長側壁、蓋石とも石材は長さ80cmを越える大形のものが使用されている。この箱形石棺からは、過去に人骨と鉄製短剣が出土している（今井　1970）。

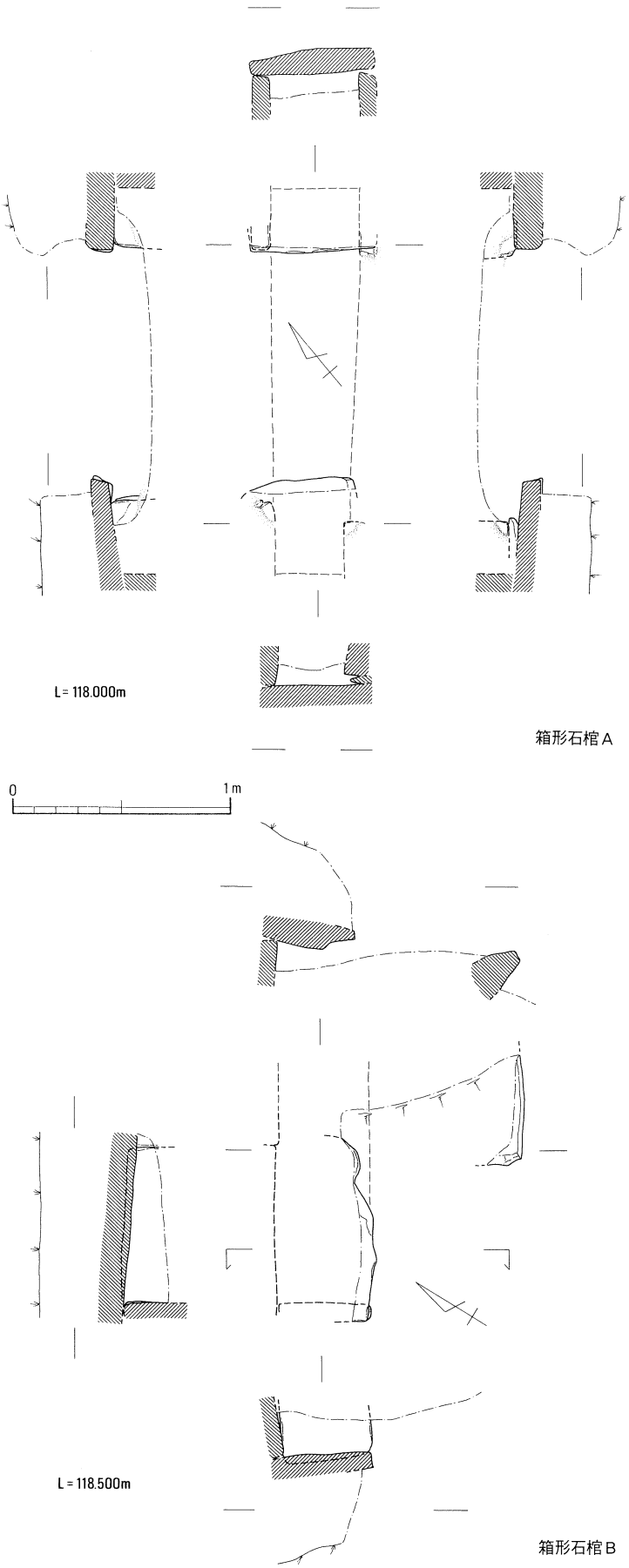
なお、両石棺の位置については墳丘測量図（第4図）を参照されたい。　（坂本心平）

第3節　小　結

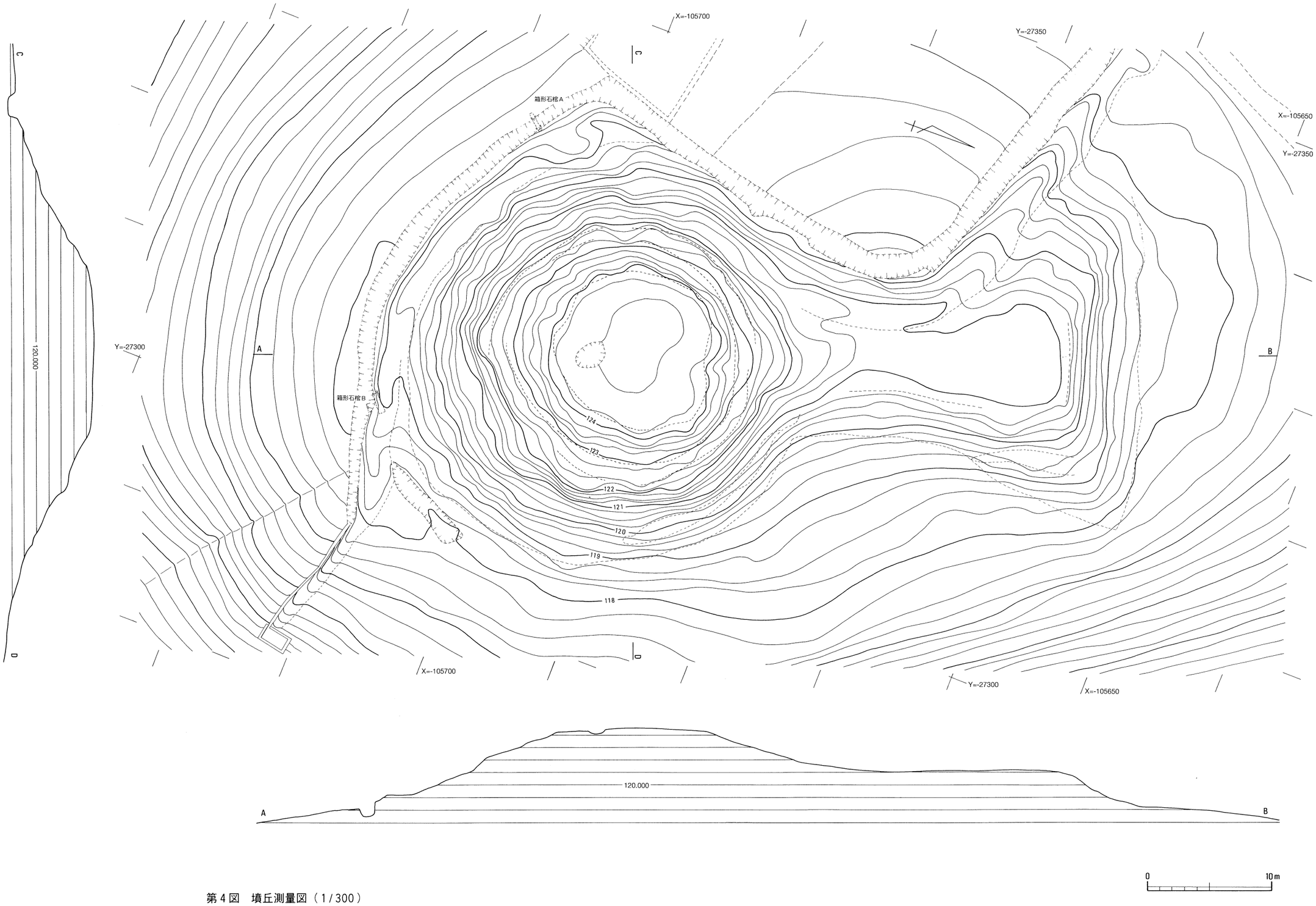
本稿では、測量調査着手前のこれまでの知見、及び測量調査終了後に新たに判明したことの二つに分けて記述する。

これまでの知見

前方部を北方向に向けている。規模は墳長55m、後円部径31m、墳頂平坦部径13m、くびれ部幅15m、前方部前面幅25m、前方部長



第3図　箱形石棺A・B　平・断・立面図（1/30）



第４図　墳丘測量図（１/３００）

25ｍである。高さは後円部が５ｍ、前方部が2.3ｍ、後円部墳頂から約２ｍ下位の位置にわずかな平坦面が巡ることから、二段築成と認識されている。前方部には段築は認められない。前方部は中ほどから前面にかけて、撥形に開く。墳丘及び周辺に円礫が散乱していることから、葺石をもつことがわかっている。埴輪は見つかっていない。後円部墳頂平坦面、前方部には盗掘を示すような墳形の乱れは認められない。

前方部の西側から後円部にかけて墳形に沿って、幅１～２ｍの排水溝が掘削されている。後円部南墳端付近で、この溝の壁面に箱形石棺(前述の箱形石棺Ｂ)が露出しており、人骨と短剣が出土している。

以上がこれまで認知されていることで、美作地方最古の前方後円墳と位置付けられてきた。

測量調査の成果

今回の測量調査によって得られた計測値は前述のとおりである。全体に従来の計測値よりも値が大きくなっている。これは墳端等の傾斜変換点をどこで押さえるかという判断の相違によるものである。

次に、段築であるが、今回の測量で後円部東側からくびれ部にかけて新たにもう一段あることが判明した。また、前方部の撥形に開く部分にも、わずかではあるが平坦部があることがわかった。このことから、後円部三段、前方部二段築成の前方後円墳である可能性が指摘された。

測量調査とは直接関係はないが、前述の溝の断面の精査により、新たに１基の箱形石棺(箱形石棺Ａ)が確認されている。

このことから、墳丘の周辺には他にも箱形石棺が存在することが推測される。　　(行田裕美)

引用・参考文献

今井　堯　1970　「日上畝山古墳群」『津山の文化財』　津山市教育委員会

第３章　発掘調査の成果

第１節　墳　　丘

・トレンチの位置及び設置理由（第５図）

トレンチは、後円部頂部平坦面のほぼ全面、後円部の墳丘斜面と裾部に二箇所、くびれ部に一箇所、前方部では四箇所に設けた。畑地や用水溝によって、墳丘の西側が著しく削られていたため、墳丘斜面と裾部のトレンチ設定は基本的に東側に限定せざるを得なかった。

まず後円部の墳頂平坦面では、埋葬施設の検出及び構造把握を目的として、墳丘主軸に沿って南北トレンチを、またこれに直交して東西トレンチを設定した。各々の北壁と西壁をメインセクションラインとし、適宜拡張した。また、後円部径を正確に復元するために、南北トレンチの延長線上の南端裾部にトレンチを設けると共に東西トレンチを東端裾部まで延長し、さらにくびれ部には第１トレンチを設定した。東西トレンチを墳丘裾部にまで延長することにより、墳丘の段築成や盛土などの構築状況を連続的に捉えられることが期待されたことは言うまでもない。

前方部の形状に関しては、事前踏査や墳丘測量調査の時点でいわゆる撥形を呈する点が指摘されていた。そこで東側斜面に第２・３トレンチを、前端の東隅部に第４トレンチを設けて、前方部の形状や墳丘斜面の状況把握に努めた。さらに、前方部の長さや前面の傾斜、前端ラインなどを明らかにするために、南北メインライン上に第５トレンチを設定した。　（倉林眞砂斗）

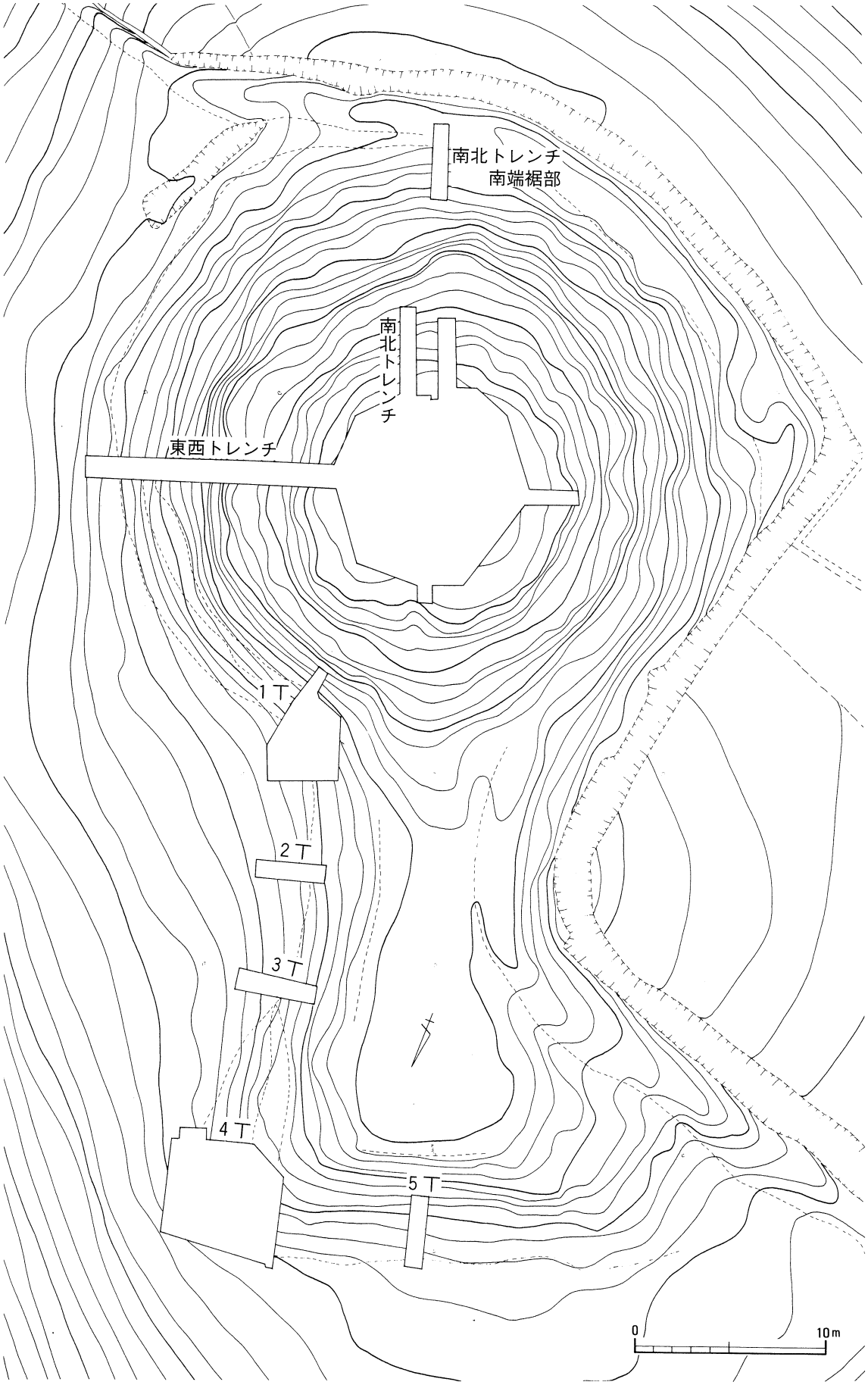
Ⅰ．後円部の発掘調査

１）南北トレンチ

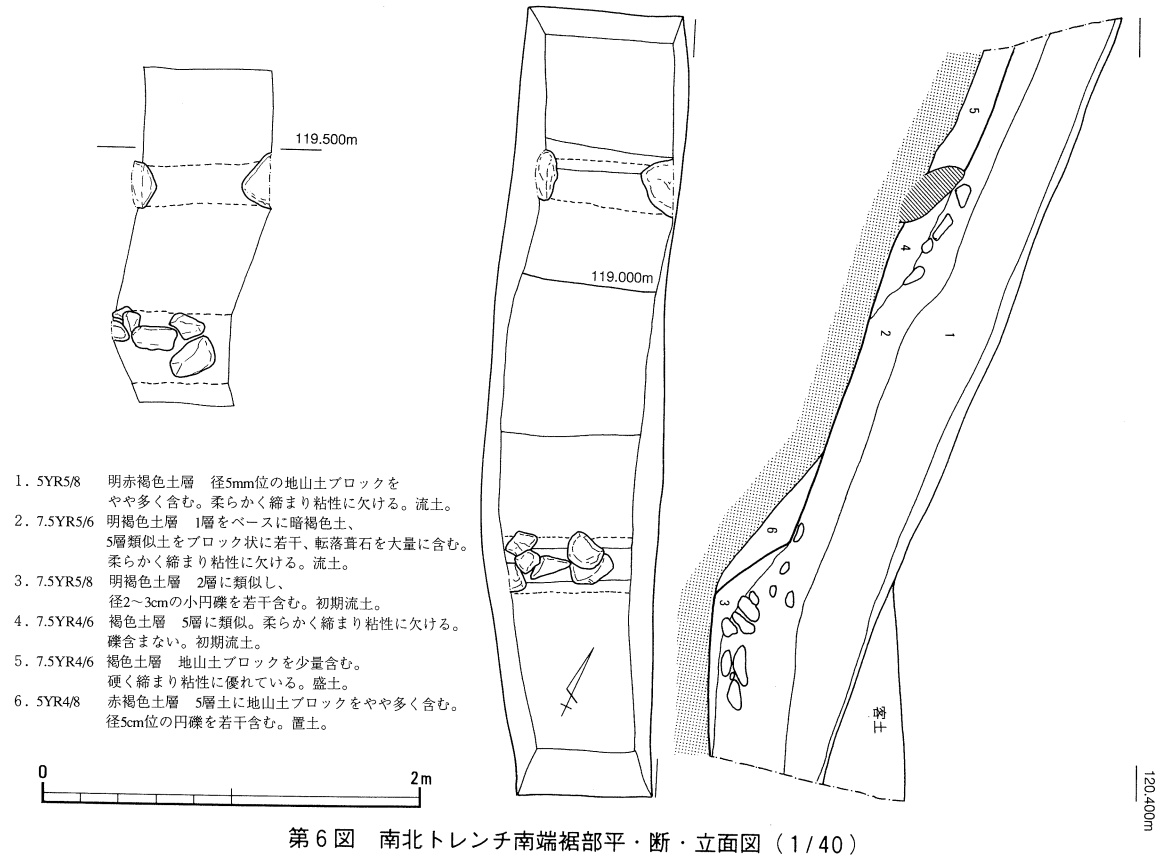
・南端裾部（第６図）

本トレンチは、後円部の墳端の構造、直径及び墳長を決定すべく後端側の墳端位置の確認を目的として南北メインライン上、南端裾部に3.5×１ｍの規模で設定した。調査の結果、上下二つの斜面とこれらに挟まれた平坦面を検出している。

下段の斜面は、後円部墳頂部の東西メインラインより南に18ｍ、下端の標高118.15ｍの位置で確認している。これは地山を削出した比高0.4ｍ、傾斜角55°ほどの斜面で、後述するくびれ部の墳端に比べ標高がやや低いものの、東西トレンチでの成果を勘案すると、この斜面を墳端と考えることができる。また、この斜面では、地山の直上で硬く良く締まった土層（６層）を観察しているが、円礫等を含まないことから葺石を固定するための置土と判断した。ただしこの土層に密着する葺石はなく、根石を含めて原位置を留めている葺石はなかった。また、その上部で検出した平坦面は、標高118.55～119.15ｍ、幅1.7ｍ程で後円部東トレンチ墳裾部をはじめくびれ部、前方部東側面、前方部前面でもこれに相当する平坦面を確認した。おそらくこの平坦面はほぼ墳丘を巡ることが想定され、段築成平坦面と考えられる（下段テラス）。さらにその上部で墳丘斜面（中段斜面）を検出している。この中段斜面は後円部東西メインラインより南に16ｍ、標高119.15ｍの位置で立ち上がり、盛土によって下端の傾斜変換線を作り出しているが、ここではトレンチの東西壁で人頭大の円礫を確認した。後に触れるとおり中段斜面に葺石が施されていた可能性があることから葺石根石と考えている。



第５図　墳丘トレンチ配置図（1/300）



第６図　南北トレンチ南端裾部平・断・立面図（1/40）

土層の堆積状況は、東壁面での観察を行った。基本的に五層に分層可能で、このうち流土と思われるものは四層に分層することができた。また、墳端付近の最下面で葺石を含まない初期流土を確認している。特にテラス面を覆う２層では大小の円礫を大量に含んでおり、中段斜面より上でも葺石が葺かれていたことが想定される。また、先に記したとおり下段斜面で葺石を固定するための置土を確認している。客土としたものは、墳丘西側より続く根切り溝を掘削した際の排土である。この客土を除いては層序に乱れもなく上部より順に堆積しており、自然に埋没したものと思われる。

なお、本トレンチから土器は出土しなかった。　（澤田秀実）

・頂部平坦面（第７図）

墳丘の構築　後円部頂部平坦面での南北トレンチは、埋葬施設の検出と墳丘構造の把握を目的として、墳丘主軸線上に設けたトレンチである。最も深い部分で、現在の地表面から約2.4ｍ掘り下げた。トレンチ壁面の大部分が、中心石槨及び第２石槨の墓坑に占められており、墳丘構築法を観察できる部分は少ないが、以下、築造時の順序を考慮しながら記述していきたい。

まず中心石槨の南側では、中心石槨床面付近まで掘り下げた。ここではまず、盛土予定区の外縁に黄橙色土(44・45層)、黒褐色土(30層)等をほぼ水平に標高122.90ｍ付近まで盛土し、その内側に黄褐色土(40層)、黄色土(43層)等を、後円部の中心方向に向かって盛土していったと考えられる。

このように標高122.90ｍ付近まで構築された後円部の南側外縁部に、断面カマボコ形の土堤状盛土が行なわれている。これは、赤色土(26層)、黒褐色土(27層)を中心に、南側から細かく互層に積んでいくことで構築されている。この土堤状盛土の頂部は123.80ｍ付近にあり、このトレンチの底面からは、

およそ0.8ｍの高さをもつことになる。このような盛土方法は、南北トレンチの南端でのみ確認され、他のトレンチでは確認されなかった。南北トレンチの南側では土堤状に盛土した後、内側に暗褐色土(24層)、黄褐色土(25層)を、南から北に向かって盛土していったと考えられる。一方、第２石槨北側ではこのような特徴的な盛土方法は見られず、赤褐色土(75層)、暗褐色土(76～79層)、黒褐色土(83・84層)等を細かく、レンズ状に盛土することで墳丘を構築している。

墓坑埋土　南北トレンチ西壁における観察では、中心石槨と第２石槨の墓坑埋土が観察された。第２石槨については後述することにし、ここでは中心石槨の埋土についてのみ述べることにしたい。

中心石槨の墓坑埋土は、主に中心石槨の壁体構築に伴ういわゆる「裏込め土」と、中心石槨構築後の埋め戻しに伴う「埋め戻し土」に分類することができるが、中心石槨構築後の「埋め戻し土」については、さらに上下二群に分割して捉えることができる。したがって、墓坑埋土は、大きく三群に分類できることになる。以下、これらの各層群について下から順に述べていくことにする。

まず中心石槨の壁体構築に伴う墓坑埋土であるが、中心石槨南側では、墓坑壁と中心石槨壁体の間隔が下半部で約25cmと非常に近いためか、壁体構築に伴う埋土としては、黒褐色土(30層)のみが使われている。一方、中心石槨北側では第２石槨の床面を断ち割った部分で見られた99層以下の層群がこれに対応するが、暗褐色土(103・106層等)や黒褐色土(100～102層等)を細かく、ほぼ水平に互層に積んでいる。これらの上に明赤褐色土(南側15層、北側99層)が入れられている。この土層は東西南北いずれのトレンチでもこの位置に見られ、かつ中心石槨の壁体上面の高さにほぼ一致するように入れられた点で、非常に特徴あるものである。以上が、中心石槨の壁体構築に伴う埋土である。

次に蓋石が置かれた後に、これを覆うように盛られたのが黒褐色土(30層)である。この土層は数cm大の礫を含んではいるものの、主体となる土質自体は細粒で非常にきめ細かいものである。この土層は10～20cm程度の厚さで蓋石の全面を覆っていた。

竪穴式石槨の埋め戻しに伴う土層は、この黒褐色土層よりも上層の層群である。中心石槨の北側ではこの部分は第２石槨の構築に伴って失われていた。また南半においても、中心石槨中軸線上に当たるこのトレンチの西壁は、三回にわたる撹乱(盗掘坑Ａ、Ｂのほかに、墳頂平坦面の南半部に現地表面で確認できた撹乱坑がある)の影響で遺存状態が悪いため、主に東壁の状況について述べていきたい。

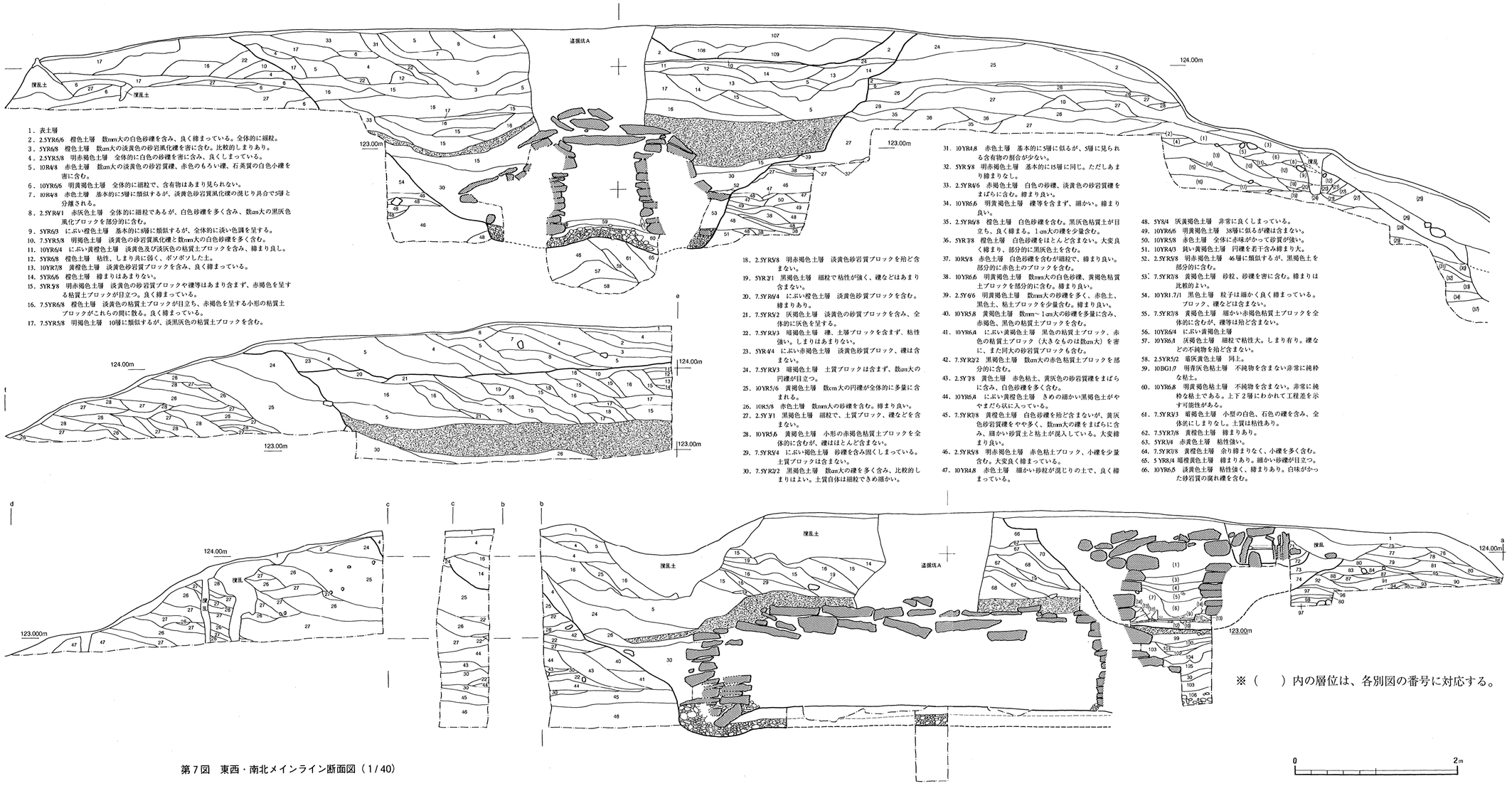
まず最初の埋め戻し土として、明赤褐色土(15層)、橙色土(16層)等が中心に用いられている。これらの土層は南から北に向かって傾斜しており、各層が南から北に向けて積まれていったことがわかる。この工程で高さにしておよそ0.6m、標高124.00m付近までが埋め戻され、ここで一度平坦面が形成されている。

次の埋め戻し土は、明赤褐色土(４層)や赤色土(５層)等、全体として赤味の強い土を中心に用いて、前の段階と同様に各層を南から北に向けて斜めに積み、この段階でも0.5ｍ程度埋め戻されている。以上の工程によって墓坑の埋め戻しが終了する。　(増田直人)

２）東西トレンチ（第７・８図）

・墳丘の構築

東西トレンチは、埋葬施設の検出と墳丘構造の把握を目的に、南北メインラインに直交する形で設けたトレンチで、南北メインラインから東へ18ｍ、西へ約５ｍ、幅約１ｍの規模で設定した。後円部の東側斜面では墳端付近から墳頂平坦面まで通して掘り下げ、墳頂平坦面では最も深い部分で、現地表面



1．表土層
2．2.5YR6/6　橙色土層　数mm大の白色砂礫を含み、良く締まっている。全体的に細粒。
3．5YR6/8　橙色土層　数cm大の淡黄色の砂岩風化礫を密に含む。比較的しまりあり。
4．2.5YR5/8　明赤褐色土層　全体的に白色の砂礫を密に含み、良くしまっている。
5．10R4/8　赤色土層　数cm大の淡黄色の砂岩質礫、赤色のもろい礫、石英質の白色小礫を密に含む。
6．10YR6/6　明黄褐色土層　全体的に細粒で、含有物はあまり見られない。
7．10R4/8　赤色土層　基本的に5層に類似するが、淡黄色砂岩質風化礫の混じり具合で5層と分離される。
8．2.5YR4/1　赤灰色土層　全体的に細粒であるが、白色砂礫を多く含み、数cm大の黒灰色風化ブロックを部分的に含む。
9．5YR6/3　にぶい橙色土層　基本的に6層に類似するが、全体的に淡い色調を呈する。
10．7.5YR5/8　明褐色土層　淡黄色の砂岩質風化礫と数mm大の白色砂礫を多く含む。
11．10YR6/4　にぶい黄橙色土層　淡黄色及び淡灰色の粘質土ブロックを含み、締まり良し。
12．5YR6/8　橙色土層　粘性、しまり共に弱く、ボソボソした土。
13．10YR7/8　黄橙色土層　淡黄色砂岩質ブロックを含み、良く締まっている。
14．5YR6/6　橙色土層　締まりはあまりない。
15．5YR5/8　明赤褐色土層　淡黄色の砂岩質ブロックや礫等はあまり含まず、赤褐色を呈する粘質土ブロックが目立つ。良く締まっている。
16．7.5YR6/8　橙色土層　淡黄色の粘質土ブロックが目立ち、赤褐色を呈する小形の粘質土ブロックがこれらの間に散る。良く締まっている。
17．7.5YR5/8　明褐色土層　10層に類似するが、淡黒灰色の粘質土ブロックを含む。
18．2.5YR5/8　明赤褐色土層　淡黄色砂岩質ブロックを殆ど含まない。
19．5YR2/1　黒褐色土層　細粒で粘性が強く、礫などはあまり含まない。
20．7.5YR6/4　にぶい橙色土層　淡黄色砂質ブロックを含む。締まりあり。
21．7.5YR5/2　灰褐色土層　淡黄色の砂質ブロックを含み、全体的に灰色を呈する。
22．7.5YR3/3　暗褐色土層　礫、土層ブロックを含まず、粘性強い。しまりはあまりない。
23．5YR4/4　にぶい赤褐色土層　淡黄色砂質ブロック、礫は含まない。
24．7.5YR3/3　暗褐色土層　土質ブロックは含まず、数cm大の円礫が目立つ。
25．10YR5/6　黄褐色土層　数cm大の円礫が全体的に多量に含まれる。
26．10R5/8　赤色土層　数mm大の砂礫を含む。締まり良い。
27．2.5Y3/1　黒褐色土層　細粒で、土質ブロック、礫などを含まない。
28．10YR5/6　黄褐色土層　小形の赤褐色粘質土ブロックを全体的に含むが、礫はほとんど含まない。
29．7.5YR3/4　にぶい褐色土層　砂礫を含み固くしまっている。土質ブロックは含まない。
30．7.5YR2/2　黒褐色土層　数cm大の礫を多く含み、比較的しまりはよい。土質自体は細粒できめ細かい。
31．10YR4/8　赤色土層　基本的に5層に似るが、5層に見られる含有物の割合が少ない。
32．5YR3/8　明赤褐色土層　基本的に15層に同じ。ただしあまり締まりなし。
33．2.5YR4/6　赤褐色土層　白色の砂礫、淡黄色の砂岩質礫をまばらに含む。締まり良い。
34．10YR5/6　明黄褐色土層　礫等を含まず、細かい。締まり良い。
35．2.5YR6/8　橙色土層　白色砂礫を含む。黒灰色粘質土が目立ち、良く締まる。1cm大の礫を少量含む。
36．5YR7/8　橙色土層　白色砂礫をほとんど含まない。大変良く締まり、部分的に黒灰色土を含む。
37．10R5/8　赤色土層　白色砂礫を含む小礫状で、締まり良い。部分的に赤色土のブロックを含む。
38．10YR6/6　明黄褐色土層　数mm大の白色砂礫、黄褐色粘質土ブロックを部分的に含む。締まり良い。
39．2.5Y6/6　明黄褐色土層　数mm大の砂礫を多く、赤色土、黒色土、粘土ブロックを少量含む。締まり良い。
40．10YR5/8　黄褐色土層　数mm～1cm大の砂礫を多量に含み、赤褐色、黒色の粘質土ブロックを含む。
41．10YR6/4　にぶい黄褐色土層　黒色の粘質土ブロック、赤色の粘質土ブロック（大きなものは数cm大）を密に、また同大の砂岩質ブロックも含む。
42．7.5YR2/2　黒褐色土層　数cm大の赤色粘質土ブロックを部分的に含む。
43．2.5Y7/8　黄色土層　赤色粘土、黄灰色の砂岩質礫をまばらに含み、白色砂礫を多く含む。
44．10YR6/4　にぶい黄橙色土層　きめの細かい黒褐色土がややまだら状に入っている。
45．7.5YR7/8　黄橙色土層　白色砂礫を殆ど含まないが、黄灰色砂岩質礫をやや多く、数mm大の礫をまばらに含み、細かい砂質土と粘土が混入している。大変締まり良い。
46．2.5YR5/8　明赤褐色土層　赤色粘土ブロック、小礫を少量含む。大変良く締まっている。
47．10YR4/8　赤色土層　細かい砂粒が混じりの土で、良く締まっている。
48．5Y8/4　灰黄褐色土層　非常に良くしまっている。
49．10YR6/6　明黄褐色土層　38層に似るが礫は含まない。
50．10YR5/8　赤色土層　全体に赤味がかって砂質が強い。
51．10YR4/3　黒い黄褐色土層　円礫を若干含み締まり大。
52．2.5YR5/8　明赤褐色土層　46層に類似するが、黒褐色土を部分的に含む。
53．7.5YR7/8　黄褐色土層　砂粒、砂礫を密に含む。締まりは比較的よい。
54．10YR1.7/1　黒色土層　粒子は細かく良く締まっている。ブロック、礫などは含まない。
55．7.5YR7/8　黄褐色土層　細かい赤褐色粘質土ブロックを全体的に含むが、礫等は殆ど含まない。
56．10YR6/4　にぶい黄褐色土層
57．10YR6/1　灰褐色土層　細粒で粘性大。しまり有り。礫などの不純物を殆ど含まない。
58．2.5YR5/2　暗灰黄色土層　同上。
59．10BG1/7　明青灰色粘土層　不純物を含まない非常に純粋な粘土。
60．10YR6/8　明黄褐色粘土層　不純物を含まない。非常に純粋な粘土である。上下2層にわかれて工程差を示す可能性がある。
61．7.5YR3/3　暗褐色土層　小型の白色、石色の礫を含み、全体的にしまりなし。土質は粘性あり。
62．7.5YR7/8　黄橙色土層　締まりあり。
63．5YR3/4　赤黄色土層　粘性強い。
64．7.5YR7/8　黄橙色土層　余り締まりなく、小礫を多く含む。
65．5YR8/4　暗橙黄色土層　締まりあり。細かい砂礫が目立つ。
66．10YR6/5　淡黄色土層　粘性強く、締まりあり。白味がかった砂岩質の風化礫を含む。
67．10YR6/4　にぶい黄橙色土層　白色砂礫をやや含むが、細粒で粘性強い。良く締まっている。
68．10YR5/8　赤色土層　1～2cm大の白色礫を多く含み、部分的に黄灰色粘土を含む。土半はやや黒みを帯びている。締まりあり。
69．10YR5/8　赤色土層　数mm大の白色礫を含み、しまりはあまり良くない。
70．10YR6/8　赤橙色土層　白色砂礫を密に含む。良くしまっている。
71．10YR4/4　褐色土層　白色粒多く含み、1cm以下の凝灰岩粒を含む。しまりあり。
72．10YR3/4　暗褐色土層　黒色粒含み、粘性強い。
73．10YR4/4　褐色土層　粘土粒、白色、黄色土粒を多く含む。
74．10YR3/4　暗褐色土層　黒色の土粒を含む。
75．5YR3/4　赤褐色土層　黄色、白色含む。2～3mmの土粒を主体とし、しまりは固い。
76．7.5YR4/4　暗褐色土層　黄色、白色の微粒をわずかに含む。ブロックより成り、しまりあり。
77．7.5YR4/6　暗褐色土層　1～3cmの凝灰岩および5mm以下の白、黄色粒を含む。しまりあり。
78．10YR4/3　暗褐色土層　白黄色の微粒含む。76層より暗く固い。
79．10YR3/4　暗褐色土層　白黄色の微粒と黒色土粒を含む。ブロック状で固い。
80．10YR4/4　褐色土層　2～3cmの小石や、黄、白色粒、白色粘土の微粒を多く含む。
81．10YR1.7/1　黒色土層　きめ細かい黒褐色土中に2mmほどの黒色土粒含む。また黄褐色の土粒もわずかに含まれる。
82．7.5YR4/4　褐色土層　黄、白色粒を含む。ブロック主体の土。
83．10YR3/2　黒褐色土層　黄褐色の小ブロックと7cm大の小石を含む。また、黒色土粒を多く含む。
84．10YR2/2　黒褐色土層　83層よりも暗い色調で、黄褐色ブロックを含まない。
85．10YR5/6　黄褐色土層　黄褐色土ブロック層。
86．10YR4/4　褐色土層　黄褐色、白色、黄色粒含む。ブロックよりなる土。
87．10YR4/4　褐色土層　2cmの凝灰岩、黄色、白色粒含む。固い。
88．10YR4/4　褐色土層　褐色、黒色土をわずかに含むのみ。良くしまっている。
89．10YR1.7/1　黒色土層　きめの細かい黒色土中に、わずかに褐色土の微粒を含む。良くしまっている。
90．10YR3/3　暗褐色土層　3cm前後の暗褐色土ブロックと黒色土の混合土。僅かに白色、黄色微粒含む。
91．10YR4/4　褐色土層　白、黄、灰、黒色土粒含む。ブロックよりなる。
92．10YR1.7/1　黒色土層　きめの細かい黒色土に、褐色土のブロックがわずかに含まれる。
93．10YR3/3　暗褐色土層　暗褐色土のブロック主体。しまりあり。
94．10YR3/3　暗褐色土層　黄色土、黒色土粒を含む。
95．10YR4/4　褐色土層　黄色、白色の微粒を多く含み、ブロックよりなる。
96．10YR4/4　褐色土層　褐色土ブロックに黒色土がわずかに混入している。
97．10YR1.7/1　黒色土層　きめの細かい黒色土に褐色土が多く混入している。
98．10YR3/2　暗褐色土層　軟質の暗褐色土の単一土層。
99．5YR4/6　赤褐色土層　灰色、黄色、粘土粒を多く含む。
100．7.5YR4/1　黒褐色土層　1cm前後の褐色土粒、黒色土粒、灰白色粘土粒を含み、やや柔らかい。
101．7.5YR4/2　黒褐色土層　褐色土粒、黒色土粒を含み粘性強い。
102．7.5YR4/2　黒褐色土層　褐色土のブロックを主体とし、部分的に灰色粘土粒を含む。
103．10YR2/3　暗褐色土層　黄色土、灰色粘土の微粒を含み、粘性が強い。
104．10YR2/2　黒褐色土層　1cm以下の褐色土粒を含む。やや粘性強い。
105．10YR4/4　褐色土層　白色、黄色、灰色の土粒を含み、粘性が強い。
106．10YR2/3　暗褐色土層　103層に似るが、粘性が強い。
107．2.5YR6/6　橙色土層　数mm大の白色砂礫をまんべんなく含み、全体的に細粒。
108．5YR6/8　橙色土層　淡黄色の砂岩風化礫を密に含む。比較的しまっている。
109．10YR4/8　赤色土層　数cm大の淡黄色砂岩質礫、赤色のもろい礫、石英質の白色小礫等を密に含む。

※（　　）内の層位は、各別図の番号に対応する。

第7図　東西・南北メインライン断面図（1/40）

から約2.7ｍ掘り下げている。本トレンチでもセクションの大部分は中心石槨の墓坑埋土であったが、段築成、盛土の手法など墳丘構造についてもある程度の知見を得ることができた。

以下、本トレンチにおける調査所見を地山整形、盛土、外表施設の三点に分けて記述していくことにしたい。

地山整形（第８図）　後円部東西トレンチでは、南北メインラインより東へ11.9ｍから17.9ｍの範囲で地山を確認した。本トレンチ内では旧表土は確認されず、検出した地山はすべて整形されたものと考えられる。

確認された地山のうち傾斜変換点が見られるのは、南北メインラインより15.8ｍ（標高118.70ｍ）、14.4ｍ（標高119.20ｍ）の地点である。15.8ｍの地点には、わずかながら葺石が遺存しており、墳端を表わしているものと考えられる。14.4ｍから15.8ｍの間の地山は、約16°の傾斜で緩やかに削り出されている。また、15.8ｍ地点より東側についてもトレンチ内では旧表土は見られず、非常に緩やかな傾斜で下っていっており、地山整形は墳丘外にまで及んでいる。

南北メインラインより12.4ｍから13.9ｍの地点での地山はほぼ水平に削りだされているが、12.4ｍ地点から西へ向かって緩やかに上がっていくようである。

盛土（第７図、第８図）　墳丘の最下段はほぼ地山の削り出しによって構築されており、盛土が行われるのは標高119.70ｍよりも上の部分である。後円部墳頂は標高124.50ｍ付近にあることからおよそ4.8mの盛土が行われていることになり、約6.4ｍの高さをもつ後円部の大半が、盛土によって築かれていることがわかる。ここでは、まず東側の墳丘斜面における盛土の状況について、下層から順に述べていきたい（第８図）。

44・45層は第１トレンチ前方部側２層、同後円部側４層、第３トレンチ４層、第４トレンチ３・６・７層、第５トレンチ４層等と同様、粒子が細かくよく締まった褐色土層で、初期流土もしくは地山の土をベースにした置き土の可能性が考えられる。

標高119.70ｍから120.90ｍの部分では、盛土予定区のやや内側に41・42・46層の各層を水平に盛土し、その外側に38層を積んで墳丘斜面を形成している。同様に標高120.90ｍから121.80ｍ部分でも32・33・34・37層の各層を水平に盛土し、その後35・36層を外側に積んで墳丘斜面を形成している。

標高121.80ｍから123.20ｍの間の部分の盛土状況はあまり明瞭ではないが、28層やその上の土層が、36層や38層などと同じように積まれていることから、基本的にはこの下方で見られたのと同じ工程が一ないし二回行われたと想定される。また、中心石槨両側の一段深く掘り下げた部分と中心石槨床面断ち割り部分は、レヴェルから見るとちょうどこの工程に対応する（第８図）。ここでは、最も深い部分で標高121.80ｍまで掘り下げている。中心石槨床面断ち割り部分では、まず46・57・58層をほぼ水平に積み、56・61・65層を西から東に向けて順に積んでいったと考えられる。また、中心石槨西側では明赤褐色土（46層）、灰黄褐色土（48層）などがほぼ水平に盛土されている。一方、東側では明黄褐色土（38層）、赤色土（47層）、灰黄褐色土（48層）などを標高122.80ｍ付近まで非常に細かく互層に積み上げている。

標高123.20ｍよりも上の部分（第７図）では、まず、東側では赤色土（26層）、黒褐色土（27層）等の各層を墳丘外縁から中心方向に向かって盛土することで、標高123.80ｍ付近まで築成している。西側では東側と同様、明黄褐色土（６層）、黒褐色土（27層）の各層を標高123.80ｍまで、ほぼ水平に盛土している。この段階で一旦平坦面が形成されたようである。

この後、東側では24・25層をほぼ水平に盛土し、また西側ではまず盛土予定区の内側に４・10・22

層を盛土し、そこから墳丘外縁方向に向かって標高124.50ｍまで順次盛土を行ない、すべての工程が終了したと考えられる。

外表施設　墳丘自体の傾斜変換点は、標高118.70ｍ、119.20ｍ、121.60ｍの三地点で確認できた。これらにはそれぞれ葺石根石が伴っており、墳丘の段築を意味するものと考えられる。また、標高123.00ｍ付近にも傾斜変換点が見られるが、これについてはその下方に25層の流土が認められるため、墳丘築成後に削平されたものと判断した。

東西トレンチ内では、外表施設として葺石が遺存していることを確認した。葺石はすべて傾斜変換点付近で検出しており、亜角礫と円礫の二種類が認められた。以下、最下段から順に調査所見を述べていくことにしたい。

最下段には人頭大の石が１つだけ確認された。南北メインライン南端裾部及び第１・３・４・５トレンチの下段に見られるような地山の傾斜、根石の遺存状況などからみて、これは墳端を画する葺石根石と判断することができる。これらは、第５トレンチ下段の根石と同様、石の長軸を横方向にして設置されていた。

第二段目ではまず人頭大の亜角礫を設置し、その上に人頭大かそれよりやや小振りの円礫が数段積まれていた。これらの根石は、第１・３・４トレンチ上段の根石と同様に長軸を縦方向に並べていたようである。

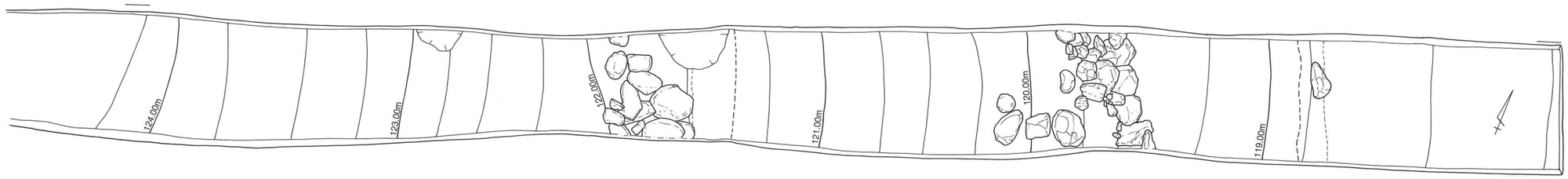
第三段目でも第二段目と同様に、まず人頭大の礫を設置し、その上に人頭大程の石を二段程度積んでいた。根石は、本トレンチでの第二段目と同様に、長軸を縦方向にして並べていた。トレンチ内の流土中には多くの円礫、亜角礫が混入しており、墳丘全体を覆っていたと思われるほどの数は確認できなかったが、少なくとも遺存していた状態よりは多くの葺石が施されていたと思われる。なお、葺石と墳丘構築過程の関係については、葺石が遺存していた箇所の断ち割りを実施しなかったため、十分に把握できなかった。

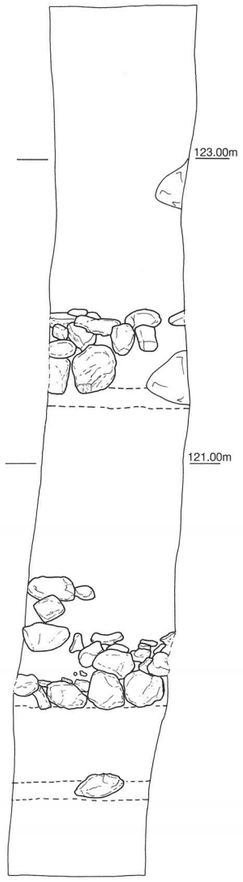
以上が後円部東西トレンチにおける墳丘に関する所見である。なお、遺物は弥生式土器が墓坑埋土及び盛土中から数点出土している。　（増田直人・高橋幸治）

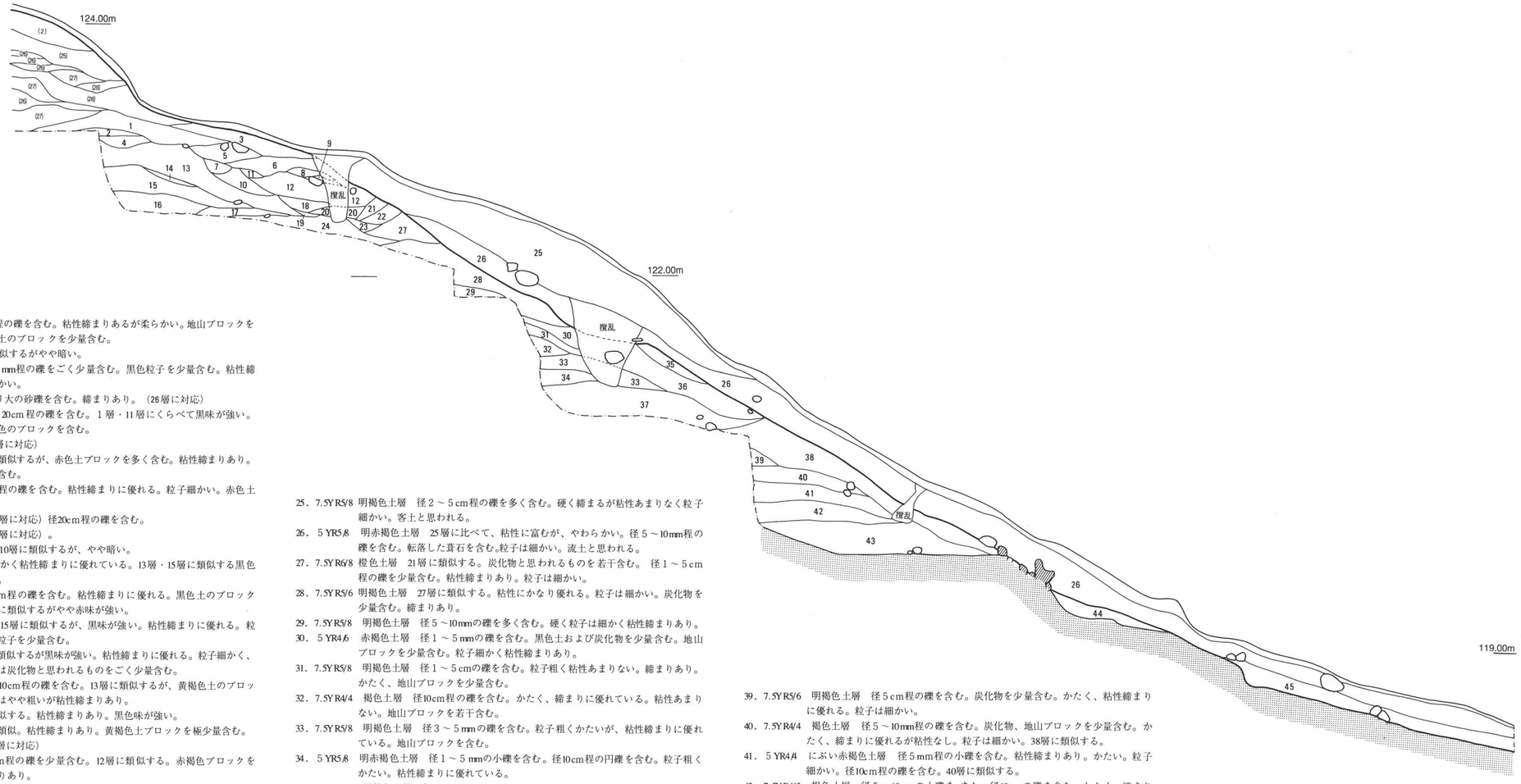
・墓坑埋土について（第７図）

この東西トレンチ内では第２石槨の墓坑埋土は見られず、墓坑埋土としては中心石槨と第２箱形石棺に伴うものを確認している。ここでは中心石槨の墓坑埋土について触れ、第２箱形石棺に伴うものについては別項で述べることにしたい。なお、ここで扱う中心石槨の墓坑埋土は、南北トレンチにおける所見と同様に中心石槨の壁体構築に伴ういわゆる「裏込め土」、中心石槨完成後の二群の「埋め戻し土」と合計三群に把握することができる。

まず中心石槨壁体構築に伴う「裏込め土」は、西側では黒褐色土(30層)が多く用いられているが、東側では黄褐色土(53層)が多く用いられていた。そして、続く「埋め戻し土」は、これらの上に石槨壁体上部の高さに対応するように明赤褐色土(15層)が用いられている点は、南北トレンチにおける状況と同様であった。また、蓋石を黒色土(30層)によって覆っていることも南北トレンチにおける所見と同様であるが、西側では約10cmと薄かったのに対して、東側ではおよそ50～60cmとかなり厚く積まれていた。これは、南北トレンチの東壁セクションにおける所見とも一致するもので、この黒色土(30層)は、東側では中心石槨に沿ってかなり厚く積まれていたことがわかる。







1．10YR4/6　褐色土層　径５mm程の礫を含む。粘性締まりあるが柔らかい。地山ブロックを極僅かに含む。黒色土のブロックを少量含む。
2．10YR4/4　褐色土層　１層に類似するがやや暗い。
3．10YR6/8　明黄褐色土層　径５mm程の礫をごく少量含む。黒色粒子を少量含む。粘性締まりあり。粒子は細かい。
4．10R5/8　赤色粘質土層　数ミリ大の砂礫を含む。締まりあり。（26層に対応）
5．10YR2/3　黒褐色土層　径15～20cm程の礫を含む。１層・11層にくらべて黒味が強い。粘性締まりあり。黒色のブロックを含む。
6．10R5/8　赤色粘質土層　（26層に対応）
7．5YR4/6　赤褐色土層　11層に類似するが、赤色土ブロックを多く含む。粘性締まりあり。黒色土の粒子を若干含む。
8．7.5YR4/6　褐色土層　径10mm程の礫を含む。粘性締まりに優れる。粒子細かい。赤色土粒子を若干含む。
9．10R5/8　赤色粘質土層　（26層に対応）径20cm程の礫を含む。
10．10R5/8　赤色粘質土層　（26層に対応）。
11．5YR4/6　赤褐色土層　６層・10層に類似するが、やや暗い。
12．7.5YR3/4　暗褐色土層　粒子細かく粘性締まりに優れている。13層・15層に類似する黒色土の粒子を若干含む。
13．7.5YR3/3　暗褐色土層　径５cm程の礫を含む。粘性締まりに優れる。黒色土のブロックを含む。１層・15層に類似するがやや赤味が強い。
14．10YR2/3　黒褐色土層　13層・15層に類似するが、黒味が強い。粘性締まりに優れる。粒子細かい。赤色土の粒子を少量含む。
15．7.5YR3/2　黒褐色土層　13層に類似するが黒味が強い。粘性締まりに優れる。粒子細かく、黒色土の粒子あるいは炭化物と思われるものをごく少量含む。
16．10YR3/4　暗褐色土層　径５～10cm程の礫を含む。13層に類似するが、黄褐色土のブロックを多く含む。粒子はやや粗いが粘性締まりあり。
17．7.5YR2/1　黒色土層　５層に類似する。粘性締まりあり。黒色味が強い。
18．7.5YR2/2　黒褐色土層　５層に類似。粘性締まりあり。黄褐色土ブロックを極少量含む。
19．10R5/8　赤色粘質土層　（26層に対応）
20．10YR3/4　暗褐色土層　径１cm程の礫を少量含む。12層に類似する。赤褐色ブロックを若干含む。粘性締まりあり。
21．7.5YR5/6　明褐色土層　27層に類似する。黒色土のブロックを若干含む。径２～３mmの礫をごく少量含む。粒子細かく、粘性締まりに優れている。
22．10YR3/3　暗褐色土層　20層に類似する。径１cm程の礫をごく少量含む。黒色および赤褐色ブロックを若干含む。
23．10YR6/8　明黄褐色土層　21層に類似するが、やや黄色味が強い。赤褐色の粒子を多く、径２～３mmの礫を極少量含む。硬く、粘性締まりに優れている。
24．2.5Y5/6　黄褐色土層　径３～15cmの礫を多く含む。粒子粗い。粘性あまりないが、かたく締まりに優れている。
25．7.5YR5/8　明褐色土層　径２～５cm程の礫を多く含む。硬く締まるが粘性あまりなく粒子細かい。客土と思われる。
26．5YR5/8　明赤褐色土層　25層に比べて、粘性に富むが、やわらかい。径５～10mm程の礫を含む。転落した葺石を含む。粒子は細かい。流土と思われる。
27．7.5YR6/8　橙色土層　21層に類似する。炭化物と思われるものを若干含む。径１～５cm程の礫を少量含む。粘性締まりあり。粒子は細かい。
28．7.5YR5/6　明褐色土層　27層に類似する。粘性にかなり優れる。粒子は細かい。炭化物を少量含む。締まりあり。
29．7.5YR5/8　明褐色土層　径５～10mmの礫を多く含む。硬く粒子は細かく粘性締まりあり。
30．5YR4/6　赤褐色土層　径１～５mmの礫を含む。黒色土および炭化物を少量含む。地山ブロックを少量含む。粒子細かく粘性締まりあり。
31．7.5YR5/8　明褐色土層　径１～５cmの礫を含む。粒子粗く粘性あまりない。締まりあり。かたく、地山ブロックを少量含む。
32．7.5YR4/4　褐色土層　径10cm程の礫を含む。かたく、締まりに優れている。粘性あまりない。地山ブロックを若干含む。
33．7.5YR5/8　明褐色土層　径３～５mmの礫を含む。粒子粗くかたいが、粘性締まりに優れている。地山ブロックを含む。
34．5YR5/8　明赤褐色土層　径１～５mmの小礫を含む。径10cm程の円礫を含む。粒子粗くかたい。粘性締まりに優れている。
35．7.5YR5/8　明褐色土層　径３cm程の礫を含む。26層にやや類似するが若干暗くやわらかい。粘性あまりないが、かたくしまる。粒子は細かい。
36．5YR5/8　明赤褐色土層　径１～３mm程の小礫を少量含む。地山ブロックを含む。硬く締まるが、粘性あまりない。粒子は細かい。
37．5YR4/6　赤褐色土層　径５～10cmの礫を多く含む。地山ブロックを含む。硬く締まりに優れているが、粘性あまりない。粒子は粗い。
38．7.5YR4/6　褐色土層　径１cm程の礫を含む。かたく締まりあるが、粘性なし。地山ブロックを少量含む。粒子細かい。40層に類似する。
39．7.5YR5/6　明褐色土層　径５cm程の礫を含む。炭化物を少量含む。かたく、粘性締まりに優れる。粒子は細かい。
40．7.5YR4/4　褐色土層　径５～10mm程の礫を含む。炭化物、地山ブロックを少量含む。かたく、締まりに優れるが粘性なし。粒子は細かい。38層に類似する。
41．5YR4/8　にぶい赤褐色土層　径５mm程の小礫を含む。粘性締まりあり。かたい。粒子細かい。径10cm程の礫を含む。40層に類似する。
42．7.5YR4/3　褐色土層　径５～10mmの小礫を、また、径10cmの礫を含む。かたく、締まりに優れているが、粘性あまりない。粒子細かい。
43．7.5YR4/4　褐色土層　地山ブロックを少量含む。締まりに優れている。粒子は細かい。粘性あまりない。径５cm程の礫を含む。
44．7.5YR4/6　褐色土層　初期流土もしくは置土である可能性がある。粘性締まりあり。径５mm程の小礫を含む。また、径５cm程の礫を含む。粒子細かい。
45．5YR4/8　赤褐色土層　初期流土もしくは、置土である可能性がある。粘性締まりあり。径10mm程の小礫を含む。また、径５cm程の礫を含む。粒子細かい。

第８図　東西トレンチ 平・断・立面図（1/40）

その後の「埋め戻し土」の在り方は、南北トレンチとは異なり、また本トレンチ内でも東側と西側とで様相が異なる。東側では橙色土(12・14・16層等)、黄橙色土(13層)等が墳丘中心から外縁部に向けて積まれたようで、南北トレンチにおける所見と同様、標高124.00m付近で一旦平坦面を作り出した後、再び埋土を行っている。一方西側では、他の部分で見られたような標高124.00m付近における平坦面は見られず、部分的にレンズ状に落ち込んでいる部分があるものの、全体として西から東に向けて土を積んでいったと考えられる。

(増田直人)

Ⅱ．くびれ部の発掘調査

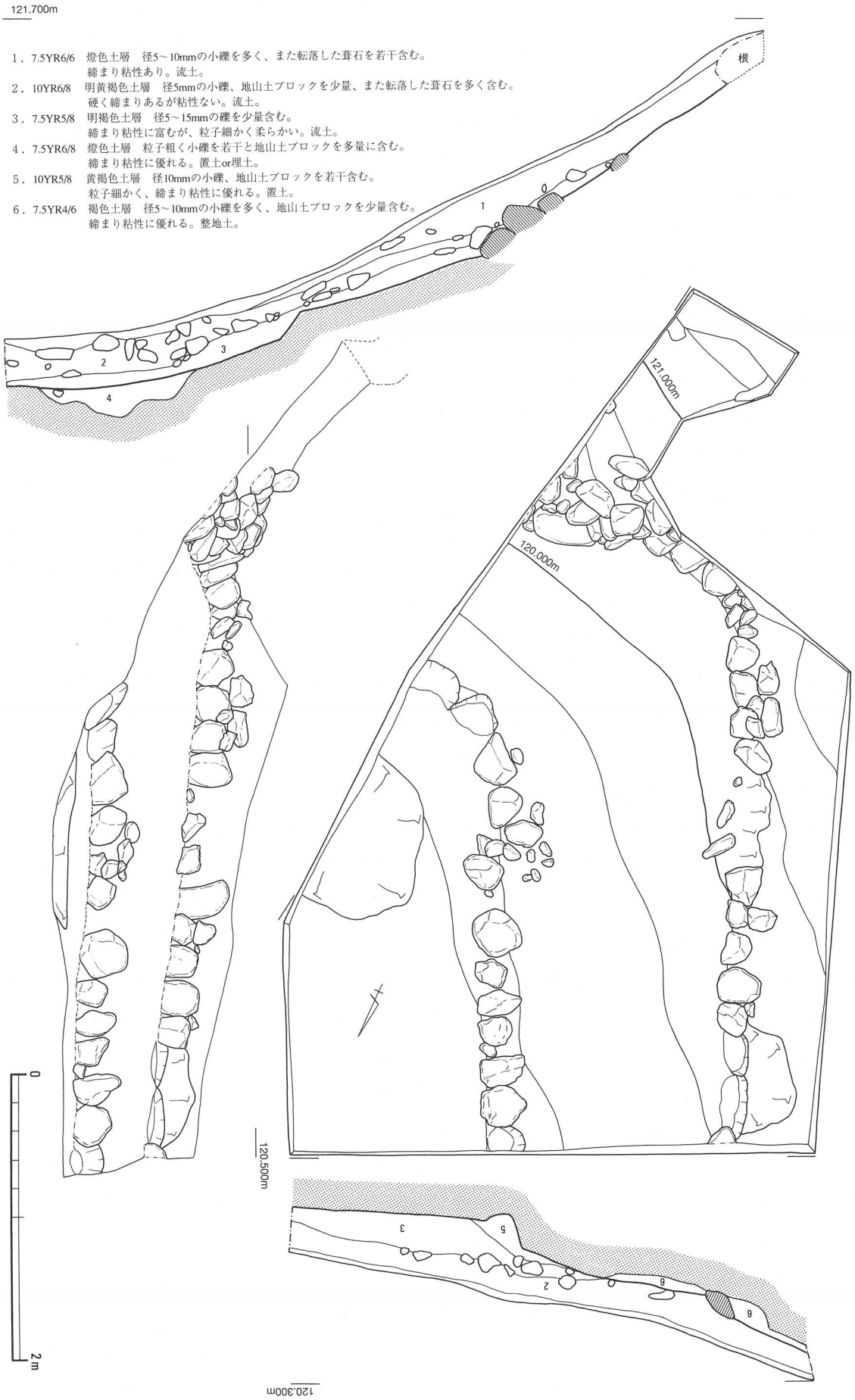
1）第1トレンチ（第9図）

本トレンチは、くびれ部の形状及び供献土器の確認を目的として、東側面に設定した。当初、矩形を呈するもののおよそ4×3.5mの規模で設定し、一部、後円部墳丘の上部に向かって長さ1.5m、幅0.5m程の拡張を行った。調査の結果、墳端とみなし得る葺石を伴った斜面、テラス面、墳丘斜面を検出している。また併せて、これらによって区画されたくびれ部の折れ線と墳頂部より転落したと思われる二重口縁壺形土器(第36図1)を検出した。

墳端と思われる斜面は、地山を削り出した比高0.2m、傾斜角57°で人頭大の角礫、亜角礫を列状に伴っていた。これらの礫は長軸を立てて用いたもので一段のみが遺存していたが、後述するテラス面との関係からみて、旧状は上部にもう一段小礫が積まれていた程度と考えられ、葺石根石というよりも石列に近い在り方を呈している。このような状況は、第4・5トレンチでも検出している。くびれ部の折れ線より後円部側では礫を検出することはできなかったが、ここでは据え方を確認しており、調査区内では少なくとも二石が据えられていた可能性がある。また、石列下端の標高はくびれ部折れ線部分で119.40mを測り、ここを最高所として前方部前端、後円部後端に向けて傾斜を有していた。平面的には、前方部に向かって直ちに広がるのではなく、少なくともトレンチ内では南北メインラインに平行していた。

テラス面は、標高119.50～120.20m、幅1.5mで検出しており、後円部南端トレンチ、東西トレンチで検出した下段テラスにほぼ相当する。その上部の墳丘斜面は傾斜角35°で、その下端では後円部のトレンチと同様に葺石根石が施されていた。前方部側では数石転落していたが据え方を検出することができた。この斜面では墳端斜面とは異なり、後円部側の一部の斜面で下端の人頭大角礫の上部に拳大の円礫が葺かれており、葺石を伴った斜面と判断し得た。これは、後述するテラスを覆う流土中に円礫が多く含まれることからも肯定されるところであり、現状で一段の礫しか認められない前方部側面の斜面にも旧来は葺石が施されていたものと思われる。なお、折れ線部分の標高は120.20mであったが、この墳丘斜面の基底部も墳端と平行して後円部後端、前方部前端に向かって僅かに傾斜を有しており、トレンチ内の最も前方部寄りの根石下端の標高は119.75mであった。

堆積状況は、後円部側の東壁面と前方部側の北壁面で観察を行っている。流土は東壁で三層、西壁で二層に分層することができたが、上部の1・2層は対応関係にある。東壁の3層は円礫等を余り含んでいないが、葺石が崩落ないし抜き取られた下段斜面を覆っており、流土と判断した。両壁面とも基本的に層序に乱れはなく、自然に埋没していったことが類推される。北壁面のテラス面では地山直上に薄い土層を観察した。面的にはテラス面の全面を覆うものではなく墳丘整形時に削りすぎた部分を埋める整地土的な性格が考えられる。また、同じ北壁面で下段斜面の石列を設置する際の据え方を観察することができた。ここでは石を設置するためにやや地山を掘り窪めていること、その際に地山と石の間に置き



第9図　第1トレンチ 平・断・立面図（1/40）

土を充填し石を固定していること、また礫と礫との間にもある程度の土を充填している状況を知ることができた。

なお、本トレンチでは墳丘外の平坦面で径約1.1ｍの不整形の落ち込みを検出している。セクションで観察する限り、流土が堆積した後のものではなく、整地がなされた後に掘り込まれたもので、覆土は流土と区別され葺石等の円礫は含まれていなかった。遺物の出土もなく調査区外に延びていくこともあり、その性格を十分に把握することはできなかった。

遺物は、第36図１に示した二重口縁壺形土器一個体分と土師質土器、歴史時代の土師器杯（第37図４）など数点が流土中より出土している。二重口縁壺形土器は１層及び２層中に含まれ、その一部はくびれ部折れ線付近のテラス上及び下段石列に引っ掛かった状態で出土している。口縁部から頸部にかけての破片が出土しており、旧来墳頂部付近にあったものが片付けられたか、何らかの理由で転落したものと思われる。（澤田秀実）

Ⅲ．前方部の発掘調査

１）第２トレンチ（第10図）

本トレンチは、前方部の開き具合を確認するために、東側面、ややくびれ部に近い東西メインラインから北に20ｍ、さらに南北メインラインから東に5.5mの位置に3.8×１ｍの規模で設定した。調査の結果、葺石を確認することはできなかったが、墳端とみなし得る斜面を確認している。また、第１トレンチ他で検出した下段テラスに相当する平坦面も検出している。

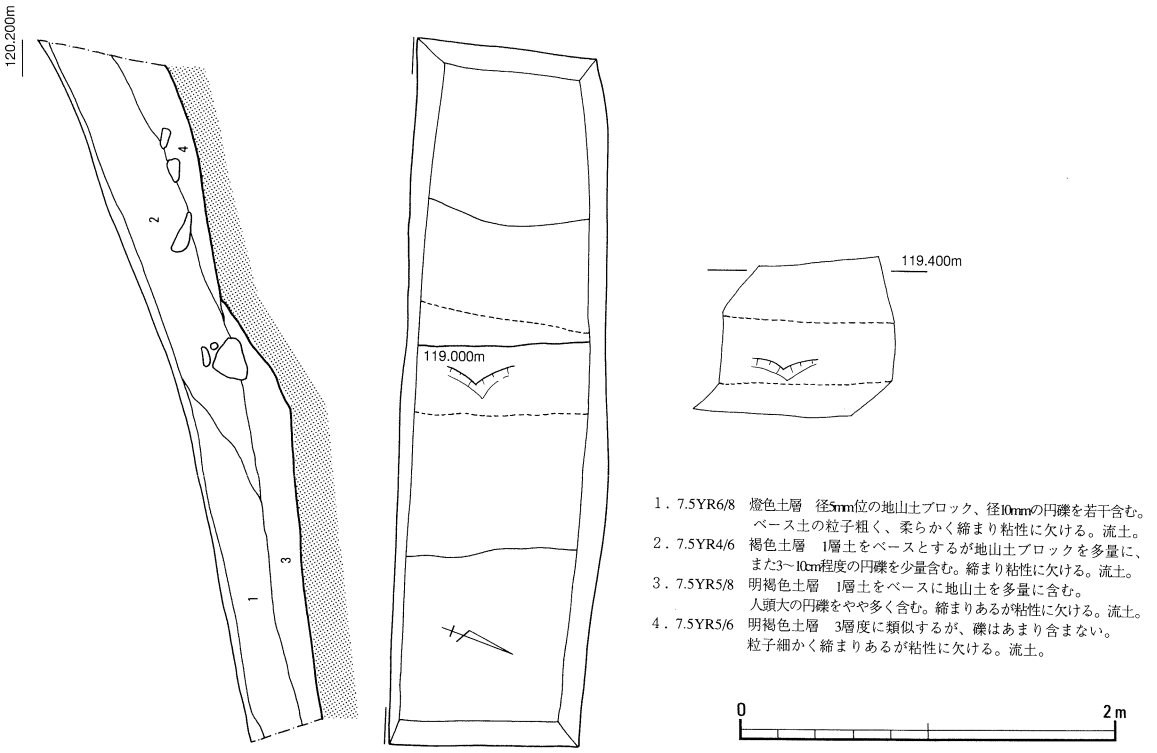
検出した斜面は、下端の標高で118.80ｍを計測し、33°の傾斜角度を有していた。斜面下端の標高は第１トレンチのそれに比べやや低い位置にあるが、この斜面は第１トレンチの葺石を伴った下段斜面よりも若干東に位置し、墳丘主軸にほぼ平行していた。後述する平坦面との比高は0.35ｍであった。この斜面には原位置を留めた葺石はなく、斜面より下方に堆積した流土中に人頭大、拳大の円礫が大量に含まれていることから、当初は葺石を有していたことが想定される。位置関係からみて、現状で葺石・石列等伴っていないが墳端とするのが妥当であろう。さらに、この斜面の上部で幅1.3ｍ以上にわたる平坦面を確認している。調査区内で、それより上部の状況を確認していないが、その最上部は標高119.45ｍであり、墳端の標高と同様に第１トレンチで検出した下段テラスの標高より若干低い位置にある。墳端斜面と同様に位置関係からみて、この平坦面は第１トレンチ他で検出した下段テラスに相当するものと考えられる。これらの墳端斜面、テラスとも地山を削り出して作り出されたものであった。また、下段テラスを覆う流土中には円礫が多数認められており、テラスより上部に存在する斜面にも葺石の存在が想定される。

トレンチ内の堆積状況は、南壁面で観察しているが、基本的に四つの流土層からなり、先に記したとおり墳端斜面より下方の３層とテラスを覆う４層は人頭大から拳大位の円礫を多く含んでいた。上層の１・２層に比べ、両層とも極細かい土をベースに硬く良く締まった土質であった。層序に乱れもなく上部より順に堆積しており、自然に埋没したものと思われる。

なお、本トレンチからは土器の出土はなかった。（澤田秀実）

２）第３トレンチ（第11図）

本トレンチは、第２トレンチと同様に前方部の開き具合を確認するために、東側面のやや前端部に近



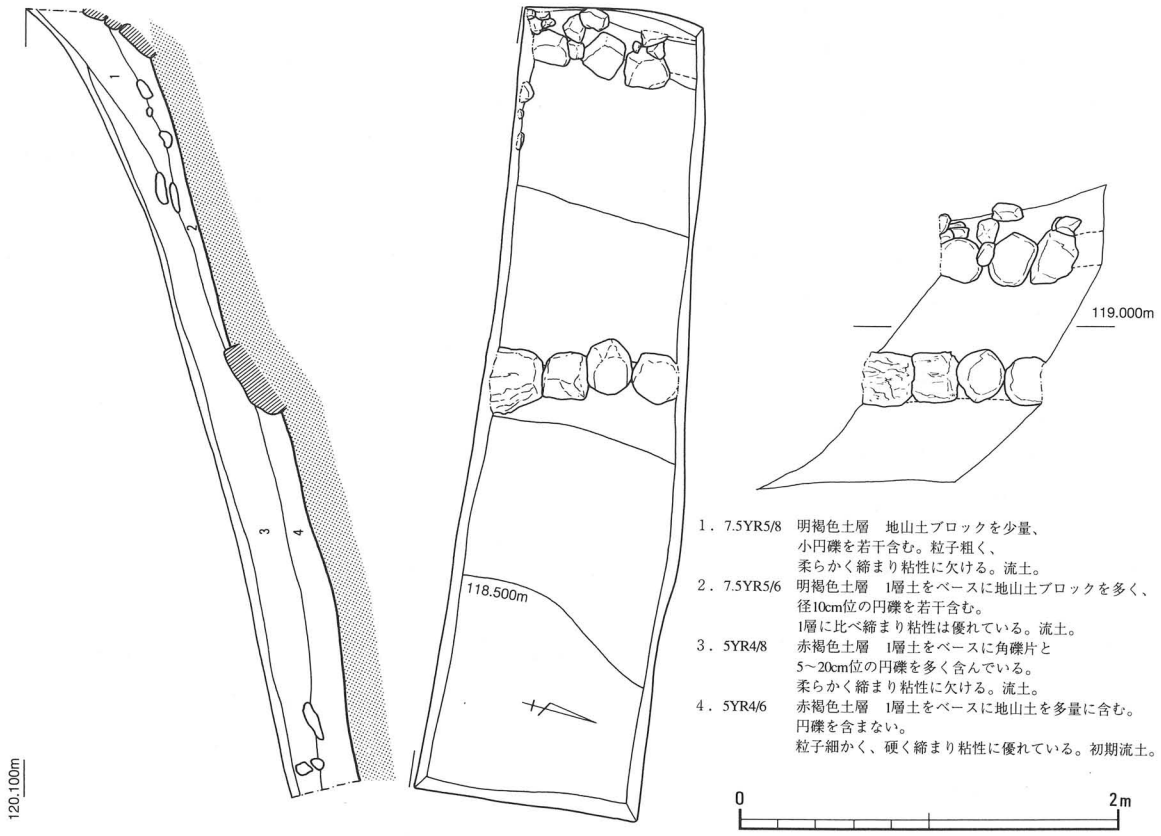
第10図　第2トレンチ 平・断・立面図（1/40）

い、東西メインラインから北に26m、南北メインラインから東に6mの位置に4.2×1.1mの規模で設定した。調査の結果、葺石根石と考えられる人頭大の角礫を用いた上下二段の石列を伴った斜面とそれに挟まれた平坦面を確認している。

墳端とみなし得る下段の斜面は、第2トレンチの下段斜面よりやや東側に位置しており、主軸に対して前方部前端側に斜行して列をなした四つの礫を検出している。人頭大の角礫・亜角礫と円礫が用いられており、その下端は標高118.75mであった。傾斜角は40°で、比高は0.3m程であった。石列の状況は第1トレンチの墳端の石列に酷似しており、葺石根石というよりも石材の長軸を立てて設置しており、最下段の一段のみが遺存していた。第1トレンチと同様に旧状を留めているか、もしくは直上の平坦面の傾斜との関係からみて直上にもう一段小礫が積まれていた程度であったと思われる。また上段の斜面でも列をなす人頭大の亜角礫を検出しているが、こちらは根石的な在り方で上方に拳大の円礫が連続して積まれていた。この根石下端の標高は119.45mで、下段斜面と同様に第1トレンチの上段斜面下端よりも低く設定されている。また、両斜面に挟まれて幅1.5m程の平坦面を検出している。この平坦面は地山を削り出して整形されたものであった。下段斜面も地山を削り整形されたのであろう。なお、これらの下段斜面、平坦面、上段斜面は、位置関係や葺石の在り方からみて、それぞれ第1トレンチで検出した斜面や下段テラスに対応するものと思われる。

土層の堆積状況は南壁面で観察している。第2トレンチの状況にほぼ類似しており、層序に乱れもなく上部より順に堆積しており、自然に埋没していったものと思われる。下段斜面下方の4層には礫は含まれず、平坦面を覆う3層に拳大の円礫が含まれていた。上段斜面に葺かれていた葺石が転落したのであろう。双方とも墳丘完成直後に堆積した初期の流土であろうが土器類は含まれていなかった。

（澤田秀実）



第11図　第3トレンチ 平・断・立面図（1/40）

3）第4トレンチ（第12図）

本トレンチは、前方部前端コーナーの形状を確認するために東側面コーナー部に矩形を呈するものの約5.5×5.5mの規模で設定した。調査の結果、くびれ部や第3トレンチでの下段に相当する下段斜面と石列によって区画された前端部コーナーを検出している。

検出した斜面は、側面・前面側とも傾斜角62°、比高0.3m程であった。この斜面では、他のトレンチとは異なり弥生時代の遺物包含層を含む地山を削り出して据え方を設定し石列を設置している様子を観察したほか、石列より墳丘側で盛土を観察している。また、斜面には他のトレンチと同様に長軸を縦にした石列を検出している。コーナーは第3トレンチの墳端より4m程東側に位置し、側面側は前面に向かって緩く外反し、前面側も直線的ではなく外湾気味に曲線的な膨らみをもっていた。

側面側の石列は調査区内のほぼ全面で検出し得たものの、前面側で原位置を留めている石は主軸よりの四ないし五石のみであった。下端の標高はトレンチ南端部分で118.35m、コーナー付近が僅かながら低く118.10mであったが、ここでも前端に向かって傾斜を有することを観察している。また、前端側の石列下端の標高はトレンチ西壁付近で118.10mであった。石列の状況は、人頭大の角礫の上に小円礫を噛み合わせて積んでおり、第1トレンチや第3トレンチとは様相が若干異なる。また、第12図に示した前方部前端コーナー付近のやや大振りの石塊は地山に密着しており、墳丘完成直後に崩落したか、原位置を留めているかのいずれかで、石材の大きさは部分的ではあるが他のトレンチとは異なる。なお、本トレンチでは下段平坦面、上段斜面に相当する施設は確認し得なかった。やや乱れた等高線の在り方からみて、盛土の流出ないし後世の変形によるものであろう。

本トレンチの堆積状況は、側面側は南壁面で前面側は西壁面で観察している。このうち石列の据え方

に関しては南壁セクションで観察することができた。先にも少し触れたが、基本的には他のトレンチと同様に地山を削り出して石列を設置する位置を確保しているが、さらに削り出した面に角礫・亜角礫を土留め的に設置し、その後に盛土を施してこの角礫を埋め殺しにしていた。石列はこの後に施されるが、その際に石列の下端の位置を揃えて固定するために置土がなされていた。また、流土は基本的に四層に分層することができたが、ここでも他のトレンチと同様に層序に乱れがなく自然に埋没したものと思われる。3層は締まり粘性が強く遺物・礫等を含んでいないことから整地土とも考えたが、南壁面で石列の据え方に用いられた土層を覆うことや西壁面で石列を覆う流土の後に堆積がなされていることから、流土と判断した。礫が多く含まれていたのは1層と2層で、同層中からは前面側で弥生式土器が数点出土している。

・なお、本トレンチでは前端部流土中より土師質土器・須恵器(第36図8、第37図2・3)が、また墳丘盛土内(4層)・弥生包含層(5層)より土器が数点出土している。　(澤田秀実)

4）第5トレンチ（第13図）

本トレンチは、前方部前端の構造及び墳長を確認するために南北メイン石列ライン上やや東側、前方部前端裾部に3.8×1mの規模で設定した。調査の結果、墳端と思われる石列を南北メインライン上、後円部東西メインラインより38.9mの地点で検出した。これによって後円部南端裾部のトレンチの成果と併せて本古墳の墳長が56.9mであることを確認した。また、外表施設として葺石の他、下段テラスに相当する平坦面とそれに続く上段斜面を確認した。

墳端と思われる石列が検出された斜面は、基本的に地山を削り出して整形されていた。斜面の比高0.3m、傾斜角62°であった。本トレンチでは葺石根石として用いられた人頭大の角礫と、その直上に葺かれた拳大の円礫を三ないし四段まで検出している。根石の角礫は長軸を縦にして斜面に沿わせていたが、円礫は斜面に突き刺すように設置されていた。その下端の標高は118.20mであった。また、これより上で幅1.4m程の平坦面を検出している。この平坦面は部分的に第4トレンチで認めたものと同じ弥生時代遺物の包含層（5層）も見られ、地山を削り出して整形していることが明らかとなった。平坦部の最高所は標高119.10m付近でやや大振りの円礫を幾つか検出している。これらは地山に密着していることや斜面に対して石の長軸を突き刺さすように設置されていることから原位置を留めていると判断でき、上段斜面の葺石根石であったと思われる。また後述するが流土である1層には拳大程度の円礫が多く含まれており、上段斜面には旧来、葺石が施されていたものと考えられる。

土層の堆積状況は、西壁で観察している。流土は三層に分層することができ、3層は、葺石が崩落したものと思われる礫を大量に含んでいた。最下層の4層では礫・土器等は含まず、むしろ炭化物を多く含んでおり、流土としては硬く締まり粘性に欠けていた。上面に焼土を有することもあり初期流土である可能性とともに整地土である可能性も考えておきたい。本トレンチにおいても層序に乱れもなく上部より順に堆積しており、自然に埋没したものと思われる。

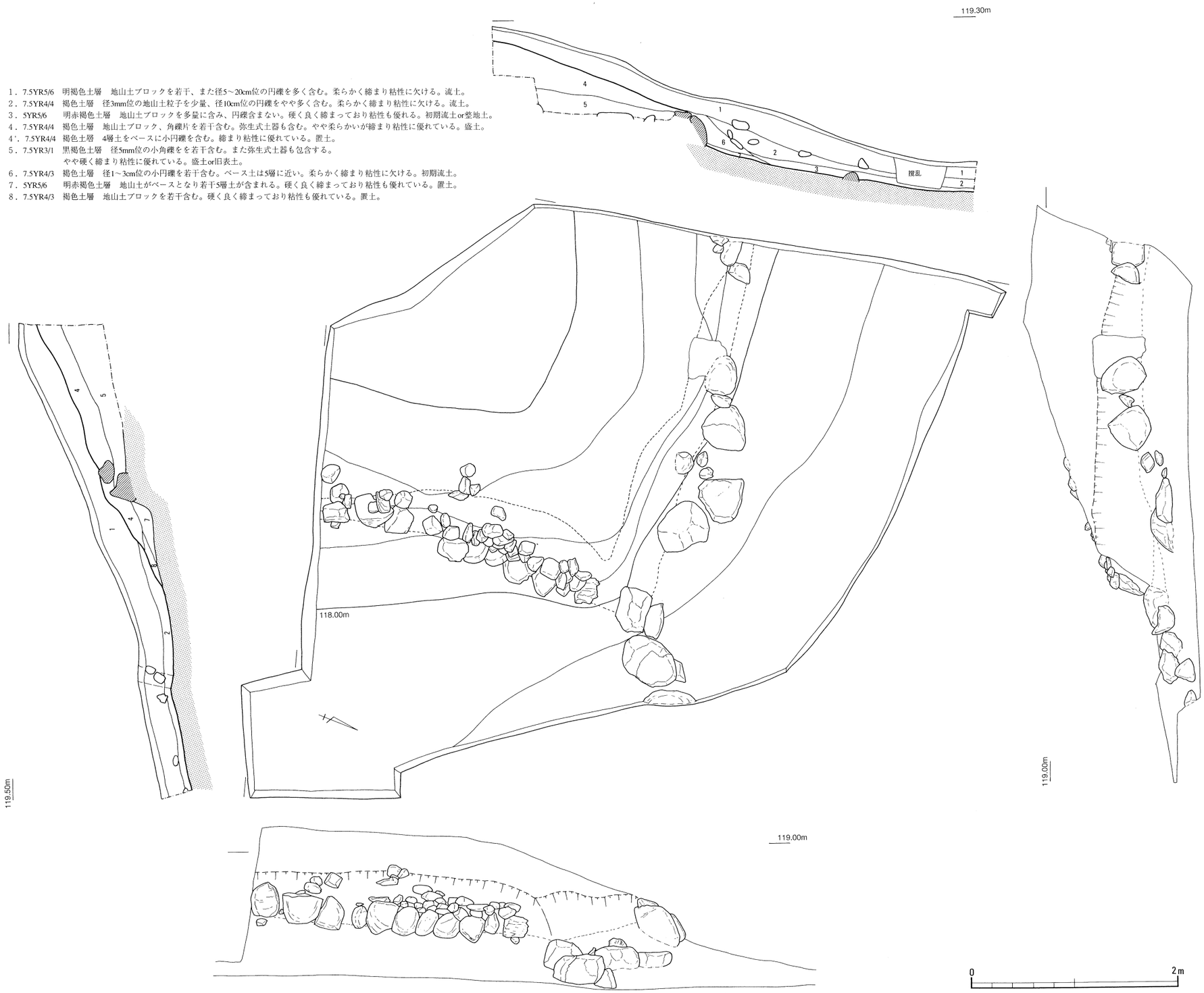
なお、本トレンチでは遺物は出土しなかった。　(澤田秀実)

Ⅳ．小結

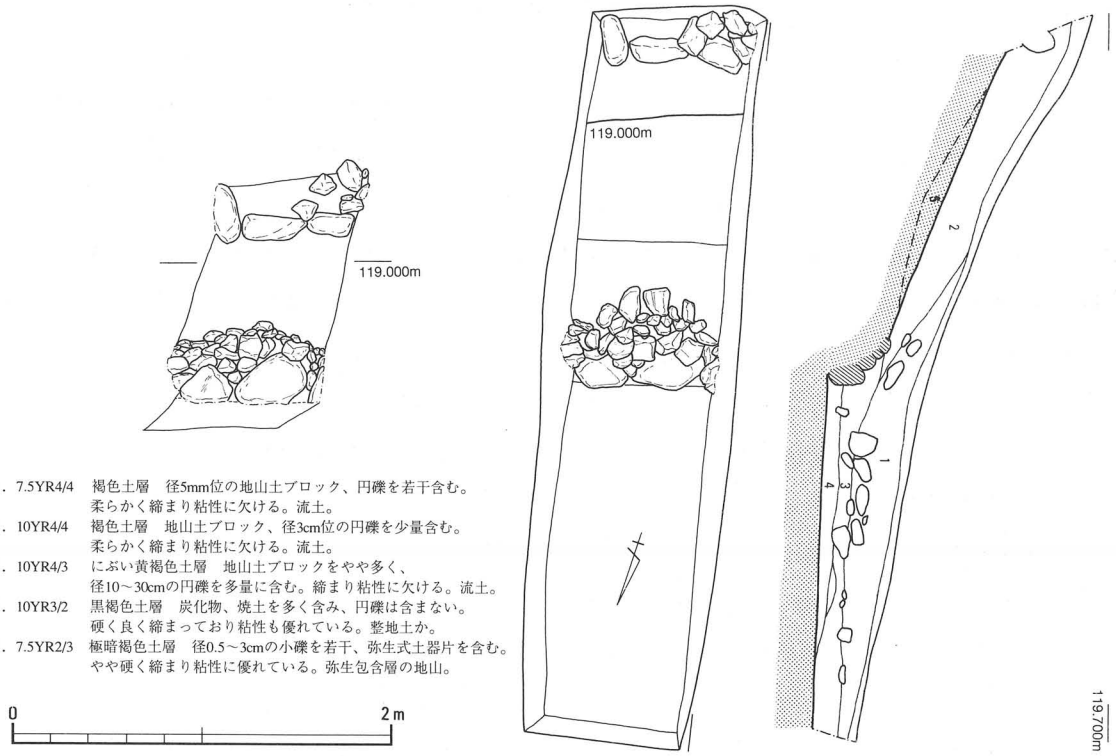
1）墳丘形態（第14図）

これまでに墳丘各所に設定したトレンチの状況を報告してきた。各トレンチでの墳端、段築成平坦面

1．7.5YR5/6　明褐色土層　地山土ブロックを若干、また径5～20cm位の円礫を多く含む。柔らかく締まり粘性に欠ける。流土。
2．7.5YR4/4　褐色土層　径3mm位の地山土粒子を少量、径10cm位の円礫をやや多く含む。柔らかく締まり粘性に欠ける。流土。
3．5YR5/6　明赤褐色土層　地山土ブロックを多量に含み、円礫含まない。硬く良く締まっており粘性も優れる。初期流土or整地土。
4．7.5YR4/4　褐色土層　地山土ブロック、角礫片を若干含む。弥生式土器も含む。やや柔らかいが締まり粘性に優れている。盛土。
4'．7.5YR4/4　褐色土層　4層土をベースに小円礫を含む。締まり粘性に優れている。置土。
5．7.5YR3/1　黒褐色土層　径5mm位の小角礫をを若干含む。また弥生式土器も包含する。
やや硬く締まり粘性に優れている。盛土or旧表土。
6．7.5YR4/3　褐色土層　径1～3cm位の小円礫を若干含む。ベース土は5層に近い。柔らかく締まり粘性に欠ける。初期流土。
7．5YR5/6　明赤褐色土層　地山土がベースとなり若干5層土が含まれる。硬く良く締まっており粘性も優れている。置土。
8．7.5YR4/3　褐色土層　地山土ブロックを若干含む。硬く良く締まっており粘性も優れている。置土。



第12図　第4トレンチ 平・断・立面図（1/40）



第13図　第5トレンチ 平・断・立面図（1/40）

は石列ないし葺石によって区画されており、また石列・葺石が原位置を留めていない場合でも明確な傾斜変換線を検出しており、比較的旧来の墳丘形態を捉えやすい状況にある。ここでは、各トレンチでの成果を再度整理し、墳丘形態を復元的に概観することから、本墳の規模や形態的特徴を見ていくことにしたい。

まず後円部であるが、墳端に関しては南北トレンチ南端裾部でメインラインの交点（以下、交点）から18m、標高118.15m、東西トレンチでは交点から15.8m、標高118.70mの位置に、またくびれ部では交点より14.6m、標高119.4mの位置で確認しており、これらの墳端をもとに後円部径を復元すると中心点が交点よりも西に0.4m、南に1.8m程に移動するものの、ほぼ正円形に復元可能であり、直径32.4mを計測する。交点より西に0.4mずれることは東西方向の中心を決定する際の誤差である可能性がある[(1)]ものの、南方向への「ズレ」は各トレンチでの墳端の標高に見られるようにくびれ部より後円部後端に向かって低くなる傾斜をもっていることに起因するものと考えられる。この円弧にしたがって中心点を求めると、先に触れたとおり交点とは後端側に1.8m程「ズレ」ることになる。このような現象は日上天王山古墳の立地とも関係する[(2)]が、甘粕健や北條芳隆が指摘するとおり西殿塚古墳、桜井茶臼山古墳や浦間茶臼山古墳などで見られる工法上の「中心点の移動」（甘粕　1985）（北條　1986）と同様な現象と見て良いだろう。

また、段築成に関しては、測量図作成の段階で標高122.00～123.00m付近に幅約1.5～2.5m平坦面が後円部をほぼ全周するかたちで観察され、少なくとも二段以上の段築成を有することが発掘調査開始以前に想定された。発掘調査の結果、やはり各トレンチで平坦面を確認しているが、事前に想定された平坦面に関しては、東西トレンチの発掘成果から後世の客土によって形成されたものと判断するに至った。けれども、報文中でも触れたとおり、なお、南北トレンチ南端裾部で一つ、東西トレンチで上下二つの平坦面を検出しており、後円部に関しては三段築成であることが確認された。その位置は、東西トレン

チで下段テラスが墳端より僅かに0.5ｍ程高い標高119.20ｍにあり幅1.3ｍ、上段テラスが墳端との比高が2.4ｍの標高121.60ｍに認められ幅0.6ｍを有していた。くびれ部の第１トレンチ、南北トレンチ南端裾部では同様に幅1.5ｍ程の下段テラスのみの検出であるが、前者も墳端との比高は0.4ｍ、後者でも比高が0.2ｍと東西トレンチと同様に低い位置に存在している。僅かに後円部後端側で下段テラスの位置が高くなっているが、これは徐々に後円部後端へ向かう傾斜を墳丘上方に向かうにしたがって緩くし、頂部平坦面において解消していく為に取られた処置と見ることができよう。このような観点で見た場合、上段テラスは旧来水平であったと見るよりも、僅かに後端側に低くなる傾斜をもっていたと見る方が妥当かも知れない[3]。

墳頂平坦面に関しては、ほぼ平坦で現状では標高約124.25ｍ付近に広がり、最高所は中心近くにあり124.50mを僅かに越える。現状ではほぼ水平で、北側に多少乱れがあるもののほぼ円形を呈し、南北約12ｍ、東西約13.6ｍの規模を有している。先に記したとおり、その中心点は調査時に設定した中心点より西に0.4m程隔たった位置になる。後円部高は後円部南北トレンチ南端裾部の成果から計測すると約6.35ｍ、くびれ部から計測すると5.1ｍを計測することになる。ただし、先にも触れたとおり標高122.00から123.00ｍ付近に後円部のほぼ全体に客土がなされており、墳頂部よりこれらがもたらされていたとするならば、現状よりやや高く且つやや狭い墳頂平坦面を想定する必要がある。

一方、前方部においても各トレンチで石列、葺石を伴った墳端や下段テラスを検出しており、こちらも幾つか制約があるものの墳丘の形態を復元することは可能である。まず墳端の平面的位置を見ていくと、第１トレンチのくびれ部折れ線では墳丘主軸より東に7.8ｍ、また同じ第１トレンチ内で北壁面でも墳丘主軸より東に7.8ｍに位置しており、折れ線から僅か2.8ｍ前端に寄ったところではあるが前端部に向けていきなり開いていない。また第２トレンチでは墳丘主軸より東に7.4～7.6ｍ、第３トレンチでは墳丘主軸より東に8.7ｍの位置にあり、第２トレンチから第３トレンチにかけて徐々に開いている様子が窺える。前端コーナーに設置した第４トレンチでは南壁で墳丘主軸より11.2ｍ、コーナーで12.3ｍであり第３トレンチより急激に開いている。このように東側面に設置した各トレンチの成果を直線で結ぶことは困難であり、また第４トレンチの側面部の墳端は僅かな距離ではあるが直線的でなく若干前端に向かって湾曲しており、前方部東側面は曲線的に外反するとみるのが妥当であろう。なお西側面に関しては、今回の調査で特に調査区を設定しているわけではなく、現状で正確な形態を捉えることはできていない。ただし、かつて掘削された墳丘西側を巡る用水溝を観察したところ、少なくとも南北メインラインを基準に東側面と線対称の位置には石列・葺石等を検出することはできなかった[4]。

また前端部に関しても第５トレンチはもとより第４トレンチにおいて既にコーナーより前面部が１ｍ余り迫り出しており、外湾している様子が窺える。これは箸墓古墳をはじめ西殿塚古墳、元稲荷古墳や杵ガ森古墳など古式前方後円墳にみられる特徴でもあり、注意しておきたい。

なお墳端の標高に関しては、既に事実記載の折りに触れたとおり、くびれ部から前端に向かって低くなる緩い傾斜をもっており、その比高は1.2ｍであり傾斜率は4.7％であった。これはくびれ部から後円部後端に向かうほどではないが傾斜を有しており、本墳の墳端はくびれ部を最高所として設定し築造されている。このような現象は墳端を本来水平に設置することを第一義的なものとするならば、築造する立地として地形的制約を受けていたことを表しているのであろう[5]。

段築成に関しては、第１トレンチ、第３トレンチ、第５トレンチで下段テラスを検出している。コーナー部分の第４トレンチ付近は後世の改変などでテラスを検出することはできなかったが、三者の標高

第14図　墳丘構築模式図（1/300）

や位置関係からみてほぼ連接すると考えて良いだろう。また、各トレンチとも頂部平坦面に達しておらず、下段テラスと頂部平坦面の間の構造は現状では把握していない。後円部東西トレンチでの上段テラスの位置や第1トレンチの後円部方向に拡張したサブトレンチの様子からすると、この間に少なくとも後円部から続く段築成の平坦面を予測することは困難である。現状で前方部は二段築成であったと考えておきたい(6)。

最後に頂部平坦面に関しては、西側は先に触れた用水溝を掘削した際の排土が盛られ、くびれ部から中程までの変形が著しい。ただし、前端部付近は両隅を除いて比較的遺存状況がよい。また、後円部よりスロープ状に連接しているのが特徴的であり、最も低いところは第2トレンチのあたりの南北メインライン上で121.02mを測る。最も高いところが前端に近いところで121.20mを計測しており、僅かながら前端に向かって高くなっている。したがって前方部の高さは、最高所と第5トレンチの墳端から計測して3.0mを測る。

以上の成果に基づく日上天王山古墳の各部の規模と特徴を再度掲げておく。各部の規模は、墳長56.9m、後円部直径32.4m、後円部高6.35m、くびれ部幅約15.6m、前方部長25.4m、前方部前面幅約24.6m、前方部高3.0mとなる(7)。墳丘の形態は、前方部の側面が緩く曲線的に外反しており、撥形前方部を有していると考えられた。また段築成は後円部で三段、前方部で二段を有し、いずれも下段斜面は比高0.3～0.6mと低く設置されている。墳丘は旧地形に合わせ、くびれ部付近の墳端が最も高く、後円部後端、前方部前端に向かって徐々に低くなるように設置されている。後円部では、この傾斜を墳頂平坦面で解消するよう処置しており、中心点に「ズレ」が生じている。なお、この中心点の「ズレ」は、調査区の設定の都合上、上段テラスでは確認することができなかった。また、上段テラスがくびれ部でどのように解消していくかも十分に把握することができなかったが、前方部頂部平坦面よりは高い位置にあることは確実で、後円部から前方部の頂部平坦面に至るスロープによって途切れCの字状に収束する可能性も否定できない。第14図の縦断面では東西トレンチの成果に合わせ墳頂平坦面の交点に一致する復元案を示したが、前述の通り、なお後端方向に傾斜を持っている可能性はあるし、くびれ部で解消していく様子も異なってくる。発掘調査による検証が可能であり、今後の課題としておきたい。

（澤田秀実）

註

(1) 標高124.25mの等高線を基準に墳頂平坦面の東西方向の中心を求めると確かに今回の調査で設定した位置になるが、124.00m付近の傾斜変換線を基準に中心を求めるとこれより0.35～0.4m程西寄りになる。ここでは後円部墳頂平坦面の中心を調査時に設定したものより0.4m西に移動して考えることにし、併せて墳丘主軸も調査時に設定したものより西に0.4m平行した位置に変更しておきたい。なお、この場合の主軸線は中心石槨の長軸線とほぼ一致する。以下、特に断らない限り、中心点もしくは墳丘主軸とした場合は、新たに西に0.4m隔てた位置に設定したものを指すことにし、調査時のものを交点もしくは南北メインラインと称することにする。

(2) 多くの前期前方後円墳（椿井大塚山古墳、行燈山古墳、渋谷向山古墳など）が尾根の先端に前方部を向けて築造がなされる中、この両古墳は、日上天王山古墳と同様に尾根の先端方向に後円部を向けており特徴的である。なお、このように尾根の先端に後円部を築造する例は讃岐地域の積石塚を含む諸墳墓（鶴尾神社4号墓、爺ガ松古墳、野田院古墳など）や西播磨地域（養久山1号墓、吉島古墳など）の諸墳墓に特徴的に見られる。

(3) ただし、この場合でもその傾斜の度合いは徐々に傾斜を解消し墳頂部で水平に至るのであり、上段テラスが水

平でないとしても墳端に平行する程の傾斜を有していたのものとはみなし難い。

(4) これは先に触れたとおり頂部平坦面を基準に設定した南北メインラインの設定位置に起因するかも知れない。その意味で、これは前方部においても墳丘主軸を西側に移動することの妥当性を示していると考えている。ただし、一方で西側面の墳端がもともと対称位置に設置されていなかった可能性も考慮しておきたい。

(5) 詳細は別稿に譲るが、日上天王山古墳が何故このような地形的制約を受けた地に築造されたのかは、埋葬頭位や墳長規模を併せて検討することによってある程度明確になるものと考えている。

(6) ただし、前端斜面に関しては側縁部と比べて傾斜角度が急であったり、また下段テラスに限っては幅もやや狭く設定されているなど他の斜面とは状況が異なっており、箸墓古墳のように前面のみに複数のテラスが存在する可能性は否定できないと考えている。

(7) なお、ここで示したくびれ部幅と前方部前面幅は新たに設けた墳丘主軸を基準に対称位置にあるとした場合の数値である。

2）日上天王山古墳における墳丘の築成について（第7・8・14図）

・墳丘築成前の旧地形（第14図）

日上天王山古墳は、日上畝山古墳群が形成された丘陵の南端、最高所に位置している。古墳周辺の現在の地形を見ると、墳丘北側では約20m程離れたところから、古墳に向かって緩やかに上る傾斜をもっている。墳丘西側では墳端付近に後世に溝が切られており、その西側には現在は畑となっている平坦な地形が広がっている。墳丘東側では、墳丘に向かって緩やかな傾斜地が広がるが、墳端から10m程東側に傾斜変換点が見られ、これより東では傾斜が急になっていく。墳端確認のために設けた墳丘東側の各トレンチにおける所見によると、後円部東側の第2トレンチで地山の高さは標高120.00m、東側くびれ部の第1トレンチで標高120.10m、前方部東側コーナー部の第4トレンチで標高118.40mとなっており、後円部北半（前方部側）からくびれ部付近で地山が最も高くなっていることがわかる。

これらのことから古墳築造前の旧地形を考えていくと、墳丘の西から北側は、古墳に向かって緩やかに上がる傾斜をもち、東側ではやや狭いながらも西側、北側と同様に緩やかな傾斜地であったと考えられる。そして本墳が築かれた場所は旧地形の最も高かった地点にあたり、なかでも後円部からくびれ部付近に旧地形の最高地点があったものと考えられる。墳丘の側面図（第14図）を見ると、くびれ部付近で葺石の最下段が最も高くなっているが、これは、ある程度上記のような旧地形の傾向を反映したものと考えられる。したがって、古墳築造前の旧地形は後円部からくびれ部付近に最高所をもつ、なだらかな丘陵であったと考えられる。

・墳丘の築成について（第7・8・14図）

墳丘築成には大きく分けて三つの工程が考えられる。地山の整形、盛土、葺石などを設ける整形の工程であるが、ここでは地山整形、盛土工程について概観することにしたい。

地山整形　まず地山の整形についてであるが、先に旧地形はくびれ部付近に最高所をもつものと考えた。各トレンチにおける所見を見ると、後円部東側及びくびれ部では、墳丘の最下段は、ほぼ地山を削り出してつくられていることがわかる。前方部に設けられた各トレンチでも、状況はほぼ同様である。

したがって地山整形では、まず地山を前方後円形に削り出し、その際墳丘の四周も、緩やかに下っていく傾斜をもつように整形されたものと考えられる。墳丘東側で見られた傾斜変換点は、この時形成さ

れたものと考えられる。もとの高さが低かったと考えられる前方部側の第4トレンチ及び第5トレンチでは、旧表土かと考えられる土層(5層)がみられるが、他のトレンチではこれに類する土層は見られない。もしこの土層が旧表土であるとすると、後円部からくびれ部付近の、旧地形における標高の高かった部分では旧表土をある程度削って低くし、旧地形における標高のやや低かった前方部側は、これを削ることなくそのまま残して利用したとも考えられる。

盛土工程　次に盛土について見ていきたい。東西トレンチで見ると、地山と盛土との境が標高119.70mとなっている。南北トレンチ南端裾部では、地山がどの程度の高さをもつのかはっきりしないが、確認できた盛土の最下底は標高119.00mにあたる。後円部の墳頂部は標高124.50mであるから、後円部では最も多い部分でおよそ5.5m、またはそれ以上の盛土が行なわれたと考えられる。

前方部の墳頂部は、標高121.50mである。前方部東側のコーナーにあたる第4トレンチで地山は標高118.40m、くびれ部では地山が標高120.10mとなることから、前方部においても多いところでは、およそ3m程度の盛土を行っていることが窺われる。以上のことから日上天王山古墳の墳丘は、大半が盛土によって築かれたと考えられる。しかしながら、今回の調査では後円部の一部を除いて、全体の盛土の様子はほとんど明らかにできなかった。

後円部の東側斜面では、基本的に褐色系統の土を中心に用いて、以下のような工程によって盛土されたと考えられる。まず、盛土予定区のやや内側にほぼ水平に各土層を積み(39～42層)、ある程度の高さまで墳丘を構築した後に、その外側に墳丘傾斜面を整えるための黄褐色土(38層)を積む。この後の工程も基本的には同じで、これを三，四回繰り返して、標高123.00m付近までを構築したと考えられる。この場合、第二工程は31～36層、第三工程は23～27層、第四工程は2～18層が対応することになる。また、中心石槨南側では、標高122.40～123.00mにおける22・30・43・44層が斜めに切られてその間に土が入れられたような状況を呈しているが、これについては南北トレンチ南側で見られた土堤状の盛土が、墳頂部以外の各工程で行われていた可能性も考えられる[1]。

そして最後に墳頂部に盛土を行っているが、ここではこれまで観察された工程とはやや異なる形で築かれている。まず、南北トレンチ南端に土堤状の盛土が行われその内側に暗褐色土、黄褐色土(24・25層)を厚く、南から北に向けて斜めに積んでいることがわかる。しかしながら、東西トレンチではこうした盛土方法は見られない[2]。東西トレンチでは、大きく上下二工程に分けて盛土を行っているようである。まず、東西ともに明黄褐色土、赤色土、黒褐色土(6・26・27層)を中心にしてほぼ水平に盛土し、ここで一旦平坦面を形成している。次に、橙色土、暗褐色土、黄褐色土(2・22・25層)を用いて、東側ではほぼ水平に、西側では東から西に向かって盛土していったものと考えられる。この上下二工程の境界部分に見られる平坦面の高さは、南北トレンチで見られた土堤状盛土の高さにほぼ一致しており、この土堤状盛土は墳丘構築工程上の一つの基準としてつくられたことが考えられる。

これらのことから復元される後円部の盛土方法をまとめると、以下のようになる。

1．まず、地山を前方後円形にある程度整形した後、盛土予定区のやや内側に一定の高さにまでほぼ水平に盛土を行う。この後、その外側に墳丘斜面を整える盛土を行う。これを一工程として、三ないし四回繰り返すことで、標高123.00m付近までの墳丘を構築する。

2．盛土予定区南側に土堤状の盛土を行う。

3．この土堤状盛土の高さに合わせて、標高123.90m付近までほぼ水平に盛土を行い、一旦平坦面を形成する。

4．更にこの上に盛土を行って、墳丘を完成させる。　（増田直人）

註

(1) このような土堤状の盛土については、権現山51号墳などで報告された土壇状の盛土である可能性も考えられよう（近藤編　1991）。

(2) 東西トレンチでこのような盛土方法が確認されなかったことも併せて、この土堤状盛土の平面形態がどのようなものであるかは確認されていない。したがって、これが土壇状の盛土の可能性も考えられるが、これを積極的に支持する要素も見当たらないため、ここでは土堤状盛土として記述する。この点に関しては今後確認を要する。

第2節　埋葬施設

・埋葬施設の位置関係（第15図）

日上天王山古墳の後円部墳頂平坦面では、合計4基の埋葬施設が検出された。それらのうち2基が竪穴式石槨、残りの2基は箱形石棺である。ここでは、これらの位置関係についてまとめておきたい。

4基のうち、まず最初に構築されたのは後円部中央に位置する中心石槨である。この石槨は、日上天王山古墳築造の契機となったものである。これに続いて北側に第2石槨が築かれ、更にその次に、第1箱形石棺が築かれた。第2箱形石棺は中心石槨の構築後に築かれたことは間違いないが、第2石槨及び第1箱形石棺との先後関係については、不明である。

中心石槨は後円部墳頂平坦面の中央からやや南寄りの位置に築かれ、現地表面から約2.8m掘込まれた墓坑内部に、墳丘主軸にほぼ平行して築かれている。

第2石槨は、この中心石槨北小口壁から約1m離れた位置に、およそ1.4mの深さの墓坑を掘って設けられている。第2石槨の主軸は、中心石槨主軸に対して約95°東に振れており、中心石槨に対してほぼ直交するといえる。平面的に見て第2石槨の南側の壁体は中心石槨の蓋石の北端にほぼ一致し、第2石槨床面は中心石槨の蓋石の高さにほぼ相当する。

第1箱形石棺は、第2石槨から更に約1m北に位置し、その長軸は第2石槨の長軸から約13°東に振れている。墳頂平坦面から浅い墓坑を掘込み、第2石槨の墓坑内に全体が収まる範囲で構築されている。

第2箱形石棺は、調査時に設定した墳頂平坦面の中心点（南北・東西メインラインの交点）から東へ約0.7mの位置にあり、中心石槨主軸に対してほぼ直交する。これも浅い墓坑をもってはいるが、調査時には既に石棺側壁の上面が地表に露出した状態であった。

以上が後円部墳頂平坦面における埋葬施設の位置関係であるが、これら4基の埋葬施設のうち、中心石槨のみが他の埋葬施設よりも1m以上深い位置に墳丘主軸に平行して築かれている。その他の三基は中心石槨長軸すなわち墳丘主軸に対してほぼ直交する形で築かれている。　（増田直人）

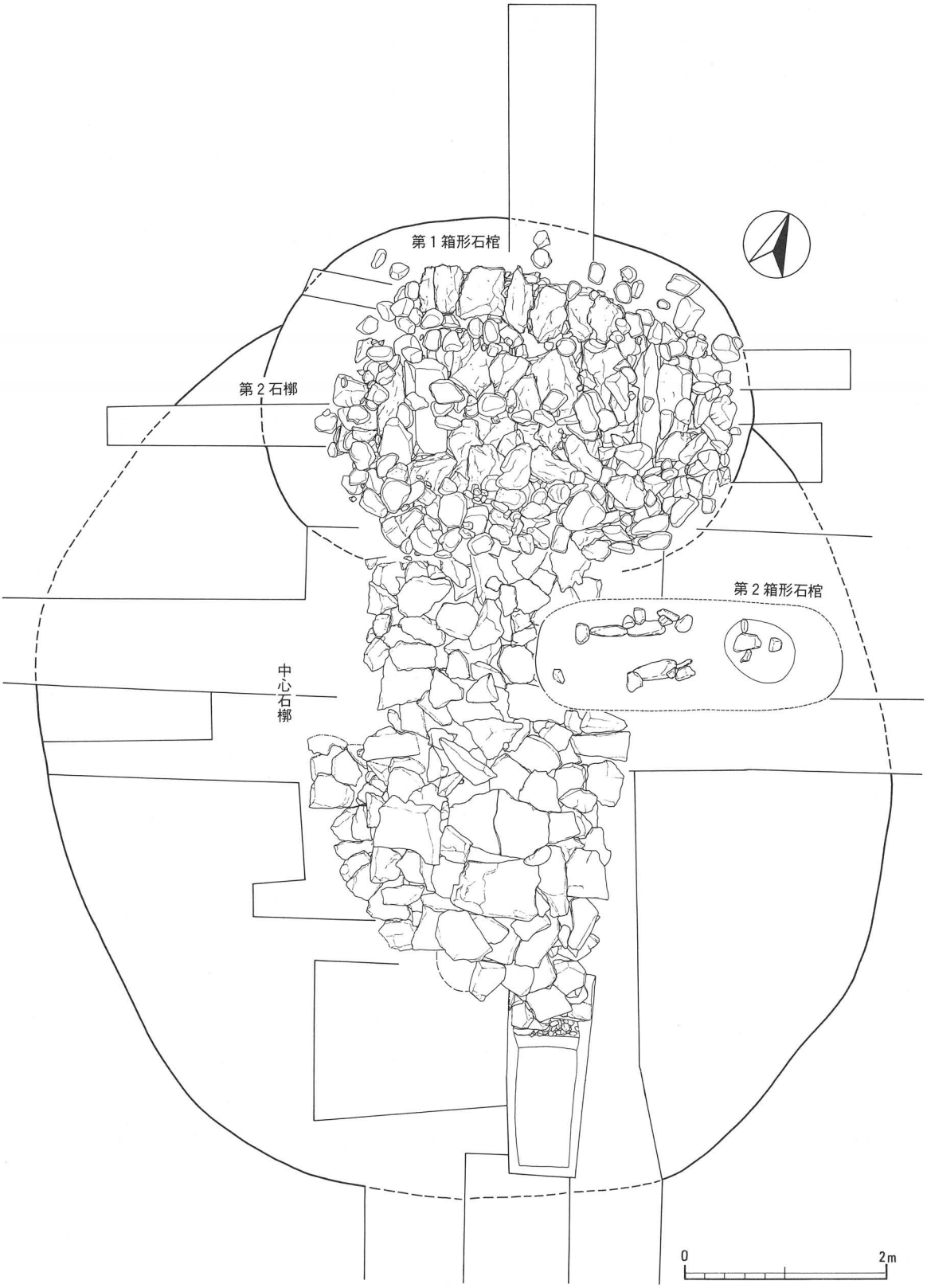
Ⅰ．中心石槨

1）盗掘状況（第7図）

事前に踏査した段階で、後円部の墳頂平坦面の南端付近に浅い皿状の撹乱坑が存在することを確認していた。この撹乱坑は径2mほどの規模で、深さは確認時で0.5m、最終的に約1mを測ったが中心石槨には達していなかった。これとは別に、現地表面では確認できず中心石槨に達していた盗掘坑が、後

円部のほぼ中央部(A)と、南端付近(B)の二箇所で検出された。

平面形が円形に近い盗掘坑Aは竪穴状に掘り込まれており、盗掘時に一度取り除かれた被覆割石は丁寧に元に戻されていた(第7図)。割石に覆われた大形の板状蓋石の1枚は打ち割られており、西半分に相当する一辺50cm大の破片が床面上に落ち込んでいた。一方、盗掘坑Bは、墳頂平坦面の南端から中



第15図　埋葬施設位置図（1/60）

心に向かって斜めに掘り込まれていた。その結果、中心石槨南側小口の上半部は損壊を受けて空洞が生じており、あたかも竪穴式石槨の構造を熟知していたかのような盗掘の仕方であった。盗掘坑Aと盗掘坑Bが同時に掘られたとは考え難く、中心石槨は少なくとも二回にわたって盗掘されたと推測できる。

石槨床面の北側の一部と南半部中央よりの部分は盗掘時に掘り返されており、各所に多数の円礫や一辺20cm大の粘土塊が散乱していた。特に南半部中央よりの撹乱坑は、粘土棺床だけではなく、その下に敷き詰められた円礫層や墓坑底をも掘り抜いていた。割石や黒褐色粘質土を用いた被覆措置はうまく機能したらしく、遺存していた棺床面上には盗掘坑からの流入土や掘り散らかされた粘土塊や円礫しか認められなかった。したがって、副葬品の大半は最初の盗掘時に持ち去られ、二回目の時には副葬品の探索のために棺床面が掘り返されたと推測される。南半部の床面撹乱坑の周辺には水銀朱が認められたことから、朱の集中部分が特に念入りに深掘りされたのであろう。鉄斧、鉄鏃、その他鉄器類の残片が出土したが、いずれも粘土塊や円礫に混じっており原位置を保ってはいなかった。　（倉林眞砂斗）

2）墳頂平坦面における位置（第15～17図）

後円部の墳頂平坦面は、径12，3m、広さはおよそ450㎡で、中心石槨はそのほぼ中央部に南北に長軸をもって設けられていた。現地表面から蓋石頂部までの深さは、約1.2mを測った。中心石槨の位置や規模に関しては、事前に行われた電気探査によっておおよその目途がついていたが、墳頂平坦面の北半部では、東西方向に長軸をもった第2石槨と第1箱形石棺が予想外に検出された（第15図）。中心石槨の長軸は墳丘主軸に平行していたのに対し、第2石槨と第1箱形石棺は直交して設けられていた。第2石槨は中心石槨よりも新しく、さらに第1箱形石棺は第2石槨を一部壊して設けられていた（第16図）。第2石槨と第1箱形石棺の保存を前提にして、中心石槨の墓坑を復元的に捉えたところ、中心石槨は全体的にやや南によって設けられたことが判明した。つまり、中心石槨の墓坑南端は墳頂平坦面の南端にほぼ一致していたのに対し、その北端は前方部への傾斜変換線から2.5mほど南へ寄っている。したがって、中心石槨の構築がなされた時点で、その北側に第2石槨を構築することがある程度予定されていた可能性は否定できない。

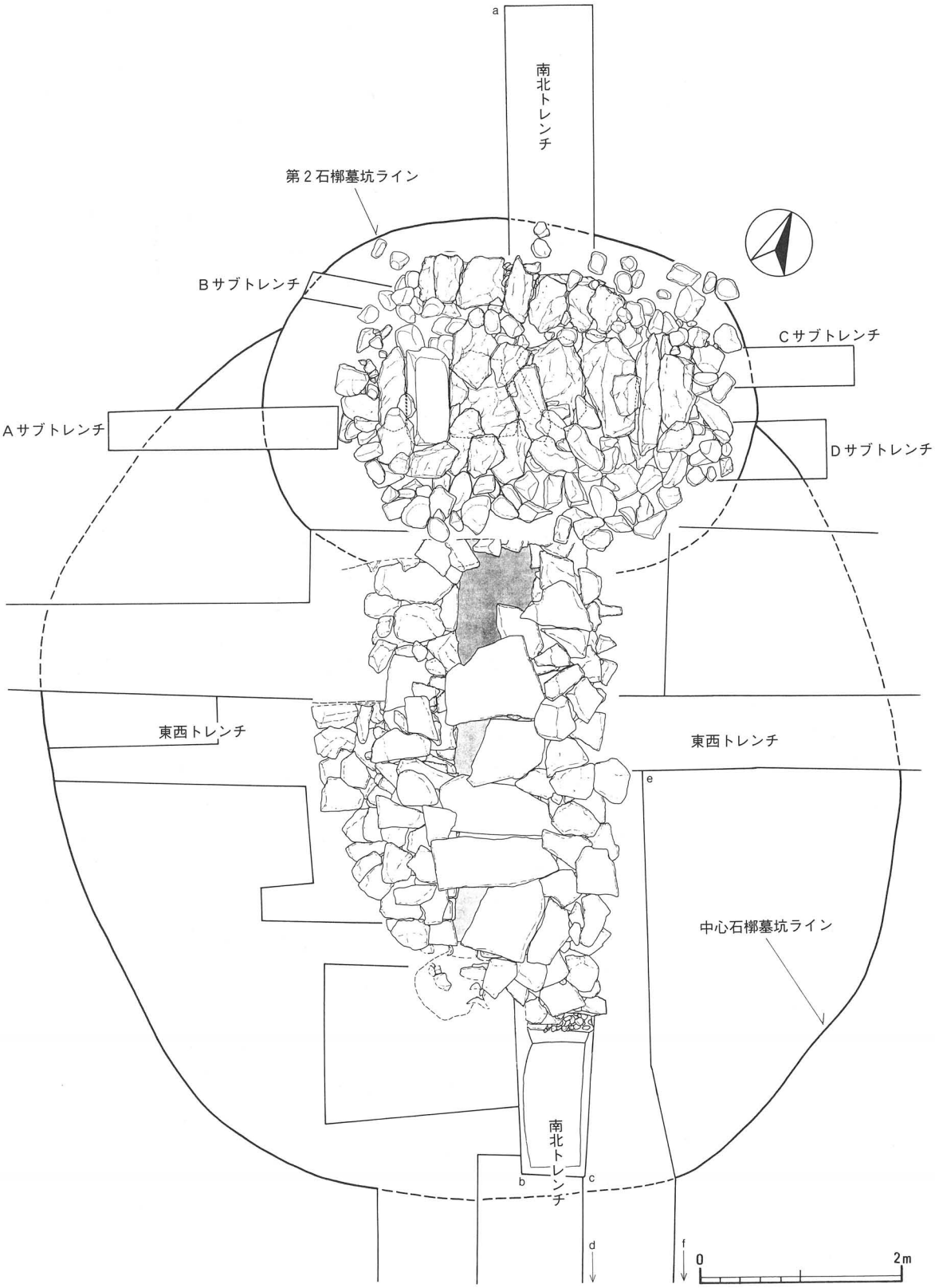
二つの石槨は平面的には重複しているが、第2石槨の墓坑底は中心石槨を被覆した黒褐色粘質土のうちに収まり、中心石槨そのものはまったく損壊を受けなかったようである。第2石槨の棺床構造や墓坑底、中心石槨とのレヴェル差などを明らかにすべく、第2石槨の棺床を約30cmの幅で断ち割ったところ、深さ10～60cmの範囲内で中心石槨を被覆した割石群の北端を捉えることができた（第17図）。その結果、中心石槨の規模は、外法で東西は約3.2m、南北は約6.1mを測ることが判明した。（倉林眞砂斗）

3）墓坑（第7・17・18図）

墓坑は、盛土の上面から掘り込まれていた。その北端は第2石槨の墓坑に切られていたが、確認面で南北約8.7m、東西約8.5mに復元することができる。長軸に対する短軸の割合は0.97と大きく、南北方向に若干長い円形を呈する（第17図）。また、現地表面から墓坑底最深部までは約2.8mを測る。第2石槨の場合は長軸約5.3m、短軸約3.9m、深さは約1.4mであったから、両者の規模較差は歴然としている。墳頂平坦面における中心石槨の墓坑の位置は全体的にやや南寄りで、先に述べたように北側には多少の余裕が残されたようだ。

墓坑内には、全周するような段は作り出されていなかった。ただし、東西メインセクションの東壁側

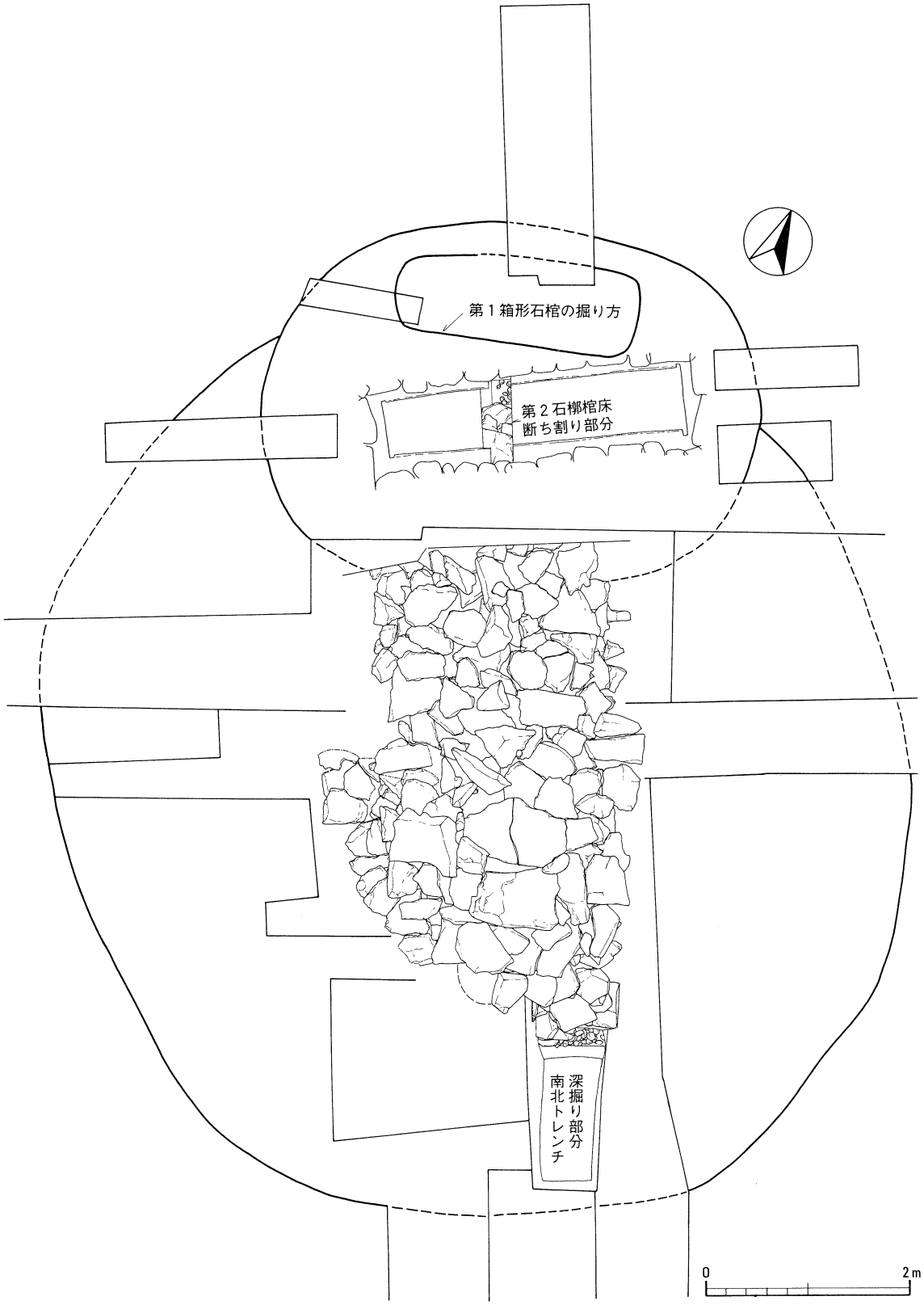
では、大体122.46ｍ、123.00ｍ、123.86ｍの三つのレヴェルで段差が認められた(第７図)。これらのうち、上から第三段目は墓坑底面からの高さは約80cmを測ったのに対し、西壁側でこれに相当する段差は約30cmにすぎず較差が大きかった。また、棺床の中軸線は墓坑中軸線よりも、約80cmほど東寄りに設定されていた。このような非対称性は、中心石槨の構築手順と密接に関連していると推測される。墓



第16図　墓坑ライン及びトレンチ配置図（1/60）

坑壁の傾斜変換は南壁でも確認でき、こちらは墓坑底面から約70cmを測りやはり西壁に比べるとかなり高かった。また、北壁側では、推定される墓坑ラインの上端と被覆割石との間隔が南壁側に比べてかなり狭く、この部分の壁面傾斜は東側と同様に急であったと推測される(第17図)。

墓坑底は平坦ではなく、棺床にあたる部分が緩く山形に掘り残されていた(第18図)。結果的に、上



第17図　中心石槨全体図（1/60）

端で幅１ｍ前後、深さ15～20cm前後の浅い溝が四周を巡るような状況を呈したと推測される。なお、東西メインラインでの計測によれば、その溝底レヴェルは東側よりも西側の方が約７cm高く、南端ではさらに２cmほど高かった。すなわち、墓坑底のレヴェルは全体としては西から東へ、そして南から北へと傾斜していたことになる。また、墓坑底には円礫が全面的に敷き詰められていた。これらが排水機能を意識した措置であったことは間違いないが、検出された南半部分の墓坑壁面では、排水溝の付設に伴う掘り込みを確認することはできなかった。墓坑底面の傾斜や北半部分における墓坑検出状況をふまえると、かりに中心石槨に排水溝が設けられていたとすれば、東側くびれ部へ抜ける北北東部分にほぼ限られるとみてよい。（倉林眞砂斗）

４）棺床と基底部の構造（第18・20図）

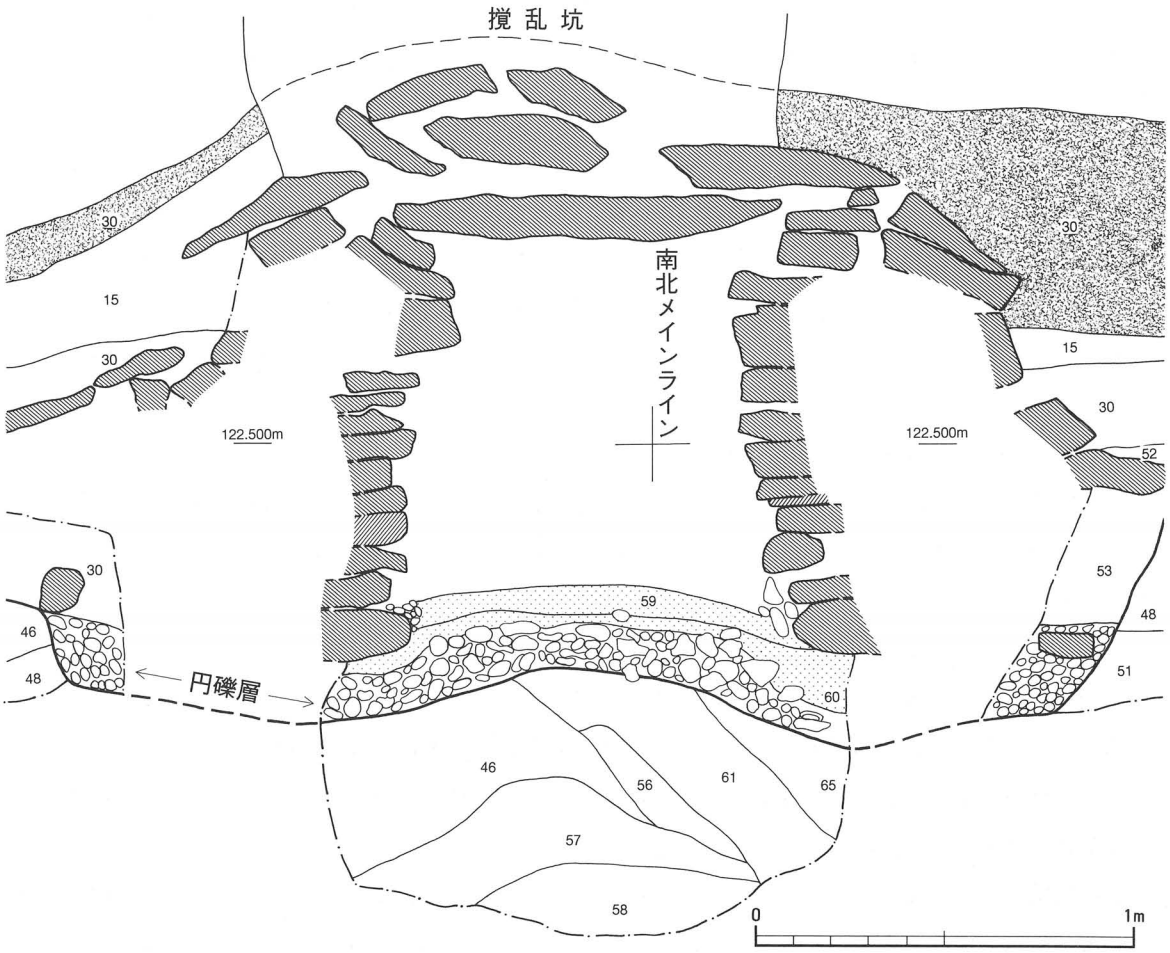
石槨内には盗掘時に流入したと思われる土砂が部分的に堆積していたものの、槨内空間の八割程度は保たれていた。石槨床面の三、四割は露出しており、散乱した粘土塊や円礫を清掃するという形で調査は進行した。

床面には盗掘時の攪乱坑が四箇所で認められ、これらのうち南半部分のものが一番大きく、かつ、深かった（第18図）。石槨床面を作り出していたのは厚さ10～20cmに敷き詰められた灰白色の粘土層で、東西メインセクションではこれが上下二層に分けられることが確認された（第18図）。その上面は全体的にほぼ平坦であったが、特に東半部分ではやや下降気味に石槨壁体の下面へと続いており、Ｕ字状を呈する状況はまったく認められなかった。

灰白色粘土層の上面には、南半部分で水銀朱が、北半部分では酸化鉄が散見されたので、この平坦面が棺床に相当するとみてよい。壁体に近い粘土は若干黄色みを帯びており、部分的にごく薄い砂層が堆積していた。また、壁体際には、相互に組み合った円礫群が多くみられ、これらも同様に黄色がかっていた。一部では不明瞭ながら、同様の状況は石槨の壁体沿いに四周で認められたことから、これを棺痕跡とみなして差し支えないであろう。その長さは390cm、幅は南端で79cm、北端で64cmを測り、南側が幅広い点が注意される（第20図）。棺は底面が平たい箱形木棺と推測されるが、第２石槨のように、長側板と小口板を組み合わせた形跡は認められなかった。また、棺床面のレヴェルは、北端で122.08ｍ、中央付近で122.13ｍ、南端で122.14ｍを測り、木棺はわずかながら南側を高くして埋置されたようである。

石槨壁体の保存をはかりながら基底部構造を明らかにするために、メインラインでは可能な限り槨内外からの断ち割りを断行した。灰白色粘土層の厚さは、南端付近でも約14cmを測ったが、壁体下に潜り込むように下降しつつ薄くなっていた（第７図）。その下には、４～７cm大の円礫が充填され、槨外へと続いていた。円礫層の厚さは、棺台状に掘り残された部分では約12cm、周溝状に掘り込まれた部分ではこれより厚く約25cmを測ったが、その上面は必ずしも水平ではなかった。灰白色粘土層が上下二層に分けられ下層の厚さがかなり不均等であることから、まず下層粘土で基本的に水平面が確保され、上層粘土でいわゆる棺床が整えられたと推測される。西壁側では、ちょうど墓坑壁の傾斜変換部分まで円礫が充填されており、少なくとも三方向で確認された墓坑の傾斜変換は石槨構築と密接な関係にあったと推断される。おそらく、墓坑底面は、石槨外法にほぼ沿うような大きさで長方形に近い形状を呈するように掘り込まれたのであろう。（倉林眞砂斗）

５）壁体と裏込め（第７・20図）

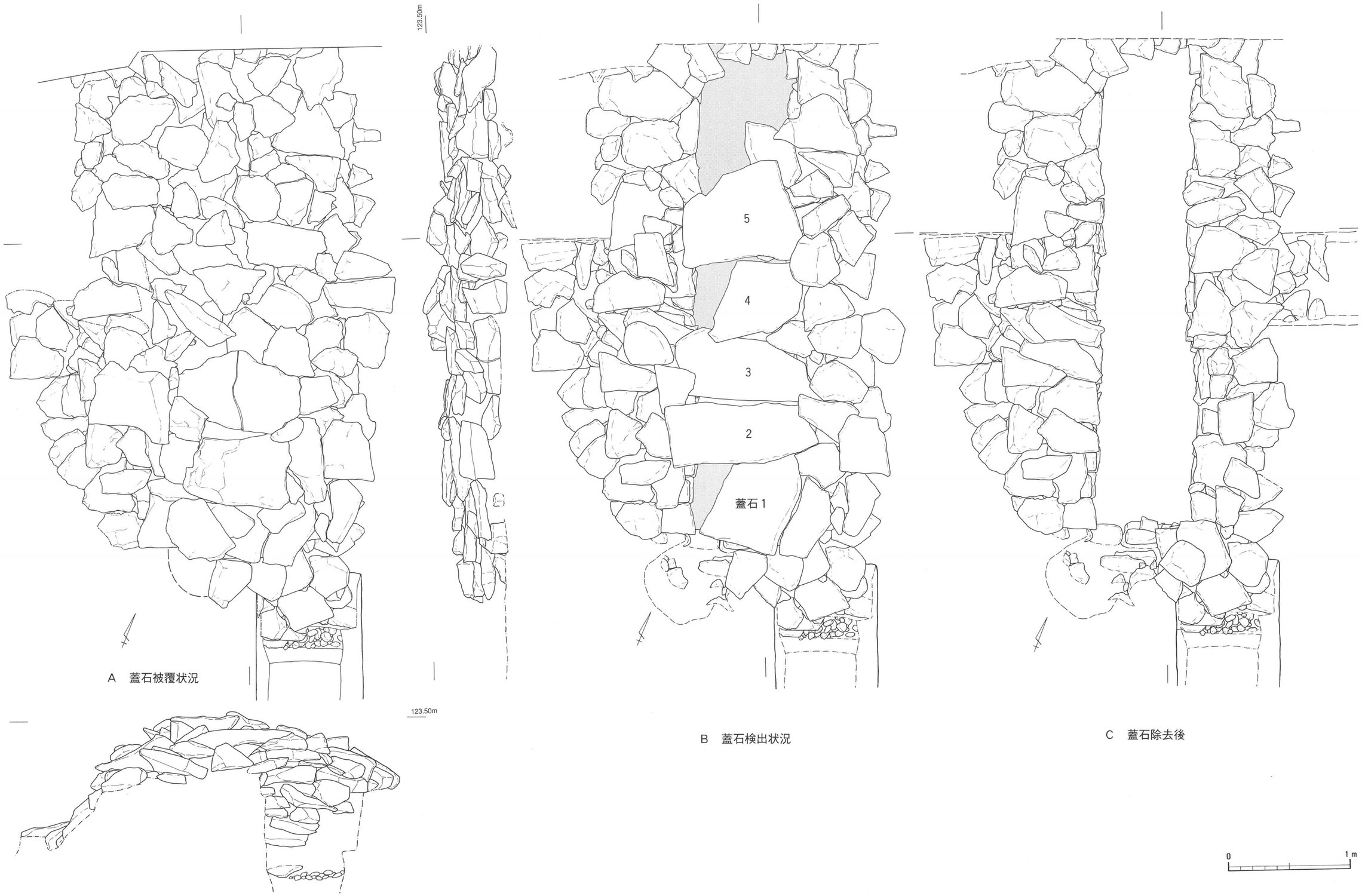


15．5YR5/8　明赤褐色土層　淡黄色の砂岩質ブロックや礫等はあまり含まず、赤褐色を呈する粘質土ブロックが目立つ。良く締まっている。
30．7.5YR2/2　黒褐色土層　数cm大の礫を多く含み、比較的しまりはよい。土質自体は細粒できめ細かい。
46．2.5YR5/8　明赤褐色土層　赤色粘土ブロック、小礫を少量含む。大変良く締まっている。
48．5Y8/4　灰黄褐色土層　非常に良くしまっている。
51．10YR4/3　鈍い黄褐色土層　円礫を若干含み締まり大。
52．2.5YR5/8　明赤褐色土層　46層に類似するが、黒褐色土を部分的に含む。
53．7.5YR7/8　黄褐色土層　砂粒、砂礫を密に含む。締まりは比較的よい。
56．10YR6/4　にぶい黄褐色土層
57．10YR6/1　灰褐色土層　細粒で粘性大。しまり有り。礫などの不純物を殆ど含まない。
58．2.5YR5/2　暗灰黄色土層　同上。
59．10BG1/7　明青灰色粘土層　不純物を含まない非常に純粋な粘土。
60．10YR6/8　明黄褐色粘土層　不純物を含まない。非常に純粋な粘土である。上下２層にわかれて工程差を示す可能性がある。
61．7.5YR3/3　暗褐色土層　小型の白色、石色の礫を含み、全体的にしまりなし。土質は粘性あり。
65．5YR8/4　暗橙黄色土層　締まりあり。細かい砂礫が目立つ。

第18図　中心石槨の棺底部分図（1/20）

中心石槨の壁体には割石が用いられており、平たい面を揃えて八ないし九段にわたって積み重ねられていた(第20図)。石質は比較的脆く、偏平な石材には縦方向の割裂が目立った。また、大きさや厚さにばらつきがあるため壁面間の連続性は必ずしも明瞭ではなく、各所に空隙部が目立った。基底部での規模は、長さが421cm、幅は北端で92cm、南端では110cmを測り、棺痕跡と同様に南端の方が幅広い。高さは約100cmで、両側壁ともやや持ち送り状に積み上げられていた。持ち送りの度合いは、全体的に東壁の方が強かった。

また、いずれの側壁も下から四ないし五段目までは比較的丁寧に積み上げられており、その高さはほぼ等しく揃っていた。この点、良好に遺存していた北側の小口壁も同様で、さらに五段目以上からはやや大振りの石材が両方の側壁に跨るようにさし渡されていた。石槨床面から四ないし五段目の上面までの高さは、約50cmを測る。ただし両側壁の最下段には各々二箇所で突出石が認められ、これらは円礫で高さは20cmほどであった。メインラインの断面図と壁体下端の観察によると、灰白色粘土の端部上面に人頭大の円礫を密に配しながら円礫をそれらの隙間や外側に充填して高さを調整し、第一段目の割



第19図　中心石槨 平・立面図(1)（1/30）

石を巡らすための平坦面を確保したようだ。

南側の小口壁では、裏込めとして割石を用いた丁寧な石積みがなされており、さらに墓坑壁との間には黒褐色粘質土が密に充填されていた(第７図)。東壁側でも同様の状況を呈していたが、第三段目の傾斜変換レヴェルでは割石が壁際まで裏込めされていた。一方、同レヴェルの西壁側では、大形の割石を用いて東側よりもかなり厚めの裏込めが施されていたが、これは墓坑壁傾斜の違いに対応する措置であったと考えられる。ただし、いずれの場合も、壁体下半に比べて中位レヴェルよりも上で割石が多用された点が注意される。

裏込めの最上面では、明赤褐色土が化粧土のように石槨を取り囲んでおり、その東西幅は約５ｍに及んだ。また、厚さは、東側及び南側では10cm前後であったが、西側では被覆石の一部を取り込んで石槨際は40～50cmとかなり厚めであった(第７図)。この明赤褐色土の上には、黒褐色被覆土が直接のっていた。

(倉林眞砂斗)

６）蓋石（第19図）

蓋石には、大形の板石が六枚用いられていた(南端から１～６とする)(第19図Ｂ)。いずれも材質は同じで、流紋岩質溶結凝灰岩である。これは一般に「尼子石」と呼ばれており、石質は比較的脆い。近場では、吉井川を挟んで対岸に位置する支谷の奥部に産することが知られている。

北端と南端の蓋石が最も大きく、前者(蓋石６)は調査時に損壊した。大きさや形状は必ずしも一定ではないが、いずれも東西幅は120cm前後で、両側壁にかかっていた部分は15～20cm程度であった。厚さは10～12，3 cmとほぼ均等で、合わせ口部分もほぼ直線的に揃っていたことから、おそらくある程度の加工調整が施されたと思われる。合わせ口や隙間部分が、粘土などで目張りされた形跡は認められなかった。

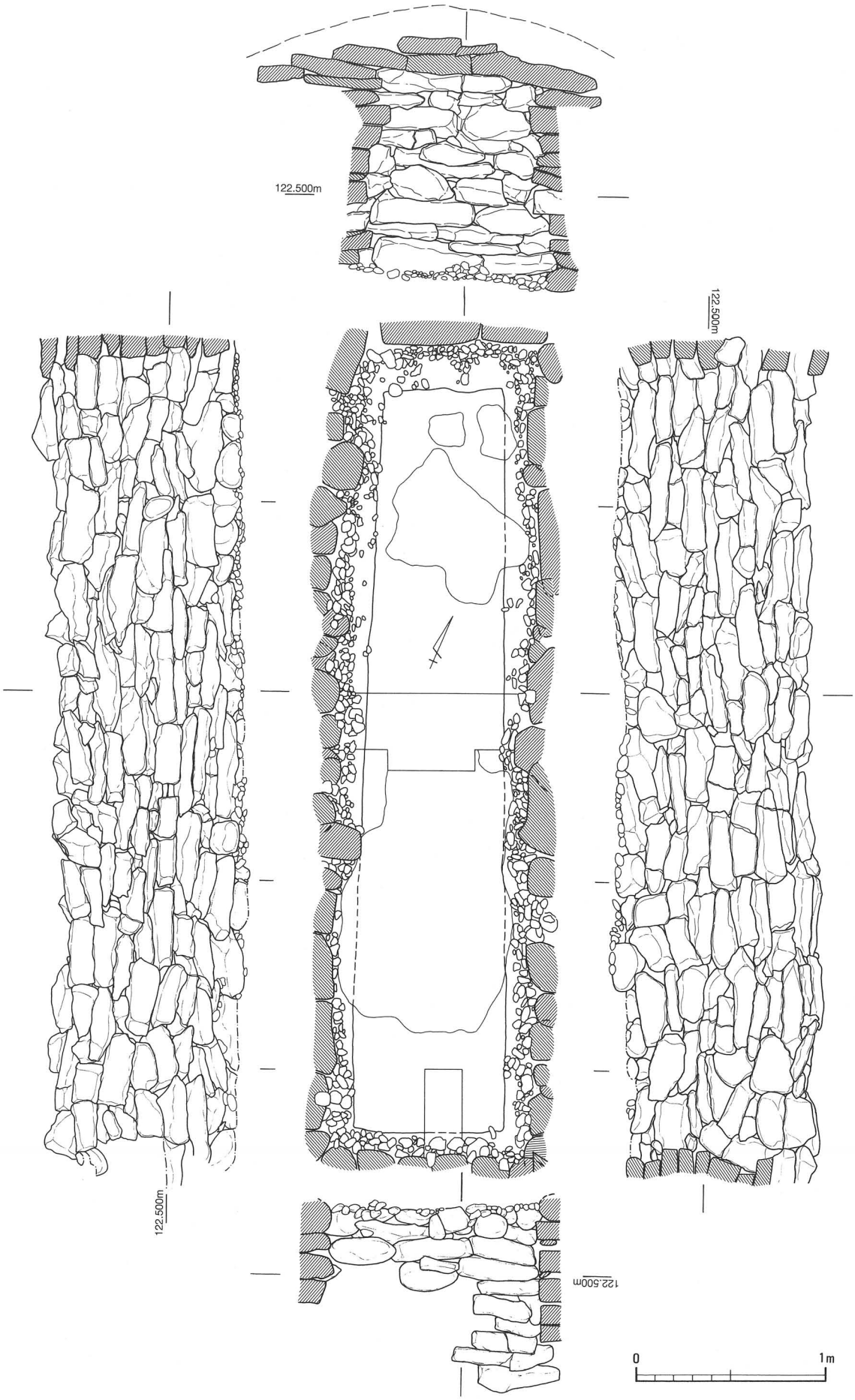
蓋石１と蓋石４は西側部分が損壊しており、いずれも破片は石槨内に落ち込み粘土棺床の上に直接のっていた。これらは、盗掘時に打ち割られたと推測される。重なり具合からみて、蓋石１は蓋石２よりも先に、蓋石３は蓋石２や蓋石４よりも先に置かれたことがわかる。

(倉林眞砂斗)

７）蓋石の被覆措置（第７・19図）

蓋石は多数の石で全面的に覆われており、特に中軸線上には高く盛り上げられて全体的に亀甲状を呈していた(第19図Ａ)。一部には大形の板石や円礫もみられたが、大半は30～60cm大の不定形の割石で、西半部分ではやや大振りのものがしっかりと積み上げられていた。西側では、被覆割石の頂部と裏込め下端との比高は約１ｍに及んだ。最下段の被覆割石は、蓋石の東西両端を抑え込むように配されており、この点は第２石槨の場合と共通していた。盗掘時に破砕された蓋石４の上にも同様に割石がのっていたが、黒褐色粘質土下のものとはまったく異なる置かれ方でこれらが一度動かされたことは明瞭であった。

蓋石を被覆した割石群をさらに覆っていたのは、黒褐色粘質土である(第７図)。その被覆範囲は、東西幅約６ｍ、北端は確認できなかったものの南北長はおそらく7.7ｍほどに達していたと思われる。この被覆土層の厚さは、西側及び南側では10cm程度で、石槨上面もこれとほぼ同様であった。したがって、被覆土層は被覆割石の分だけ石槨上面で大きく盛り上がり、石槨外方に向けて落ち込んでいた。一方、東半部分では、これとはかなり異なる状況が認められた。すなわち、黒褐色土は大体123.00ｍにあ



第20図　中心石槨 平・立面図（2）（1/30）

たる第二の傾斜変換点を基準として充填され、その厚さは40～60cmに及び上面はほぼ水平であった。

被覆に用いられた黒褐色土は、細砂礫を含んで堅くしまっており、盗掘時まで石槨内には土砂はほとんど流入しなかったと考えられることから、密封するという目的は十分に果たされていたことになる。また、第２石槨の墓坑底レヴェルが黒褐色被覆土層の中にあることを確認しており、第２石槨の営造時に中心石槨そのものは損壊を受けなかったことは間違いない。（倉林眞砂斗）

８）墓坑埋土（第７図）

墓坑埋土は、基本的に中心に向かって傾斜しており、薄層が互層状を呈するものの大きくみて上下二層に分けられる。上層は現地表面下から60cm前後までの部分で、基本的に橙色系及び赤褐色系粘質土や赤色砂質土などが互層をなしていた。一方、その下から黒褐色被覆土層の上面までが下層に相当する。下層では、上層と同様の土層がやはり互層をなしていたが、明茶褐色系の粘質土が加わり上層に比べて全体的に茶色がかっていた。

上層・下層ともに厚さは60cm前後でほぼ等しく、両者が区分されるレヴェルはおよそ123.90ｍ付近である。この点、南北メインラインより東側に１ｍ寄った土層断面（南半部）では、墓坑埋土が二分される状況をより明確に把握することができた。また、南北メインラインの断面図からは、上層・下層のいずれも墓坑南壁側から北壁に向かって少しづつ埋め戻されたことが窺える。したがって、中心石槨の墓坑は大きく二段階に分けて埋め戻されたと考えられる。

東西メインラインの西側下層部分では、明赤褐色粘質土と橙色粘質土が互層をなした浅いＵ字状の窪みが認められたが、これは黒褐色被覆土の厚みが東側に比べて薄かったことから生じた埋土の違いである。（倉林眞砂斗）

９）石槨構築過程の復元（第21図）

発掘調査の所見により、中心石槨の構築過程を次のように復元することができる（第21図）。

① 墓坑を掘る。

墓坑底は、まず幅約３ｍ、長さは少なくとも6.5ｍの長方形状に掘り込まれ、その長軸線上には断面が緩く山形を描く棺台状部分が掘り残された。この棺台状部分を取りまく溝の底面レヴェルは、西側より東側が、南側より北側が低くなるように調整された。中心石槨に排水溝が設けられたとすれば、この長方形状の掘り込みの北東隅部が切り開かれていたはずである。

② 墓坑底面の全体に小円礫を敷き詰め、灰白色粘土で水平面を整えながら棺床を作る。

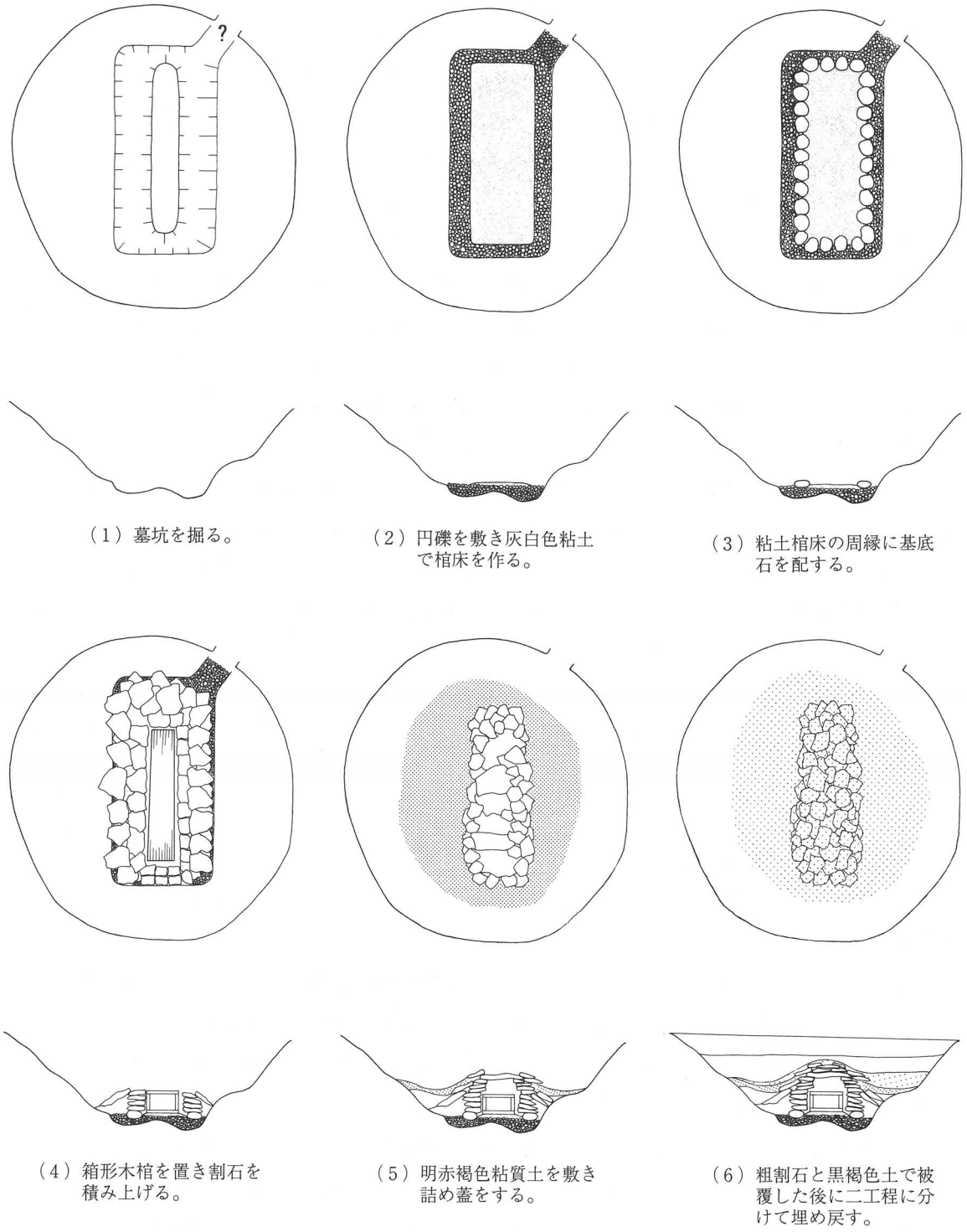
灰白色粘土で円礫層上面の凹凸が整えられ、棺床面は意識的に南側が高くされたようだ。灰白色粘土が敷かれた範囲は、おそらく東西幅約1.7ｍ、南北長５ｍの長方形状を呈すると推定される。

③ 粘土棺床の周縁部に、人頭大の円礫を基底石として配する。

それらの周辺部や墓坑壁との間に小円礫も適宜充填することにより、割石を積み上げる水平面が確保される。

④ 箱形木棺を置き、おそらく木棺の高さに等しいレヴェルまで、四ないし五段の割石を積み上げる。墓坑壁の傾斜度を勘案すると、木棺や石槨石材の搬入は西側から行われたと推測される。

⑤ 割石や黒褐色粘質土、黄褐色砂質土などを用いて裏込めをしながら最終的に八ないし九段ほど壁体を積み上げた後に、明赤褐色粘質土を化粧土のように敷き詰める。そして、六枚の大形板石で蓋



第21図　中心石槨構築模式図

をする。

⑥　蓋石を覆うように5，60cm大の粗割石を亀甲状に積み上げ、さらに黒褐色土で全体を被覆する。

⑦　大きく二工程に分けて、墓坑全体を埋め戻す。　（倉林眞砂斗）

10）小結

日上天王山古墳の中心石槨の特色について、構築順にまとめると次のようになる。

第一に、墓坑の平面形は南北にやや長い円形を呈するものの、壁面の傾斜は西側と東側とでは大きく異なっていた。すなわち、西壁は東壁よりも傾斜が緩やかでスムーズに移行しており、おそらく木棺や石材を西側から搬入するために便宜がはかられた結果、このような非対称性が生じたと推測される。

第二に、墓坑底には横断面が緩く山形を呈する棺台状部分が掘り残され、排水機能を意識した措置が施されていた。墓坑底面のレヴェル差を勘案すると、排水溝は東北隅から東側くびれ部にかけて設けられた可能性が高い。

第三に、粘土棺床の断面形からみて、箱形木棺が用いられた可能性がきわめて高い。棺痕跡の規模は外法で長さ390cm、幅64～79cmを測り、高さに関しては壁体の積み方が変わる四ないし五段目までとすると50cm前後となる。

両側壁の間隔及び粘土棺床は南側の方が幅広かったこと、粘土床面の上面レヴェルは南側がやや高かったこと、また、水銀朱が南半部のみに認められたことなどから、中心石槨の頭位方向は南であった、と推測される。これが、第四の特色である。

第五に、両側壁の四ないし五段目より上のレヴェルでは、裏込めに石が多用されていた。

第六に、両側壁の最下段には円礫の突出石が認められた。

第七は、割石及び黒褐色土を用いて、入念な密封措置が全面的に施されていたことである。

（倉林眞砂斗）

Ⅱ．第２石槨

１）墳頂平坦面における位置（第15図）

第２石槨は、後円部墳頂平坦面の現状での中心より約２ｍ北寄りに、墳丘及び中心石槨の主軸にほぼ直交する東西に長軸をもって設けられていた。

本石槨は、発掘調査前に行われた電気探査の結果に従い、中心石槨の確認を行うために後円部墳頂平坦面北側を掘り下げる途中で予想外に検出された。調査前は、盗掘坑や埋葬主体の痕跡は認められず平坦であったが、表土を剥ぎ始めるとすぐに人頭大の円礫や大型の板石が次々と姿を現し、中心石槨以外の埋葬主体部である可能性が強くなった。その性格を明らかにするためにあらためて調査区を設定し、石材群を精査した結果、中心石槨とは別の第２石槨と第１箱形石棺の存在を確認した。

第２石槨は、後円部墳頂平坦面において東西方向の長軸4.9ｍほどの墓坑が設定可能な限り北寄りに構築されており、中心石槨を意識的に避けようとしたことは明らかである。それでも結果的に、中心石槨墓坑の北側を第２石槨の墓坑は大きく壊すこととなっている。レヴェル的には中心石槨の石材を動かさない程度に留めているものの、平面的には中心石槨と第２石槨の石組みは一部重複しており、中心石槨内の北側小口の直上に第２石槨の南壁中央が構築されており、立体交差の状況を呈している。

本石槨は表土の直下で確認され、一時期、部分的に地表に露出していた可能性もあるが、乱掘等の破壊を受けておらず遺存状況は良好であった。このため、保存を前提とした調査を行うことにした。

（高橋幸治・水野敏典）

２）墓坑（第22図）

墳頂平坦面の掘り下げと、Ａ～Ｄの四つのサブトレンチを設定して確認した。

墓坑は、中心石槨の墓坑の北側を壊して、盛土の上面から掘り込まれていた。確認面での大きさは、

南北3.7ｍ、東西4.9ｍの東西に長い楕円形である。中心石槨に比較して著しく小さい。また、墓坑の深さは、検出レヴェルから1.36ｍと中心石槨に比較してかなり浅い。これは第２石槨が、中心石槨の北側小口の上に構築されているためであり、第２石槨の墓坑の掘り下げ時には、中心石槨蓋石を被覆していた黒褐色土の一部を削っているものの、中心石槨の石材を動かすには至っていない。

墓坑の立ち上がりの下半分は、第２石槨と北に隣接する第１箱形石棺の保存のために確認することができなかった。しかし、石槨内の断ち割りにより墓坑底面が平らであること、その絶対高が確認されたこと、後述する壁体の構築法の差異と、部分的に確認された墓坑立ち上がりの傾斜が一致し難いことから、墓坑の立ち上がりに緩い段をもつことが想定される。

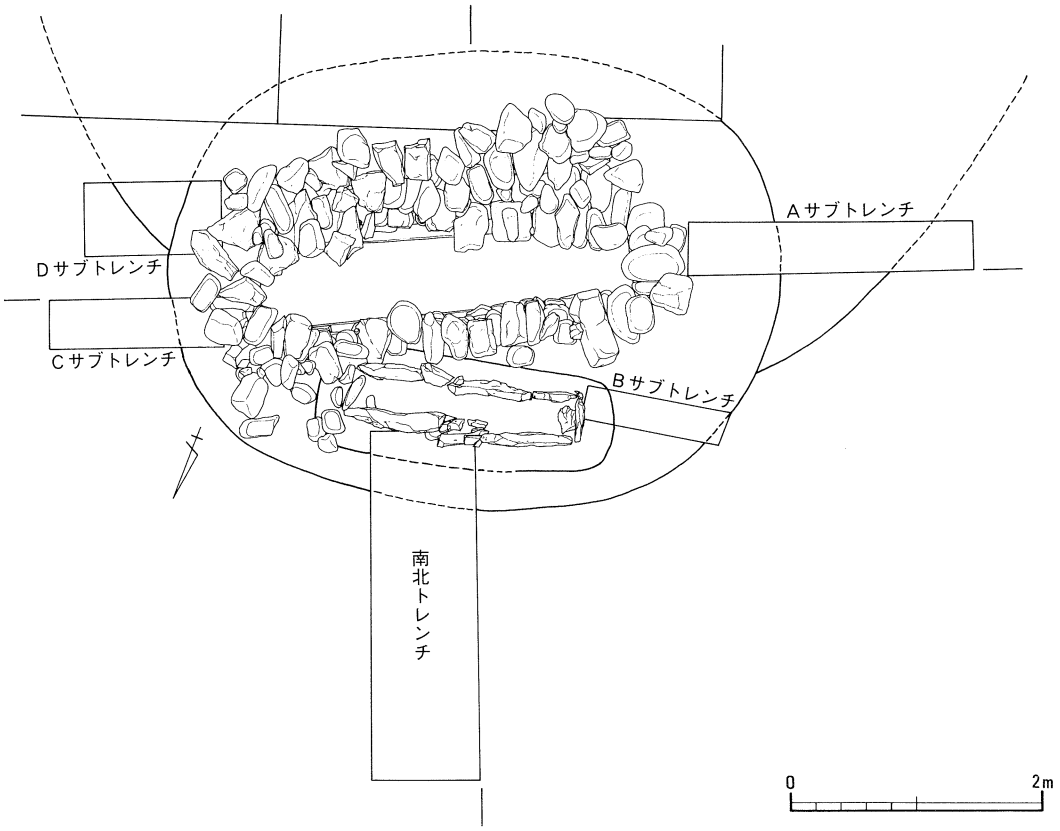
墓坑の立ち上がりは、南側に比べて北側が明らかに緩やかで、北西部分にその傾向が強く見られる。そのため、石槨内の中軸線は墓坑中軸線に対して北東－南西方向に斜交しつつ、南北ライン付近で約30cmほど南寄りに設定されている。このような非対称性は、中心石槨にも共通してみられ、石槨構築手順と密接に関連していると推測される。

墓坑底は、断ち割りで確認した限りでは平らで、中心石槨にみられた棺床下の排水を意識した円礫や溝などの遺構はなかった。また、調査区内において第２石槨に伴う排水溝の掘り込みは確認されなかった。

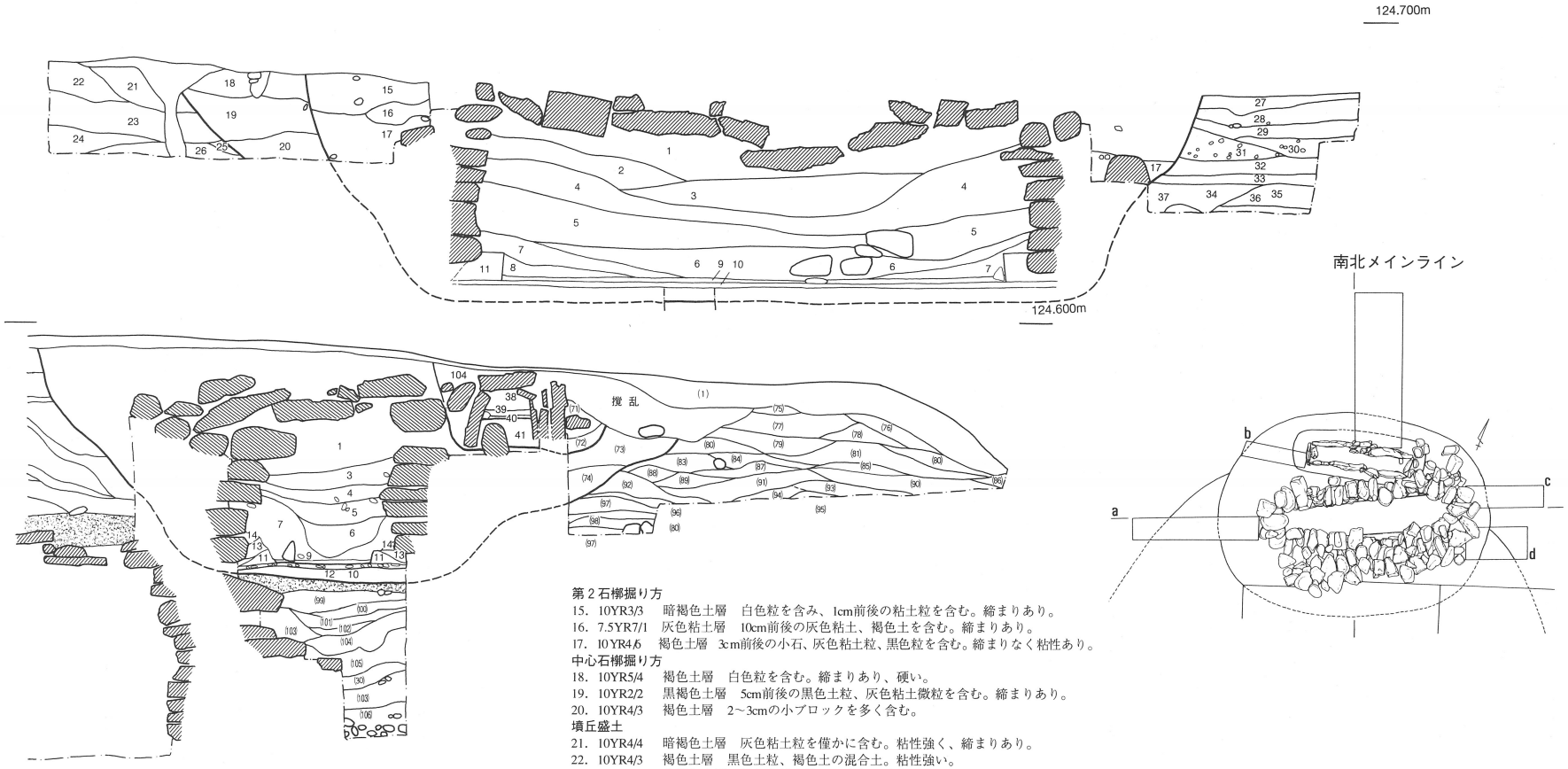
（水野敏典）

３）棺と石槨基底部分の構造（第23図）

石槨内には、一部蓋石と南側壁体中央部の崩落に伴って流入した土砂が蓋石まで堆積しており、調査はこれを掘り下げる形で進行した。



第22図　第２石槨墓坑ライン及びサブトレンチ配置図（1/60）



第23図　第２石槨断面図（1/40）

第２石槨

1．2.5YR5/6　明赤褐色土層　比較的締まりあり。全体的に小礫を含む。粘性あり。
2．7.5YR3/2　黒褐色土層　締まりなくボソボソ。微細な礫含む。
3．2.5YR3/6　暗赤褐色土層　3～5cm大の礫を含む。
4．7.5YR3/2　黒褐色土層　締まりなくボソボソ。微細な礫含む。
5．7.5YR2/2　黒褐色土層　粘性が比較的強く、締まりあり。
6．2.5YR4/4　赤褐色土層　締まりあり。人頭大の河原石、数cm大の赤褐色ブロックを含む。
7．2.5YR4/4　赤褐色土層　6層より黒味がかっている。
8．10YR3/1　黒褐色土層　粒子粗く、締まり粘性に欠ける。5mm程の黒色粒を含む。
9．10YR3/3　黒褐色土層　締まりなく黒色。粘性強い。腐食土。
10．10YR4/3　暗褐色土層　赤色の粗砂を主体とし、3～5cmの礫を含む。締まり弱い。
11．10YR8/2　灰色粘土層　灰色の粘土の他に褐色土を僅かに含む。締まりあり。
12．7.5YR4/3　褐色土層　黒色土粒、灰色粘土粒、2cmほどの小礫をやや多く含む。
13．7.5YR5/6　褐色土層　白色粘土粒、長石を僅かに含む。粘性強く締まりあり。
14．10YR8/2　灰色粘土層　灰色粘土を主体とし、褐色土を僅かに含む。締まりあり。

第２石槨掘り方

15．10YR3/3　暗褐色土層　白色粒を含み、1cm前後の粘土粒を含む。締まりあり。
16．7.5YR7/1　灰色粘土層　10cm前後の灰色粘土、褐色土を含む。締まりあり。
17．10YR4/6　褐色土層　3cm前後の小石、灰色粘土粒、黒色粒を含む。締まりなく粘性あり。

中心石槨掘り方

18．10YR5/4　褐色土層　白色粒を含む。締まりあり、硬い。
19．10YR2/2　黒褐色土層　5cm前後の黒色土粒、灰色粘土微粒を含む。締まりあり。
20．10YR4/3　褐色土層　2～3cmの小ブロックを多く含む。

墳丘盛土

21．10YR4/4　暗褐色土層　灰色粘土粒を僅かに含む。粘性強く、締まりあり。
22．10YR4/3　褐色土層　黒色土粒、褐色土の混合土。粘性強い。
23．10YR5/4　黄褐色土層　黒色土粒を僅かに含む。締まりあり、粘性強い。
24．7.5YR3/2　黒色土層　褐色土粒を多く含む。
25．10YR4/4　褐色土層　1cm前後の灰色粘土粒を含む。締まりあり。
26．10YR3/2　黒褐色土層　3cm前後の褐色粒を含む。締まりあり。
27．10YR5/4　褐色土層　1～4cmの礫、祖砂を多く含む。締まりあり。
28．10YR3/3　暗褐色土層　27層より黒色土を多く含む。
29．10YR3/3　暗褐色土層　28層より白色粒が多く、2cm前後の礫を含む。
30．7.5YR2/2　黒褐色土層　3cm前後の礫と、2cm前後の褐色土を含む。粘性あり。
31．5 YR4/3　赤褐色土層　砂質土、小礫、褐色土を含む。締まりなし。
32．10YR2/2　黒褐色土層　褐色土粒を含む。粘性あり。締まりあり。
33．5 YR4/4　赤褐色土層　31層に似る。礫少なく、砂質で白色粒（頁岩）を多く含む。
34．10YR2/1　黒色土層　2cm前後の褐色土粒を含む。締まりあり、粘性強い。
35．10YR3/3　暗褐色土層　褐色土と砂の混合土。灰色粘土を僅かに含む。締まりあり。
36．7.5YR1.7/1　黒色土　腐食土。僅かに黄色砂を含む。
37．10YR4/4　褐色土　褐色土のブロック、白色砂を僅かに含む。締まりあり。

南側壁体中央部の崩落は、副葬品と石槨床面の直上にその石材が確認されたことから、土砂流入前であったことがわかる。大きな撹乱は、第1箱形石棺構築によるものだけで盗掘は受けていない。なお、第2石槨は中心石槨のように蓋石に被覆土をもっていないことから、その崩落は土砂の流入前で構築後の比較的早い段階に起きた可能性が高い。

石槨内の流入土を掘り下げていくと、四方の壁体沿いに灰色粘土が検出された。さらに掘り下げると赤色の粗砂と小石の面を確認し、その上から銅鏡、鉄剣、鉄鏃、鉄鑿などの副葬品が出土した。赤色の砂層上面は、副葬品の出土状況から木棺の設置面と考えられ、砂層は壁体沿いに確認された灰色の粘土塊の下に潜り込んでいた。この粘土塊は石槨内側に明確な面をもっており、木棺の痕跡を示すと見られる。

以下、石槨内の断ち割り結果と併せて、構築順序にしたがってみていくことにする。

墓坑底面は、ほぼ水平で、中心石槨に見られた排水溝状の施設は確認されていない。その代わりに約10cmの置土がなされ、その上に2cm前後の小石の混ざった赤い粗砂が敷かれていた。その厚さは、東側小口で3cm、西側小口で1cmと、東側で厚くなっていた。中心石槨のように石槨の床面に粘土はまったく用いられていない。

その粗砂の上に木棺を設置し、灰色粘土を木棺周囲と周辺の墓坑底面に貼り、その上に壁体を構築している。そして壁体を積み上げる際に、さらに壁体と木棺の間に粘土を充填している。そのため、灰色粘土は少なくとも三、四工程に分層できる。結果として、最下段の石材は粘土に埋もれており、場所によっては三段目の石材の一部にまで灰色粘土が付着していた。

木棺自体は腐朽して形を留めていなかったが、この灰色粘土の存在から木棺の平面形はほぼ確認できた。木棺の長さは2.9m、棺の幅は東小口付近で0.63m、西小口付近で0.53mと東側が広い。細部を観察すると東側小口では、小口板が棺の幅より4cmずつ突出する。突出部の板の厚さは3cm程である。西側小口は、粘土が一部崩れていたため明確でないが、東側と同様に棺の幅より3cm程突出していたと見られる。棺底面は、赤色の砂層に接した部分できわめて浅いU字形である。棺小口の灰色粘土の立ち上がりは垂直に近く、むしろ内傾気味で明瞭な面をもつ。それに対して棺の長側板に接する部分では、立ち上がりから約3～5cmの所でわずかに1cmほどの段をもち、棺の形状を反映したものと思われる。これらのことから木棺は、小口板が棺の幅より長く突出する組合せ式の箱形木棺とみなしてよいであろう。

砂層の上面が棺との接地面と見られるが、東小口付近で123.18m、西小口付近で123.15mとわずかに東側が高い。いわゆる棺台等の施設は確認できず、木棺は石槨内のやや北側に設置されていた。

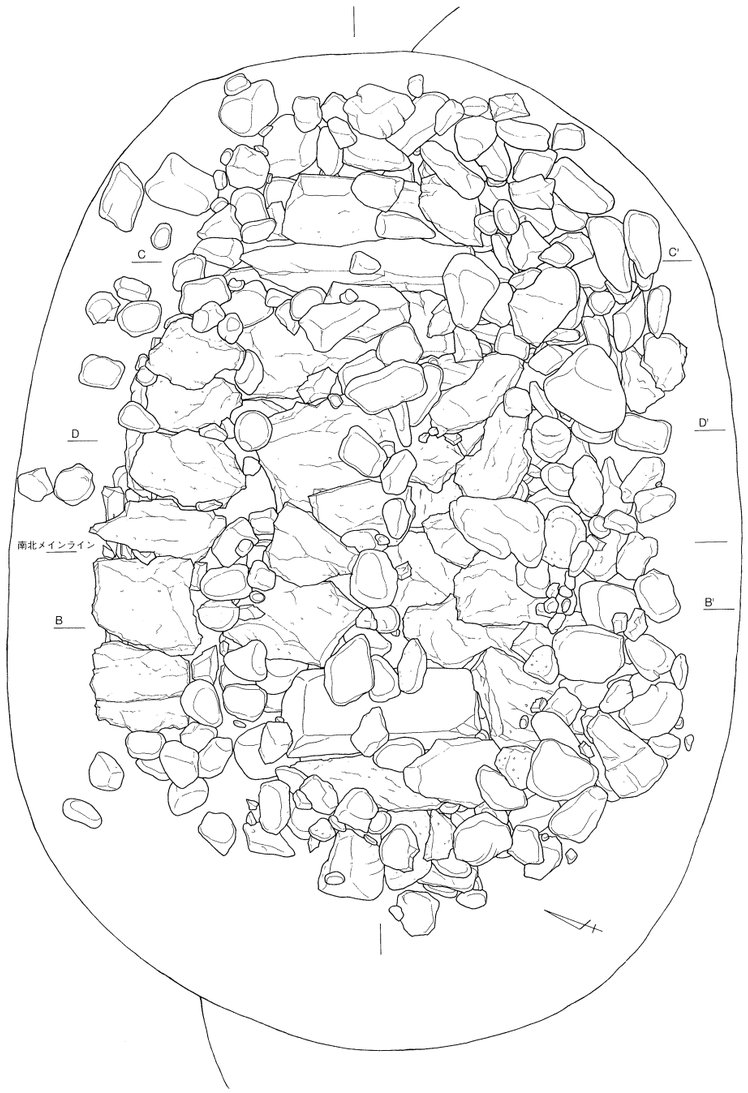
また、崩落した南側壁の石材が鉄剣の直上に載った状態で確認されていることから、木棺はその下半部分を粘土で被われていただけで、上半部分に粘土等での被覆等は行われていなかったことになる。

（水野敏典）

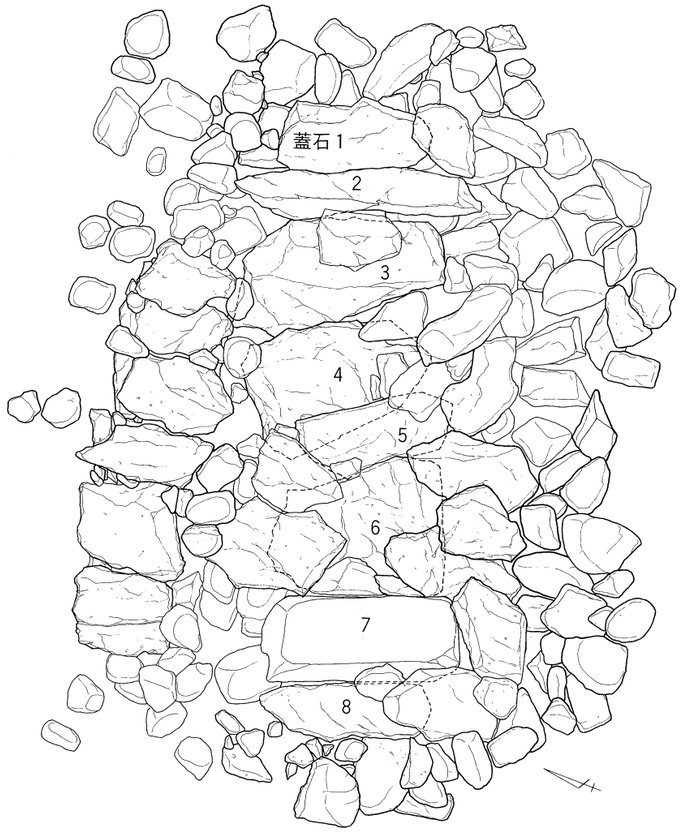
4）壁体と裏込め（第23・25図）

石槨の壁体は、赤色の粗砂の上に灰色粘土を貼り、その上に構築されている。

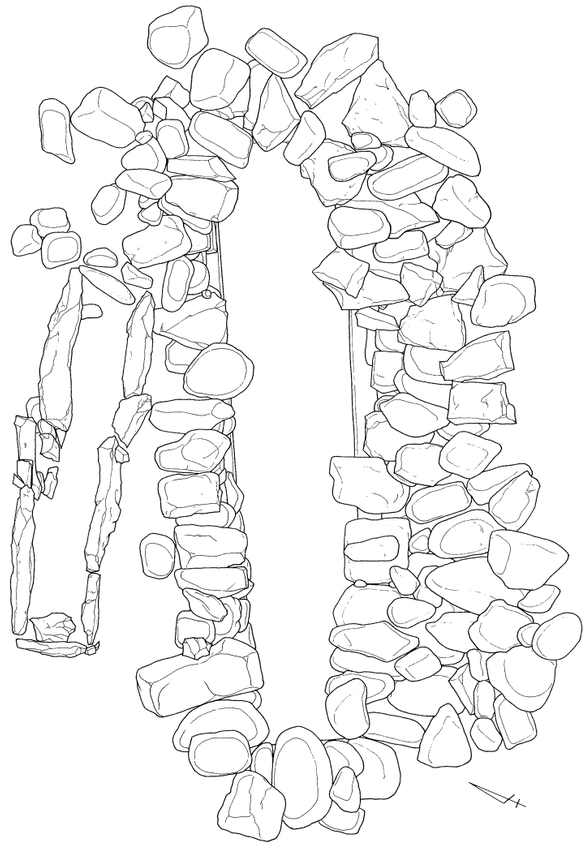
石材は、中心石槨が扁平な割石を用いているのに対して、円礫と角礫を使用している。これらの多くは人頭大であるが、厚みが5～15cm、長さが15～70cmとその大きさや形は多様である。その多様な石材を石槨内では壁面端が揃うように積んでいた。石材を積む順序は基本的に壁面に向かって左から右方向である。ただし、壁体の目地は水平に通らない部分も多く、斜めに積み上げるなど粗い石組みが目立つ。壁体は、蓋石まで七段前後に積み上げられているが、上半と下半で石の積み方に違いがみられた。



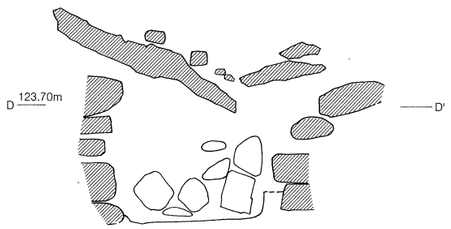
A　蓋石被覆状況



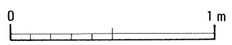
B　蓋石検出状況



C　蓋石除去後



第24図　第2石槨 平・立面図(1)（1/30）



三、四段目までは横口に積まれているが、それ以上では小口積みが主体となる。これは、墓坑立ち上がりの段と対応する可能性が強い。

石槨内は、床面付近で長さ約3.1m、東側で幅約0.8m、西側で約0.75mの基本的に矩形を呈し、棺床から蓋石までの高さは約0.9mである。南側壁はその中央が崩落し全体的に内側に崩れてきているのに対し、北側壁の残りは良好であった。三、四段目まではほぼ直立しており、四段目以上ではわずかに持ち送っている。また、小口付近では蓋石と接する石材が石槨主軸に対して斜めにさし渡すか、もしくは石槨小口を中心とした放射状に小口積みされ、持ち送りがなされていた。石材と石材の間は空隙になっており、粘土や土で固定することなく、単に積み上げているだけである。

構造的特徴としては、南北側壁の二段目の小口から二つ目の石材が槨内に四箇所、3～5cm程突出していた。同様の石材の突出は中心石槨にも見られる。また、小口から一つ目の側壁下半の石材が木棺の形に沿うように凹む傾向が挙げられる。

壁体の裏込めはボーリング棒で確認する限り、三、四段目までは壁体の後ろに石材を使用しておらず、石材と石材の間にも土が詰まっていない。四段目以上で裏込めに石材が用いられ、墓坑の立ち上がりに沿うように裏込めを厚くしている。裏込めの石材は、壁体と同様の人頭大の円礫を主体としていた。裏込めに用いられた石材は石槨内に対して小口積みにしており、ここでも石材の間に粘土や砂を意識的に詰めたりはしていなかった。（水野敏典）

5）蓋石（第24図）

蓋石には大形の板石が八枚用いられていた(東端から1～8とする)。蓋石4の南端が南側壁の一部と共に石槨内に崩落していた他は、築造時の状況を保っていた。

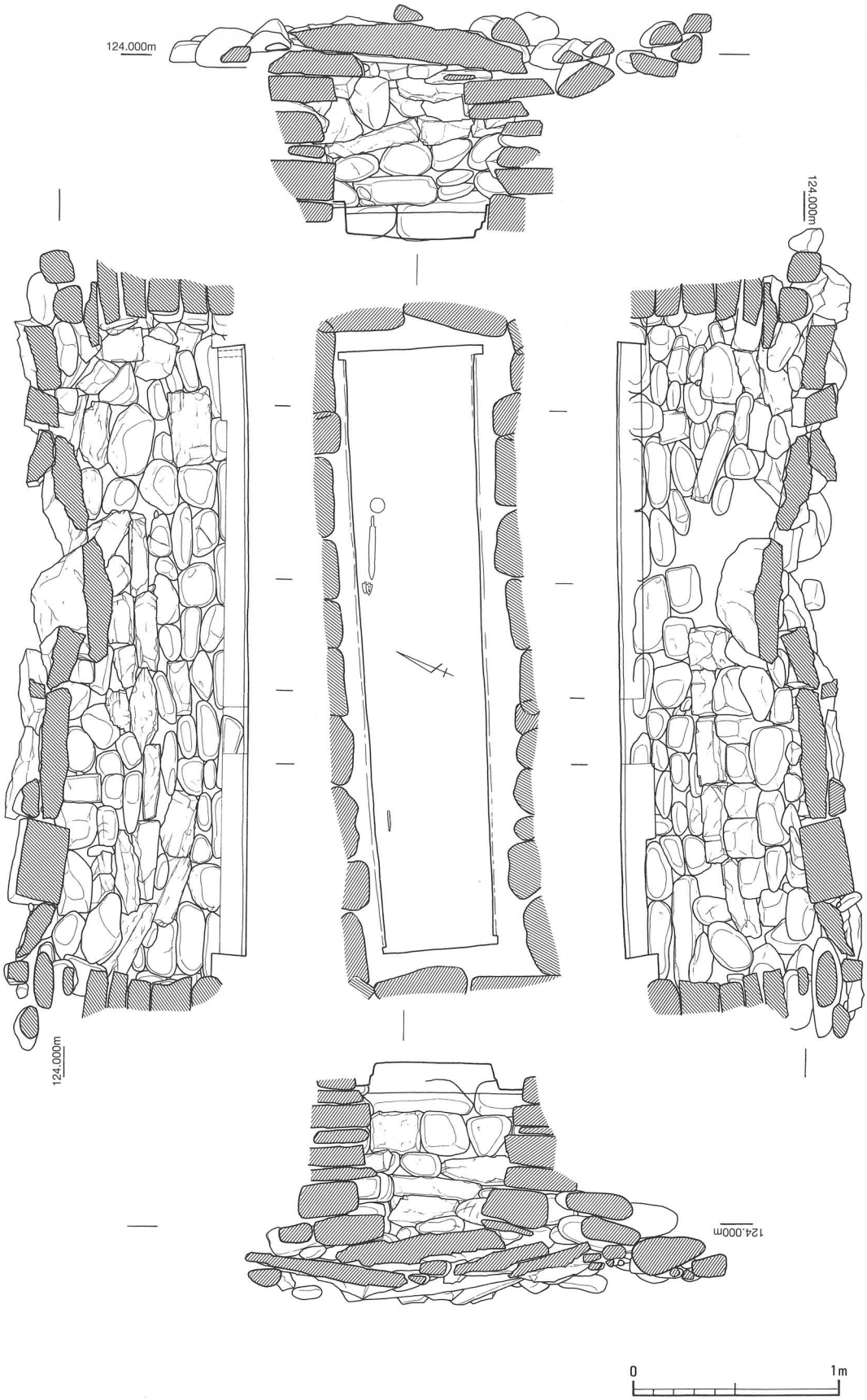
うち六枚が一般に「尼子石」と呼ばれる石材で、両小口から二番目の蓋石2・7には「尼子石」以外の石材が用いられていた。中心石槨の蓋石にも「尼子石」が用いられていたが、第2石槨使用の石材の方が含まれる礫が多く表面も粗い。

「尼子石」の蓋石は、不整形な板状で、合わせ口も大まかにしか割り揃えられていない。最大の蓋石6で、長さ約1.1m、幅0.6mほどで、厚さは10～15cmほどである。それに対して「尼子石」でない蓋石2・7は最大厚さ25cmほどと厚く、長さも、1～1.2mと長く、角柱状の石が用いられていた。重なり具合から、蓋石1は蓋石2よりも先に、蓋石4、蓋石5、蓋石6の順序で置かれたことがわかる。

これらの八枚の蓋石の南北それぞれ両端を押さえ込むように、蓋石よりやや小振りの長さ約0.5～0.7m、幅約0.3～0.5mほどの不整形な板石(尼子石)が掛けられており、さらにその石材が見えなくなる程度に人頭大の円礫が積まれていた。しかし、石材の隙間に粘土等の目張りがなされた痕跡はない。蓋石の上に積み上げられた石材は、中央石槨のように亀甲状には盛り上がらず平面的である。蓋石の上に積まれた石は、墓坑の検出面付近で壁体の裏込めの石材と区別がつかなくなる。その広がりは墓坑検出面付近で最大となる。

蓋石の端を押さえていた板石は、蓋石の両端とも同様の状態であったと考えられるが、調査時には南側が八枚に対し、北側は二枚と数が少なかった。また、蓋石の上に積まれた円礫も同様に北側の数が少なかった。これは第1箱形石棺の構築の際に抜き取られたためとみられ、「尼子石」をはじめとした石材の多くは第1箱形石棺の部材に再利用されたものと推測される。

本石槨は、表土の直下で確認されており、一部は地表に露出していたため、蓋石より上の覆土につい



第25図　第２石槨 平・立面図（２）（1/30）

ては不明である。中央石槨のような特別な被覆土は確認できず、石材と石材の間には空隙が目立つ。

（水野敏典）

6）石槨構築過程の復元（第26図）

調査結果に基づいて、第2石槨の構築過程を順を追って整理していくことにする。

① 墳頂平坦面の北側に東西長軸4.9m、南北短軸3.7mの小判形に墓坑を掘る。その際に、中心石槨掘り方の北側を破壊し、その蓋石の被覆土を一部削るものの、中心石槨の石材を動かした痕跡はなく、中心石槨を意識的に避けて構築していることは明らかである。墓坑底は平らで、立ち上がりは北側に緩く、傾斜の途中には緩やかな段をもつ。

② 厚さ10cm程の置土をした後、赤い砂層を墓坑内に敷き詰める。この時、東側が厚く敷かれる。

③ 組合せ式の箱形木棺を砂層の上に設置し、木棺の周囲と墓坑内に灰色粘土を貼る。墓坑の傾斜の緩いところから搬入したとすれば、北側の前方部側から行われた可能性が強い。

④ 灰色粘土の上に壁体を積み上げる。壁体の石材は人頭大の円礫と角礫で、壁体下半分は横口積みにしている。裏込めに石材等は用いられていない。二、三段目までは壁体を構築しつつ木棺との間に粘土を充填する。

⑤ 壁体四段目からの上半分は小口積みに変わり、最終的に蓋石までに七段前後に積み上げる。上半分では裏込めに人頭大の石材を石槨に対して小口積みの方向で使用している。

⑥ 蓋石を置く。大形の八枚の板石を蓋石とする。その際に石槨小口付近の壁体では斜めに石を差し掛けたり、石槨小口から放射状に壁材を積む。確認できる限りでは蓋石は東側から置かれている。

⑦ 蓋石の両端をそれぞれ小形の板石を置いて押さえる。調査時には南側に八枚、北側に二枚確認された。北側部分については、第1箱形石棺構築の際に用材として抜き取られたものと思われる。

⑧ 蓋石の上に円礫を平らに積む。これらの石材は石槨裏込めの石材と墓坑検出面付近で区別が付かなくなる。最後に墓坑を土で埋める。

（水野敏典）

7）小結

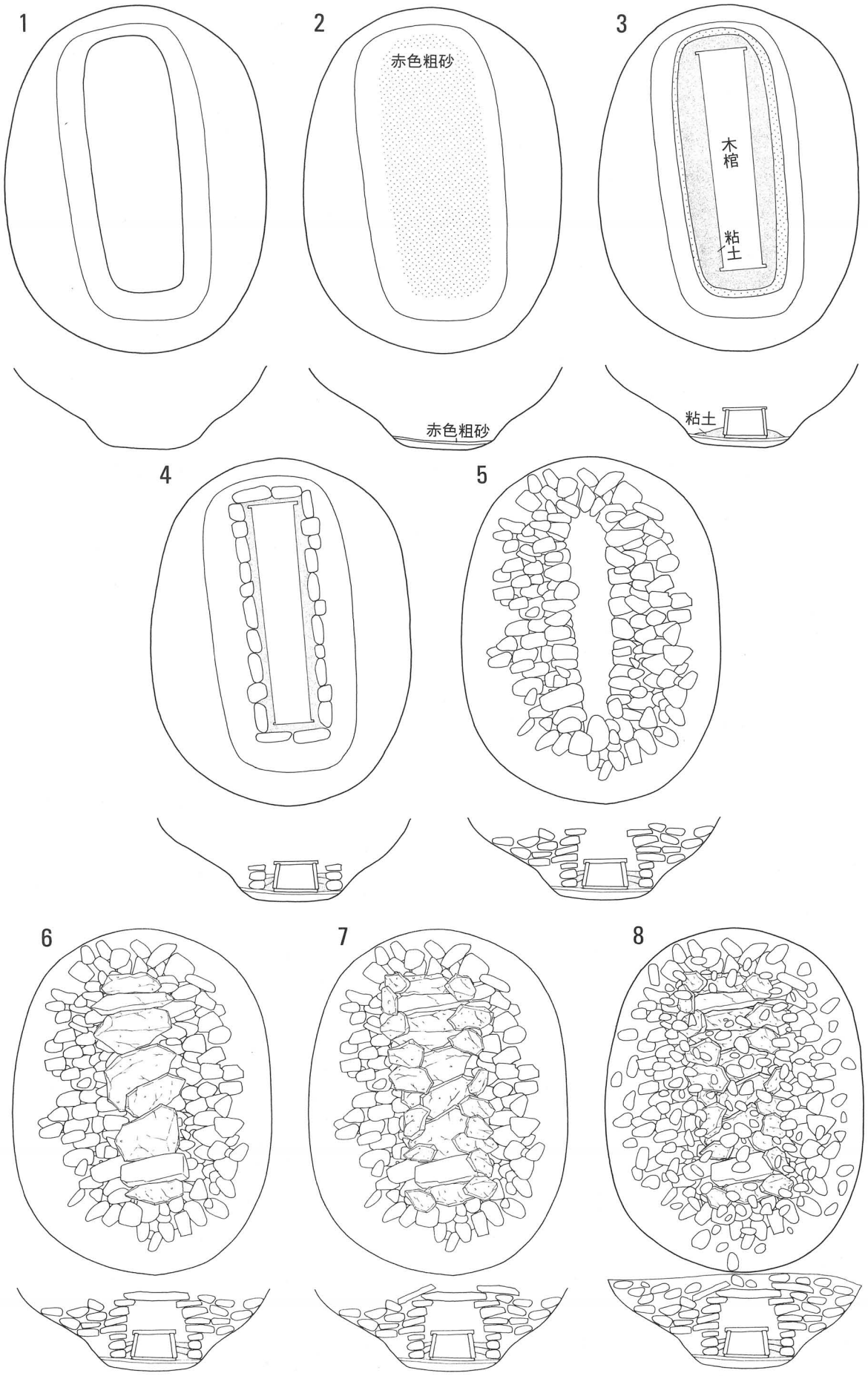
本石槨は、中心石槨の北側小口の直上に、中心石槨主軸に直交する東西方向を主軸として構築されていた。しかし、墓坑は中心石槨の蓋石被覆土の一部を削るのみで石材を動かしておらず、その構築に際して意識的に中心石槨の破壊を避けたものと思われる。

第2石槨の特色について以下のようにまとめる。

墓坑においては、明らかに北側の立ち上がりが緩い。また、部分的に確認された墓坑立ち上がりの傾斜と壁体の積み上げ方の横口積みから小口積みへの変換との対応から、北側の立ち上がりには緩い段の存在が想定された。墓坑の立ち上がりにみられる段は、中心石槨でも確認されており、石槨の構築や木棺の搬入に便宜をはかるために設けられた可能性が考えられる。

本石槨は、中心石槨と同様に一部側壁の石材の突出が確認された。しかし、棺痕跡から窺う限りでは直接木棺に接することはなさそうである。また、棺座等の施設をもたず、代わりに木棺設置後に棺と壁体の間を粘土で充填する特異な構造が明らかとなった。

使用された棺は、小口板が棺幅より長い組合せ式の箱形木棺と想定される。長さ2.9m、幅0.63～0.53m。木棺の高さは石槨の石積みの変換点である三、四段目までの可能性を考えると40cm前後となる。



第26図　第2石槨構築模式図

構築過程を復元する限り、小型の石槨でやや特異な構造をもつものの、木棺を設置してから石槨壁体を構築する竪穴式石槨の基本的な工法を踏襲している。

人骨は確認されなかったが、棺痕跡の幅が東側が広いこと、石槨床面のレヴェルが東側が高かったこと、剣の切っ先の方向と鏡の副葬状況から東頭位で埋葬されたものと推測される。　　（水野敏典）

Ⅲ．箱形石棺

1）第1箱形石棺（第17・27図）

本石棺は、後円部の墳頂平坦面の北側、第2石槨蓋石の北側に隣接し、主軸を東西にもつ。

第2石槨の範囲を確認するために掘り下げていく途中で、石槨の石材とともに確認されたため、調査過程においては第2石槨の一部とも考えられたが、その後、独立した埋葬主体部であることが確認された。遺存状況は良好で、目立った石材の移動もなく、盗掘は受けていない。

墓坑は、第2石槨の墓坑内の北側に、第2石槨の一部を壊すように掘り込まれている（第17図）。検出面で長軸が2.4m、短軸が約1mの細長い楕円形である。墓坑底は、第2石槨の石材を部分的に引き抜いて掘り込んでいるため凸凹が著しいが、小口板を埋め込んでいる部分が最も深く検出面から約50cmに達する。

本石棺には、六枚の蓋石が用いられていた。すべて「尼子石」で、その大きさは長さ50～60cm、幅30～50cm、厚さ6～10cmの不正形な板状で長軸を両側壁に重ねている。合わせ口はわずかに割揃えている。蓋石は構築時の状況を良好に残しており、基本的に西側の蓋石が下であり逆はない。判明する限り西側から順に置かれおり、蓋石の隙間には大小の円礫及び角礫を詰めている。石材の間に目張り粘土もなく特別な被覆粘土層も確認されなかった。

棺身は、長側板や小口板のいずれも外方に突き出ない箱形であり、敷石を用いていない。棺身の石材は、西側小口は板石で、東側小口は円礫で片側が約10cm内側に入った形で認められた。棺北側の一つが角礫と東側小口以外は全てが「尼子石」である。側壁は板状で最大で長さ84cm、幅約15cmで、最小の石で長さ33cm、厚さ8cmと大小の差が大きい。北側石4枚、南側石3枚を数え全体の造りはやや粗く中央部で石の厚みだけ食い違っており、西側が東側よりも5cm高い。

棺の内法は、長さは175cm、幅は西側小口付近で約35cm、中央で35cm、東側小口付近で30cm、棺内の深さは東西両小口で19cmである。

棺床には石槨に見られたような特別な粘土や砂も使用されていない。ただし、中央部と東側小口付近では灰色の粘性の強い土の薄い堆積を認めた、この土は棺床を二分するものである。東側小口に接して灰色の粘性の強い薄い土を認めた。

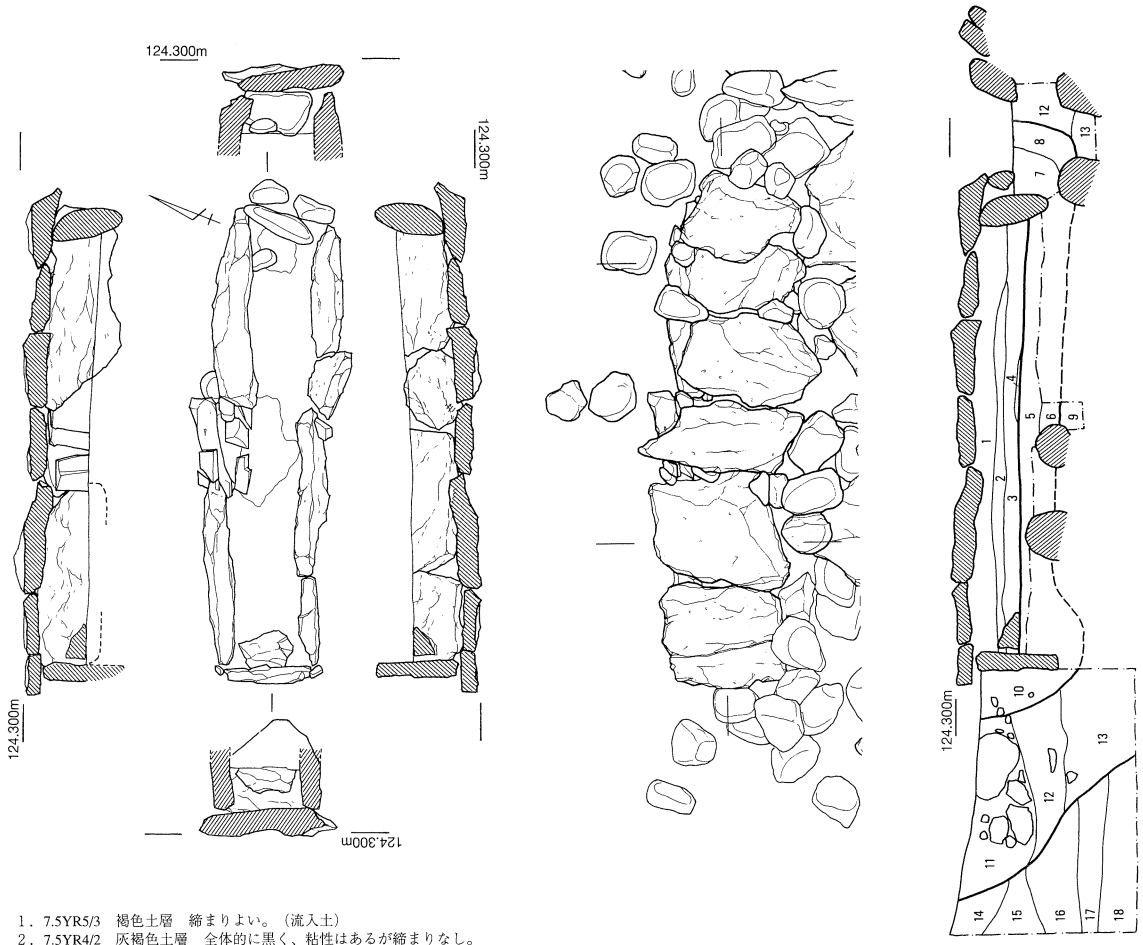
棺内から人骨や副葬品は一切出土しなかったが、西側小口に枕石と考えられる幅25cm、厚さ8cmほどの角礫が確認され、東側小口付近の隅でも幅10cm、厚さ6cmほどの円礫が確認された。これらの二つの石は蓋石の石材の落下とは考えにくい。棺中央部北側壁の割れた石材が一部散乱している。

本石棺は先に構築された中心石槨と第2石槨を十分に意識し、なおかつ墳頂平坦面に埋葬場所をもとめて第2石槨を破壊しており、多くは第2石槨の墓坑を掘り込む際に抜き取った石材を二次的に使用したものと考えられる。

西部分は、北側壁と南側壁がほぼ平行し、西端の枕石とともに同時構築とみて良い。それに対し、東部分では北側壁が10数センチほど内側に据えられており、西半分の北側壁とは明らかなずれを見せる。

このことは、当初西部分の範囲ないしそれよりやや東に張り出した箱形石棺が構築され、その後その箱形石棺の東の小口石が取り外され、東側に延長してやや幅が狭い部分が継ぎ足され新たな埋葬箇所が設置されたものであることを示している。

なぜそのようなことが起こったかを推察するに、初め西側に幼児または小児と推定される人物が葬られ、次いでその人物に親しい血縁関係にある人物がまもなく死亡したために、初めの死亡者と同一の埋葬空間を必要としたからであろう。後からの埋葬者は、新たな埋葬空間の幅狭さから察するに、最初の埋葬者よりもより幼少の人物であったと推定される。（渡辺健治）



1．7.5YR5/3　褐色土層　締まりよい。（流入土）
2．7.5YR4/2　灰褐色土層　全体的に黒く、粘性はあるが締まりなし。
3．7.5YR4/3　褐色土層　白色の粘土ブロックを含む。粘性なし。
4．10YR4/4　褐色土層　灰色粘土のブロック、小礫を含む。締まりあり。
5．7.5YR1/4　褐色土層　3cm前後の小石と白色、黄色粒を多く含む。締まりあり。
6．10YR4/4　褐色土層　白色、黄色粒を多く含む。締まりあり。
7．10RY4/4　褐色土層　3cm前後の小石と白色、黄色粒を多く含む。締まりあり。
8．10YR4/4　暗褐色土層　白色、黄色粒を含む。ややもろい。
9．10YR4/4　褐色土層　粘土粒、白色、黄色粒を多く含む。
10．7.5YR3/4　暗褐色土層　黒色土粒を含む。
11．7.5YR5/4　明褐色土層　10cm以上の灰色粘土ﾌﾞﾛｯｸと礫、白色粒を含む。締まりあり。
12．10YR4/4　褐色土層　粘土微粒、白色粒を多く含む。
13．7.5YR3/4　暗褐色土層　黒色土粒を含む。締まりあり。
14．10YR5/4　明褐色土層　白色粒、灰色粘土粒を多く含む。硬い。
15．10YR3/1　黒褐色土層　3cm前後の褐色土粒を含む。粘性強い。
16．10YR4/3　褐色土層　1cm程の褐色土粒を主体として粘土粒、黒色土粒を含む。
17．10YR2/1　黒色土層　黒色土と褐色土の混合土。
18．10YR3/1　黒褐色土層　褐色土の微粒を含む。締まり弱く柔らかい。

0　1m

第27図　第1箱形石棺 平・断・立面図（1/30）

2）第2箱形石棺（第28図）

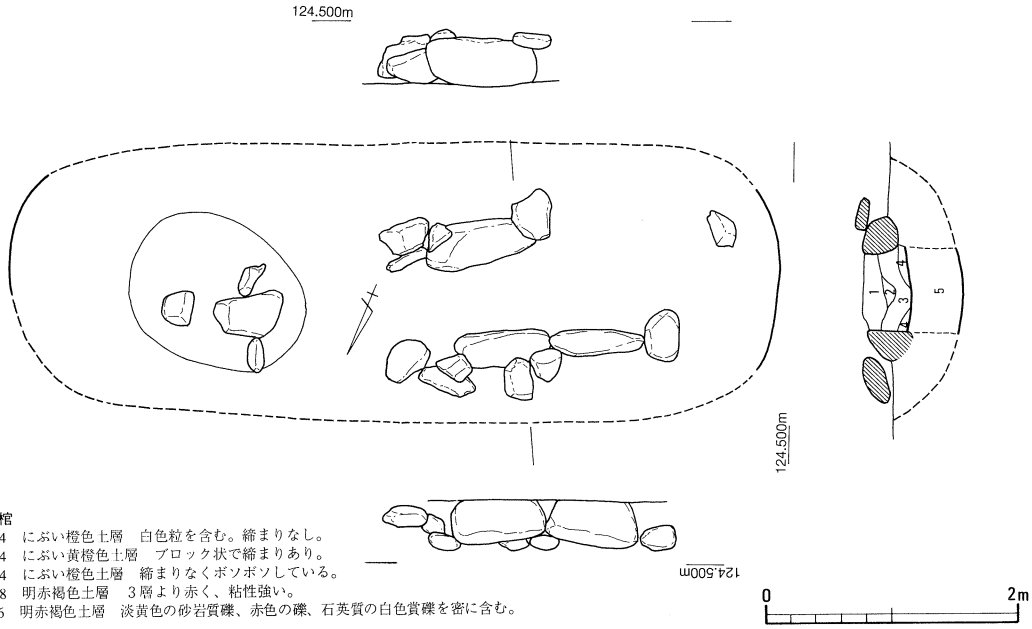
本石棺は、後円部の墳頂平坦面の中心からやや東に位置し、主軸を東西にもつ。中心石槨の調査を進める中で、表土の直下より確認した。遺存状況はきわめて悪く、掘り方の一部と、石棺側壁の石組みの一部を確認できただけである。

この石棺は、底石をもたず、30cm程の扁平な円礫を立てて側壁とし、10cm程の円礫を組合せてその隙間を埋めていた。調査時には、北側側壁で約1m、南側側壁の0.6mを残すのみであった。残存する

棺の高さは、棺床面から25cm程で第１箱形石棺の状況とほぼ同様である。小口の構造や蓋石の有無は不明である。石棺石材は、基本的に円礫であり、第１箱形石棺が「尼子石」を用いていたのと異なる。なお、周辺表土中から多くの人頭大の円礫が見つかっており、石棺の部材であったものとみられる。

掘り方は、中心石槨の墓坑の上面を削って掘り込まれており、多くは攪乱を受けているが、復元すると東西約３ｍ、南北約1.1ｍの長楕円形をなすと考えられる。石棺の内法は、幅が30～40cm程で石棺の長さは不明である。しかし、掘り方の東西主軸が２ｍに及ぶことから、幅がやや狭いものの成人の伸展葬が可能な石棺であったと考えた方が良いであろう。

埋葬頭位は、棺床端の高低や棺の平面形も確認できず、東西いずれかを決める材料に欠けるため、不明である。人骨、副葬品は確認されなかった。　（水野敏典）



第２箱式石棺
1．5YR6/4　にぶい橙色土層　白色粒を含む。締まりなし。
2．10YR7/4　にぶい黄橙色土層　ブロック状で締まりあり。
3．5YR6/4　にぶい橙色土層　締まりなくボソボソしている。
4．5YR5/8　明赤褐色土層　3層より赤く、粘性強い。
5．5YR5/6　明赤褐色土層　淡黄色の砂岩質礫、赤色の礫、石英質の白色賞礫を密に含む。

第28図　第２箱形石棺 平・断・立面図（1/30）

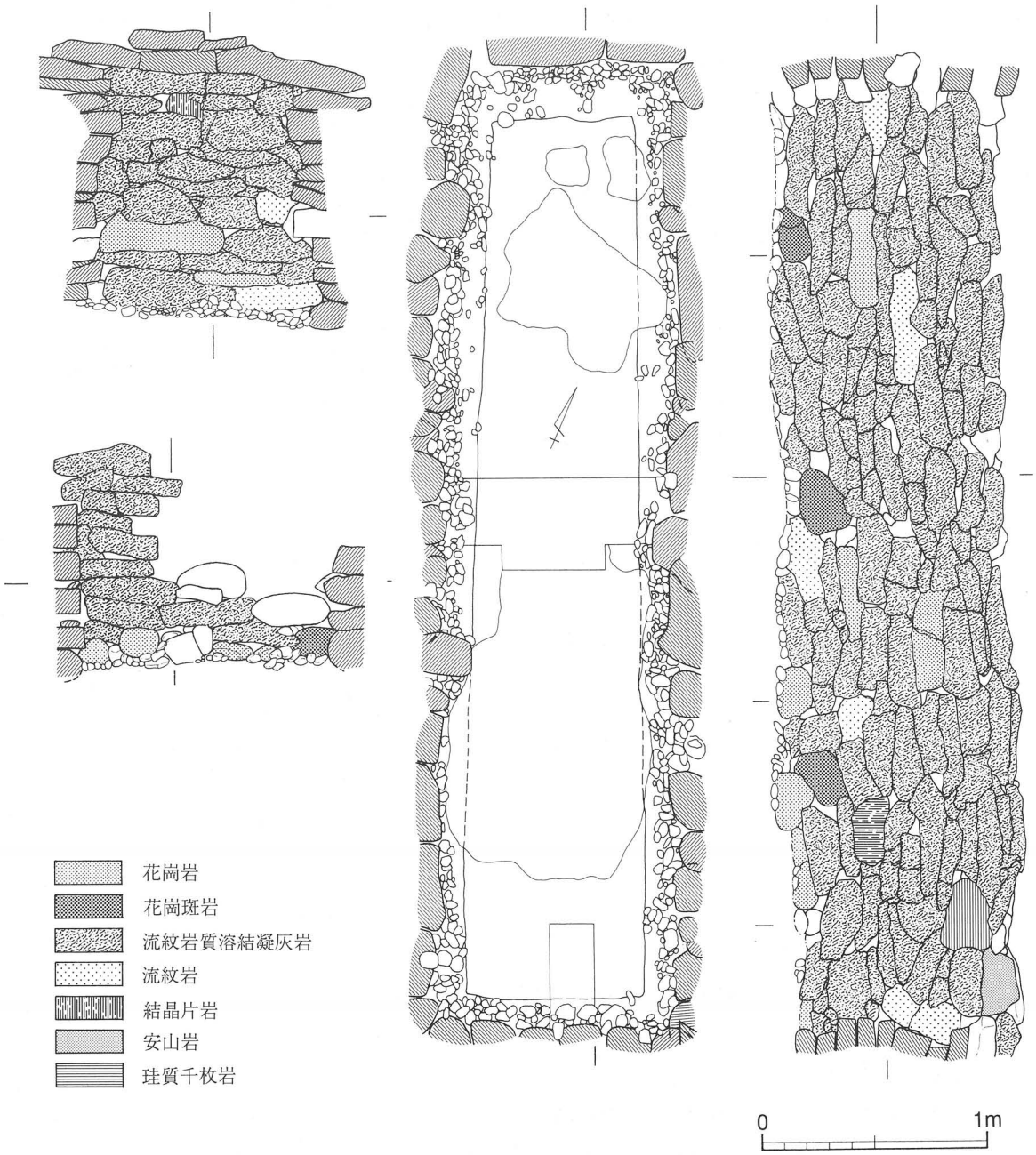
Ⅳ．石槨に使用された石材（第29～31図、第１表）

中心石槨と第２石槨の使用石材について観察調査を実施した。観察は、発掘調査がほぼ終了した時点で行ったため、たとえば第２石槨南側壁面上部のように崩落の危険があって既に取り除いていた部分については観察を行えなかった。観察箇所は、中心石槨では東側壁面と南北両小口壁面の計三面、第２石槨では四面について実施し、石槨の控積み部分や蓋石等については一点ずつの観察と記録は行っていない。

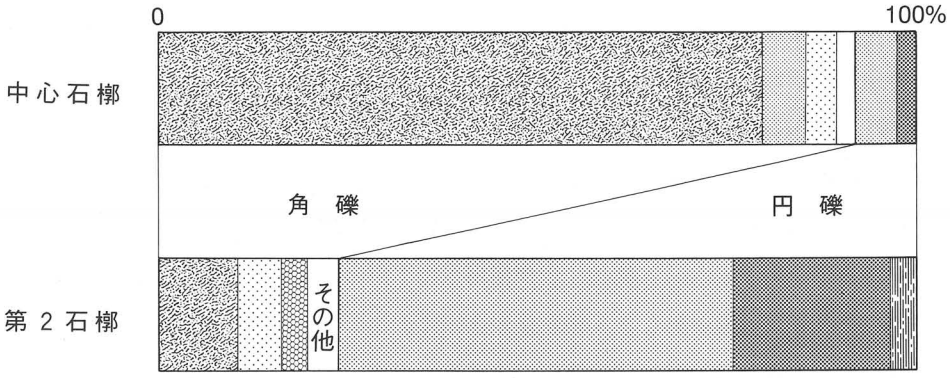
石材の種別については、観察時に代表的なサンプルを採取し、調査終了後に県立江見商業高等学校横山義人氏に鑑定していただいた。

中心石槨は、石材の観察を行った合計161点の使用石材のうち、円礫は7.7％の13点で、残りの92.3％は板状の角礫である。円礫の構成は、花崗斑岩と花崗岩からなり、石槨基底部あるいは基底部付近に多く使われている。角礫の大部分(86.5％)は流紋岩質溶結凝灰岩を使用する。残りの角礫には花崗岩、流紋岩、珪質千枚岩、安山岩、結晶片岩が使用されている。板状角礫の花崗岩は、すべて縞状構造をもち、円礫のそれとは種類が異なる。採取地の違いによるものとみられる。

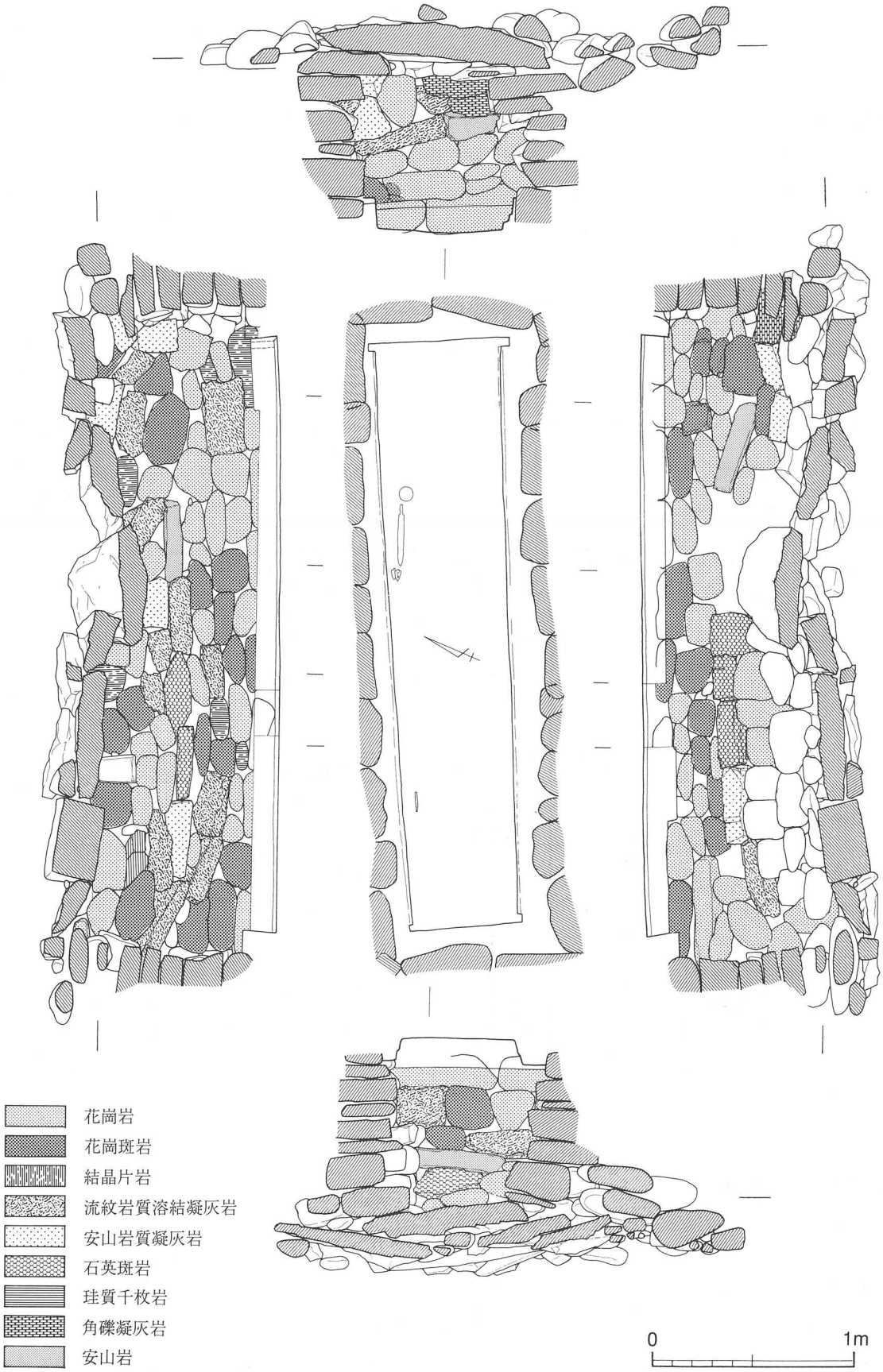
第２石槨は、中心石槨とは対照的に円礫が76.3％を占めている。円礫を石材別に見れば花崗岩が最も多く、ついで花崗斑岩が使用され、これに僅かな量の結晶片岩が加わる。残りの23.7％に相当する41



第29図　中心石槨の石材



第30図　石槨使用石材の割合



第31図　第2石槨の石材

点の角礫には、中心石槨と同様に流紋岩質溶結凝灰岩が多く利用されているものの安山岩質凝灰岩や石英斑岩など他の石材の使用も比較的多く、雑多な印象を受ける。

石材の分類で円礫としたのは、水流による転磨を受けた円礫がほとんどである。円礫は、大きさがおおむね人頭大のものがほとんどで、同類の円礫は古墳北側の加茂川、西側及び南側の吉井川の河原で現在も広範囲に見ることができ、数地点で観察したところによれば石材種別も古墳使用のものとほぼ一致する。地点の特定はできないが、これらの河原から採取されたものとみて間違いない。

角礫に分類したもののうち、流紋岩質溶結凝灰岩を除く石材にはしばしば亜角礫が存在する。亜角礫には、安山岩や結晶片岩が目立つ。墳端周辺に穿たれた用水溝壁面の観察によれば、地山自然層中にこうした礫の存在が認められるので、墳丘築造に伴う周辺の削平や掘削時に掘り出されたものを石材の補充にしたことが考えられる。

角礫の大半を占める流紋岩質溶結凝灰岩を産出するのは、日上天王山古墳の周辺では、吉井川を隔てた西側対岸の神奈備山から笹山にかけての一帯である。神奈備山の南側の谷が尼子谷と呼ばれることから、地元では尼子石(あまこいし)の名称で呼んでいる。吉井川の東岸側の古墳近辺にはこの石材は産出せず、この石材の確保にあたっては、吉井川を越えて採取に赴いた可能性が高い。尼子石は全体に風化が進んでいて軟質である。

(安川豊史)

中心石槨

種別	部位	東壁面(側壁)		北壁面(小口)		南壁面(小口)		計	
円礫	花崗岩	5	8			4	5	9	13
	花崗斑岩	3				1		4	
角礫	流紋岩質溶結凝灰岩	98	114	23	28	13		134	155
	流紋岩	5		2				7	
	花崗岩	8		2				10	
	結晶片岩	1		1				2	
	安山岩	1						1	
	珪質千枚岩	1						1	
	計	122		28		18		168	

単位：個数

第2石槨

種別	部位	北壁面(側壁)		南壁面(側壁)		西壁面(小口)		東壁面(小口)		計	
円礫	花崗岩	35	58	33	47	11	13	11	14	90	132
	花崗斑岩	17		14		2		3		36	
	結晶片岩	6								6	
角礫	流紋岩質溶結凝灰岩	12	21	1	10	2	4	3	6	18	41
	安山岩質凝灰岩	5		3				2		10	
	石英斑岩	2		3		1				6	
	珪質千枚岩	1								1	
	角礫凝灰岩			2						2	
	安山岩	1		1		1		1		4	
	計	79		57		17		20		173	

第1表　石槨使用石材の点数

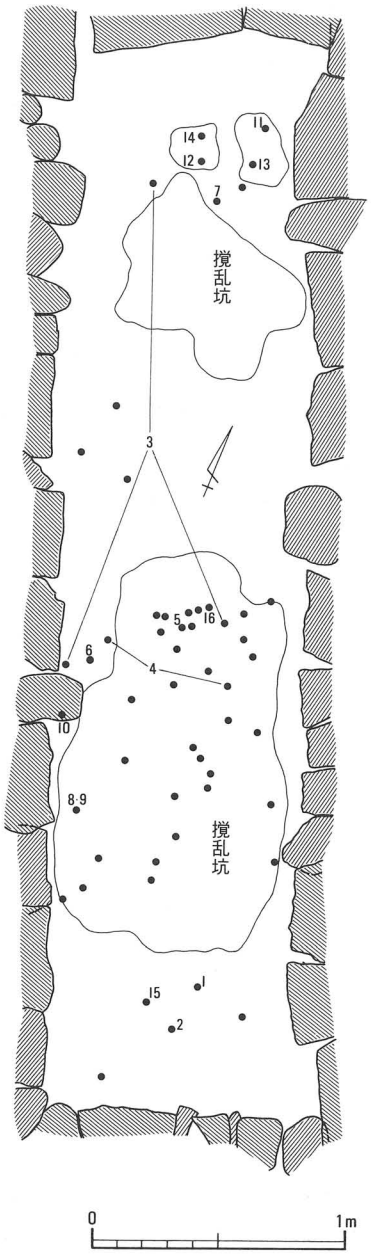
第3節　出土遺物

Ⅰ．中心石槨の副葬品

1）副葬品の内訳と出土状況（第32・33図）

中心石槨から出土した遺物は、青銅小片3点と鉄器類54点である。青銅小片は、排土をふるいにかけた段階で発見された。鉄器類は、完形の小型鉄斧1の他は、鉄剣、鉄鏃、刀子、鉋などの残片である。これらはすべて盗掘時の流入土や粘土塊、円礫に混じって出土しており、原位置を保っていたも

のはなかった(第32図)。特に半数以上が南半部分の大きな攪乱坑の中から出土した。鉄器類のうち図示することができたのは、直刀2(第33図1・2)、鉄鏃6(同3～8)、鉋5(同10・12～14)、刀子1(同11)、鉄斧1(同15)、棒状鉄器1(同9)、板状鉄器1(同16)である。このうち鉄鏃3は、かなり離れて出土した三片が接合したものである。　(倉林眞砂斗)



第32図　中心石槨遺物分布図(1/30)

2)直刀(第33図－1・2)

1、2は直刀の刃部片である。1は、切っ先付近の破片で、刃部先端が欠損しており、現存長10.3cm、平棟で刃部幅は2.3cm、現重量は4.9g。多量の布が幾重にも付着している。鞘材の木質は確認できない。2は、刃部片で残存長2.7cm、刃部幅2.8cm、重量が7g。平棟で1と同様の平絹とみられる布が大量に付着している。1と2は同一個体の可能性がある。　(水野敏典)

3)鉄鏃(第33図－3～8)

3～8は、柳葉式の同じ型式の鉄鏃とみられる。3以外は著しく欠損しており、全体の形状を知ることができない。3を中心にみていくと、中茎が一部欠損しているが、現状の全長は、10.2cmで、刃部幅は2.3cm、厚さは0.3cmで重量は14.5gである。鏃身部の断面は扁平な両丸造りで鎬はなく、中茎の断面は方形である。

平面形は、刃部にふくらみをもち、わずかにくびれて、鏃身部から中茎に向かって棘状の屈曲をみせる。刃部は棘状の屈曲まで確認できる。矢柄は、刃部先端から8.5cmのところから装着されており、中茎固定の樹皮の巻き付けは左上がりに巻かれ、一部に漆が付着している。3には平絹と見られる布とともに木質が付着していた。その木質が棺材なのか、盛矢具の一部か、ほかの副葬品に伴うのか不明である。

4は、残存長6.8cm、刃部幅2.2cm、厚さ0.3cmで、重量は11gである。ほぼ3と同じ形状をもつ。3と同様の布とともに黒漆の小片が付着していた。

5は、縁がほとんど欠損しており、現存長が6.1cm、刃部幅が2.3cm、厚さが0.3cm、重量が8.5g。鏃身部断面形は、3と同様に扁平な両丸造りである。

6は、鏃身部の先端である。現存長2.8cm、重量3.5gである。

7は、鏃身部片で、先端と関部を欠損している。現存長6.3m、刃部幅2.3cm、厚さ0.25cm、重量10.5gである。

8は、鏃身部片とみられるが、小片で詳しいことは不明。

3や4などをみる限り、造りは丁寧で形状は均一である。　(水野敏典)

4）鉈（第33図－10・12～14）

10は鉈の刃部、12、13、14は鉈等の工具の柄とみられる。現存長4.3cm、刃部最大幅1.5cm、刃部断面は三角形をなし片面に弱い鎬をもつ。刃部は刃部最大幅付近までで、それ以下は扁平な方形で、幅は1.3cm以下、厚さ0.4cmほどである。重量は9ｇである。

12は、刃部と柄の端部が欠損している。現存長8.4cm、重量は12ｇ。鉄器の部分は幅0.8cm、厚さ0.4cmの断面は扁平な方形である。鉄器の周囲には木質が付着し、そのまわりに幅3mmほどの布状の紐が図示した状態で上から下に、左上がりに巻き付けてある。木質及び布は片面しか残存していない。

13も刃部と柄の端部が欠損している。現存長7.7cm、重量5ｇ。鉄器の部分は幅0.5cm、厚さ0.2cmで断面は扁平な方形である。鉄器の周囲には木質が付着している。一部に糸が密に巻き付けてある。

14も刃部と柄の端部が欠損している。現存長は7.2cm、重量は11ｇ。鉄器の部分は幅0.9cm、厚さ0.5cmの断面は扁平な方形である。鉄器の周囲には木質が付着している。（水野敏典）

5）刀子（第33図－11）

11は刀子の刃部で、切っ先と関・中茎部分を欠損している。現存長は5.6cm、刃部幅は1.4cm。重量は7.5ｇである。平棟で、刃部の先に木質が付着している。（水野敏典）

6）鉄斧（第33図－15）

15は、中心石槨から出土した鉄斧である。石槨南側の床面上にあった撹乱土中から出土したもので、原位置を保つものではない。無肩で柄を差し込む袋部をもつ、いわゆる有袋鉄斧である。

全長7.3cm、刃部最大幅3.5cm、厚さ（最大）0.6cm、身部最小幅2.8cm、袋部内径2.6×1.5cm、袋部の厚さ0.2cm）を測り、重量73.5ｇを量る。形態的には、古瀬清秀の分類におけるＢ２類に属するものである（古瀬　1991）。

袋部の折り合わせ部分は、ほとんど隙間をもっておらず、また身の断面形も左右対称で、非常に丁寧なつくりの鉄斧である。身部の側縁は緩やかに内湾しており、刃部は緩やかに外湾している。刃部は両刃である。袋部には木質が残存しており、また袋部の合わせ部の背面側には布が残存している。材質は不明であるが、すべて経糸、緯糸を交互に潜らせていく平織の布で、１cmあたり12～14本程度の繊維を観察することができる。図の右上部分では、布目の方向から３枚の布が重なって付着していると考えられる。図右下のものについては依存状況が悪く、詳細はよくわからない。（増田直人）

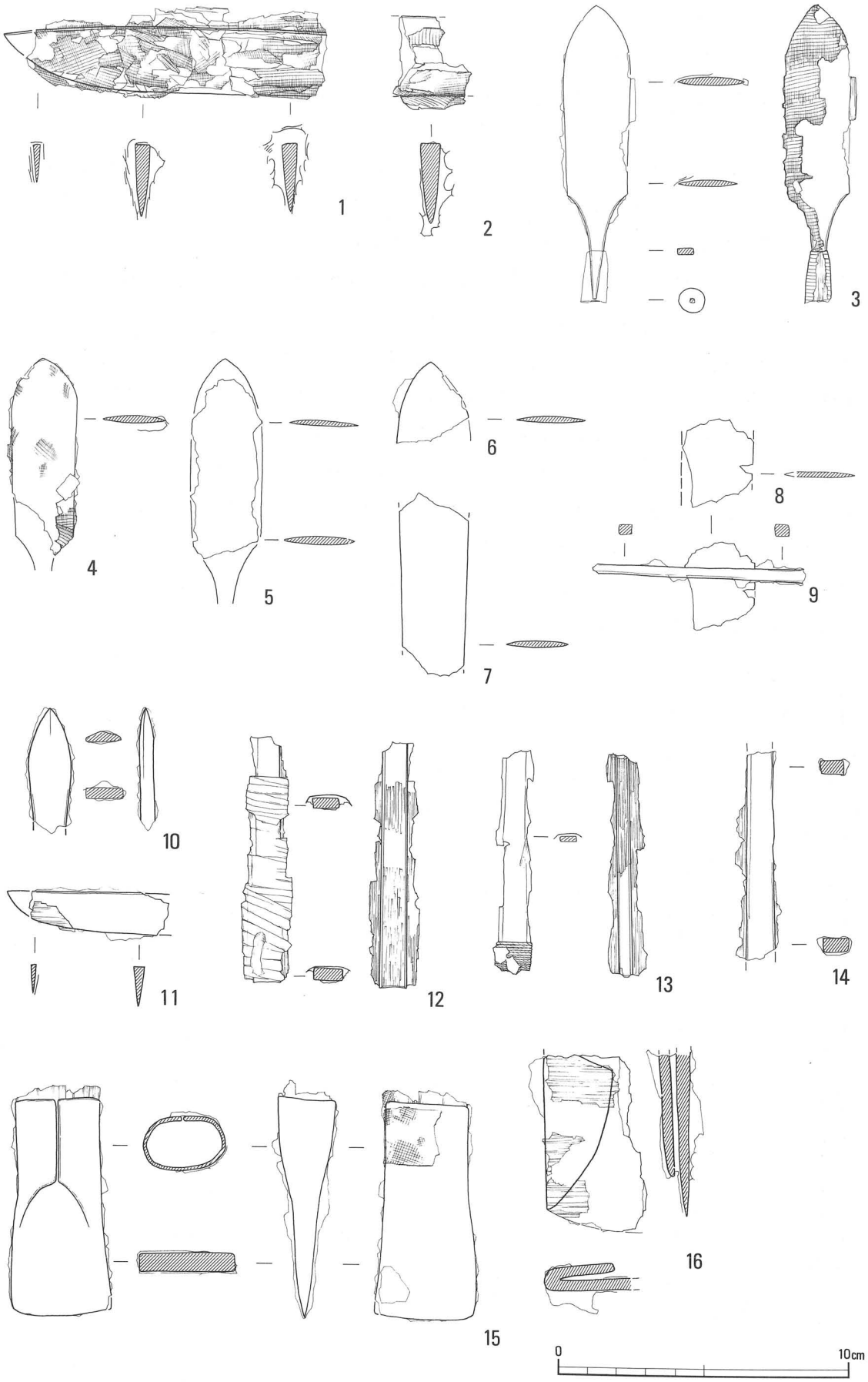
7）その他の鉄器（第33図－９・16）

９は断面方形の棒状鉄器である。現存長7.3cm、幅0.5cm、厚さ0.3cm。両端を欠損しており形状は不明である。鉄鏃片とみられる８と付着している。総重量６ｇ。

16は折り返された鉄板であり、一部に刃部らしき部分が伺える。長さ6cm、重量は35ｇ。方形の鋤先の可能性がある。折り返された鉄の外面に木質が付着している。（水野敏典）

8）青銅片

一片１cm四方ほどで、非常に薄い薄片である。鉄錆びと異なる金属片として取り上げた。３点出土しているが、性格は不明である。各0.5ｇ以下。（水野敏典）



第33図　中心石槨出土遺物（1/2）

Ⅱ．第２石槨の副葬品

１）副葬品の内訳と出土状況（第34図）

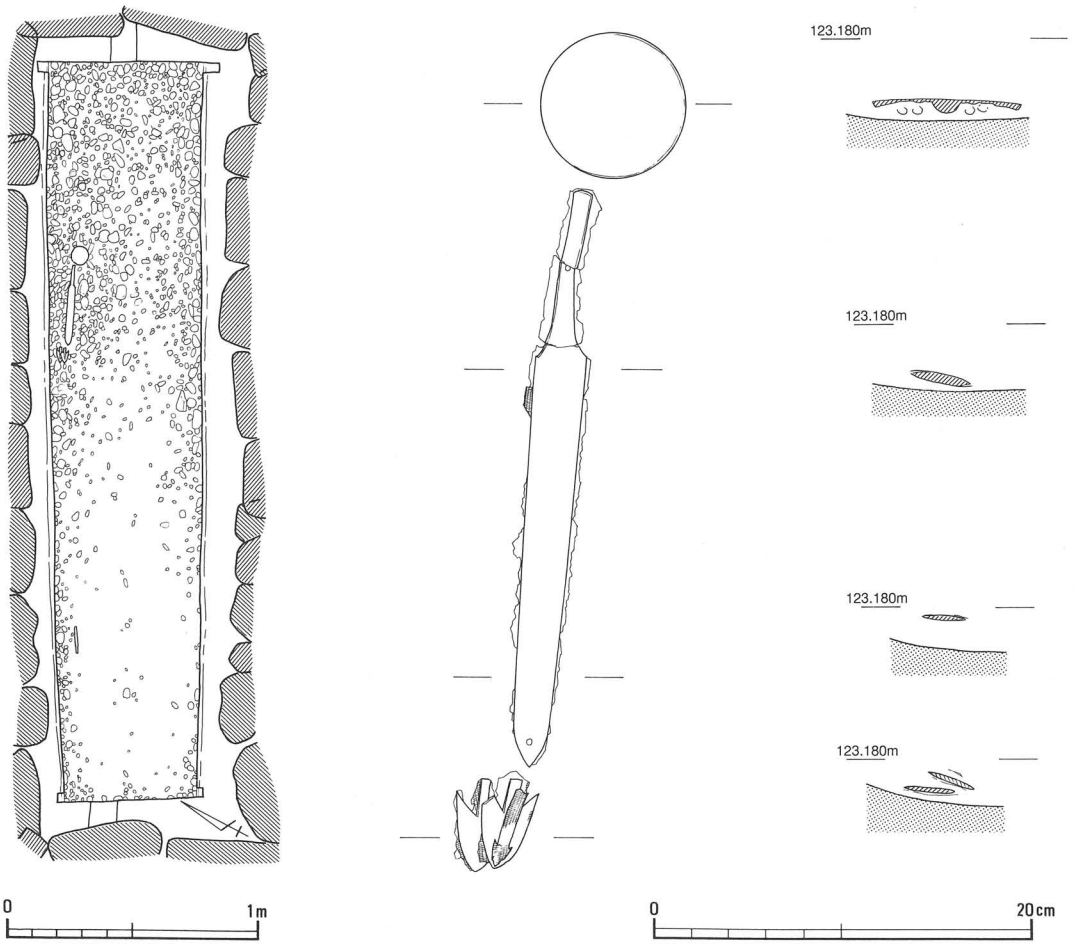
第２石槨は、盗掘を受けておらず、木棺の腐朽や石槨の崩落に伴う移動以外は、副葬時の位置関係を良く残していた。

副葬品は、東側から銅鏡１面、鉄剣１点、鉄鏃２点、鉄鑿１点、不明鉄器１点であり、他に各鉄器に付着した布の痕跡がある。蓋石４と南側壁中央の崩落による石材が、直接鉄剣の上に載った状況で確認された。残りの副葬品も、木棺の接地面である赤色の砂層に直に接するように、崩落した石材の間から出土した。基本的に副葬品は棺痕跡の北側に沿って確認され、被葬者が東頭位で仰臥伸展の姿勢をとったと仮定すれば、体側の右手側に副葬品が並べられたことになる。

東側小口からみていくと、小口より約72cmの所で銅鏡が鏡面を上に向けて出土した。そのすぐ西側に鉄剣が切っ先を西に向けて出土し、さらに西側に鉄鏃がまとまって同じく刃部先端を西側に向けた状態で確認された。銅鏡には布や木質が付着しておらず、木箱等の容器に納められた痕跡はみられなかった。銅鏡の直下からは矢柄とみられる直径７～８mmの植物繊維の痕跡が確認された。

鉄剣は表裏とも布が何重にも直接刃部に付着していた。木質の鞘材の痕跡は認められないことから、抜き身を直接布でくるんで副葬したものとみられる。

鉄鏃は棒状の不明鉄器とともに３点が束になって、先の鉄剣と同様に布にくるまれていた。付近に漆や木質の痕跡も確認されず、点数も少ないことから靫などの盛矢具に納められていたのではなく、矢を



第34図　第２石槨遺物出土状況（1/30）

直接布でくるんで副葬したと判断される。ただし、銅鏡の下から直接矢柄の痕跡が確認されており、布の痕跡が確認されないことから、矢の鏃身部分周辺のみを布で包んだ可能性がある。なお、矢柄の痕跡は、鉄剣の下面にも圧痕として布に残っていることから、木棺内への副葬の順序は矢が銅鏡と鉄剣に先行していたことがわかる。

これらの副葬品から少し離れて、西側小口より60cmの所に刃先を東に向けて鉄鑿が出土した。これにも一部布が付着していた。

先にふれたように、棺幅、棺床の高さ、そして鉄剣の切っ先が通常足先を向くことを考慮すれば、東頭位の可能性が強い。これに従えば、銅鏡は頭もしくは右肩の脇に、鉄剣と鉄鏃は右腕の脇に、鉄鑿は足元の右側に副葬されたとみられる。

なお、十分な精査にもかかわらず、玉類は1点も出土しなかったことを付け加えておきたい。

（水野敏典）

2）銅鏡（第35図－1）

鏡径7.9cm、重量46.5gの銅鏡である。鋳上がりは良好で、全体に薄く、場所によっては0.5mm以下となっている。鏡縁部の一部は錆びて崩れかけており、遺存状況は良くない。

型式は樋口分類での「捩文鏡」に相当する。紐は、鏡背面から高さ6 mm、直径1.55cmの半球状である。紐孔は、鏡背面に接した幅3.8mm、高さ2.6mm弱の明瞭な四角形でやや磨滅している。

その周囲を2条の圏線がめぐり、内区には乳はなく、圏線に挟まれた幅5mmの半肉彫りの隆帯の上に、長さ6 mm前後の五、六本の隆線よりなる捩文七つを、二本の隆線と三ないし四つの珠文の列が区画している。ただし、珠文の列は六つで、その割り付けは不均一である。半肉彫りの捩文は2本の隆線と珠文の列に絞られるようにくびれている。

外区は四ないし五本の隆線を単位とした複合鋸歯文である。

鏡縁部は幅約1.3cmの平縁でその幅は端にいくにつれて厚さを増し、最大で厚さは3 mmである。鏡面は弱い凸形で、鏡縁部で2 mmほど反っている。

全体が錆びており、表面の観察は困難であるが、図示した下方の紐孔とその前の圏線の鋳上がりがやや悪いことから、下方が湯口の可能性が高い。

紐孔には紐等の痕跡はなく、布等の付着も認められなかった。（水野敏典）

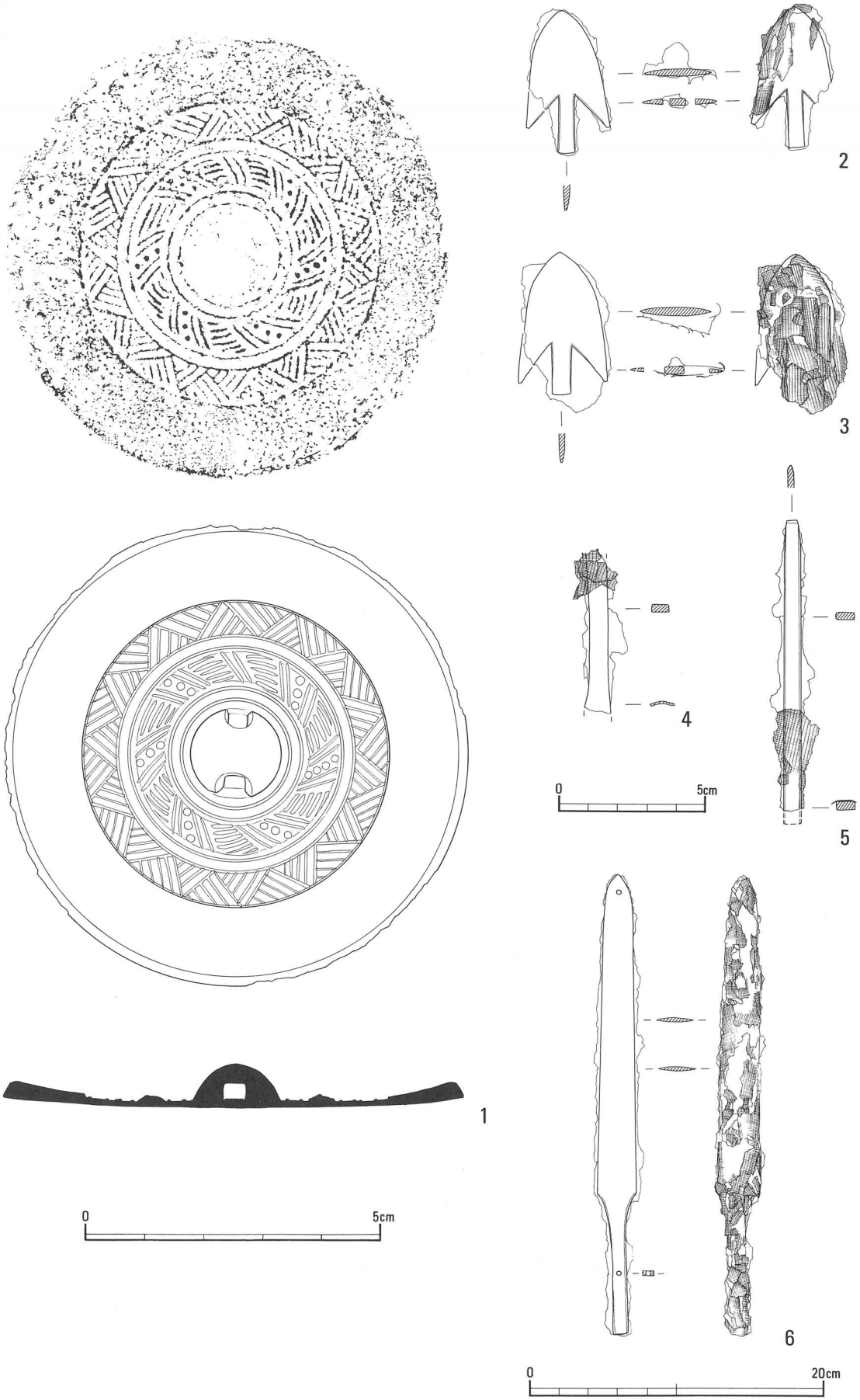
3）鉄鏃（第35図－2・3）

2、3は同型式の三角形の鏃身をもつ、短茎の鉄鏃である。

2の鏃身長は4.9cm、復元幅が2.8cm、鏃身厚が2.5mm、重量は現状で9.9 gである。3の鏃身長は4.9cm、復元幅が3.0cm、鏃身厚が3.0mm、重量は現状で12.5 gである。

刃部断面は両丸造りで逆刺の先端まで刃部をもつ。いずれも片方の逆刺が欠損しているが、逆刺の先端は鋭角的にならず、わずかに切り落としたように小さい面をもつ。短茎部は逆刺の先端より長く、2が2.0cm、3が1.8cmを測り、先端に向かうにつれて薄くなっている。全体として造りは丁寧で、形状は整っている。

出土時には、先端が尖る木質の根ばさみが付着していたが、遺存しなかった。平絹とみられる布が大量に付着している。（水野敏典）



第35図　第2石槨出土遺物

4）鉄鑿（第35－図5）

5は、鉄鑿である。柄の先端を欠損しており、残存長が9.9cm、幅が6 mm、厚みが2.5～3 mm、刃部先端の幅が4 mm、現重量が7.0 gである。

全体に細身で、柄の部分から刃部にかけて緩やかにその幅を減じ、関を持たない。刃部の断面形は片面の角度が急で、片面の角度が浅い鑿特有の刃部を持つ。

柄部分に木質の痕跡はなく、布が巻かれた痕跡もみられなかった。そのかわり、柄先端の付近に平絹とみられる布が掛けられるように付着していた。（水野敏典）

5）鉄剣（第35図－6）

6は、全長31.4cmで重量108.5 gの鉄剣である。刃部に明確な鎬をもたず断面はレンズ状である。関付近に刃部の最大幅をもつ。刃部最大幅は2.6cm。関は撫で関で、緩い曲線を描いて中茎に繋がる。中茎は関より測って9.5cmと長く、幅は0.9cm、厚さは0.4cmと棒状で、中茎尻はやや丸みをもつ。目釘孔は一つで直径は3 mm、金属製の目釘は確認できず、有機質の目釘を使用しているものとみられる。

木質等の鞘材の痕跡は確認されず、代わりに幾重にも布が巻き付けられている。この布は平絹とみられ鉄鏃に付着していたものと同質のものである。中茎については、布が付着していて木製の装具は確認されなかった。

X線写真撮影により、刃部先端付近に直径3 mmほどの目釘状の穿孔がなされていることが確認された。孔に目釘や紐等の痕跡はなく、用途等は不明である。（水野敏典）

6）その他（第35図－4）

4は、鉄鏃2、3、とともに出土したが、X線写真をとっても形状がわからず、不明品である。棒状で現状での長さ5.2cm、幅6.5～8mmで厚みは3.1～2mm、、重量は6.5gである。一部に鉄鏃と同様に布が付着している。

Ⅲ．東くびれ部出土の壺形土器及びその他の土師質土器（第36図）

今回の調査により、弥生土器ないしは土師器片が100片弱発見された。このうち、古墳に伴うとみてよいものは、東くびれ部で発見された二重口縁壺で、30片程が発見され、頸部以上が復元できた。この他、古墳に伴う可能性のあるものとしては、中心石槨及び第2石槨周囲で発見された10数片の土器片があるが、いずれも細片で、古墳との共伴関係は必ずしも明確でない。

その他50数片の土器は、墳丘盛土ないしは流土中から発見されたもので、その特徴の捉えられる断片から判断して、大半は弥生後期後半のものであろうとみられる。それらのうち以下の9点を図示した。

1は、東くびれ部出土の土師器で、口縁部及び頸部三分の二程度の破片が発見された。胴部破片も16片発見されているが、胴部形状は不明である。頸部以上の形態の特徴からいって、いわゆる茶臼山型の二重口縁壺とみてまちがいない。

外面は、赤味のある暗褐色、内面も暗褐色を呈する。胎土中には3 mm角程度までの砂粒を多く含む。内外面とも磨滅が激しく胎土中の砂粒が大きく浮きでている。大きく開く口縁部端は面をもちながらもほぼ丸く納められており、かえりの痕跡はない。胴部破片内面には、指頭による圧痕とみられる窪みを

とどめるものがあり、その部分はきわめて薄い。仕上げ調整は不明である。

2は、東西トレンチ出土の甕形土器口縁部片。全体に淡褐色で、一部暗褐色を呈する。内外面ともにヨコなで仕上げ。立ち上がり部上位に、平行沈線文をなで消したような条痕が残されている。

3は、墳頂部出土の甕形土器口縁部破片。内外面に丹彩が施され、なで仕上げされている。胴部内面は、ヘラ削りが加えられている。砂粒の多い胎土であるが、大粒のものはふくまれていない。断面屈曲部に押圧不良による空隙が存在し、粘土帯の接合方法が推測できる。

4は、中心石槨蓋石を覆っていた黒色土層中から発見された甕形土器口縁部小片で、中心石槨に伴う可能性が強い。小片のため、復元口径は必ずしも正確ではない。内外面とも器壁の荒れが激しく仕上げ調整は明確でないが、口縁部内外面はヨコなでにより仕上げられているらしい。胴部内面は、ヘラ削りが加わえられている。大粒のものはないが、砂の多い胎土である。内外面とも淡褐色を呈し、外面に煤の付着がある。

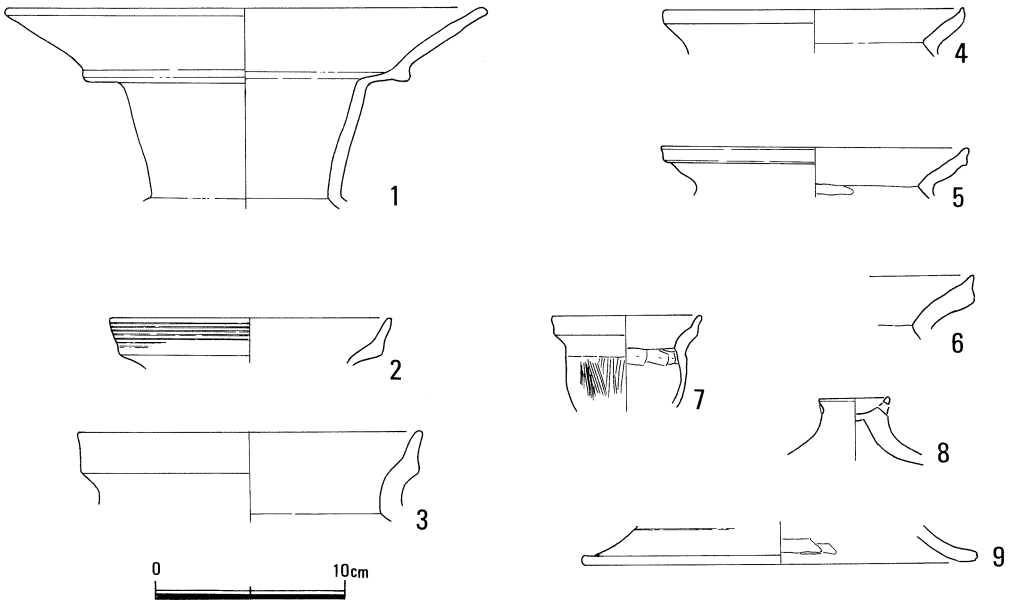
5は、墳頂部の4区、盛土中から発見された甕形土器の口縁部破片である。口縁部内外面は、丹彩されている。胴部内面には、ヨコ方向のヘラ削りが加えられている。内外面とも淡褐色を呈する。1～2mm角の砂粒を含むが、砂粒は多くない。

6は、東西トレンチから出土した甕形土器の口縁部小破片。明褐色の色調を呈する。内外面ヨコなでで仕上げられており、0.5mm角程度の白色粒を含む。

7は、墳頂部の2区、盛土中から出土した小型鉢形土器。外面は、淡褐色を呈する。口縁部内外面はヨコなで仕上げ、内面頸部以下はヘラ削りで仕上げられているが、砂粒の動きはほとんど観察されない。外面調整は不明であるが、煤の付着はない。

8は、第4トレンチ出土品で蓋形土器破片とみられるが、器種同定についてはやや疑問を残す。つまみ部端の左右対称位置に、それぞれ一孔の小さな孔があけられている。中央部に、粘土板を差し込み充填している。内外面はヨコなで仕上げ。外面に、丹彩痕跡をとどめる。大粒の砂粒はない。

9は、中心石槨直上の黒色土中から発見された高坏脚部端とみられる小片で、内面は端部までヘラ削



第36図　墳丘出土の土器（1/4）

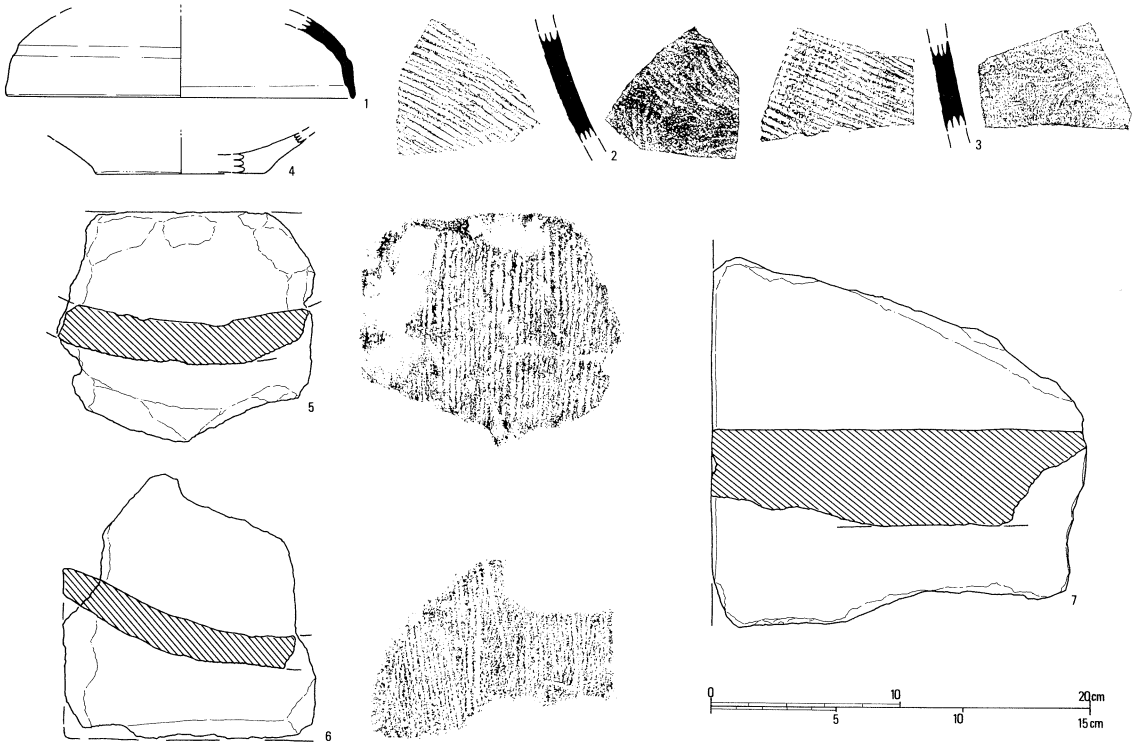
りの痕跡をとどめている。内外面とも、淡い赤褐色を呈するが、丹彩痕跡は確認できない。外面は、ヨコなで仕上げ。

各土器の推定所属時期は、1が布留式並行期の土師器とみられ、奈良県箸墓古墳出土品（中村・笠井1976）に類似するものがある。4も、同期のものである可能性は高い。2・3・5・6・7は、大田十二社遺跡3式土器（中山編　1981）に類似する。上東編年才ノ町Ⅰ式土器（柳瀬　1977）に並行する弥生後期後葉のものであろう。また、8についてもその可能性が強い。　（中山俊紀）

Ⅳ．その他の遺物（第37図）

遺構に伴わない遺物として、須恵器・土師器・勝間田焼・瓦・塼などが各トレンチから総数で30点程出土している。そのほとんどは細片であり、図示し得たものはごく僅かである。以下若干の説明を加える。

1は須恵器杯蓋である。墳頂部盗掘坑埋土内から出土している。外面は天井部との境に浅い沈線が巡り、後円部内面には浅い段を有する。青灰色で天井部には自然釉が付着している。2・3は須恵器甕の胴部破片であり、いずれも第4トレンチから出土している。2は外面平行タタキ、内面は同心円当て具痕の上をナデている。焼成は良好で青灰色を呈する。3は外面は格子目タタキ、内面はやはり同心円当て具痕の上をナデている。焼成は良好で青灰色を呈するものである。4の土師器杯の底部片は第1トレンチから出土したものだが表面の磨耗が激しく調整は不明である。やや赤味がかった橙色を呈しており、焼成はやや甘く軟質である。5・6は平瓦で、5は狭端面側の破片であり、凹面は磨滅により調整は不明だが凸面は平行縄目叩きである。胎土には2～4 mm大の白色砂粒を含み暗橙色を呈し、軟質の焼成である。6は平瓦広端部側の側面の破片である。この破片も磨耗が著しく、凹面の調整は不明であるが



第37図　その他の遺物（1～4：1/3、5～7：1/4）

凸面は5と同様に平行縄目叩きである。表面は黒灰色、内面は灰白色を呈する。7は塼である。厚さは49～50mmだが、全体の大きさは不明である。焼成は良好であり、やや赤みがかった橙色を呈する。

須恵器杯蓋についてはその形状からTK43～TK209に相当し、6世紀後半から末に位置付けられるが、隣接する日上畝山古墳群は6世紀前半代を中心とする群集墳であり年代的には矛盾するため、他所から持ち込まれたものと考えられる。4の土師器杯については、図示し得なかったが細片が出土している勝間田埦に伴うものならば、12世紀代のものと考えられる。5～7の瓦・塼は日上天王山古墳から東へ500～1000mの距離にある美作国分寺・国分尼寺との関係が考えられる。塼は国分寺・国分尼寺においては厚さ47～67mmのもの（A群）と厚さ77～88mmのもの（B群）の二種類が知られているが、共に出土量が多いのはB群である。7の塼は厚さ49mmであり、A群である。塼という遺物の性格上、国分寺あるいは国分尼寺に使用されていたものが何らかの形で持ち込まれたと考えられるが、その使途については不明である。平瓦についても同様のことが考えられる。（平岡正宏）

引用・参考文献

甘粕　健　1985　「前方後円墳の技術史－土木構造物の起点を考える－」『第五回日本土木技術学会発表論文集』日本土木史学会

近藤義郎編　1991　『権現山51号墳』　『権現山51号墳』刊行会

中村一郎・笠井　毅　1976　「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号　宮内庁

中山俊紀　1981　『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集　津山市教育委員会

古瀬清秀　1991　「4　農工具」『古墳時代の研究』8　古墳Ⅱ副葬品　雄山閣

北條芳隆　1986　「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価－成立当初の畿内と吉備の対比から」『考古学研究』第32巻第4号　考古学研究会

柳瀬昭彦他　1977　『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第16集　岡山県教育委員会

第４章　考　　察

第１節　墳丘形態からみた日上天王山古墳

はじめに

日上天王山古墳は墳長56.9ｍの前方後円墳であり、くびれ部から出土した二重口縁壺形土器等から前期でも前半の中に位置付けることが可能となってきた。また、今回の発掘調査では墳丘各所に調査区を設定し、断片的ではあるが正確な墳端の位置や段築成の状況を把握することができ、これらの成果にもとづいて墳丘形態を復元し、その背後に潜む築造企画から編年的位置付けを行う根拠も得られている。

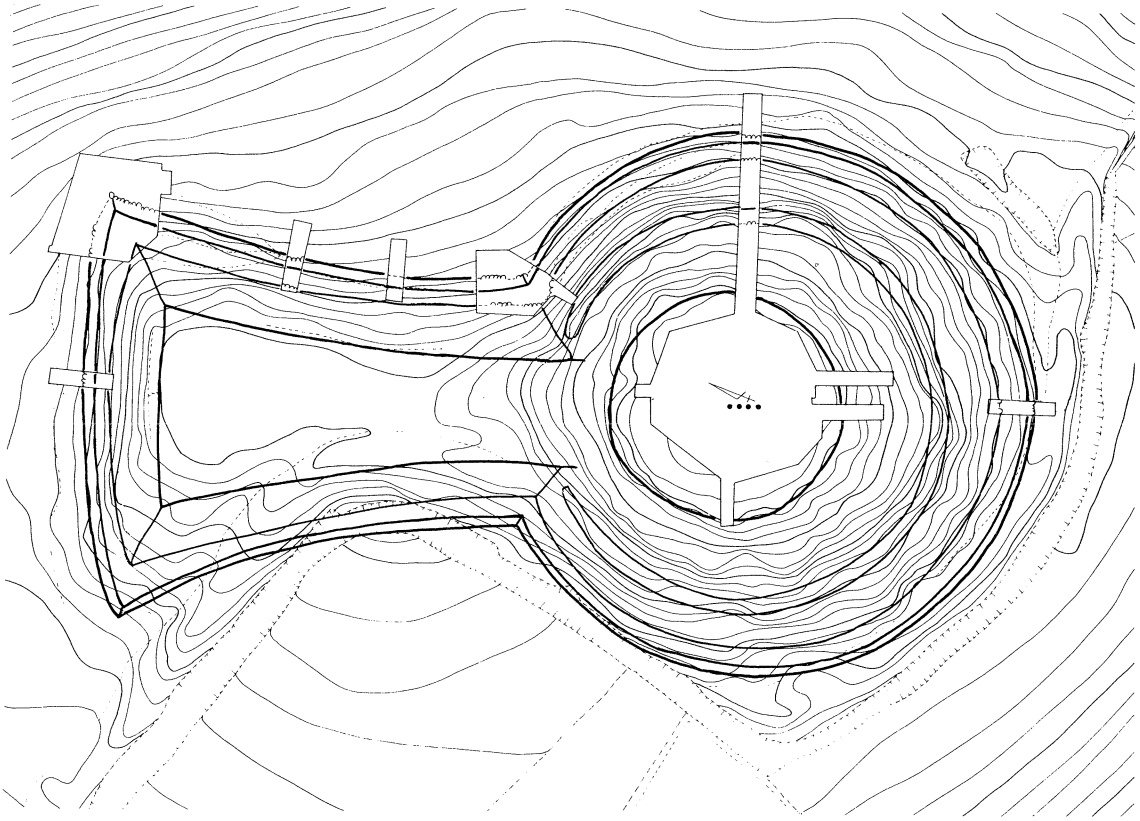
ところで、これまで日上天王山古墳の編年的位置付けは、逸速く今井堯によってなされ墳長約50ｍに達し前方部が低く細長いことから４世紀代に築造されたものと考えられた(今井　1972)。また、その後の測量調査によって墳長約55ｍであることが明らかとなり、前方部が「途中から外に向かって開き、岡山市湯迫車塚古墳の前方部と似通った形態を持っている」ことから古墳時代前期でも「発生期に属する」可能性が指摘された(湊・安川　1978：ｐ９)。その後も撥形前方部を持つことが注意され、美作地域における最古の古墳の一つとして位置付けられるようになった(河本　1986・安川　1991)が、何れの見解も墳丘の平面形態、特に前方部の在り方から導かれたものであった。また筆者もかつて墳丘形態の分析から西殿塚古墳の１／４規模の相似形墳である可能性を考えた(澤田　1991)が、この見解は墳丘西側面から後円部後端におよぶ用水溝とその廃土によって変形した形状、規模をもとに与えた評価であり、発掘調査によって正確な墳丘形態が明らかになった今日、再考の余地がある。また、この墳丘形態による分析方法は中心主体が盗掘の難に遭い副葬品によってその営造年代が十分に検討できない状況のもとでは、なお有効な手段と思われる。

そこで本節では発掘調査によって明らかになった成果をもとに墳丘形態の復元を試み、畿内の大形前方後円墳や他地域の前方後円墳との比較から、これまで提示されてきた時間的位置付けを再度検討していくことにしたい。

１．墳丘の復元

墳丘の復元に関しては既に第３章第１節の小結のなかで具体的な論拠を述べてきた。ここでは重複を避け詳細について論じることは省略するが、以下にその概要をまとめておく。

まず形態的特徴に関して、墳端は地山を削出することで作り出されており基本的に旧地形に沿って設定されている。それらの標高はくびれ部付近の墳端が最も高く、後円部後端、前方部前端に向かって低くなる。また後円部では、この傾斜を墳頂平坦面で水平になるような処置がなされ、墳端、下段・上段テラス、墳頂平坦面の円周に対する中心点に「ズレ」が生じていた。段築は後円部で三段、前方部で二段であり、下段は各部とも比高0.3～0.6ｍと低い。さらに、これらは後円部の下段テラスが前方部のテラスに連接し墳丘全体を巡る一方、上段テラスは前方部頂部平坦面に比べ高い位置にあり、その収束の仕方は今回の調査では十分に把握できなかったものの後円部墳頂から前方部の墳頂平坦面に続くスロープ状施設で途切れ、その平面形はＣ字状を呈する可能性が考えられた。また、前方部平面の形状は側面が緩く曲線的に外反しており、撥形を呈していると考えられたほか、前面が曲線的に張り出しやや膨ら



第38図　日上天王山古墳墳丘復元図（1/450）

みをもっていた。

なお、このような第3章第1節で示した復元案を図化したものが第38図である。第3章の第14図では調査で明らかになったトレンチ部分での墳端を示したに留めたが、ここでは第3章で触れたとおり墳丘主軸を発掘調査時の南北メインラインから0.4m西に移動したうえで作図し直している。復元した前方部西側は、この墳丘主軸を中心線として対称であることを前提にしている[1]。

このような復元案にもとづく各部の規模は墳長56.9m、後円部径32.4m、後円部高6.35m、くびれ部幅約15.6m、前方部長25.4m、前方部前面幅約24.6m、前方部高3.0mを計測する。

次節では、これらの特徴を踏まえ畿内大形前方後円墳などとの比較検討を行い、編年的位置付けに際しての前提条件を確認していくことにしたい。

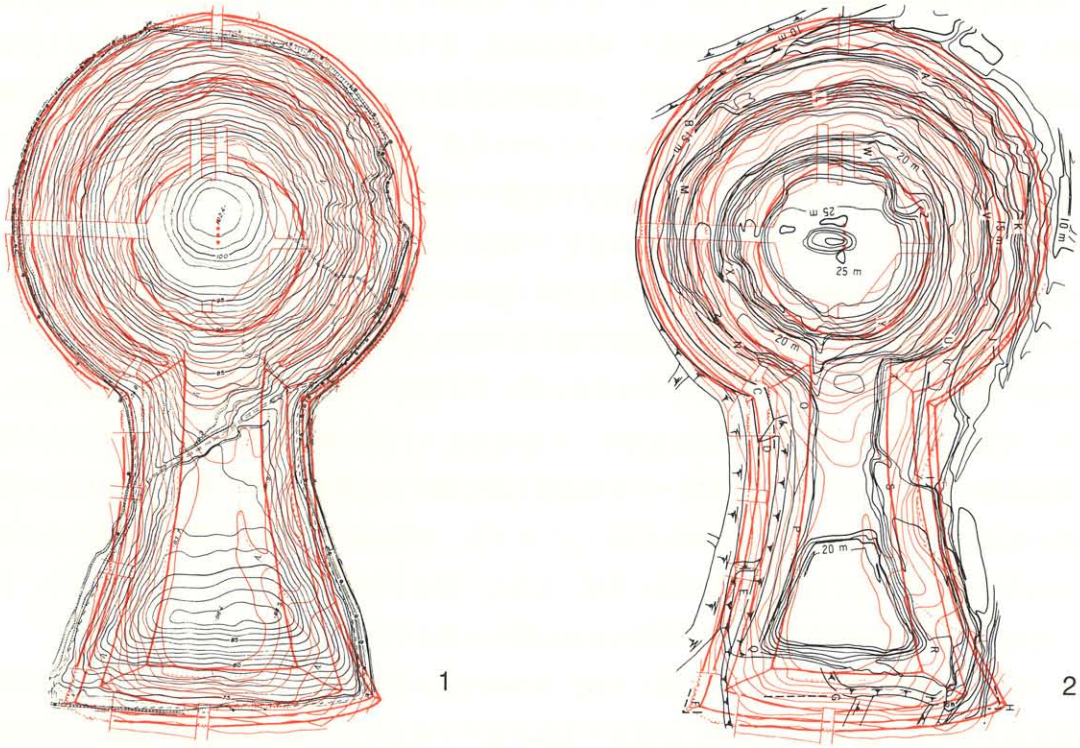
2．畿内大形前方後円墳との対比

これまでに示してきた復元案に基づくと日上天王山古墳の墳丘は石部正志他の分類(石部他　1979)による6区型となる。古墳時代前期に位置付けられる畿内大形前方後円墳の中で6区型に入ると認められるものは箸墓古墳、渋谷向山古墳など幾つか挙げられるが、前方部の側面が曲線的に外反する撥形前方部をもつものとしては、やはり箸墓古墳を挙げることができる。箸墓古墳は墳長約280mとされるが、墳長56.9mの規模をもつ日上天王山古墳はその約1／5規模となる。そこで日上天王山古墳と箸墓古墳とを1：5(1/600：1/3000)で重ね合わせたものが第39図1である。後円部径がおおよそ合致するもののくびれ部の在り方や段築成の在り方、前方部の頂部平坦面や前方部前端線の位置などが異なっている。

このような齟齬を解消し墳長が合うように日上天王山古墳の測量図の縮尺を変えてみると約１／619となり、その偏差として約３％の誤差が生じた[2]。これは宮川徙が行った地割り実験の成果(宮川　1988)を参考にすると、築造企画を地面に割り付ける際の誤差率は１％未満であり、直ちに日上天王山古墳が箸墓古墳の１／５相似形墳(箸墓類型墳)であると考えるには躊躇せざるを得ない状況にある。

そこで同じ吉井川の下流域に所在し、北條芳隆や宇垣匡雅によって箸墓古墳の１／２相似形であることが指摘されている浦間茶臼山古墳(北條　1986)・(宇垣　1987)[3]と日上天王山古墳の測量図を２：５(1/600：1/1500)で重ね合わせたものが第39図２である。それをみると箸墓古墳との間では十分に一致していなかったくびれ部や前方部前端コーナーのほか前方部の墳頂平坦面の前端ラインの位置関係も良く合致し、後円部径、前方部長、前方部前端幅などの比率がほぼ等しいことが理解される。また、後円部の段築成の構成や斜面比なども良く合致している。つまり、ここでの比較検討より日上天王山古墳の築造企画は先に見た箸墓古墳との直接的な関係を重視するよりも、浦間茶臼山古墳との関係の中で捉えていくことの妥当性が看取されるのである。

これは第３章第１節で指摘した前方部を尾根の付け根に設定する手法や、墳端をくびれ部から後円部後端に向かって傾斜を付けながらも墳頂平坦面で水平に解消していく工法上の共通性を勘案しても両者の関係は重視する必要があろう。また畿内大形前方後円墳から直接的に築造企画を受容する類型墳は、管見に触れる限り１／２、１／３など二分、三分原理によってその規模が設定されている場合が多く、五分原理によって規模が設定されている[4]本墳は特異なものである。つまり規模の設定基準においても畿内での原理・原則からはずれているものと考えられる。その他、埋葬頭位に関して箸墓類型墳の多くが北頭位を指向しているにもかかわらず、日上天王山古墳が南頭位をもつことも十分に畿内での原則が貫徹されていないことを示しており、箸墓古墳と直接的な関係を想定するにはやや難がある。さらに、



第39図　日上天王山古墳（１/600）と箸墓古墳（１/3000）・浦間茶臼山古墳（１/500）

中心石槨の棺床構造も特異なものであり、これに加えることができよう。一方、浦間茶臼山古墳の被葬者との関係は吉井川を介した交通路を想定することが可能であり、情報の伝達ルートから見ても浦間茶臼山古墳と日上天王山古墳の関係がより密であったことは認められるであろう。

以上のことからみて、この日上天王山古墳の築造企画は段築成の存在や構成などから大和盆地に所在する箸墓古墳などの畿内中枢から直接的にもたらされた可能性もなお考慮する必要もあろうが、ここではその可能性よりも吉井川下流域に展開する備前地域の浦間茶臼山古墳との共通点を積極的に評価し、畿内大形前方後円墳(箸墓古墳)から浦間茶臼山古墳を通じ間接的にもたらされた非類型墳[5]である可能性を考えておきたい。

3．墳丘からみた日上天王山古墳の編年的位置付け

最後にその築造開始時期について言及し、本稿の責を果たしたい。

まず築造開始時期の上限であるが、前節で触れたとおり本墳の築造企画が浦間茶臼山古墳から波及しもたらされたものとする以上、当然ながら浦間茶臼山古墳の築造時期を上限とすることができる。また、仮に箸墓類型墳であった場合においては、箸墓古墳の築造時期が上限となり、僅かに日上天王山古墳の築造時期の上限が遡ることになろう。一方、下限に関しては本墳の築造の契機となった中心石槨の被葬者の埋葬の完了年代(被葬者の死亡時期)を充てることができるとするならば、中心石槨の編年的位置付けが問題となるだろう。日上天王山古墳の中心石槨は筆者の分類(澤田　1993)によるⅢA型式ないしⅣA型式の範疇で捉えることができる[6]が、それは浦間茶臼山古墳の竪穴式石槨とほぼ同型式である(澤田　1993)ことから、両者の時間的関係は近接して考えることが可能である。また、美作盆地中央部での首長墳の動態でみた場合、吉井川を日上天王山古墳から6 kmほど上流に遡った美和山1号墳との関係が問題となる。

この美和山1号墳は曲線的に緩く外反しやや短く狭い前方部を有しているが、この特徴は行燈山古墳に類似している。規模的にも約1／3であり、行燈山類型に属する可能性がある[7]。この美和山1号墳からは線刻をもつ埴輪片が出土しているが、これは備中に所在する中山茶臼山古墳からも紋様が若干異なるものの同様に線刻を施した埴輪片が採集されており(近藤　1987)・(葛原　1987)、両者の関係について留意する必要がある。また中山茶臼山古墳は石部他の分類基準による4区型に属す可能性があり、美和山1号墳は中山茶臼山古墳から派生的に生まれた可能性はなお否定できず、その範囲で美和山1号墳を中山茶臼山古墳より派生した非類型墳と考えておく必要がある。けれども、この中山茶臼山古墳も行燈山古墳の1／2相似形を呈する行燈山類型に属する可能性があり、いずれの場合にせよ両墳とも行燈山古墳と関係をもったものと考えられ、その築造に関しては近接した時期を求めることは可能である。したがって箸墓類型墳である浦間茶臼山古墳ないし箸墓古墳より派生的に築造された日上天王山古墳は、箸墓古墳→西殿塚古墳→行燈山古墳→五社神古墳と続く畿内大形前方後円墳の築造企画(規格)の型式学的の変遷(澤田　1993)・(岸本　1995)に照らしてみても、行燈山類型ないし行燈山類型墳である中山茶臼山古墳から派生的に生まれた美和山1号墳に先行して築造されたことを類推することができ、美和山1号墳の築造開始時期を日上天王山古墳の営造時期の下限とすることが許されるであろう。

以上の検討から築造開始期と埋葬完了期との間にやや時間幅があるものの、ここでは日上天王山古墳の営造時期を古墳時代前期でも前半代に位置付けられるものと考えておきたい。なお、これはくびれ部から出土した二重口縁壺形土器の編年観からも大きく矛盾するものではないだろう[8]。

むすび

以上、日上天王山古墳が箸墓古墳のおよそ１／５規模であることを確認し、さらにその築造にあたっては浦間茶臼山古墳の築造企画を基準にその２／５規模に設定された「非類型墳」である可能性を指摘してきた。また併せて築造開始時期についても言及してきたが、そこでは浦間茶臼山古墳の築造時期をその上限とし、行燈山類型ないし行燈山類型墳より派生的に生まれた非類型墳に属すると思われる美和山１号墳の築造開始時期を下限とするものの、おおよその営造時期を考えることができた。本墳は盗掘の難に遭い、このような時間幅を副葬品の型式群によって検討することができずやや問題を残しているが、これらの検討結果を根拠にここでは古墳時代前期でも前半の中で日上天王山古墳の墳丘築造が開始され中心石槨の被葬者の埋葬が完了したものと考えておきたい。但し、なお本墳は箸墓類型墳である可能性も否定し得ないが、この場合でも築造時期に関しては大きく変更することはないだろう。むしろ、畿内政権との政治的関係がどのようなものであったかが問題となろう。また、美作地域の中でこの時期に築造が遡る前方後円(方)墳として勝田郡勝央町所在の美野中塚古墳にその可能性を見いだすことができる[9]ものの、今のところ確実な例はなく、本墳はその限りで美作地域最古の前方後円墳の一つとして位置付けることができる。なお、これは冒頭で示した従来の見解を大きく逸脱するものではなく、むしろ追認することとなった。

今後、美作地域にみられる首長墓系列やその背景にある集団関係、さらに畿内との政治的関係などについて議論が波及していくことになろうが、ここではひとまず本墳の編年的位置付けに議論を留め、波及する問題については課題としておきたい。

最後になったが調査への参加ならびに本稿を成すにあたり近藤義郎先生、倉林眞砂斗、水野敏典、増田直人の諸氏をはじめ日上天王山古墳発掘調査団、津山弥生の里文化財センター、東京都立大学人文学部歴史学研究室の諸兄に多大な助言と協力をいただいた。特に近藤先生からは適切な助言をいただいたほか発掘調査・整理作業への参加、本稿の執筆、文献貸与等をお許し下さるなど格段のご配慮をいただいている。また小野昭先生、山田昌久先生をはじめ東京都立大学人文学部史学科考古学研究室の諸兄、また岸本直文氏からは日頃より多大な助言と助力をいただいている。末筆ながら記して厚く御礼申し上げるとともに、ご助言の数々を活かし切れなっかったことを深くお詫び申し上げる次第である。

なお、本稿は1995・1996年度に交付を受けた科学研究費補助金基盤研究(C)一般「美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究」(研究代表者　倉林眞砂斗)、1995年度に交付を受けた科学研究費補助金奨励研究(A)「前方後円墳築造企画の型式学的研究」および東京都立大学特別研究費若手研究「前方後円墳築造企画の型式学的研究－古墳時代前期の政治的関係の抽出－」の成果を一部に含んでいることを付記しておきたい。

(澤田秀実)

(1997年２月10日脱稿)

註

(1) ただし、箸墓古墳を含めた前期前半代の多くの古墳は左右非対称であり、恐らくは日上天王山古墳も同様であったと予想される。けれども、西側は未調査であり現状ではなおその根拠が明確ではないので、第38図では仮に左右対称に復元することにした。

(2) 図示し得なかったが日上天王山古墳の測量図の縮尺をさらに97％縮めて重ね合わせたところ、それまで合わなかった箸墓古墳の標高75ｍ付近の等高線が日上天王山古墳の墳端線に良く合致することや前方部前端の位置

や幅など、大枠で一致することが読み取れた。このことから、両者が厳密に１：５であった場合に約３％の誤差が認められるものと判断している。

(3) この浦間茶臼山古墳は後世の改変が著しくなかなか旧来の形状が把握しにくく、宇垣の復元案(宇垣　1987)の他にも狐塚省蔵によって空中写真などを用いての復元案が提示されている(狐塚　1988)。狐塚の復元案は、宇垣のそれに対し批判的であるが前方部の復元案に関しては両者とも共通するところが多いように見受けられる。大きく異なるのは後円部の捉え方であり、特に後端部の墳端位置の評価が最も異なるところである。つまり宇垣は標高10m付近の傾斜変換線を重視し、狐塚は12m付近の傾斜変換線を重視する。それが規模や形態の評価につながっているのであろう。筆者は、具体化された古墳形態よりその背後に認められる築造企画を復元的に読み取る作業を試みており、その場合、これは現在の土木開発においても同様であるが、当初の設計や企画に沿いながらも実際の地形に合わせて現地において設計・施工変更がなされていることは留意すべき点であると考えている(小沢　1988)・(澤田　1992)。もちろん岸本直文が指摘するとおりその偏差について(岸本　1988・1996)も留意する必要はあろうし、変形が何に由来するのかは検討、説明する必要性は認めざるを得ない。

このような視点で浦間茶臼山古墳を見ると、その立地に関しては西に張り出し付け根で一旦狭くなり先端に向かって広がりをもつ尾根に築造がなされており、浦間茶臼山古墳はこの一旦狭くなる尾根の鞍部にくびれ部を設定している。この位置にくびれ部を設定すると前方部が細くなっている尾根の付け根の形状に合致し、特に前端幅が丁度尾根の付け根の幅に符合している。このように前方部を設定した場合、約80ｍに及ぶ規模の後円部の墳端を水平に削出する際にそのスペースは十分に確保することはできない。もちろん、径の小さい後円部を設置することは十分にできただろうが、浦間茶臼山古墳の場合、後円部の側面を削り後端側にあわせた径の小さい後円部を採用せずに大きな後円部を築造している。これは当初より一定の企画や規模が存在し、それを貫徹するためになされた処置とみることができよう。ちなみに狐塚が示す南側くびれ部の成果をもとに後円部を正円であるとして復元すると後端部では標高10m付近を通ることになり、企画上の後円部がこの標高10ｍ付近の傾斜変換線によって具体化、表徴されている可能性は無視することはできず、一概に宇垣の復元案を否定することは出来ない。したがって、仮に標高12ｍ付近の傾斜変換線がくびれ部から後端を通過しもう一方のくびれ部まで連接すると考えた狐塚の復元案が旧状であったとしても、なおその背後に復元される築造企画はその下段に作り出された標高10ｍの傾斜変換線によって表されているものと思われる。つまり、狐塚が主張するような後円部が歪んだ特異な墳丘企画を当初よりもち、その築造を目指したのではなく、地形の制約によって当初の築造企画を水平位置において貫徹することを断念し後円部に一定の処置を施したものと考えている。したがって筆者は北條や宇垣の復元案に近く、それが箸墓古墳に由来する可能性を考えておきたい。なお、ここでの議論は選地の問題とも関係がでてくるだろう。詳細は別稿にゆずりたい。

(4) 岸本は大阪府高槻市弁天山Ａ１号墳、福岡県苅田町石塚山古墳を箸墓古墳の２／５、兵庫県御津町権現山50号墳を箸墓古墳の１／５規模相似形墳と見る(岸本　1996)が、前二者は箸墓古墳の４／９規模相似形、後者は西殿塚古墳の１／４規模(澤田　1991)である可能性が高い。弁天山Ａ１号墳・石塚山古墳はともに120ｍ近い規模をもち、約280ｍの規模をもつ箸墓古墳の２／５規模(112ｍ)を考えると７％近い誤差が生じ、先に触れた築造企画を地面に割り付けする際の誤差率が１％未満であるとする宮川の見解(宮川　1988)を尊重すれば、岸本の見解を直ちに受け入れることはできない。

(5) この用語は(澤田　1992)で類型墳にもれるもの対して仮称したものである。類型墳とは畿内大形前方後円墳の築造企画を直接的に受容した正数分比で同一企画をもつ古墳であり、その副葬内容や内部主体の構造と共に小田富士雄の「畿内型古墳」と称されるもの(小田　1970)に近い。けれども非類型墳は類型墳を通じ二次的に築造企

画が設定されているものや前方後円(方)形という墳墓形態の形式概念のみを模倣的に受容したもので、類型墳に含むことのできない多様な形態をもつ前方後円形ないし前方後方形の古墳を総称したものである。したがって、前方後円形の墳墓を含まない「在地型古墳」(小田　1978)とは根本的にその内容が異なる。そこで混乱を招くことを恐れて「畿内型古墳」、「在地型古墳」の用語を避け、ここでは前稿(澤田　1992)に則り「類型墳」、「非類型墳」と仮称することにした。

(6) 日上天王山古墳の中心石槨では、側壁の控え積みが上部にのみ施されている。これは基底部から数段がほぼ垂直に立ち上がることに起因するのであろうが、上部においてもあまり石材を用いない点が特徴である。また石槨の閉塞状況は亀の甲状に側壁とほぼ同じ大きさの板石を積み上げ、一見筆者の分類(澤田　1993)によるⅡA型式に近い在り方をしている。けれども第一段階での蓋石には幅1mを越える石材を用いておりⅢA型式に位置付けることができる。また、先に触れたとおり側壁は基底部から数段はほぼ垂直に立ち上がっており、そのために下部における控え積みが省略されていたとしてもⅣA型式の範囲を越えるものではない。ⅢA型式の石槨を内包する古墳として権現山51号墳、元稲荷古墳、浦間茶臼山古墳等が挙げられ、ⅣA型式を内包するものとして椿井大塚山古墳、備前車塚古墳等が挙げられるが、いずれも古墳時代でも前期前半に位置付けられるものであり、日上天王山古墳もほぼこれらの古墳と併行した時期に石槨の構築がなされたものと考えられる。

(7) 美和山古墳は中世の「美和山城」によって改変が著しいが、既に発掘調査がなされ部分的にではあるが墳端が明らかになり、その調査成果に基づいて復元案が示されている(中山　1992)。その復元案にもとづくと美和山1号墳は石部他の分類(石部他　1977)の5区型となる。けれども、前方部前端の復元に関しては、葺石根石等明確な墳端が検出されているわけではなく、やや問題が残る。くびれ部に近いT12では標高141.20m付近で葺石根石を伴う明確な墳端が検出されており、そのレベルで前端部の墳端が設定されていたとすると中山による復元案よりやや内側に墳端を想定することができる。測量図によると前端部の標高142.00m付近の等高線の間隔が間延びし墳頂平坦面から続く墳丘斜面とは傾斜を異にしており、前述のやや内側に求められる墳端線の位置とも整合する。したがって、ここでは美和山1号墳の前方部前端の墳端ラインを標高約142.00mの等高線に求め、従来よりやや短い約76mを墳長規模と考えておきたい。なお、この美和山1号墳は行燈山古墳の1／3規模相似形墳と思われるが、それは墳端ラインはもとより後円部、前方部とも墳頂平坦面の位置関係が良く合致することをその根拠としている。

(8) 中山俊紀は幾つかの条件を付けながら、日上天王山古墳出土の二重口縁壺形土器を寺沢編年(寺沢　1986)による布留1式に位置付けている。なお詳細は本書、第4章第5節を参照のこと。

(9) 1995年12月に美作東部の勝田郡勝央町所在の美野中塚古墳(墳長約55m)の測量調査を実施した(倉林・澤田　1996)が、この美野中塚古墳がやはり撥形前方部を有し、箸墓古墳ないし浦間茶臼山古墳に近い形態を持つことが観察された。詳細は今後検討していくが、日上天王山古墳に近接した時期に美野中塚古墳が営造されていた可能性を指摘しておきたい。

測量図出典

箸墓古墳：(白石他　1984)　浦間茶臼山古墳(狐塚　1988)

引用・参考文献

石部正志他　1979　「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89　古代学研究会

今井　堯　　1972　「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第1巻原始・古代　津山市

宇垣匡雅　1987　「吉備の前期古墳－Ⅰ浦間茶臼山古墳の測量調査－」『古代吉備』第９集　古代吉備研究会

小沢一雅　1988　「第２章形態研究の方法論」『前方後円墳の数理』　雄山閣

小田富士雄　1970　「畿内型古墳の伝播」『古代の日本』３　角川書店

小田富士雄　1978　「西日本における発生期古墳の地域相－総括にかえて－」『古文化談叢』第４集　九州古文化研究会

岸本直文　1988　「丁瓢塚古墳測量調査報告」『史林』第76巻第６号　史学研究会

岸本直文　1995　「「陵墓」古墳の研究の現状」『「陵墓」から見た日本史』　青木書店

岸本直文　1996　「前方後円墳の築造規格」『考古学による日本史』５政治　雄山閣

狐塚省蔵　1988　「浦間茶臼山古墳考」『考古学と関連科学』　鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会

葛原克人　1987　「古墳時代前期」『岡山県の考古学』　吉川弘文館

倉林眞砂斗・澤田秀実　1996　「美作における前方後方墳の測量調査」『中四研だより』第３号　中国四国前方後円墳研究会

河本　清　1986　「日上畝山古墳群」『岡山県史』第18巻 考古資料　岡山県

近藤義郎　1987　「最古の前方後円墳」『吉備の考古学』　福武書店

澤田秀実　1991　「墳丘形態からみた権現山51・50号墳」『権現山51号墳』　『権現山51号墳』刊行会

澤田秀実　1992　「墳丘形態からみた堂ヶ作山古墳」『堂ヶ作山古墳Ⅱ』　堂ヶ作山古墳調査団

澤田秀実　1993　「前方後円墳の成立過程」『研究論集』XII　東京都埋蔵文化財センター

白石太一郎他　1984　「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集 国立歴史民俗博物館

寺沢　薫　1986　「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県教育委員会

中山俊紀　1992　『史跡美和山古墳群保存整備事業報告書』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集　津山市教育委員会

北條芳隆　1986　「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価－成立当初の畿内と吉備の対比から」『考古学研究』第32巻第４号　考古学研究会

北條芳隆　1987　「墳丘と方位からみた七つ坦１号墳の位置」『七つ坦古墳群』　七つ坦古墳群発掘調査団

湊哲夫・安川豊史　1978　「古墳時代」『図録津山の史跡』　津山市教育委員会

宮川　徙　1988　「前方後円墳築造企画と技法の伝統性」『橿原考古学研究所論集』第八　吉川弘文館

安川豊史　1991　「美作」『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社

第２節　古墳時代における盛土技法ー日上天王山古墳を中心としてー

１．はじめに

第３章では日上天王山古墳における調査結果から、断片的ながらも後円部の墳丘盛土法を推定、復原した。日上天王山古墳における墳丘築造における特徴として、

・最大で5.5ｍかそれ以上の、かなり大規模な盛土を行っていること

・盛土は４回から５回程度にわけて行われたと考えられること

・その際の具体的盛土技法として、盛土予定区周縁部に土堤状の盛土を行い、その内部に土を充填していくという方法を少なくとも１回、もしくは２回行っているらしいこと

を特徴として挙げることができる[1]。

古墳の構築には墓域の選定から墳丘の築造、埋葬施設の構築、外部施設の整備等幾つかの段階が想定されている(和田　1989)。このうちの盛土段階における具体的な盛土技法ついては、最近では冨田和気夫氏(冨田　1988)や北條芳隆氏(北條　1990)による論攷がある。現状では資料的な制約もあってこれらの研究に付け加え得る部分は少なく、前述の諸先学の成果と重複する部分が多いが、本稿では古墳の盛土技法について簡単にまとめ、日上天王山古墳で見られた盛土の特徴について若干の考察を行いたい。

また埋葬施設を納める墓壙は、墳丘構築後に改めて掘り込まれるものが一般的であり(掘込墓壙)、日上天王山古墳においても、墓壙は墳丘完成後改めて掘り込まれている。このほかに少数ではあるものの墓壙を持たない無墓壙や、墳丘と墓壙の構築が並行して進められる構築墓壙も知られている(和田1989)。これらの墓壙形態のうち、特に構築墓壙をとる古墳では墳丘と墓壙の構築が並行し、両者の区別が困難なものもあることから、これについては今回は対象より除外しておきたい。

２．古墳の盛土技法

冨田、北條両氏は、竪穴系埋葬施設をもつ(または古墳時代前期の)古墳の盛土技法について検討し、冨田氏は２種４類、北條氏は２類型に分類した(冨田　1988、北條　1990)。いずれにしても、古墳の盛土技法について現状では以下のような３類に分類することができる[2]。

Ａ．盛土予定区の外縁部に断面蒲鉾形、または台形を呈する土堤状の盛土を行い、その内側に盛土を行う技法。円形、または馬蹄形に行われるものが多いが、前方部前端に築かれ、これを起点にして順次盛土の行われるものもある。代表的な例として福岡県三国の鼻１号墳(片岡他　1985)、兵庫県五色塚古墳(兵庫県教育委員会事務局社会教育部文化課編　1989)、千葉県石神２号墳(沼沢他1977)等が挙げられる。

Ｂ．盛土予定区内に一つ、または複数の土壇(小墳丘)を築き、その間や四周に盛土を行う技法。代表例として、大阪府百舌鳥大塚山古墳(樋口他　1985)、岐阜県新井原12号墳(今村他　1983)、千葉県飯合作１号墳(沼沢他　1978)等を挙げることができる。

Ｃ．上記したような顕著な法則性の明らかでないもの。この中にはそれほど多くはないものの、ほぼ水平に細かく盛土していったと考えられるもの(広島県石鎚山第１号墳(高倉他　1981))や、１方向に向かって斜めに土を積んでいったと考えられるもの(島根県古曽志大塚古墳前方部（足立他1981))など、一定の法則性を持つものも見られるが、現状では少数例にとどまっており、独立した分類基準としうるほどの数はない。

これらの盛土技法については、幾つかの指摘がある。まずこれらの盛土技法のうち一つのみを用いて墳丘を構築するものと、これらのうちの幾つかが組み合わされて築かれるものの二者があること(冨田 1988)、次に墳丘規模の点から、これら3種の盛土技法が盛土量によって使い分けられた可能性が指摘されている(北條　1990)。また時期的な見地から、古墳時代前期には、A類、B類いずれの方法も既にほぼ確立された技法として出現し、中期段階までは確実に用いられたらしいこと、またそれが地域的に限定されるものではないらしいこと(北條　1990)等である。

ここでは以上の問題全てに触れる余裕はないが、盛土量と時期の問題について簡単に触れておきたい。まず盛土量の問題について、大量の盛土が必要とされる際にはA類、またはB類の技法が用いられる例が多く、C類の技法のみで墳丘の構築される古墳は、盛土量の少ないものに限定される。盛土が行われる際の地山地形の問題を抜きにすれば、具体的には直径20m以上で、高さ1.5m以上の盛土範囲が必要とされるものでは、ほとんどのものがA類、またはB類の盛土技法によって盛土されていると考えられる。したがって、盛土量はこれらの盛土技法を使い分ける際の主な要因の一つと考えられる。

また時期的な問題について、古墳時代前期を中心に前後の時期を見てみると、古墳時代前期から中期にかけては、A類、B類を用いる例は比較的多く、先の指摘にあったように地域的に限定される可能性も低いと考えられる。ただし、この方法がどのような起源を持つものであるのか、現状でははっきりとしない。弥生時代の墳丘墓の中で盛土を持つものについてみると、例えば弥生時代後期初頭の大阪府巨摩・瓜生堂遺跡第5号方形周溝墓(大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター編　1981)では、報文中には具体的な盛土技法について言及されてはいないものの、図面から判断するかぎり盛土予定区外縁部に先行して土堤状に盛土し、その内部に土を充填していったものと考えられる。また、弥生時代中期の佐賀県吉野ヶ里遺跡のST1001墳丘墓では「土を叩き締めながら小山を幾つか築き、次にそれら小山の間を同様な技法で水平に埋め、さらに、その上に小山を築いて、小山の間を再び水平に埋めるという工法がとられていたものと考えられる」と報告されている(七田他　1992)。これらの例が直接古墳時代における各技法とつながるものであるかどうかは、現状では資料が僅少で判断し難いが、少なくとも方法的には古墳時代のA、B類の盛土技法と類似していることは指摘できる[(3)]。

また、古墳時代後期には横穴式石室の普及に伴って、墳丘構築法自体にも大きな変化が見られる。既に幾度も指摘されているが、こうした横穴式石室を主体部に持つ古墳では、まず石室の構築が先行し、これに伴って盛土が行われる(1次墳丘)。このときには、ほぼ水平に入念に質の異なる土を用いた盛土が行われる。この完成後にこれを覆い、外形を整えるための盛土が行われる(2次墳丘)。規模の小さな古墳ではこの段階で墳丘が完成するものが多く、A類、B類の技法を用いる例は見られないが、比較的大型の古墳においては使用例が認められる。たとえば、福岡県鬼の枕古墳(小田　1987)では前方部前端に土堤状の盛土を行い、そこから後円部に向けて順に盛土が行われたものと考えられる。また、同じく福岡県の東光寺剣塚古墳(吉留編　1991)では後円部外縁に土堤状の盛土を行い、その内側に横穴式石室を築きながら盛土を行っている。一方、同期の小型の竪穴系埋葬施設を持つ古墳では、比較的規模の小さなものでもA類の技法をとるものが、管見に触れたかぎりでも幾つか見受けられる[(4)]。

以上のことからA、B類の技法について、その起源は現状では不明ではあるが、B類の技法については古墳時代後期においては明瞭な例が認められないものの前期から中期にかけて、A類の技法は古墳時代の前期から中期を中心として一部では後期に至るまで用いられたものと考えられる。

3．日上天王山古墳における盛土の特徴

以上のように整理される盛土技法のうち、日上天王山古墳では、後円部の一部でA類の技法を用いていると考えられる。それでは先に見た盛土技法のうち、この土堤状の盛土はどのような意味を持つのであろうか。この点について、北條氏は「土壇」の意味を考える中で、土堤状の盛土と土壇状の盛土の技術的な共通性を指摘し、

・土壇は墳丘築成において土盛り手順の下位に位置づけられる土盛り技法としての側面を持つ

・土盛りに際しての高さの基準を設定する機能を持つ

・傾斜地形においては、足場としての機能を持ち、上方の盛土を支える基底部ともなった

という3点を指摘している(北條　1990)。

日上天王山古墳後円部では、南北トレンチで土堤状の盛土が観察され、東西トレンチにおいてはこれとほぼ一致する高さで水平面が見られることから、その後の盛土は、この土堤状盛土の示す高さを基準として行われたことが考えられる。このことから、ここでの土堤状の盛土は先の指摘の中にあった、内部に盛土を行う作業時における高さの基準として築かれた可能性を指摘できる。

また日上天王山古墳では、後円部で5.5mかそれ以上の大量の盛土を行っているが、このように大量の盛土を行う場合には、これを数回に分けて行い、各工程ごとに一定の水平面を作り出しながら行われるものが見られる。類例として、百舌鳥大塚山古墳や、新井原12号墳、広島県酒屋高塚古墳(青山編1983)など幾つかを挙げることができるが、日上天王山古墳の場合も東西トレンチにおける所見から、4～5回の盛土工程を想定できる。こうして盛土された墳丘は、数層の厚い水平な盛土によって構築されていると見ることも可能で、先に見た盛土技法はこうした一まとまりの層を造る際の具体的な盛土技法と見ることができる。

この時土堤状、土壇状の盛土の高さ、あるいは水平面が示すレベルは、墳丘築造企画となんらかの関連をもって設けられたことは充分に考えられる。例えば、百舌鳥大塚山古墳前方部では、各工程ごとに土壇状の盛土を行い、その間を埋めながら土壇状盛土の上面において水平面を作り出しており、その際各工程ごとの高さは1.3mで一定している。また、このように大規模な盛土を行うもの以外にも土堤状の盛土が見られるものでは、その上面がほぼ一定のレベルに揃えられる例が多く、その高さは各古墳において一定はしていないものの、最も高いもので1.2～1.3m程度であり、これを超える例はほとんどない[(5)]。日上天王山古墳の場合、盛土の一工程がどの程度の高さを持つのか、はっきり把握できる部分は少ないが、南北トレンチ南側にみられた土堤状盛土の高さは、第27層を底面であると考えればおよそ1.1mの高さということになる。また、東西トレンチにおいて推定される盛土の一工程についてもほぼ1mの高さを持つことから、この1～1.1m高さを1工程として盛土が数工程にわけて行われたものと考えられる。では、こうした一定の盛土の高さや、水平面の示すレベルといったものは、古墳の築造企画の上でどのように理解できるだろうか。次にこの点について、日上天王山古墳を例にして簡単に検討していきたい。

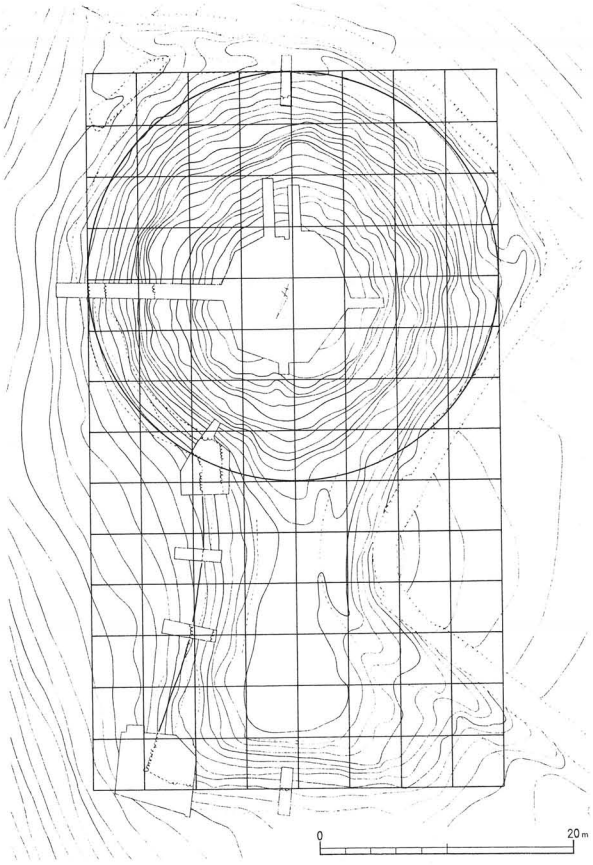
4．盛土と墳丘築造企画の関係 ── 日上天王山古墳を例として ──

日上天王山古墳は、今回の調査における所見によると墳長56.9m、後円部径32.4m、前方部長24.5m、くびれ部幅約15.6m、前方部前面幅約24.6mを測る。この古墳の墳丘築造企画を宮川徙氏らの試みている後円部を8分割する方法(石部他　1978)によって復原すると、墳長56.7m、後円部径32.4m、前方

部長24.3ｍ、前方部幅24.3ｍに復原され、今回の調査における所見とほぼ一致する形で復原することができる。このときの１区の長さは4.05ｍと考えられ、前方部の長さは24.3ｍであることから６区型の前方後円墳として理解される（第40図）。

南北トレンチ内で確認された土堤状盛土の高さは、先に述べたようにこの底面と見られる27層からはおよそ1.1ｍの高さがある。これを先に見た墳丘平面の築造企画の中に求めれば１区=4.05ｍの1/4=1.0125ｍが最も近い値と考えられるが、今回はこれを１単位と仮定する。この長さをもとにして、仮に東西トレンチにおける墳端を起点として後円部の各トレンチセクションに割り付けたのが第41図である。まず、東西トレンチでは、墳端から１単位分を地山の削りだしによって整形し、その上に盛土を行っている。ここで想定した盛土１工程の高さは、先に想定した１単位にほぼ一致し、その一つ上の工程まではほぼこの企画に一致する形で行われたものと考えられる。この考え方から見れば、標高121.8ｍ～123.8ｍまでの間には、同様な工程がおそらく２回程度行われたことが予想されるものの、今回の調査では確認できなかった。また、東西トレンチの標高123.8ｍで見られた水平面は、この場合墳端から５単位分の高さの位置に当たる。さらに南北トレンチで確認された土堤状の盛土は、その底面が東西トレンチにおける墳端から４単位の高さをもつ位置にあたると理解できる。

さらに、この単位を基にして中心石槨の築造企画を考えてみると、中心石槨の幅は１単位、長さはおよそ４単位（１区）、高さは１単位という形で理解できる。また同様に第２石槨では、幅は１単位よりもやや狭いが、長さが３単位、高さは中心石槨同様に１単位となり、長さの点で中心石槨よりも１単位分短い企画に則って築かれていると考えられる[6]。



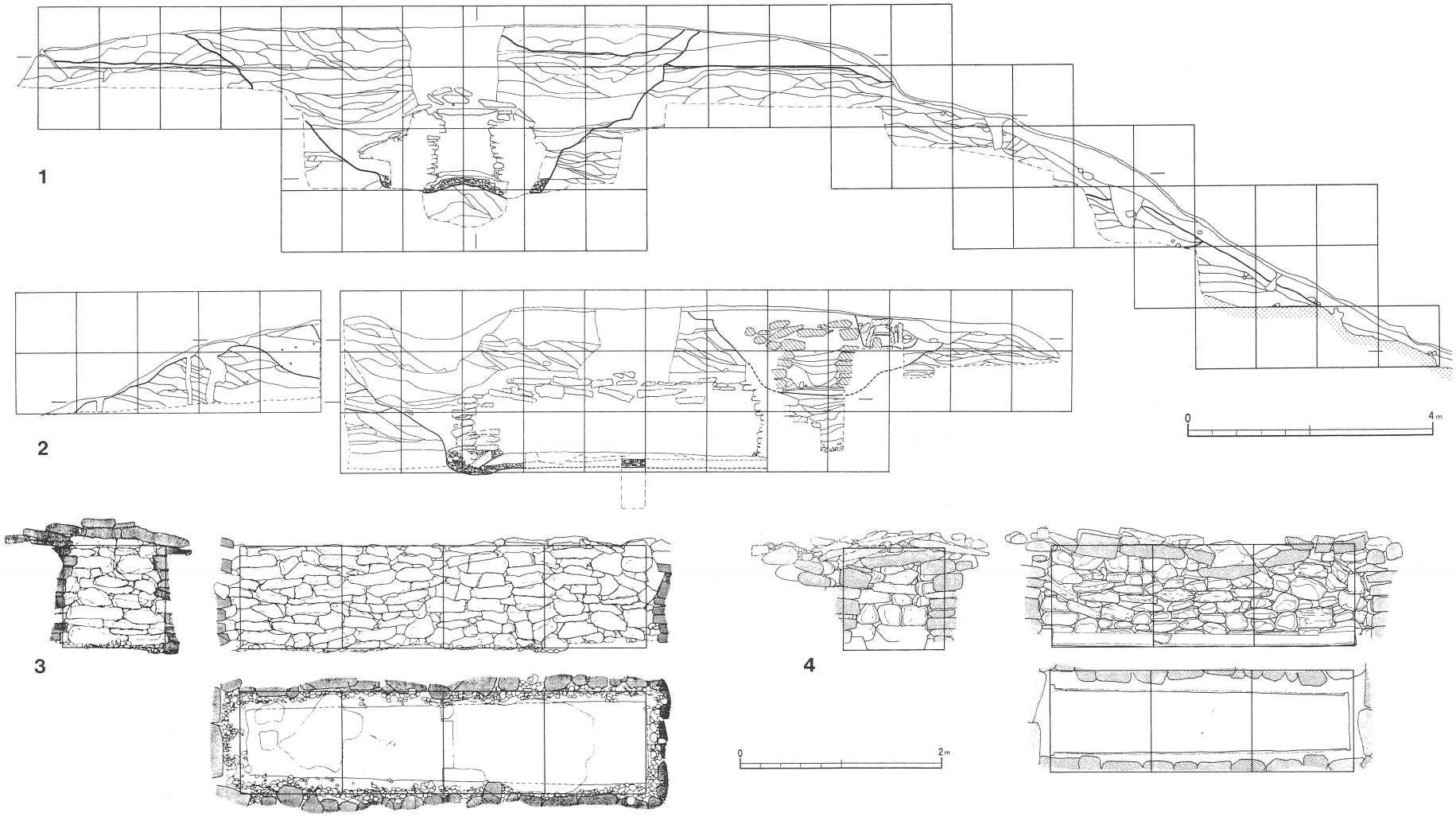
第40図　日上天王山古墳墳丘築造企画の推定復元図
（1/600）

論証が不十分ではあるが、これらのことから後円部盛土の各工程は、日上天王山古墳の墳丘築造企画に則って行われた可能性が高いと考える。これは墳丘の断面観察による盛土の１単位が、築造企画の一定の単位を表す可能性を示唆している。

ただし、今回の検討は東西、南北トレンチの部分的な墳丘調査の結果のみに基づいており、今後調査においてこのような規格性が本当に認められるのか否か検証される必要があることはいうまでもない。また、今回は墳丘の築造企画を考えるうえでの理論的な前提について細部を詰めておらず[7]、他の古墳においてもこうした事実が認められるかどうかを検討していくことも必要である。上記のように今回の検討は様々な問題を含んではいるが、日上天王山古墳の墳丘築造企画・技術を復原するうえでの一つの可能性として提示した。

５．おわりに

近年箸墓古墳などの調査から従来の認識と異なり、古墳時代初頭から大規模な盛土を行う古墳の



第41図　日上天王山古墳　後円部・竪穴式石槨築造企画の推定復元図（1．東西トレンチ　2．南北トレンチ　3．中心石槨　4．第2石槨）（1・2：1/100，3・4：1/60）

あることが明らかとなってきている。しかし、巨大な古墳墳丘を構築した具体的な技術について、現状ではいまだ不明な点が多い。本稿では墳丘盛土についても、墳丘築造企画に則って行われた可能性を指摘したが、まとまった論を展開することができなかった[8]。いずれにしても現状では、古墳墳丘盛土技法について、その意味を考えるには資料数が(特に大型古墳におけるものが)限定されている。今後、各地で積極的に墳丘構造についての調査がなされることを希望したいが、その意味で日上天王山古墳の調査は、不充分な点も多いが一つの資料を追加したものと評価できよう。

最後に本稿の作成に当たって、近藤義郎先生、古瀬清秀先生には様々な点でご指導、ご教示を頂きました。また澤田秀実氏には日上天王山古墳の築造企画に関して、その他に広島大学考古学研究室の大学院生諸兄にも有益なご教示を頂きました。これらすべてを活かしきれなかった点をお詫びすると共に、記して心より感謝致します。

(増田直人)

註

(1) 第3章小結部分で述べたとおり、日上天王山古墳の南北トレンチで見られた断面蒲鉾形の盛土については、これが東西トレンチでは見られなかったことから、後円部南側を堤状に巡るものかどうかははっきりと確認されたわけではない。しかしながら、これまで土壇状の盛土が外縁部に単独で築かれた例は確認されたことはなく、ここでは土堤状の盛土と判断して記述していく。ただし、今後の調査で確認すべき部分であることはいうまでもない。

(2) 冨田氏は、東日本において平坦な地山上に築かれた竪穴系の埋葬施設を持つ中小古墳の盛土法について、土堤状の盛土を行うもの土壇状の盛土を行うものとに大別し、その中でさらにそれぞれ2類ずつに分類している。また、こうした土壇状、土提状の盛土を行うもの以外の盛土技法については、数としてはそれほど多くないとしている。一方北條氏は、前期古墳の盛土法について、土提状の盛土を行うものと法則性の顕著でないものに大別し、土壇状の盛土については、土提状の盛土と共通の技術基盤を持っていた可能性を指摘されている。

まず土壇上の盛土については、北條氏の指摘するような側面が認められる一方で、例えば長野県新井原1号墳等のように、盛土予定区の中心付近に単独で土壇上の盛土を行い、その後四周に盛土していったと考えられる例があることから、現状ではこれを分類しておいた方が有効であると考える。またこれまでに調査された古墳の中には法則性の顕著でないものも一定の数で存在していることから、現状では以下のような三類に分類しておきたい。

(3) 本文中でも述べたようにA類、B類の技法については、古墳時代前期には確立した技法として現れてきていることが指摘されていることから、弥生時代において既に用いられていた技法であったことは充分に考えられる。またこうした技法の起源については、海外からの影響についても考慮しなくてはならないが、土木工事の基礎的な測量技術が、弥生時代の谷水田や扇状地における水田開発によって獲得された可能性が指摘されている(宮川1979)ことから、盛土技法に関してもこうした作業の中で獲得されたものと考えることはできないだろうか。

(4) 一例を挙げれば、岡山県津山市の大開古墳群4号墳(平岡　1994)がある。

(5) 例えば三国の鼻1号墳では、土提状盛土の上部の高さは標高46.7～47mでほぼ一定しており、その時の高さは1～1.3mを測る(片岡他　1985)。その他にも五色塚古墳、石神2号墳等を挙げることができる。

(6) 墳丘築造時の基本単位が内部主体企画時の基準単位とする研究には、(石部他　1977)等がある。

(7) 複雑な地山の上に長大な墳丘を築くに際しては、企画が割り付けられた際の旧地表面の高さが、高さの企画上

の基準となるのではないかとする指摘がある(宮川　1985)。今回の検討では、この点がはっきりしないため仮に後円部東側の墳端を起点として考えた。また、竪穴式石槨の企画についても、その内法の企画が重視されたのか、棺の大きさによって槨の大きさが決定されたのか、といった問題点が残る。

(8)　こうした問題のほかに、各盛土技法と埋葬施設との関係や地山地形との関係等、幾つかの問題点について触れることができなかった。今後の課題としたい。

引用・参考文献

青山　透編　1983　『酒屋高塚古墳』　広島県教育委員会

足立克巳・丹羽野裕　1989　『古曽志遺跡群発掘調査報告書』　島根県教育委員会

石部正志他　1977　「メスリ山古墳の墳丘築造企画の復元について」『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊　橿原考古学研究所

石部正志他　1979　「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』第89号　古代学研究会

今井　堯　　1972　「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第1巻原始・古代　津山市

今村善興・小林正春　1983　「新井原12号墳」『長野県史』考古資料　長野県史刊行会

大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター編　1981　『巨摩・瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　㈶大阪文化財センター

小田和利　　1987　『鬼の枕古墳』甘木市文化財調査報告第19集　甘木市教育委員会

片岡宏二他　1985　『三国の鼻遺跡Ⅰ』小郡市文化財調査報告第25集　小郡市教育委員会

神戸市教育委員会事務局社会教育部文化課編　1989　『史跡五色塚古墳復元・整備事業概要』　神戸市教育委員会

高倉浩一他　1981　『石鎚山古墳群』　広島県教育委員会・(財)広島県文化財センター

冨田和気夫　1988　「墳丘構築過程の復元」『丸山遺跡発掘調査報告書』　大潟町教育委員会

七田忠昭他　1992　『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第113集　佐賀県教育委員会

沼沢　豊・深沢克友・森尚登　1978　『佐倉市飯合作遺跡』　(財)千葉県文化財センター

沼沢　豊・深沢克友他　1977　『東寺山石神遺跡』　日本道路公団東京第一建設局・建設省関東地方建設局・㈶千葉県文化財センター

樋口吉文・野田芳正　1985　「速報・史跡百舌鳥大塚山古墳の発掘調査概要」『考古学ジャーナル』254　ニューサイエンス社

平岡正宏　　1994　『津山市大開古墳群・大開遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第51集　津山市教育委員会

北條芳隆　　1990　「2　墳丘築成における土壇の意味」『鳥居前古墳　総括編』　大阪大学考古学研究室

宮川　徙　　1979　「前方後円墳築造企画の「基準尺度」について」『橿原考古学研究所論集』第四　吉川弘文館

宮川　徙　　1985　「前方後円墳築造規格性の立体的観察」『末永先生米寿記念献呈論文集』　末永先生米寿記念会

吉留秀敏編　1991　『東光寺剣塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第267集　福岡市教育委員会

和田晴吾　　1989　「葬制の変遷」『古代史復元』6 古墳時代の王と民衆　講談社

第3節　捩文鏡（ねじもんきょう）の編年と製作動向

1．はじめに

日上天王山古墳第2石槨の捩文鏡の出土を契機に、仿製鏡製作の実態の一端を明らかにすることを目的として、鼉（だ）龍鏡を原鏡とする立場での捩文鏡の型式分類とそれに基づく編年を行う。その作業を通して古墳時代仿製鏡の製作動向の一端を窺い、日上天王山古墳鏡の位置づけを行うことにする[1]。

研究史を概観すれば、捩文鏡を古墳時代の仿製鏡として捉えたのは高橋健自であり（高橋1907:213、396頁）、その存在は小型仿製鏡としては早くに認識されていたと言えよう。そして捩文鏡を「綟形文鏡」と分類し、「…所謂獣形鏡の異形なりとす。」として原鏡について触れたのは富岡謙蔵である（富岡1920:375頁）。続く後藤守一も「捩形文鏡」として基本的に富岡の論を肯首したものと思われ、後の『古鏡聚英』では「捩り紐を細糸でくくったように見える」文様を主文とする鏡式に「捩文鏡」の名称を採用するに至る（後藤1942:33頁）。捩文鏡の原鏡について、小野勝年は長野県姥ヶ懐古墳出土鏡の分析において「盤龍鏡の便化したもの」の可能性を指摘した（小野1953:213頁）。それに対し、捩文鏡を正面から採り上げた伊藤禎樹は、捩文鏡が単に盤龍鏡の便化したものではなく、複数の鏡から抽象的に組み立てた新たな鏡式を創り出そうとする試みによるものと論じ、現在に続く捩文鏡の系譜の論議を方向づけた（伊藤1967:25頁）。さらに、伊藤は銅質と鋳上がり、鏡径と文様から3型式に分類し、基本的に鏡径の大から小へ、鋳上がりと銅質の良から劣への変遷を見出している。

一方、樋口隆康は捩文鏡の祖型として環状乳神獣鏡を挙げ、その獣形の胴部のみが抽出されたものから変化したと指摘してⅠ～Ⅴ型（以下、樋口分類と呼称する）を設定した（樋口1979:333頁）。この分類は現状の捩文鏡認識の基礎を為すが、後に小沢洋（小沢1988:89～96頁）は80面に及ぶ集成をもとに分析を試み、樋口分類の一部混乱を指摘して部分的な修正を加えている。樋口分類は広範に古鏡を集成し鏡式の整理を行う中で設定されたもので、その文献の性格上、文中よりⅠからⅤ型への進化論的な変遷を想定していることが窺われるものの具体的な編年作業は行われていない。

田中琢（田中1979:68頁・1981:36頁）は、樋口Ⅰ型を「獣文倭鏡」として捩文鏡とは区別し、環状乳神獣鏡から直接獣毛表現を抜き出したのではなく「単頭双胴怪獣倭鏡」（樋口分類の鼉龍鏡に相当）を介して「捩文倭鏡」が成立する事を指摘し、両者が大型・中型と小型の関係にあることを示した。これは、捩文鏡の系譜に対しての現状で最も説得力のある説明と考え、小稿もこの視点に基づく。小林三郎（小林1983:416頁）も、樋口Ⅰ型を仿製四獣文鏡として区別し、鼉龍鏡から変形したA型、盤龍鏡から変形したB型に分類し、捩文鏡の再定義を行っており、未だ捩文鏡の認識や分類についての意見は一致を見ていないようである。また、田中の見解を押し進めた車崎正彦（車崎1993:151頁）は鼉龍鏡の分析の中で、捩文鏡を鼉龍鏡の小型鏡として、鏡径による畿内政権の信任の度合いを見出すに至った。

これまでの研究は、捩文鏡の仿製鏡としての系譜論と分類型式の認定に重点が置かれてきたように思える。結果として、分類した鏡群の型式学的変遷の把握を目的とした資料操作は必ずしも十分でなく、編年的な研究はそれほど議論が深められていない。そこに新たに捩文鏡を論じる余地があると考える。小稿では樋口分類の捩文鏡の認識に従って集成を行い、121面を確認した[2]。その中で分析に足るだけ内容が知れたもの96面をもとに改めて外区と主文の分類を行い、各型式内での変遷を見ていくことにする。

2．分類

①分類の視点

捩文鏡の定義はひとまずおいて、樋口分類のⅠ～Ⅴ型に相当する鏡の外区と主文を改めて分類し、その相関から編年を試みる。その場合に小稿では、鼉龍鏡の図像をより小さな鏡径に納めたものが捩文鏡であるとした先述の田中・車崎の見解を肯首するとともに、先行している鼉龍鏡の研究を援用することにする。鏡径に大小がある場合、鏡式の諸要素の変化や脱落には時間経過による変化と鏡径の制約による省略が混在しており、これらを区別することが不可欠となる。つまり、より小型の鏡における図像の省略や要素の脱落は、必ずしも時間的新古に置き換えることができない。これらを小型の鏡である捩文鏡群に対してもあてはめることにする。したがって、時間的新古関係の把握には、鏡径の差異を越えた変化と、同等もしくはそれ以上の鏡径を持つ鏡間での個々の要素の変化と脱落を中心に扱う。捩文鏡の主文は単純で要素も少なくその変化は明瞭でない。それが編年的な研究が立ち遅れた原因でもあり、これを補うものとして外区の分類との相関を重視する。

②外区の分類

外区及び内区外縁(以下「外区」と表記)の主要構成は、集成表を概観すれば、複合鋸歯文および捩文帯を用いる鏡群(1群)と、鋸歯文＋凹線＋鋸歯文＋外区を画する段差＋櫛歯文(以下二重の鋸歯文に挟まれた凹線を「‖」、外区を画する段差を「¬」として外区構成を「鋸‖鋸¬櫛」と表記)を典型とし、その省略型式を含めた鏡群(2群)の、2つのグループに容易に大別できる。

外区1群を構成する複合鋸歯文(以下「複」と表記)は、単純な幾何学文で鏡径の大小に関わらず安定した文様で変化はほとんどない。15cm前後以下の舟木山27号墳鏡などの小形の鼉龍鏡に複合鋸歯文が用いられており、鼉龍鏡の本来の外区である菱雲文と置き換え可能な文様であることがわかる。複合鋸歯文自体は中国鏡にその起源を求めることができず、やや類似した文様に多紐細文鏡の外縁を挙げることができるが系譜的な関連は全く追えず、古墳時代の石製腕飾類等にも広く用いられる銅鏡に限定されない文様である。

捩文帯は、名本二六雄(名本1982:13頁)が指摘するように鳥文が変化した文様と考えられ、捩文鏡の主文である捩文とは起源が異なるとして良い。しかし、15cm以上の鼉龍鏡において鳥文は型式的な変化するものの鳥文の原型を保つのに対して15cm未満の鼉龍鏡のみが捩文帯を用いている事、小型の鼉龍鏡である辰馬鏡(田中1981)では捩文帯と鳥文帯を同時に用いる例がある事、捩文鏡においても御屋敷遺跡出土鏡はやや省略しつつも鳥文を用いている事から鳥文帯と捩文帯は直接時間的な先後関係にあるのではなく、捩文帯は鳥文帯の鏡径の制約による省略表現として並存していることがわかる。捩文帯には、平行線が描かれた隆起を区分する縦2本線が、「∬」状のⅰ類と、隆起が階段状の段差を持ち直線的な2本線に区分されるⅱ類、隆起が低く平面的で直線的な2本線に区画されるⅲ類が認められる。ⅰ類には前橋天神山古墳鏡、三ノ峯古墳鏡、築山古墳、ⅱ類には一宮天神山古墳鏡、伝都介野鏡や鼉龍鏡の辰馬鏡等がある。捩文帯ⅰ、ⅱ類の違いは時間的要素というよりも製作工人(集団)の違いと解した方が良さそうである。

外区1群では、「複捩」又は「捩」を基本とし、「複複」「鋸¬複」などの鼉龍鏡の「菱雲文」＋「鳥文」の構成から離れるものを新相とする。また、外区1群では圏界状の突起(以下、圏界と表記)を持つものが多く、鏡径の7.3cmの高津尾遺跡鏡でも圏界を持つことから、それ以上の鏡径で圏界を持たない

ものは鏡径による制約以外の省略として新相とみる。圏界斜面に鋸歯文を使うのは、前橋天神山古墳鏡、楢原寺山古墳鏡と御屋敷遺跡鏡のみでそれ以外は櫛歯文を用いる。外区１群対応の鼉龍鏡の圏界斜面には鋸歯文が使われており、前者のより鼉龍鏡に忠実な縮小を示すとともに、縮小表現としての櫛歯文の使用を見いだせる。

外区２群の典型である「鋸‖鋸¬」は、鋸歯文と鋸歯文の間に沈線を巡らし内側の鋸歯文に凸線を加え、段差付けて外区を画している[3]。これは、鼉龍鏡外区の鋸歯文＋複波文＋鋸歯文(以下「鋸複波鋸」と表記)の縮小表現であり、鏡径11.8cmと小形の鼉龍鏡である上大谷９号墳鏡に「鋸‖鋸¬櫛」が用いられているほか、捩文鏡である伝白石鏡に「鋸複波鋸」が用いられており鼉龍鏡と捩文鏡の間で置き換え可能な外区である事がわかる。このように見ていくと「鋸‖鋸¬櫛」に珠文帯を加えたものは、半円方格帯の縮小表現として、半円方格帯を充填する珠文を抜き出したものと見なすことができる。また、それ以外にも外側の鋸歯文を省いた「‖鋸¬櫛」や「鋸¬櫛」「¬櫛」などの様々な型式を認めることができる。相対的に鏡径が小さいものほど外区構成の省略が顕著であるが、鏡径が同じでも省略表現は必ずしも同様ではなく、時間的要素と鏡径による制約が混在している。これに対しては鏡径と外区構成の対比から鏡径に制約によるものでない省略表現を新相として扱い、外区２群の「鋸‖鋸¬」を外区２群１に、「鋸‖鋸¬」が姿を消すことを画期とした「鋸¬」系主体の時期を外区２群２と区分する[4]。

外区１群と２群の混在は弁天山Ｃ１号墳鏡のみで、両者が明瞭に分離していることを示す。弁天山Ｃ１号墳鏡の「鋸¬複‖」は複合鋸歯文が外区外縁に使用されない特異なものであり、複合鋸歯文に省略が見られる事と合わせて外区１群中の新相であることを示している。従って、外区１群と２群が時間的な新古を示すと仮定すれば外区文様において、外区１群が２群に先行すると言える。これは、車崎の鼉龍鏡分析による外区変遷を認めるならばより明確となる(車崎1993:135～139頁)。外区１群は鼉龍鏡の菱雲文と鳥文に対応し、外区２群は鼉龍鏡の「鋸複波鋸文」に対応し、外区１群が２群に先行するとみなすことができる。この外区１群から２群への変化は、編年上の大きな画期となる。

③主文の分類

小沢の試み(小沢1988:92～93頁)によって樋口分類が増加した類例に対しても十分適用可能であることが既に確認されており、樋口分類での個々の型式認識を基本的に肯首したい。しかし、樋口分類は先述したように環状乳神獣鏡を捩文鏡の原鏡とする立場の分類であり、小稿では捩文鏡の原鏡を鼉龍鏡と認識することとから、それに基づく基本分類としてＡ～Ｄの４型式の分類案を提示する[5]。

Ａ型式　鼉龍鏡の内区外縁の獣毛表現を抜き出したものであり、樋口分類のＩ型に相当する(第42図－１)。獣毛表現そのままのａ類(第43図－１、２、４)と、様式化を進めたｂ類(第43図－３)の２系統が認められる。

Ｂ型式　鼉龍鏡の長い獣形の胴部(以下鼉龍胴部)表現を抜き出したもの(第42図－２)。Ｂ型式は細長い半肉彫りの隆起をもち、その隆起に沿った平行線の束をほぼ直交する縦方向の２本線で縛るような表現を基本とする。これは、乳に挟まれた細長い隆起上の平行線の束の中央付近に縦２本線を持つａ類(第43図－６)と、縦２本線に両側を挟まれた珠文列(第42図－３)を持つｂ類(第43図－７)、そして０乳で環状の隆起上の平行線の束を縦２本線で縛る表現を繰り返すｃ類(第43図－８)に分類できる。樋口分類Ⅱ・Ⅲ型に相当する。

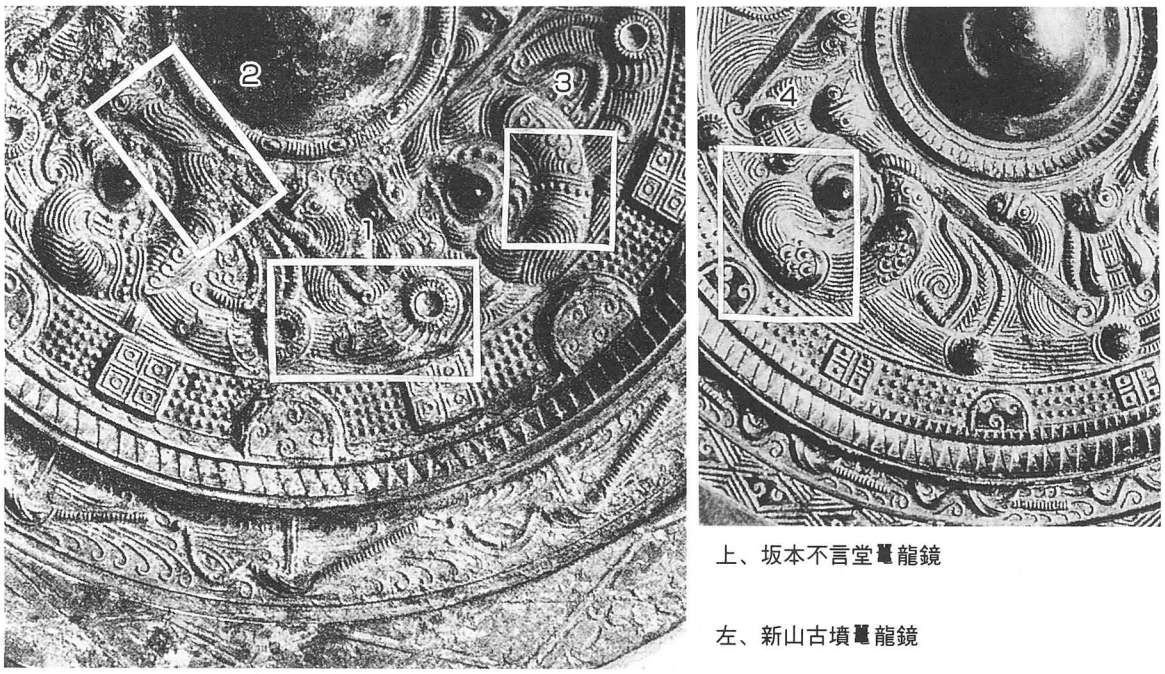
Ｃ型式　鼉龍胴部下半の節状の表現を抜き出したもの。(第42図－４)平行線をもつ短い隆起の一端は

	県名	古　墳　名	鏡径	乳の数	外　区	分類	内区	小分類	文　献
1	岡山	楢原寺山古墳	13.8	4(4)	複圏鋸半円方	1	A	a1	樋口　1979
2	群馬	前橋天神山古墳	13.1	4(2)	捩・圏鋸	1	A	a1	樋口　1979
3	不明	東京国立博物館A	12.3	4(2)	複圏櫛	1	A	a2	樋口　1979
4	香川	川津茶臼山古墳	12.2	4(4)	複捩圏櫛半円	1	A	a3	松本他1983
5	不明	五島美術館	10.8	4	方捩圏櫛	1	A	b1	田中　1979
6	兵庫	御屋敷遺跡	9.7	4	複鳥圏櫛	1	A	b2	西谷　1992
7	福岡	桜ヶ丘古墳		4	複捩圏櫛	1	A	b3	児島他1973
8	京都	三ノ峯古墳	13.2	4	捩圏櫛‖櫛	1	B	b1	京都府1987
9	大分	築山古墳	11.4	4	複珠捩圏櫛	1	B	a1	賀川他1968
10	和歌山	伝紀伊国	11	0	複複珠圏櫛	1	B	c1	樋口　1979
11	岡山	一宮天神山古墳	10.4	0	複捩圏櫛	1	B	c1	鎌木　1986
12	岡山	日上天王山古墳	7.9	0	複‖	1	B	c2	本　書
13	長野	県山古墳	7.8	4	複櫛圏櫛	1	B	b2	岩崎　1988
14	福岡	高津尾遺跡17号石棺	7.3	0	複圏櫛	1	B	c1	北九州1990
15	奈良	伝都祀村白石	12.8	4	鋸複波鋸¬櫛	2	B	a2	樋口　1979
16		久保惣五鈴鏡	11.4	4	鋸¬櫛圏鋸鋸	2	B	b2	和泉市1985
17	福岡	鋤先古墳	9.7	6	鋸¬櫛圏櫛	2	B	a2	柳沢　1984
18	和歌山	岩内３号墳	9.3	4	鋸‖鋸¬櫛‖	2	B	b3	巽他　1980
19	山口	阿多田古墳	9.2	0	¬櫛珠	2	B	c3	平生町1979
20	千葉	俵ヶ谷４号墳	8.8	5	鋸¬‖櫛	2	B	a2	小沢　1988
21	山口	妙徳寺古墳	8.4	4	‖鋸¬櫛珠	2	B	b3	山口県1991
22	岐阜	行基寺古墳	8.4	0	櫛‖櫛‖	2	B	c1	楢崎　1972
23	長野	川柳将軍塚古墳A	8.1	0	鋸¬櫛珠	2	B	c4	岩崎　1988
24	香川	円養寺C地区古墳	8	0	¬櫛‖	2	B	c5	松本他1983
25	奈良	ガクオン寺古墳	8	4	鋸‖櫛珠	2	B	a3	網干　1965
26	奈良	伝南生駒	8	6	鋸¬櫛‖珠	2	B	b3	樋口　1979
27	愛媛	三角１号墳	8	4	鋸¬櫛	2	B	a2	西田　1986
28	韓国	皇南里	8	4	鋸¬櫛‖珠	2	B	b3	後藤　1942
29	京都	平尾山の古墳	7.9	6	鋸¬櫛‖珠	2	B	b3	京都府1987
30	香川	北浦山古墳	7.9	0	鋸¬櫛‖	2	B	c4	松本他1983
31	福岡	老司古墳	7.8	0	¬櫛‖	2	B	c3	山口他1989
32	滋賀	新開１号墳	7.3	5	鋸¬櫛‖圏櫛	2	B	a2	樋口　1979
33	香川	毘沙門山古墳	7.2	0	¬櫛‖	2	B	c3	松本他1983
34	佐賀	谷口古墳B	7.2	4	鋸¬櫛	2	B	a3	亀井他1982
35	鳥取	郡家	7.1	0	鋸¬櫛	2	B	c4	樋口　1979
36	鳥取	長瀬高浜遺跡	7.1	0	鋸¬櫛	2	B	c4	田中　1979
37	栃木	上侍塚	7	0	鋸¬‖	2	B	c3	斉藤他1986
38	広島	神宮山の古墳	6.8	0	¬櫛‖	2	B	c3′	広島県1993
39	奈良	的場池３号墳A	6.1	4	櫛珠	2	B	b4	樋口他1992
40	岐阜	出目地山古墳	6.1	0	櫛	2	B	a3	楢崎　1972
41	群馬	伝高崎市	約25	0	¬櫛‖	2	B	c4	相川　1933
42	愛知	車塚古墳	10.2	0	複圏櫛‖	1	C	a1	岩野　1977
43	奈良	伝都介野　不明		4	複捩圏櫛珠	1	C	a1	樋口　1979
44	奈良	新沢千塚48号墳B	12.4	4	¬櫛珠	2	C	c2	樋口他1992
45	愛知	出川大塚古墳	12.1	4	鋸波鋸¬櫛擬銘	2	C	a2	後藤　1942
46	愛知	栗林古墳	11.8	4	鋸‖鋸¬櫛珠‖	2	C	a2	斉藤他1989
47	群馬	長瀞西	11.3	4	鋸¬櫛‖珠	2	C	(a)	東博　1983
48	長野	長谷八幡古墳	11.2	4	鋸‖鋸¬櫛珠	2	C	a2	岩崎　1988
49	鳥取	小波字下原田　不明	10.9	0	鋸¬珠櫛鋸	2	C	c1＋	梅原　1924
50	山口	赤妻古墳	10.9	4	鋸‖鋸櫛‖	2	C	b1＋	樋口　1979
51	京都	大谷古墳	10.8	4	鋸¬櫛‖珠	2	C	a2	京都府1987
52	福島	会津大塚山古墳北棺	10.3	0	鋸‖鋸¬櫛	2	C	a2	藤原他1994
53	京都	愛宕山古墳	10.2	0	鋸‖鋸¬‖	2	C	(a)＋	京都府1987
54	山形	お花山古墳	9.5	0	鋸複波	2	C	a3	山形県1985
55	大分	重光古墳	9.5	4	鋸‖鋸¬櫛	2	C	a2	賀川　1961
56	東京	伊興遺跡	9.3	0	鋸¬櫛	2	C	c2	大場他1975
57	岡山	殿山11号墳	9.3	4	櫛珠	2	C	a3	平井　1987
58	奈良	火野谷山２号墳	8.8	4	鋸¬素	2	C	b1	樋口他1992
59	奈良	的場池３号墳B	8.7	8	鋸‖	2	C	c3′	樋口他1992
60	千葉	島戸境１号墳	8.5	4	鋸‖鋸¬櫛珠	2	C	a2	平山他1993

第２表　捩文鏡集成（1）

61	静岡	陣座ヶ谷古墳	8.4	4	鋸‖鋸¬櫛	2	C	d	小林　1983
62	不明	東京国立博物館B	8.4	4	鋸‖鋸¬櫛	2	C	d	小林　1983
63	広島	上定27号墳	8.3	4	鋸‖櫛	2	C	c3′	広島県1993
64	佐賀	谷口古墳A	8.3	4	鋸¬櫛	2	C	a3	亀井他1982
65	京都	牛廻古墳	8.2	4	鋸¬櫛（珠）	2	C	a3	京都府1987
66	香川	黒岩古墳	8	4	鋸¬櫛	2	C	a2	松本他1983
67	島根	奥才34号墳	7.8	4	鋸¬櫛圏櫛	2	C	(a)	久保　1989
68	神奈川	加瀬白山古墳	7.5	4	¬櫛‖	2	C	a3	松本　1953
69	広島	御堂西２号墳	7.4	4	鋸（　）	2	C	c3′	広島県1993
70	千葉	下方丸山古墳	7.2	4	鋸¬櫛‖	2	C	a3	東博　1986
71	京都	伝山城南部	7.2	0	鋸‖鋸¬櫛	2	C	a2	京都府1987
72	大分	船岡山古墳	7.1	0	¬櫛‖	2	C	b2	大分県1989
73	長野	更級郡内	6.9	0	¬櫛	2	C	c1	岩崎　1988
74	広島	大久保古墳	6.9	4	鋸¬（　）	2	C	c2	広島県1993
75	長野	川柳将軍塚古墳B	6.8	4	鋸櫛‖	2	C	c1	岩崎　1988
76	奈良	新沢千塚48号墳A	6.8	0	鋸¬	2	C	c2	樋口他1992
77	兵庫	敷地大塚古墳	6.7	0	鋸¬櫛珠	2	C	a3	西谷　1992
78	滋賀	斗西遺跡河道跡	6	4	¬櫛‖	2	C	b2	能登川1993
79	大阪	弁天山C１号墳	10.8	4	鋸¬複‖	1	D	a	原口他1973
80	長野	矢先山古墳	6.8	4	複¬櫛	1	D	a	岩崎　1988
81	長野	姥ヶ懐古墳	12.2	4	鋸‖鋸¬櫛珠	2	D	a	岩崎　1988
82	兵庫	万籟山古墳	12.2	4	鋸‖鋸¬櫛‖	2	D	a	直営　1975
83	岐阜	前山古墳	11.7	4	鋸‖鋸¬櫛珠	2	D	b	樋口　1979
84	埼玉	江川山古墳	11	4	鋸‖鋸¬櫛	2	D	b	埼玉県1984
85	群馬	稲荷塚古墳	10.6	5	鋸‖鋸¬櫛	2	D		群馬県1980
86	鳥取	馬山13号墳	10	6	鋸‖鋸¬櫛‖	2	D	b	山陰　1978
87	鳥取	勝見17号墳	10	0	櫛‖珠文帯	2	D	a′	鳥取県1986
88	大阪	北玉山古墳	10	4	鋸‖鋸¬櫛	2	D	b	井藤　1966
89	千葉	下方丸山古墳	9.5	4	‖鋸¬圏櫛	2	D	a	東博　1986
90	兵庫	久良部１号墳	9.2	5	鋸‖鋸¬櫛珠	2	D	b	西谷　1992
91	熊本	五反田古墳	8.9	0	鋸¬櫛圏櫛	2	D	(a)	小林　1983
92	広島	馬場谷２号墳	8.6	7	鋸¬櫛圏櫛	2	D	a	広島県1993
93	岡山	焼山古墳	6.9	8	鋸¬櫛	2	D	a′	伊藤　1967
94	福井	足羽山龍ヶ岡古墳	6.6	0	鋸¬櫛‖	2	D	(a)	斉藤　1960
95	長野	川柳将軍塚古墳		4	鋸¬櫛	2	D	a	後藤　1942
96		古鏡聚英六鈴鏡		4	鋸‖櫛‖	2	D	a	後藤　1942
97	高知	曽我山古墳	10.4		複‖圏櫛	1	欠損		森　1954
98	愛知	伝名古屋市大夫町	9.5	4		2			小林　1983
99	岐阜	佐波古墳	8		鋸‖鋸¬櫛	2	不明		楢崎　1972
100	愛媛	柳ヶ谷古墳	7	4	鋸¬	2	不明		西田　1986
101	愛媛	大塚穴古墳群(坂戸)	6.4	0	櫛	2	不明		門田　1973
102	静岡	若王子１号墳	6	0		2			藤枝市1983
103	京都	私市丸山古墳		4	鋸¬櫛珠	2			樋口　1991
104	三重	向山古墳	23						後藤　1923
105	愛知	伝味鋺神社	不明						小栗　1935
106	岡山	川面　不明	不明						樋口　1979
107	福井	小羽山12号墳	11.2						古川　1992
108	愛知	兜山古墳	9.4	4					小栗　1930
109	愛知	三ツ山２号墳２主体	8.9						萩野　1980
110	佐賀	伝　一本松古墳	8.9						志佐　1977
111	岐阜	伝瀬田　不明	8.5						白石他1994
112	三重	丹那山古墳	8.2	4					小林　1983
113	岐阜	天神森古墳	7.8	6			欠損		楢崎　1972
114	三重	野添古墳	7.8						鈴木　－
115	宮城	吉之内１号墳１主体部	7.5						藤沢他1992
116	千葉	島戸境１号墳	7.5	0			不明		平山他1993
117	三重	伝岸岡山	6.8	4					三重県1954
118	大分	下ヶ迫	6.8				不明		大分県1989
119	宮城	南小泉遺跡SD01	6.7						白石他1994
120	鳥取	田川及び百塚原　不明	6.7						野田　1983
121	大分	高森赤塚付近	6.7	5					小林　1983

第３表　捩文鏡集成（2）



上、坂本不言堂鼉龍鏡

左、新山古墳鼉龍鏡

第42図　鼉龍鏡における捩文鏡原図像

節状に高く強調されその上に弧線をもち、もう一端は低く平行線の延びる房状の表現を基本とする。この型式は、長さの短い隆帯に平行線の束を持つａ類(第43図－９､10)、隆起の長さがさらに短くなって隆起上に平行線をもつ三日月形になるｂ類(第43図－11)、さらに平行線が失われ三日月形の隆起のみとなるｃ類(第43図－12)に細分できる。樋口分類Ⅳ型に相当する。

Ｄ型式　鼉龍鏡の図像を直接抜き出すのではなく、鼉龍胴部の節状表現を抽象的に文様化したもの。細長い弧状の隆起とそれに沿った弧状の２本線の組合せを連続して羽根車状を呈す(第43図－13､14、15)。樋口分類のＶ型に相当する。

従来の分類と異なる部分があるので補足しておきたい。まずこの基本分類案には樋口Ⅲ型に相当する分類がない。これは各型式が鼉龍鏡のどの部分を抜き出したものかを重視したためであり、樋口Ⅲ型はⅡ型式と同じ鼉龍胴部表現から派生していると考え、これを重視して樋口Ⅲ型をⅡ型の０乳と解釈してＢ型式としてまとめて扱っている。また、森下章司による分類(森下1991)ではＣ型式を房文鏡(Ｃ型式のａ類相当)と三日月文鏡(Ｃ型式のｂ・ｃ類相当)に区分しているが、隆起の長さが短くなって三日月型に変化することと、房状に平行線が隆起の外にでる傾向から連続性を見出せることから、それらを一つの型式組列として扱っている。

４．分類と編年

外区分類と主文の基礎分類をもとに、各型式を詳述していく事にする。

Ａ型式　主文は先述したように鼉龍鏡の獣毛表現をもとにしたａ類とｂ類の２系統が認められる。その区分を越えた共通の要素に乳があり、環状の乳(１類乳)、環状の乳の中に弱い突起をもつ２類乳、周囲に放射状の線を持つ円錐状の乳(３類乳)そして一般的な円錐乳(４類乳)がある。１類乳の類例には前橋天神山古墳鏡(第43図－１)、五島美術館鏡、御屋敷遺跡鏡(第43図－３)があり、御屋敷遺跡鏡は乳に接する羽根状表現が弱くその中で新相を示す。２類乳には川津茶臼山古墳鏡(第43図－４)と桜ヶ丘

古墳鏡があるが、羽根状表現が小さく、隆起が扁平であることから、2類は1類より後出と考えられる。3類は乳の周囲に放射状の線をもち、1・2類と系統を異にするが、3類乳は楢原寺山古墳鏡(第43図－2)以外に前橋天神山古墳鏡でも確認されており、1類乳に並行することが知れる。

次に乳の配置を問題にすると、主文は基本的に4単位で獣毛表現に付属した4乳が基本である。この配置をとらないものは、3類乳に付属する獣毛表現中に1類乳をもつ前橋天神山古墳鏡と、獣毛表現以外に4類乳を4つ持つ楢原寺山古墳鏡、川津茶臼山古墳鏡がある。これは、鼉龍鏡の4乳と内区外縁の獣毛表現の忠実な縮小表現を試みた結果とみられる。B～D型式中に類例はなく、原鏡に忠実で普及しない試みという点で捩文鏡創作初期のいくつかの試みの結果として製作されたものと考える。整理すると、a類は、1、3類の乳を持ちなおかつ変則的な配置を持つ前橋天神山古墳鏡・楢原寺山古墳鏡がA型式で最古相(a1)を示し、東博A鏡が後続し(a2)、2類の乳を持つ川津茶臼山鏡へと繋がる(a3)。また、b類は1類の乳を持つ五島美術館鏡(b1)、御屋敷遺跡鏡(b1)から、2類乳の桜ヶ丘古墳鏡(b2)と続くことがわかる。

また、A型式の外区は1群のみであり、複合鋸歯文と捩文帯の組合せを基本とする。型式内最小の御屋敷遺跡鏡でも複合鋸歯文と鳥文が用いられ、鏡径の小型化による外区構成の省略は明確でないが、b類がそろってa類より小型であるのは注目して良い。五島美術館鏡では、菱雲文の変形した格子状の文様が用いられており、類例としては鼉龍鏡の甲斐銚子塚古墳鏡(上田1931)と辰馬鏡の菱雲文が挙げられ、菱雲文から複合鋸歯文への置換の認識過程を示している。また、A型式はいずれも圏界状の突起を持つが、前橋天神山古墳鏡と楢原寺山古墳鏡、御屋敷遺跡鏡だけは他のA型式が圏界斜面に櫛歯文を用いるのに対して鋸歯文を用いており、外区1群対応の鼉龍鏡の圏界斜面の鋸歯文の使用と対応していることからも、より鼉龍鏡的要素を強く持つことを裏付ける。

B型式　三の峯古墳鏡(第43図－5)の多数の珠文は鼉龍胴部の鱗状文を模したものであり、型式内で大きめな三の峯古墳鏡や伝白石鏡、伝紀伊鏡には半肉彫りの隆起の一端を節状に強調し、もう一端が流れるように低くなるなどの胴部表現を残している。つまり、B型式は獣毛表現の変形ではなく鼉龍胴部の表現を抜き出したものであり、A型式と型式組列を別にしており、直接には型式的な前後関係を持たない。B型式は先述したようにa、b、c類の3系統を認めることができる。

a類の表現は既に鼉龍鏡最古型式と指摘される新山古墳鏡(梅原1921b)[6]の鼉龍胴部表現に既に見出すことができるが、a類における外区1群の類例は築山古墳鏡だけである。しかも捩文帯はi類だが主文も同様の形状(a1)をもち、外区は複合鋸歯文と捩文帯の間に珠文帯をもつ類例のないものであり、原鏡から離れていることから新相と評価したい。外区2群においては、鼉龍胴部表現を残す伝白石鏡の「鋸複波鋸」を「鋸‖鋸¬」に対応するもの(a2)として理解できるが、「鋸‖鋸¬」そのものは確認できない。C型式に鏡径8.4cmまで「鋸‖鋸」を用いるものが多数あるのと対照的である。a類の鋤崎古墳鏡が9.7cmと比較的大型で圏界を持つにも関わらず「鋸¬」を使用するなど先の伝白石鏡との間にやや断絶が伺えるようである。主文の型式変化は乏しく、主文に弱い渦流表現をもつ俵ヶ谷古墳鏡(第43図－6)や、鏡径は7.3cmと小さくとも圏界を含めた多重の外区を持つ新開1号墳鏡などの隆起の明瞭なもの(a2)からガクオン寺古墳鏡や出目地山古墳鏡のように隆起がほとんどなく4本前後の平行線と縦2本線のみのもの(a3)への変遷が伺える。

b類の外区1群では、鱗状表現を持つ三の峯古墳鏡が、前橋天神山古墳鏡と同様な捩文帯i類を外縁に用いることから古相と位置づけることができる。その他には、平行線の束に直交する縦2本線に挟ま

れた１列構成の珠文列(b2)をもつ県山古墳鏡ある。捩文鏡中で唯一の三角縁をもち、外区の「複櫛」の構成からも新相と言える。外区２群では岩内３号墳が「鋸‖鋸」を用いており外区２群でも古相である。その主文は珠文が１列と２列のものが組み合わされており(b3)、これが「‖鋸¬」の妙徳寺古墳鏡、「鋸¬」系の平尾山鏡など、より新相のものに継続的に用いられている。これは先の県山古墳鏡の構成と異なり、これらは、新山古墳鏡などの胴部珠文列(第42図－3)をそのまま抜き出したのではなく、あらたに鱗状文の縮小表現を創出したものと見なして良いであろう。その点から外区１群から２群への移行にはやや断絶が伺える。２列構成の珠文列を持つものは基本的に類似したものが多く、特に平尾山鏡と伝南生駒鏡(第43図－７)は酷似しており、皇南里出土鏡も「鋸¬櫛‖珠」と同様の外区や同じ乳を用いており、特定の工人(集団)の製作を見出すことが可能である。ｂ類の型式変化は顕著ではなく、珠文が１列のみで隆起が明確なもの(b2)から珠文の２列構成を含み隆起がひくく平行線が５本前後のもの(b3)へ移行する。さらに最も小型な的場池３号墳ではさらに隆起が低く平行線も三本での１列構成(b4)を見出すことができる。珠文列の使用は、後述するｃ類の日上天王山古墳鏡の斜行した珠文列を唯一の例外としてＢ型式ｂ類(Ｂｂ型式と以下表記)に限定されている。なお久保惣五鈴鏡は外区構成が「鋸¬櫛圏鋸鋸」と異なることから他の大部分と同一系統の工人集団の製作と捉えるのは困難であり、鈴鏡としての別系統の製作を考えるべきであろう。

ｃ類は、外区１群のものが４面と多く、一宮天神山古墳鏡が「複捩」の基本構成を保ち、捩文帯ii類を用いることから古相と位置づけられるなど、Ｂ型式の製作開始時には主体的な存在であったと考える。伝紀伊鏡は複合鋸歯文を２重に巡らせ龜龍鏡の縮小表現から逸脱し新相である。なかでも、今回の分析契機となった日上天王山古墳鏡は、より小型の高津尾遺跡鏡と比べても圏界状突起を持たず外区の省略が著しく新相であり、外区１群の中でも幅があることがわかる。また、Ｂｂ型式以外で珠文列を用いる例外的な存在であり、１列構成の斜行した珠文列(c2)の唯一の例でもあり、これ以外にｃ類中に珠文列を持つ例がないことから、外区１群最新相での試作品的なものとみなすことができよう。外区２群の主文は行基寺古墳など隆起が明確なもの(c1)から川柳将軍塚古墳鏡Ａや長瀬高浜遺跡鏡などの隆起がほとんどなく平行線と縦２本線だけのもの(c4)への移行が見いだせる。Ｂ型式自体に「鋸‖鋸¬」が少なくＣ型式と様子が異なるが、ｃ類の外区構成には特に「¬櫛」系が目立つ。c3をもつ「¬櫛」の阿多田古墳鏡、毘沙門天古墳鏡、老司古墳鏡などは、後述するＣ型式での外区変遷を適用するならば、c4で「鋸¬」を用いる郡家鏡や長瀬高浜遺跡鏡、川柳将軍塚古墳鏡Ａとほぼ同時期で、主文の違いは鏡径の制約による省略として外区２群２として理解は可能である。しかし、「鋸‖鋸」の特殊な省略とみられる「櫛‖櫛‖」をもち、圏線を区画する縦２本線をもつ行基寺古墳鏡や、円養寺Ｃ地区古墳鏡の主文は明らかに古相であるにもかかわらず「¬櫛」系を用いるのは異質である。「鋸‖鋸¬」の省略系としてではなく、他の小型の内行花文鏡などの素縁の「¬櫛」系の使用を考慮すべきかも知れない。円養寺Ｃ地区古墳鏡(第43図－８)は環状隆起の２ヶ所に鱗状表現を持つが、先の三の峯古墳鏡が珠文群のみで表現するのに対して波線と珠文を用いており、より龜龍鏡的要素をもつことからも両者が系譜的に繋がらないことを付け加えておく。つまり、型式的に外区２群１が欠落しているわけである。

最後にＢ型式の鏡径を概観すると、外区１群の７面は８cmを境として大小が明瞭に認めらる。外区１群では鏡径に大小の違いのある鏡を意識的に生産していたことがわかる。外区２群では伝白石鏡と久保惣五鈴鏡だけが突出し、他は9.7～6.1cmまでのばらつきがあるが明確に造り分けている様子は窺えない。ただし、同じ小分類でも鏡径には大きなばらつきが認められ、鏡径が全体的に小さくなる傾向を

認めることができる[7]。

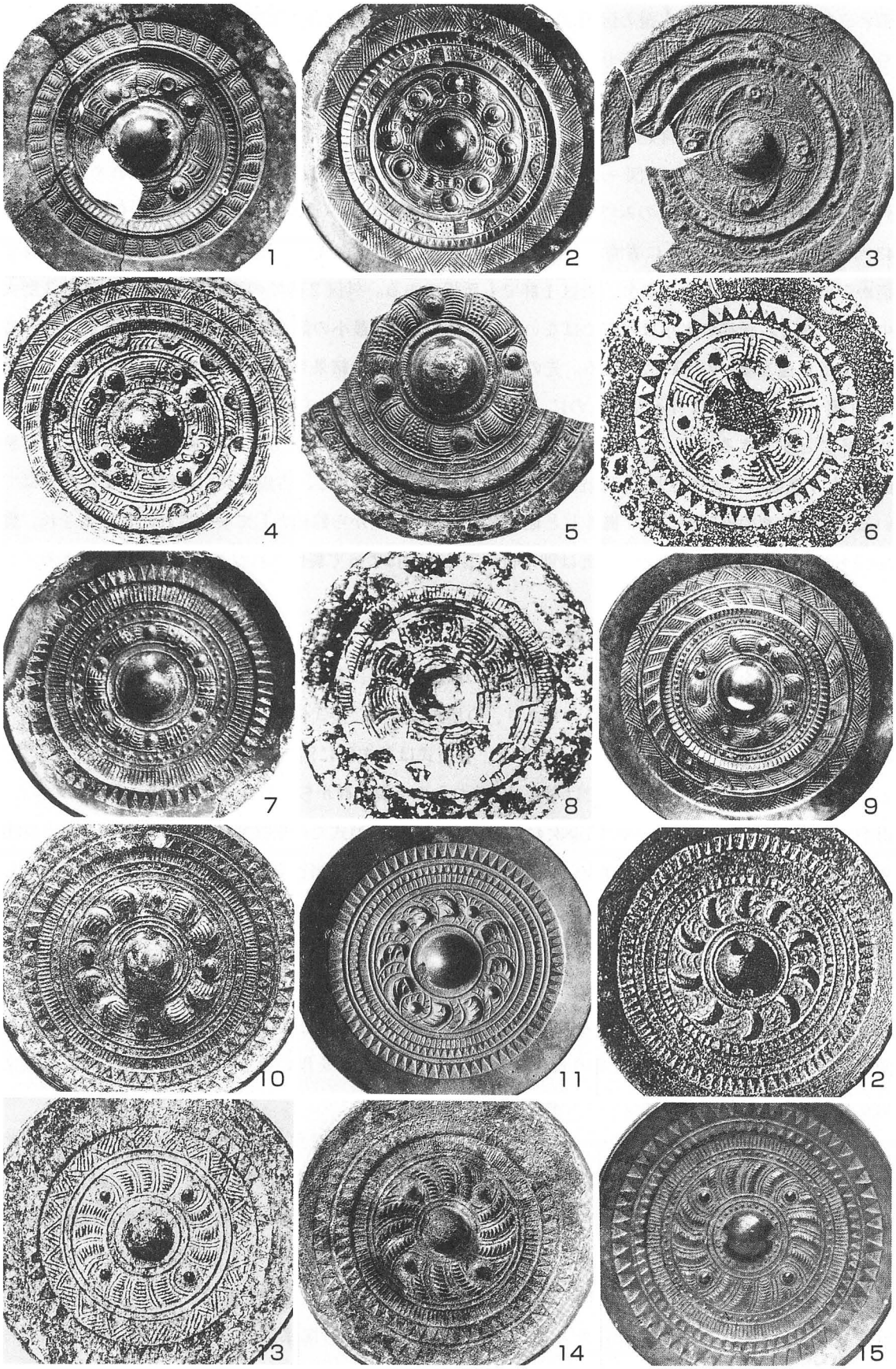
C型式　鼉龍胴部の表現を節の所から切り取ったものであり、伝都介野鏡(第43図－9)をその初期のものと認めえるならば、主文はまさしく房状を呈し、B型式を介して派生していないことがわかる。主文の隆起の形状によりa、b、c類に分類できるが、房状の表現をもつ隆起が長さを減じて楕円形を経て三日月形への変遷として一系列に扱うことができる。a類のなかでも、明確な隆起上の平行線束による長い房状表現をもつa1(第43図－9)と、より模式化が進んで隆起の一端が節状に高く節状に縦2本線をもち、隆起の上に房状の平行線をもつa2(第43図－10)と、隆起の長さを減じてその一端は丸くなり節状の線がなくなるとともに房状の表現が隆起の外に出てクラゲ状を呈する(a3)に細分できる。これらは様式化が進み隆起の長さが短くなる傾向を見い出すことで、a1→a2→a3への変遷を追える。b類も三日月形の隆起に平行線をもち弧線を組み合わせるb1(第43図－11)と弧線を持たないb2に、c類も三日月形の隆起に弧線を組み合わせたc1、弧線のないc2(第43図－12)、さらに細くなった三日月形の隆起を持つc3、c3の変形で対向するものをc3'として細分できる。

以下、外区変遷と照合することで検証していくことにする。B型式よりも類例が多いにも関わらずC型式の外区1群は2面と少ない。しかしながら、伝都介野鏡は鼉龍胴部端の房状表現を抜き出しており、外区構成も「複捩」と鼉龍鏡から逸脱せず古相で、捩文帯ii類を用いている。車塚古墳もa1であり、a1は外区1群に対応する。外区2群では「鋸波鋸¬」を用いる出川大塚古墳や「鋸‖鋸¬」を用いるものは全てa2であり、近似した鏡径でのa1からa2への変遷が外区変遷と対応することを確認できる。なお鏡径が11.8～8.4cmまでのものに「鋸‖鋸¬」が集中するが、鏡径7.2cmの伝山城南部鏡でも「鋸‖鋸¬」でa2を用いていることから、a3がa2の鏡径の制約による省略ではなく、a2からa3への時期的な変遷を示すことがわかる。a類からb類への移行は、a3が鏡径9.5cm以下の「鋸¬」系に集中し、またb1の赤妻古墳鏡の外区が「鋸‖鋸」でありながら内側の鋸歯文が小さく、内区との段差をほとんどもたない新相であり、a3とb1が外区変遷においてほぼ並行することからその連続性を確かめられる。b2では鏡径も7.1cm以下とさらに小型化し「¬櫛」系の素縁を用いている。c類の下原田鏡は三日月形の隆起の間に平行線をもっており(これを「＋」と表記)、b類の三日月形の隆起上の平行線が省略されて隆起の外に出たものとして、b類とc類の繋がりを理解できるであろう。これがさらに変容したc3およびc3'は系列的に繋がることは理解できるが、もはや原鏡である鼉龍鏡の面影はない。しかし、三日月形が対向するc3'の原型はb類の赤妻古墳鏡に既に見い出せる。このように、外区構成の変遷と主文の変遷は鏡径差を越えてほぼ一致をみる。また、d類とした鱗状表現をもつ陣座ヶ谷古墳鏡と東京国立博物館鏡Bは、多数の珠文を持つ鱗状文と乳の下に珠文を配する点で特異であるが、鏡径、外区及び乳の下に珠文列をもつ点まで酷似している。これらは、外区が「鋸‖鋸¬」でありa2と時間的に並行するものと考えておきたい。

乳の数は、末期的なc3'と的場池3号墳B鏡の8乳を例外とすれば、基本的に0及び4に揃い、B型式の行基寺古墳等に窺われたような異質な外区構成は確認できなかった。鏡径については、外区1群の状況が不明だが、2群では明瞭な区分は不明ながらa2に限れば鏡径11.8cmの栗林古墳鏡から7.2cmの伝山城南部鏡まであり、同時期に大小の鏡径を製作していたことが推測できる。

D型式　鼉龍鏡の表現を直接抜き出したものではなく、胴部の平行線が描かれた隆起をより抽象的にしたものである。その主文は一部の例外を除けば極めて斉一的である。

例外となるのは、勝見17号墳鏡で「¬櫛」に珠文群帯を加えるという特殊な外区構成をもち、珠文



A型式（1．前橋天神山古墳、2．楢原寺山古墳、3．御屋敷遺跡、4．川津茶臼山古墳）B型式（5．三ノ峯古墳、6．俵ヶ谷4号墳、7．伝南生駒出土、8．円養寺C地区古墳）C型式（9．伝都介野出土、10．栗林古墳、11．赤妻古墳、12．下原田出土）D型式（13．弁天山C－1号墳、14．万籟山古墳、15．前山古墳）

第43図　捩文鏡の分類

帯と二重の圏線を貫く２本線の区画が４ヶ所あり、類例としてはＢｃ型式の行基寺古墳が挙げられる。もう一つの例外は焼山古墳であり、「鋸¬櫛」ながら主文の隆起がほとんどなく、伴う弧線も１本と省略が進んでおり、同型式内での最新相に位置づけることができる。

それ以外は羽根車状の隆起の向きと、乳の下の凸線が逆Ｌ字形のａ類（第43図－13、14）と横や縦の線を組み合わせたｂ類（第43図－15）とがきれいに対応しており、型式において明確な２群を形成する。外区１群を用いるのはａ群のみで、その先行とともに鏡径の大小が確認できる。弁天山Ｃ１号墳鏡（第43図－13）は先述したように省略した複合鋸歯文が用いられ、矢先山古墳も圏界状の突起をもたず鼉龍鏡から離れた外区を用いており、外区１群でも新相である。外区２群での鏡径は平均約10cmと３型式中１番大きく、鏡径の大小は明瞭ではないが、鏡径6.6cmと最小の龍ヶ岡古墳鏡でも「鋸¬櫛‖」と省略があまり進まないのが特徴である。先のＣ型式の外区分析の結果を用いるならば、より大型のものに「鋸‖鋸¬」を用い、より小型のものに「鋸¬」系を用いることから、外区２群２での小型化の傾向を認めることができる。ａ、ｂ類ごとに細かい部分まで似ており、同一もしくは極めて限られた工人（集団）により連続的に製作された可能性がつよい。それから考えると、古鏡聚英六鈴鏡は主文は他と似ているものの、その外区が「鋸‖櫛‖」と他と異なっている点から鈴鏡として製作されたと推測され、勝見17号墳鏡と同様に大多数のものとは別系統の工人集団によって製作されたと見るのが妥当であろう。

５．まとめ　－捩文鏡の年代観と製作動向－

各型式の関係を整理すると、Ａ型式は鼉龍鏡の獣毛表現を、Ｂ型式は鼉龍胴部表現を、Ｃ型式は鼉龍胴部下半の節状表現を抜き出したものであり、Ｄ型式はＡ～Ｃ型式に見られた縦２本線と平行線の束の図像をより抽象的にしたものである。つまり、各型式は基本的に別々の図像を用いており、「捩文鏡」と呼ばれる鏡式は一つの図像からではなく、いくつかの小鏡式群から成る鏡式と言える。そう考えると、田中、小林（田中1981:36頁、小林1983:416頁）の指摘するＡ型式だけを捩文鏡と区別して扱うことは鏡式の認識の上で必ずしも妥当ではないことになる。その名称の妥当性を別にすれば、鼉龍鏡を原鏡とした小型仿製鏡創作の一連の試みとして「捩文鏡」をとらえ直すことができるであろう。あえて名称に意味を与えるならば、Ａ～Ｄ型式までの、平行線を束ねた表現をもつ隆起とそれを縛るような縦２本線が一貫して主文の基調となっている点を指摘できる。鼉龍鏡を原鏡としてその一部を抜き出して主文とする点から言えば、獣首鏡も鼉龍の頭部表現を抜き出して創られた小型仿製鏡である。しかし、京北愛宕山古墳では12.6cmの鏡径でありながら「菱雲文¬櫛歯文」を用いるなど、外区構成の約束が捩文鏡と異なることには注意を払うべきであろう。

各型式の相対年代をまとめると、環状乳やより原鏡に忠実なＡ型式ａ類の乳配置からＡ型式製作開始は他の型式に先行する。Ｂ、Ｃ、Ｄ型式も外区１群の時期に製作が開始しているが、Ｄ型式は外区１群の新相のみであることから、Ｂ、Ｃ型式にさらに遅れて外区１群から２群への移行期に製作が開始したと理解したい。Ｂ型式は外区２群において他よりも比較的大型のものが少なく全体的に小型であり、「鋸‖鋸¬」系が２面しかなく外区１群が７面あるのと対照的である。Ｃ型式で確認した外区変遷に従えば、外区２群１においてやや断絶気味となる。またＢ、Ｃ型式の並行関係については谷口古墳東石室からBa3型式とCa3型式が共伴しており一つの手がかりを与えてくれる（第４表）。

外区変遷においては、外区１群の古相を鼉龍鏡を忠実に縮小表現しようと試みる段階、外区１群新相を捩文鏡として内外区とも安定し基本型式が出揃う段階、外区２群１（古相）を鼉龍鏡が原鏡の環状乳神

獣鏡から離れ、それに忠実に捩文鏡が対応する段階、外区２群２（新相）を鼉龍鏡から離れて独自の型式変化を遂げる段階と位置づけたい。

今回、車崎（車崎1993:139頁）の指摘に従い鼉龍鏡の変遷に対応する外区１群から２群への移行を前提とした分析を行った。分析前には２つの外区構成の存在は２系統の工人集団を想定することも不可能でなかったが、主文の連続性、特にＤ型式のa･b類において細部まで類似した主文が外区１群と、２群に跨って製作されており、a･b類を同一の工人（集団）による製作と認め得る限り、外区１群から２群への移行は集成した捩文鏡の分析結果とも矛盾せず基本的に肯首できるものと考える。しかし、主文型式の連続性に対し、外区１群から２群への変化は型式学的な変遷で説明できない。これが原鏡である鼉龍鏡の変化に対応することは明らかであるが、鼉龍鏡の「菱雲文＋鳥文」から「鋸歯文＋複波文＋鋸歯文」への変化も鏡式内の型式変化では説明がつかない。鼉龍鏡の２群古相の東車塚古墳鏡と北和城南鏡の三角縁の使用から仿製三角縁神獣鏡工人との関連が指摘（車崎1993:135頁）されているが、捩文鏡においても三角縁をもつ県山古墳が外区１群新相に１点だけ確認できることは留意すべきであろう。このことは、鼉龍鏡の変遷と捩文鏡の変遷が緊密な関係を持つことをあらためて示すとともに、外区１群から２群への変遷の背景には外的な要因として仿製三角縁神獣鏡の製作活動の影響があったものと推測される。

外区２群においては、「鋸‖鋸¬」から「鋸¬」系への変遷が、主文との対応から特にＣ型式で明瞭に確認できた。これは森下（森下1991）の神頭鏡系における指摘と一致し、これを捩文鏡において検証したことになる。しかし、これは捩文鏡の外区構成の変遷を共通ルールとした工房群による製作を前提としたものであり、行基寺古墳鏡や勝見17号墳鏡、及び鈴鏡などについては、分析対象とした大部分の製作工人集団とは別系統の工人集団の活動を想定させるに十分である。今回は個別の工人論に踏み込む用意がないが、Ｅ型式のa･b類は特定の工人（集団）の活動を示すであろうし、捩文帯ｉ、ii式が鼉龍鏡とＡ、ＢおよびＢ、Ｃ型式を跨って見いだせ、詳述しなかったが鈕の周りの２本の圏線の幅など極めて斉一的であり、大部分のものは小規模で相互に交流可能な工人集団内での生産が想定される。その場合に、Ａ型式の存在と外区構成の変遷の対応などから捩文鏡製作工人集団と鼉龍鏡の製作工人集団との、少なくとも重複を見出すことは許されるであろう。

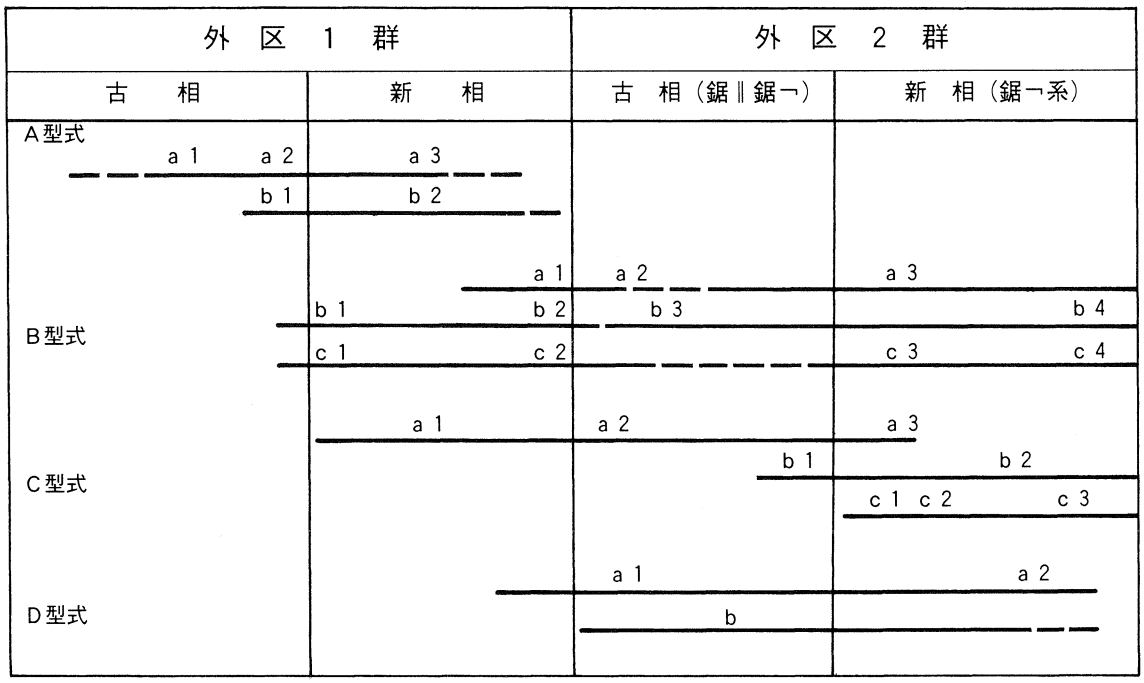
捩文鏡は既に鼉龍鏡をもとにした縮小版としての性格が指摘されているが、今回捩文鏡の編年作業を通して、特に外区１群で大小の鏡径を製作が明らかとなった。鼉龍鏡に柳井茶臼山古墳鏡（梅原1921b）を代表とする超大型鏡がある一方で、捩文鏡は古墳時代前期の小型仿製鏡の中でもさらに小型のものを含み、同じモチーフから派生したものにこれほど鏡径の差がある鏡式は他に内行花文鏡しかない。仿製三角縁神獣鏡が鏡径がほぼ画一的であったのと非常に対照的で、同じ仿製鏡でも鏡径に対する意識に伴い使用方法が異なっていたことは明らかである。鏡径が畿内政権の信任の度合いを示すとする車崎（車崎1993:151、152頁）に従うならば、より複雑な政治的要求と配布原理を想定することも可能である。しかし、捩文鏡は中期古墳からの出土も少なくなく、鼉龍鏡や仿製三角縁神獣鏡の製作終焉時期にまたがることが予測できることから[7]、他の仿製鏡、舶載鏡および甲冑類を含めた威信財の分配体系全体の中でとらえ、その一部として理解するべきであろう。生産量からみても、外区１群相当の鼉龍鏡が25面、捩文鏡が18面、外区２群では鼉龍鏡が17面、そして捩文鏡が77面で、その内訳は古相が20面、新相が57面となっており、今後の出土を考慮しても三角縁神獣鏡に比して極めて少なく、鼉龍鏡衰退前後にむしろ生産量が増えて小型仿製鏡としてその命脈を保っており、その価値や分配目的も時期によっ

て異なる可能性が強い。

最後に、捩文鏡の年代についての問題点に触れておきたい。

捩文鏡A型式の前橋天神山古墳鏡の環状乳や獣毛表現は鼉龍鏡の柳井茶臼山鏡や雪野山古墳鏡(都出1996)などの初期の鼉龍鏡の図像を抜き出した可能性が強い。獣毛表現の型式変遷は早く[8]、それらの鼉龍鏡と製作時期を大きく離して考える必要を認めない。従って、鼉龍鏡の製作開始年代にそれほど遅れることなく捩文鏡も開始されたものと考えたい。現状での鼉龍鏡を出土した最も古い古墳に滋賀県の雪野山古墳があり、少なくとも雪野山古墳造営時には最古相の捩文鏡は製作されていたことになる。小林行雄(小林1961)により仿製三角縁神獣鏡が他の仿製鏡に先行するとした説が長く支配的であったが、舶載・仿製三角縁神獣鏡と「倭鏡」との共伴関係を重視する岸本直文によれば、仿製三角縁神獣鏡に対して鼉龍鏡製作の先行は明らかであるという(岸本1996:101頁)。それに従えば、少なくとも外区1群の一部、特にA型式の製作は仿製三角縁神獣鏡の製作開始前に遡る可能性を持つことになる。なお、岸本(岸本1996)の視点に沿えば捩文鏡でも最古相の前橋天神山古墳鏡は、岸本分類舶Ⅱ段階の三角縁神獣鏡2面と共伴し先の見解と矛盾しない。また楢原寺山古墳出土の土師器(河本1988:52頁)は亀川上層式であり楠元(楠元1993:174頁)によれば寺沢編年(寺沢1986)布留0もしくは1式としている。これらに実年代を与えることは古墳時代開始年代とも関わり容易でないが、仿製三角縁神獣鏡の生産開始を4世紀第1四半期とする福永(福永1994:67頁)の指摘を肯首するならば、捩文鏡の製作開始年代はそれを遡ることになる。

もう一つの画期が、外区1群から2群への移行時期である。該当する鏡を出土する古墳で時期が明確なものは決して多くない。それでも外区2群で古墳時代前期に遡ると判断し得るものに、琴柱形石製品をもつ万籟山古墳や川柳将軍塚古墳、岸本倭Ⅱ段階の三角縁神獣鏡2面出土した出川大塚古墳、岸本倭Ⅰ段階の三角縁神獣鏡を出土した会津大塚山古墳などが挙げられ、弁天山C1号墳には岸本舶Ⅴ段階三角縁神獣鏡が後円部竪穴式石室が出土し、その隣の粘土槨から外区1群の最新相の捩文鏡が出土してお



第4表　捩文鏡型式編年表

り、外区２群への移行年代をおおまかに捉えることができる。さらに外区「鋸Ⅱ鋸¬」から「鋸¬」系への移行は、俵ヶ谷４号墳、鋤先古墳、黒岩古墳などに「鋸¬」系の古相が出土しており、これらの古墳の埋葬年代をやや遡るものとみられる。

今後、古墳への埋葬年代と鏡の製作年代とのズレを考慮した共伴遺物の検討を経て判断するべきであるが、その製作年代を出土古墳の時期を少し遡らせて考えると、仿製三角縁神獣鏡の製作開始を福永（福永1994:67頁）に従って４世紀第１四半期として、これを前方後円墳集成編年（近藤編1993）の１期の後半及び２期におくと、外区１群の一部がこれを遡ると考えて、外区１群の製作時期を１、２期相当に、外区２群１を３期、外区２群２を４、５期に相当すると便宜的に想定しておきたい。

分析契機となった日上天王山古墳第２石槨出土の捩文鏡は、Ｂ型式のところで触れたように型式としてはかなり特殊な鏡ではあるがBc型式の外区１群最新相と位置づけることができた。被葬者が入手して一定期間の後に副葬されていれば、製作想定時期である２期後半が第２石槨の埋葬年代の上限となり、日上天王山古墳中心石槨の埋葬年代もそれを下限としたそれほど離れない時期とみなすことができる。

小稿では、捩文鏡の原鏡を鼉龍鏡とする立場からＡ～Ｄの型式分類を設定し、外区変遷と対応した編年を行った。その作業を通して捩文鏡の変遷が鼉龍鏡に対応するとともに、森下（森下1991）の仿製鏡における外区変遷の一部を検証し、ごく少数ではあるが外区構成のルールを共有する大多数とは別の工人集団の活動による捩文鏡を認識することができた。しかし、出土分布や出土古墳からみた捩文鏡の性格や共伴遺物の検討による埋葬年代の検討など、多くの問題を残した。また今回は捩文鏡を取り上げたが、今後仿製鏡の製作と分配の歴史的な意義を論じるには仿製三角縁神獣鏡と他の仿製鏡との相対年代観の確立が不可欠であり、併せて今後の課題としたい。

小稿を執筆するにあたり、調査団の方々より有益な助言を受けるとともに、資料の集成に際して杉山晋作、岩本崇、車崎正彦、岡内三眞の諸氏より支援を受けた。記して謝意を表したい。岡山県一宮天神山古墳の資料の観察については亀田修一氏の、岡山県焼山古墳鏡の観察には邑久町教育委員会の馬場昌一氏にお手を煩わせた。また、日頃よりお世話になっている岩崎卓也先生、菊池徹夫先生に御礼を申し上げます。

（水野敏典）

註

(1) 今回は慣習に従って仿製鏡という呼称を用いるが、仿製が「倣」と同様の意味で用いられるならば、鼉龍鏡や捩文鏡は「倭」独自の創作鏡であり、田中（田中1979・1981）や岸本（岸本1996）の指摘するように「倭鏡」がふさわしいように思われる

(2) 捩文鏡の集成は（小沢1988）をもとに（樋口1979）、（小林1983）、（白石他1994）を参考にして、私見を加えたものである。集成97から121は文献を入手したが図像が明確でなかったものを不明とし、文献が手に入らなかったものを空欄にしている。今回の分析には含まれていないが、今後の参考のために載せるることにした。

(3) （森下1991）の凸線付鋸鋸文に相当する。

(4) 外区構成の変遷の仿製鏡編年での有効性は（森下1991）により既に指摘されており、今回の試みは捩文鏡の編年作業を通しての検証でもある。

(5) 後述するように各型式間の時間的な変遷を否定する立場と、及び文章中での樋口分類と樋口分類に修正を加えた小沢分類との型式名称の混乱を避けるためローマ数字を使っていない。

(6) (車崎1993)や(新井1995)、(森下1991)と異なる視点による分析が行われているが、新山古墳鏡が型式的に最古との共通認識は得られている

(7) B型式の伝高崎鏡は鏡径は25cmと報告されており、今回の集成中でも突出した鏡径であり、扱いを保留しておきたい。

(8) (福永1994)において、福永Ⅳ・Ⅴ期(4世紀の後半)での仿製三角縁神獣鏡の生産と三角縁神獣鏡による政治秩序の衰退が指摘されている。

(9) (新井1995)の獣毛表現分類の「胴部乳」のA～C分類のAに相当する。

使用写真出典一覧

第42図　左（樋口　1979）329、右（樋口　1979）330

第43図　1.（樋口　1979）図154右

2.（樋口　1979）365

3.（西谷　1992）図版105－112

4.（松本他　1983）29－2

5.（京都府山城郷土資料館他　1987）254

6.（小沢　1988）

7.（樋口　1979）369

8.（松本他　1983）18

9.（樋口　1979）図154左

10.（斉藤他　1989）図版100

11.（樋口　1979）372

12.（鳥取県　1924）図版19

13.（原口他　1973）PL.165

14.（西谷　1992）図版105－114

15.（樋口　1979）図155左

樋口隆康先生には『古鏡』の図版の複写使用を許可していただきましたことを御礼申し上げます。

引用・参考文献

網干善教　1965　「本馬丘火葬墳墓とガクオン寺古墳」『御所市史』　御所市史編纂委員会

新井　悟　1995　「鼉龍鏡の編年と原鏡の同定」『駿台史学』第95号　駿台史学会

相川龍雄　1933　「倣製鏡の一資料」『考古学雑誌』第23巻第7号　考古学會

伊藤禎樹　1967　「捩文鏡小論」『考古学研究』第14巻第2号　考古学研究会

井藤　徹　1966　『北玉山前方後円墳発掘調査概報　第2次調査』　大阪府教育委員会

和泉市久保惣記念美術館　1985　『和泉市久保惣記念美術館蔵鏡図録』　和泉市久保惣記念美術館

岩崎卓也　1988　「青銅鏡」『長野県史』考古資料編　長野県史刊行会

岩野見司　1977　「伊勢古墳群」『新編一宮市史』本文編上　一宮市長森鉛太郎

上田三平　1931　「山梨縣銚子塚古墳附丸山塚古墳」『史蹟調査報告』第5号

梅原末治　1921a「周防国玖珂郡柳井町水口茶臼山古墳調査報告」『考古学雑誌』第11巻第8・9号
梅原末治　1921b『佐味田及び新山古墳研究』岩波書店
梅原末治　1924『因伯二國に於ける古墳の調査』鳥取県
西田　栄　1986「古墳時代鏡鑑集成」『愛媛県史』資料編考古　愛媛県史編さん委員会
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1989『古墳文化の世界－豊の国の支配者たち』
大場磐雄他　1975『武蔵伊興遺跡』伊興遺跡調査団
小栗鐵次郎　1930「知多郡上野村名和に於ける古墳」愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第8号
小栗鐵次郎　1935「楠村大字味鋺附近の古墳及遺物」愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第13号
小沢　洋　1988「捩文鏡について」『千葉県木更津市小浜遺跡Ⅰ　俵ヶ谷古墳群』君津郡市文化財センター発掘調査報告書37集　君津郡市考古資料刊行会
小野勝年　1953「中野町小田中姥懐山古墳」『下高井』長野県教育委員会
賀川光夫　1961『大分県考古資料』20集
賀川光夫他　1968「北海部郡佐賀関町の古墳調査報告」大分県文化財調査報告15　大分県教育委員会
門田正志　1973『宇和の古墳』
鎌木義昌　1986「一宮天神山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料　岡山県史編纂委員会
亀井明徳・永井昌文　1982「谷口古墳」『末盧国』唐津湾周辺遺跡調査委員会
岸本直文　1996「雪野山古墳副葬鏡群の諸問題」『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会
北九州市立考古博物館　1990『紫川－弥生・古墳時代の風景』
京都府山城郷土資料館他　1987『鏡と古墳』便利堂
楠元哲夫　1993「古墳時代仿製鏡製作年代試考」『大和宇陀における古墳の研究』宇陀古墳文化研究会
久保穣二朗　1989「六部山21号墳出土品」『郷土と博物館』
車崎正彦　1993「鼉龍鏡考」『翔古論集』久保哲三先生追悼記念文集　新陽社
群馬県立博物館　1980『群馬の古鏡』
河本　清　1988「美作町楢原寺山古墳出土の土師器について」『古代吉備』第10集　古代吉備研究会
児島隆人・藤田　等　1973『嘉穂地方史』先史篇　嘉穂地方史編纂委員会
後藤守一　1923「伊勢一志郡豊地村の二古式古墳」『考古学雑誌』第14巻3号　考古学會
後藤守一　1942『古鏡聚英』上篇　東京堂出版
小林三郎　1983「捩文鏡とその性格」『日本古代史論苑』遠藤元男先生頌寿記念論文集　国書刊行会
小林行雄　1956「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部五十周年記念論集』
小林行雄　1961「古墳発生の歴史的意義」『古墳時代の研究』青木書店
小林行雄　1962「古墳文化の形成」『原始および古代』岩波講座日本歴史1　岩波書店
近藤義郎編　1992『前方後円墳集成』近畿編　山川出版社
埼玉県立博物館　1984『北武蔵　杖刀人とその時代』
斉藤嘉彦他　1989「栗林古墳」『新編岡崎市史』史料考古下16　新編岡崎市史編さん委員会
斉藤　忠・大和久震平　1986『那須国造碑・侍塚古墳の研究』吉川弘文館
斉藤　優　1960『足羽山の古墳』福井県郷土誌懇談会
山陰考古学研究所　1978『山陰の前期古墳文化の研究』1
志佐惲彦　1977「県内出土の古鏡」佐賀県立博物館調査研究所第3集

白石太一郎他　1994　「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集

鈴木敏雄　　不明　「阿山郡府中村考古誌考」『三重考古誌考』７巻　（白石他1994）より引用

高橋健自　　1907　「本邦鏡鑑沿革考」第３、４回「考古界」第７篇3,5号　考古学會

巽　三郎・西岡　巌　1980　『岩内古墳群発掘調査概報』　御坊市教育委員会

田中　琢　　1977　『鐸・剣・鏡』日本原始美術大系４　講談社

田中　琢　　1979　『古鏡』日本の原始美術８　講談社

田中　琢　　1981　『古鏡』日本の美術第179号　至文堂

都出比呂志編　1996　『雪野山古墳の研究』　八日市市教育委員会

寺沢　薫　　1986　「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県教育委員会

東京国立博物館　1983　『古墳遺物篇』関東Ⅱ

東京国立博物館　1986　『古墳遺物篇』関東Ⅲ

鳥取県埋蔵文化財センター　1986　『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財シリーズ１　鳥取県教育文化財団

富岡謙蔵　　1920　『古鏡の研究』　丸善

直営憲一　　1975　『摂津万籟山古墳』宝塚市文化財調査報告書第７集　宝塚市教育委員会

名本二六雄　1982　「捩文帯を持つ鏡－相の谷古墳出土鏡の占める位置－」『遺跡』第22号　遺跡発行会

楢崎彰一　　1972　「古墳時代」『岐阜県史』通史編原始　岐阜県

西谷真治他　1992　『兵庫県史』考古資料編　兵庫県

野田久男　　1983　「鳥取県内出土銅鏡一覧」鳥取埋文ニュースNo.5　鳥取県埋蔵文化財センター

能登川町教育委員会　1993　『斗西遺跡（２次調査）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第27集　能登川町教育委員会

荻野繁春　　1980　『三ッ山古墳群発掘調査報告書』　小牧市教育委員会

原口正三・西谷　正　1967「弁天山c1号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告書第17号　大阪府教育委員会

原口正三　　1973　「弁天山古墳群」『高槻市史』考古編６巻　高槻市役所

樋口隆康　　1979　『古鏡』　新潮社

樋口隆康　　1991　「京都府下近年出土の鏡について(2)」京都府埋蔵文化財論集第２集　京都府埋蔵文化財調査研究センター

樋口隆康他　1992　『大和の古墳の鏡』　奈良県立橿原考古学研究所

平井　勝　　1987　「殿山古墳群」『総社市史』考古資料編　総社市史編纂委員会

平生町史編纂委員会　1979　『平生町史』

平山誠一・椎名信也・車崎正彦　1993　「千葉県山武郡山武町の前期古墳」『古代』第96号　早稲田考古学会

広島県立歴史資料館　1993　『ひろしまの青銅器』

福永伸哉　　1994　「倣製三角縁神獣鏡の編年と製作背景」『考古学研究』第41巻第１号　考古学研究会

藤枝市教育委員会　1983　『若王子・釣瓶落古墳群』

藤沢　敦・大友喜助　1992　『西屋敷１号墳・吉ノ内１号墳発掘調査報告書』宮城県角田市文化財調査報告書第８集　角田市教育委員会

藤原妃敏・菊地芳朗　1994　『会津大塚山古墳の時代』　福島県立博物館

古川　登　　1992　「小羽山古墳群」『第７回発掘調査報告会資料』　福井県教育庁埋蔵文化財センター

松本敏三・石橋　孝　1983　『讃岐青銅器図録』　瀬戸内海歴史民俗資料館

松本信広　　1953　『日吉加瀬古墳』　三田史学会

三重県教育委員会　1954　『三重考古図録』　三重県教科書供給所

森　浩一　　1954　「獣首鏡を出土した土佐平田村戸内の古墳」『古代学研究』第10号　古代学研究会

森下章司　　1991　「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号　史学研究会

山口県教育委員会　1991　『妙徳寺山古墳・妙徳寺山経塚・栗遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第134
山口県埋蔵文化財センター

山口譲治・吉留秀敏・渡辺芳郎　1989　『老司古墳』　福岡市教育委員会

山形県教育委員会　1985　『お花山古墳群発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告第85集

柳沢一男　　1984　『鋤先古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集　福岡市教育委員会

第４節　竪穴式石槨の特色と問題点

１．美作地方の竪穴式石槨

今回の発掘調査で明らかにされた日上天王山古墳の埋葬施設は、竪穴式石槨と箱形石棺各２の４基であった。これらは後円部上で検出されたもので、他に後円部の裾部では少なくとも２基の箱形石棺の存在が確認されている。いわゆる中心主体は割石を用いた竪穴式石槨でその長軸は墳丘主軸に一致し、前方部寄りでは円礫が多用された第２石槨がこれに直交する。

美作地方ではこれまでに楢原寺山古墳（近藤　1986e）、岡高塚古墳（今井　1987）、茶山１号墳（保田1989）、王子中古墳（近藤　1986b）、田邑丸山１号墳（土居　1975）、才ノ峪１号墳及び３号墳（中山1988）、一貫東２号墳（湊　1992）、日上畝山１号墳[1]の各中心主体、近長丸山１号墳（小郷　1992）の第２、第３主体などが竪穴式石槨であったことが知られている。楢原寺山古墳と岡高塚古墳は墳長約55ｍの前方後方墳、茶山１号墳は推定墳長20.6ｍの前方後円墳、日上畝山１号墳は14.5×17ｍの方墳で、他は円墳である。各円墳の径は、王子中古墳が推定で40ｍ、田邑丸山１号墳が37ｍ、才ノ峪１号墳が８～8.5ｍ、才ノ峪３号墳が9.5ｍ、一貫東２号墳が10.5ｍ、近長丸山１号墳が20ｍとなっている。

これらのうち、埴輪を伴ったのは才ノ峪１号墳だけである。才ノ峪１号墳は、茶山１号墳と同様にTK47並行段階の須恵器が出土したことから、これらは前方後円墳10期区分の８期[2]頃の営造とみてよいであろう。才ノ峪１号墳に先行したとされる才ノ峪３号墳も同様である。一貫東２号墳は５世紀後半頃に比定されており（湊　1992：p76）、７期から８期に位置づけることができる。一方、楢原寺山古墳は石槨内から出土した甕形土器、近長丸山１号墳は土器棺とされた壺形土器からみて４期末ないし５期初頭の月の輪古墳に先駆けて築造されたことは間違いない。確言はできないものの、倭製の四獣鏡と筒形銅器を伴った岡高塚古墳や王子中古墳、田邑丸山１号墳なども遅くとも月の輪古墳と相前後する時期までには築造された可能性が高い。また、列石を据え置く手法や長軸を直交させる埋葬施設の配置に関して、日上畝山１号墳は日上天王山古墳に類似しており注目される[3]。

ところで、近長丸山１号墳、日上畝山１号墳、一貫東２号墳、茶山１号墳、才ノ峪１号墳及び３号墳の竪穴式石槨は、いずれも円礫で、あるいは円礫を多用して構築されていた[4]。中には、近長丸山１号墳の第２主体のように、石槨内に底板をもち粘土で目張りされた箱形石棺が納めらた例もみられる。石槨上部が損壊を受けて本来の高さを知りえない場合が少なくないが、部分的ながら蓋石が遺存した才ノ峪１号墳では三、四段、３号墳では六、七段ほど積み上げられていた。そもそも円礫は割石に比べて積み上げ難いことは明白であり、日上天王山古墳の第２石槨では一部崩落した状況が確認されている。最下段の措置に関しては墓坑底に直接置く、あるいはまず置土をしたり円礫や粘土を敷く、などの違いは認められるものの、基本的に円礫の短辺を揃えて槨壁となす小口積みと長辺を揃える横積みとが適宜織りまぜられた点が注目される。おそらく、このような手法によって不安定さを克服しようとしたと思われる。横長の割石を七、八段程度積み上げた日上天王山古墳の中心石槨においても最下段には円礫が用いられていた、すなわち円礫を配して石槨内側の輪郭が整えられた点は注意される。

美作地方の竪穴式石槨の規模を内法長に代表させてみてみよう。割石が用いられた竪穴式石槨の場合、楢原寺山古墳が約3.8ｍ、日上天王山古墳の中心石槨が4.21ｍ、岡高塚古墳が4.88ｍであるのに対して、王子中古墳は3.4ｍ、田邑丸山古墳は3.27ｍと円墳の場合は基本的に短い。一方、円礫が用いられた日

上天王山古墳の第２石槨は3.1ｍ、近長１号墳の第三主体は2.95ｍ、日上畝山１号墳の中心主体は3.1ｍと上限は大体３ｍ前後にかたまる傾向が看取される。この点に、積み上げるのに不向きな円礫を用いた限界が現れているのかも知れない[5]。８期頃の諸例をみると、茶山１号墳の内法長は3.1ｍ、一貫東２号墳は1.9ｍ、才ノ峪３号墳は2.3ｍを測り、墳形間の較差は依然として見受けられる。木棺直葬墳が盛行した中にあって竪穴式石槨も部分的に採用されたが、その規模は基本的に縮小されたようだ。

竪穴式石槨の内法長は幅とも関係して、棺の種別や形態と不可分の関係にある。次に、この点を含めて、日上天王山古墳の竪穴式石槨に関わる問題点を整理する。

２．竪穴式石槨に関するいくつかの問題点

第一は、日上天王山古墳の棺は中心石槨、第２石槨のいずれも箱形木棺と推定される点である。一般に棺そのものは遺存しないので、槨内床面の断面形や槨壁の立ち上がり方から種別や構造を推定復元することになる。したがって、どの程度の痕跡をどの程度評価するかが問題となる。楢原寺山古墳の場合は、石槨床面をなす粘土が若干Ｕ字状を呈していたことから割竹形木棺と推測されている。一方、茶山１号墳、近長丸山１号墳の第３主体、王子中古墳、田邑丸山１号墳、才ノ峪１号墳及び３号墳、一貫東２号墳などでは、指頭大の玉石が敷き詰められた後に粘土が貼られる、粘土が貼られずに玉石がまばらに敷かれる、いずれの措置も施されないなどの差異は認められるものの石槨床面が平坦をなしていた点は共通する。したがって、これらの棺は日上天王山古墳と同様に平底であったと推測される。

竪穴式石槨の平面形が細長いか、幅広いかという違いは比較的目につき易い。そこで、基底レヴェルの小口幅平均を内法全長で割り100を掛けた指数で長さと幅の関係を概括的に捉えてみよう。日上天王山古墳の中心石槨は23、第２石槨は24と近似する。構造的特色が第２石槨ときわめて類似する日上畝山１号墳は29とやや大きい値を示す。これらの他、近長丸山１号墳の第３主体が30、田邑丸山１号墳が28、茶山１号墳が23、一貫東２号墳は21[6]、才ノ峪３号墳は28などの値を示し、石槨床面が平底ないし平底に近い一群のほとんどは21～30の間に入る。もっとも王子中古墳は41と格段に幅広く、近似例としては38を示す鶴山丸山古墳をあげるにとどまる。一方、岡高塚古墳の場合は全体的に細長く16という値を示す。この値は、吉備では浦間茶臼山古墳（近藤他　1991）や七つ坑１号墳（近藤他　1987）の中心石槨が示す14及び18に近似する。また、金蔵山古墳（西谷他　1959）の中心石槨は20、南石槨は16となり、割竹形木棺が用いられた場合の一般的な傾向が窺える。しかしながら、現状では岡高塚古墳の石槨床面の状態を知ることはできない。日上天王山古墳と同様に２基の竪穴式石槨が直交して検出された一宮天神山２号墳では、中心埋葬のＡ主体が25、Ｂ主体は16と同一墳丘上で二態が現れている[7]が、石槨床面の状況に関しては不明である。このようにみてくると、箱形木棺が用いられたと推測される日上天王山古墳が示す指数値は他例とも整合的であり、平底棺と推測される事例ではこの値が大きくなる傾向を認めてよい。竪穴式石槨の平面形は棺の形態に左右されたわけであるから、この指数の大小をそのまま築造時期の違いとみなすことはできないが、全体的にみて実際長が縮小傾向に向かったことは間違いない。

第二は、日上天王山古墳の中心石槨の基底部構造についてである。中心石槨の墓坑底は緩く山形に掘り残された後に厚く円礫が敷かれ、明らかに排水機能を意識した作りであった。確認はできなかったが、おそらく墓坑外へと排水溝が続いていたとみてよい。いわゆる棺台ともみなせる掘り残し部分は平坦ではなく、また円礫によって完全に埋められてしまっており、木棺底面を支える役目は間接的にしか果た

せない作りと言える。粘土床下にも礫が敷かれる点を特色とする日上天王山古墳の中心石槨は、例えば都出比呂志による分類のＳＢ型式―２に該当する(都出　1981)。また、浦間茶臼山古墳の竪穴式石槨を検討した新納泉によるとⅣ段階Ｂ群(Ｂ３タイプ)に該当する(新納　1991)。この型式は排水機能を備えた竪穴式石槨の中では最も新しい段階に位置づけられ、畿内では４期頃の北玉山古墳がこれに該当するとされている。これに対し、石槨の裏込め状況に着目した澤田秀実の分類(澤田　1993)によれば、控え積みとして角礫・亜角礫が墓坑全体に充填されていない点でｄ類に、大形の蓋石が用いられた点でｅ類に相当し、石槨型式ではⅢＡ式とⅣＡ式の間に位置づけられる特徴を備えていることになる。この場合は、日上天王山古墳の中心石槨はⅣＡ式とされる北玉山古墳に先行したことになる。問題は、墓坑底に掘り残された部分をいわゆる棺台の痕跡とみるか、排水機能を作出した結果的産物であったとみるかである。基底部構造の特色をタテ系列の中で捉えると日上天王山古墳の中心石槨は新しく位置づけられることになるが、くびれ部から出土した壺形土器及び墳丘形態の特色との整合性が検討課題となる。

第三は、二つの竪穴式石槨に共通した特色である壁体最下段の配石手法である。すなわち、両側壁の最下段の一部には大形の円礫が用いられ、全体としてほぼ垂直に立ち上がる側壁下半部からやや突出していた。周辺石材との組合わさり方を検討したところ、これらが緩んでずり出たとは考え難い状況であった。そして、これらの突出石は床面から20cm前後の高さでほぼ等しく、両小口寄りに長軸に対して対称的に二箇所ずつ計四箇所に配された点からみても石槨構築の一環として取られた措置であったとみるべきである。第２石槨の場合は、まず木棺側板の下にやや柔らかい粘土を基礎として置いた後に、これがまだ固まらないうちに長側板を押さえ込んで安定をはかると共に壁体の基礎石を上面が水平となるように配する。それから小口板を挟んだ長側板を突出石で押さえ込んで木棺を固定し、併せて木棺側板が側壁構築の「チョウハリ」の役目を果たしたと思われる。中心石槨の場合もほぼ同様であったと考えられるが、こちらは基底石と突出石のみが円礫であった点が注意される。中心石槨と第２石槨の棺は箱形木棺でこれは一般に組合せ式と考えられるが、このような推測は突出石の存在によって支持される。

第四は、蓋石が懸架された後の被覆措置についてである。この点に関しては、盗掘などによって著しく撹乱を受けると明らかにし得ない場合が少なくない。日上天王山古墳の中心石槨の場合は、盗掘を受けていたが幸いにも蓋石の被覆状況や墓坑の埋め戻し状態を把握することができた。いずれの石槨も蓋石上面が石で覆われていた点は共通するが、中心石槨がまず割石で、次いで黒褐色土を用いて丁寧に被覆されていたのに対し、第２石槨の蓋石を覆っていたのは多量の円礫で被覆土は認められなかった。特に注目されるのは多量の石で蓋石全体が被覆された点で、中山大塚古墳(木下　1994)においてその典型例を知ることができる。他に、例えば備後の石鎚山１号墳の第１主体部では、扁平な割石に加えて多量の拳大あるいはそれ以下の角礫を用いて完全な被覆措置が施されており、蓋石上部の横断面形はやはり亀甲状を呈していた(小都他　1981)。人頭大の石で蓋石端部を押さえながら積み上げる手法は、光坊寺１号墳の第Ⅰ主体部や才ノ峪３号墳などでも確認される。

第五は、二つの竪穴式石槨が長軸を直交させて設けられたことである。すなわち、中心石槨の長軸は墳丘主軸に一致させて南北に、第２石槨の長軸はこれに直交させて東西に設定されていた。中心石槨の被覆土が第２石槨の墓坑底となっており、後者の構築時に前者の存在が認識されていたものと思われる。また、中心石槨の墓坑の中心はやや南に寄っており、前方部側に若干の空閑地があらかじめ確保されていたかのようにもみえる。問題は、中心埋葬との関係に基づいて第２石槨が後から長軸を直交させて設けられたのか、すなわち直交させることそのものに意味があったのか、あるいは中心石槨とは異なる頭

位意識が働いて直交は結果的な産物にすぎなかったのか、である。

この長軸直交は、中心石槨が南頭位と推測されたことと相俟って一考を要する問題である。以下、この第五の点に絞って考察を進めたい。

3．頭位と埋葬施設の直交

中心石槨は、粘土床上で確認された棺痕跡が北小口よりも南小口が幅広かった点、朱の広がりが粘土床面の南半部に限られていた点、墓坑底面のレヴェルが北東隅に向かって低くなっていた、などから南頭位と推測された。第2石槨では、鏡、短剣各1、鉄鏃2が東半部の北壁際に副葬されており、短剣や鉄鏃の先端はいずれも西に向けられていたことから東頭位であったとみてよい。また、第1箱形石棺では東西双方に枕石があったので、東頭位と西頭位の2体埋葬が行われたと考えるべきである。第2箱形石棺の場合は、長軸が東西方向であったため東頭位か西頭位のいずれかであったことは間違いない。つまり、日上天王山古墳では頭位に三様が認められるのである。

一般に、石槨、石棺を問わず頭位側の小口幅の方が足位側よりも広い。したがって、幅広の小口の方が頭位であったことを前提として、先にあげた美作地方の竪穴式石槨をみてみよう。王子中古墳、近長丸山1号墳の第2主体と第3主体、茶山1号墳、才ノ峪1号墳及び3号墳などは東頭位であったと推測される。日上畝山1号墳の中心埋葬は長軸を東西にもち、やはり東頭位の可能性がある。かりに東頭位であったならば、北頭位の箱形石棺は中心埋葬の足位方向に位置することになる。このような位置関係は、時計回りに90°回転させた場合に日上天王山古墳と一致する。

一方、田邑丸山1号墳の石槨は北西―南東に長軸をもち、北西側がやや幅広く一部に朱の痕跡が認められたことから北頭位であったと推測される。一貫東2号墳は北側小口の方がやや幅広であったと見受けられるほか、3号墳、6号墳では埋葬施設の長軸は南北方向であった。さらに、6号墳の西側周溝で検出された箱形石棺では、北側小口に二個の枕石が存在したことから北頭位であったと考えられる。なお、正仙塚古墳の後円部上には組合せ式石棺が墳丘主軸に対して平行に直葬されており、小口幅は北側が広い。明治年間の発掘によれば、二体が対置埋葬されていたらしい（光井　1903）。また、奥の前1号墳ではかつて石棺が掘り出され、その長軸は墳丘主軸に平行し出土人骨は北頭位であったらしい（湊1990）。南北に主軸をもつ土居妙見山古墳では、2基の粘土槨が主軸に平行して設けられていたことが知られるのみである（土居　1969）。

ところで、東北―西南に長軸をもつ楢原寺山古墳はわずかながら東北側の方が幅広く、岡高塚古墳の場合も同様である。いずれも、頭位は東北あるいは東北東と推測される。近藤義郎によれば、赤峪古墳の中心埋葬は円礫が用いられた木棺礫床で、その長軸は墳丘主軸に平行し頭位は北東である[8]。

このように、美作地方では確実に南頭位である事例は日上天王山古墳の他に見当たらず[9]、北を中心とした一群、東を中心とした一群、そして中間的な北東の一群が認められる。畿内、瀬戸内北岸、出雲地域の前期古墳は一般に北頭位で、時間的経過の中でこの原則が崩れていったことが明らかにされている（都出　1986）。吉備においても、例えば4期に比定しうる金蔵山古墳では主軸に直交する東頭位の竪穴式石槨が2基検出されている。美作地方に限らず前期古墳では南頭位がきわめて例外的な存在である点をふまえた上で、日上天王山古墳で明らかにされた状況をどのように説明できるであろうか。日上天王山古墳では中心石槨が最初に設けられたから、南と推定される頭位は当然のことながら他の埋葬によって制約を受けた結果ではない。ここで、木棺直葬や箱形石棺なども含めて前方後円（方）墳以外の埋葬

頭位をいま少しみてみよう。

美作地方における前方後円墳時代前期の事例として注目されるのは、最近発掘調査された津山市の有本古墳群である(津山市教委　1996)。尾根上に継続的に営造された7基の方墳群は前期でも古い時期とされ、土器棺を除く少なくとも13を数える埋葬施設はすべて東西に長軸をもっていた。これらの多くは鼓形器台を転用したり、石を配した枕を伴っており、基本的に東頭位であったようだ。一方、近長丸山1号墳の第1主体は墳丘のほぼ中心に位置し、頭位はやや北よりの北東で、同一墳丘上に営まれた竪穴式石槨とは異なる。中心埋葬が南北に長軸をもつ点は、備中北部の光坊寺1号墳も同様である。光坊寺1号墳は径約14mの円墳で、二段に石列が巡らされた点、構造が異なる複数の埋葬施設が検出された点、頭位の一致が認められない点、などにおいて近長丸山1号墳と類似する。検出された5基の埋葬施設のうち第Ⅰ、第Ⅳ、第Ⅴ主体部が長軸を南北にもち、第Ⅳ主体部は木棺痕跡幅から南頭位、第Ⅴ主体部は木棺痕跡幅や遺物の出土状況などから北頭位と推測される。一方、第Ⅲ主体部は、これらに斜行して東南―西北に長軸をもち、小口幅から東南頭位であったと考えられる[10]。また、新見市の横見墳墓群では墳丘ごとに埋葬施設の長軸方向が異なり、南北と東西の各々がほぼ同数確認されている(下澤他　1977)。

このように前方後円墳時代の頭位が北あるいは東～東南にほぼ二分される傾向は、吉備南部の小形墳や箱形石棺(間壁　1968)でも一般に認められる。その中で、小形方墳からなる総社市の殿山古墳群では中心埋葬の長軸が東西から南北へと変化しており注意される(平井他　1982)。すなわち、弥生時代後期後半から前方後円墳時代前期に築造された墳墓のうち、古い方から順に21号墳、15号墳、14号墳、13号墳では長軸を東西にもつ埋葬施設が検出された。これに対し、11号墳では4基の埋葬施設のうち4基が、10号墳では3基中2基が、9号墳では2基中1基が南北に長軸をもっており、単独埋葬の8号墳も同様であった。これらは尾根筋の高い方から低い方へと順次営造されており、11号墳の築造時に頭位に対する認識転換が起きたことが窺える[11]。長軸が南北の一群の中には鏡・玉・鉄器という組合せの副葬品をもつものがみられ、弥生時代後期後半とみなされる東西の一群との差異は際立っている。先にみた近長丸山1号墳や光坊寺1号墳の場合も考慮すると、前方後円墳時代前期前半の中小墳においても中心埋葬ではしばしば北頭位が意識的に選択されたことを示している。ただし、この北頭位への指向がどの程度の広がりをみせたかは定かではなく、また以後北頭位が定着したわけではなかったようである。例えば、殿山古墳群と同じ総社市に所在する牛飼山1号墳及び2号墳(武田他　1993)、法蓮40号墳(村上　1987a)、長砂8号墳及び10号墳の第1主体(村上　1987b)などのように、埋葬施設は東西あるいは東南―西北に長軸をもち、東頭位あるいは東南頭位であった事例が少なくない。

美作地方では、須恵器が副葬されるようになった段階においても木棺直葬の円墳が大きな割合を占める。例えば、長畝山北古墳群は8期並行段階の円墳群で9基が調査されており、検出された14の埋葬施設はおおむね東南―西北ないし東西に長軸をもっていた(行田他　1992)。遺物の出土状況からみて、一般に東頭位で足側に須恵器がまとめて置かれたようだ。

このようにみてくると、美作地方では埋葬施設の長軸は一般に東西優位であったとみてよい。この点をふまえた上で、さらに頭位に関わる注意すべき事象がある。それは、同棺合葬の際に意識的になされた頭位を違える措置、すなわち対置埋葬のことである(辻村　1983)。頭位を等しくする並置埋葬もみられるが、対置埋葬が圧倒的多数を占める。このような埋葬手法がとられた中で問題となるのは、埋葬順序と頭位の関係である。長軸を東南東―西北西にもつ隠里箱形石棺では3体分の人骨が確認され、まず